

温井遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第2集—

1981

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

温井遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
1	18	法	方 法
21	6	N-45°W	N-45°-W
24	16・17回	色	色 調
43	表	特 徴 考	備 考
52	30-39	輪 部	輪 郭
32回	2	化 物	炭 化 物
73	43回	m	M
78	17	あろう	あろう
*	表	焼 色	焼 成
79	46-5	かまど石袖	かまど石袖
87	2	二 次 期	二 次 期
99	表	存 状 態	遺 存 状 態
117	表	色 長	色 調
122	86-6	口 縁 口	口 縁 部
128	89-16	頸 頭	頸 部
135	92-19	ほぼ均一	ほぼ均一
144	95-21	裾端部は平坦	裾部は平坦
152	101-7	なっっていく	なっっていく
175	115-7	胴上半部は左	胴上半部は右
188	125-4	外橙色黒褐色	外橙色内黒褐色
*	125-7	外反し	外 反 し
198	16	3 試験結果	3 試験結果
213	36	「く」字状	「く」の字状
221	6	疵 い	疵 い



温井遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第2集—

1981

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い、昭和48年度と52年度の2回にわたり日本道路公団東京第二建設局長の委託を受け、温井遺跡発掘調査を実施しました。

温井遺跡は群馬県藤岡市岡之郷字温井地内烏川右岸の低台地上末端に所在し、古墳時代の集落を解明する上で重要な遺構、遺物を検出しました。

発掘調査の途中に3年間という空白時間があり、その間、本工事の進行と原状の変化により調査は困難を極めたこともありました。しかしここに記録保存のため、埋蔵文化財発掘調査報告書第2集の発刊のはこびとなったことは喜びに堪えません。

本遺跡は古墳時代後期初頭から末期まで間断することなく集落が営まれていました。住居跡の規模や出土遺物の推移を知る上で貴重な遺跡であります。岡之郷周辺はかつて遺跡の存在しない地区とされて来ました。今回の調査で集落を検出したことは、この地区一帯に曙光を放ったと言えます。

日本道路公団の御理解、御協力と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団関係者各位の御援助、発掘担当者の努力によって、整理された遺構遺物の調査研究が終了し、ここに報告書として刊行することになりました。

日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所の担当者、地元教育委員会、多野郡新町公民館、調査担当者、直接発掘調査に携さわっていただいた方々に敬意と感謝を申し上げますと共に、善意のある御批判と本報告書が学界はもちろんのこと学校教育の教材資料、ならびに一般の方々にも広く活用いただけることを念じ序文といたします。

昭和56年3月25日

群馬県教育委員会

教育長 横山 巖

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）工事の施行にともない事前に調査された 群馬県藤岡市岡之郷温井遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は昭和48年度と昭和52年度に実施した。
3. 調査の実施は日本道路公団東京第二建設局の委託を受けて、群馬県教育委員会文化財保護課がこれにあたり下記の職員が関係した。

昭和48年度

文化財保護課長 近藤義雄

主査 磯貝福七

第2係長 木暮仁一

第3係長 森田秀策

文化財保護主事 原田恒弘、神保信史、松本浩一、井上唯雄、横合興一、横沢克明、平野進一、柿沼恵介、清水和夫、真下高幸、巾 隆之、石塚久則、飯塚卓二、佐藤明人、下城 正

昭和52年度

文化財保護課長 磯貝福七

参事兼第3係長 森田秀策

第2係長 阿久津宗二

調査員 松本浩一

文化財保護主事 都丸 肇、平野進一、真下高幸、巾 隆之 桜場一寿、佐藤明人、大江正行、須田 茂

4. 調査担当者は次のとおりである。

木暮仁一（昭和52年まで 現新田町立生品中学校校長）

横沢克明（昭和50年まで 現伊勢崎市殖蓮小学校教諭）

都丸 肇（昭和54年まで 現勢多郡柏川村小学校教諭）

井上唯雄（昭和55年まで 現群馬県埋蔵文化財調査センター）

石塚久則（昭和55年まで 現群馬県埋蔵文化財調査センター）

真下高幸（同 上）

調査員

中東耕志（旧佐藤）（昭和49年2月22日より昭和49年5月20日まで 現群馬県埋蔵文化財調査センター）

増田 修（昭和49年1月22日より昭和49年2月13日まで）

若月省吾（昭和49年2月27日より昭和49年3月28日まで 現新田郡笠懸村教育委員会）

5. 遺物整理は石塚久則、真下高幸が中心となって行った。
6. 本書の作成、編集は真下高幸が担当した。
7. 本書の本文は真下高幸が、縄文・弥生時代の遺物については中東耕志が執筆した。また土器観察

については鈴木幹子の協力を得た。

8. 化学分析は須志器類の胎土分析を、群馬県工業試験場化学室花岡敏一氏に依頼し、本文は氏による。
9. 本書を作成するにあたり、遺物、図面整理、図版作成等に対し、下記の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表するものである。
青木静江、伊能敬司、石坂田津子、生方淳子、金子吉江、鈴木幹子、関 邦一、高橋順子、辻口敏子、浜野和宗作、細井敏子（敬称略50音順）
10. 遺物写真撮影は佐藤元彦氏による。
11. 本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関に御協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。
新井房夫、阿久津宗二、赤山容造、相京建史、石岡憲治、石塚久則、石井克己、井上唯雄、梅沢重昭、大江正行、大木紳一郎、木暮仁一、駒宮史郎、坂口 一、坂本和俊、佐藤明人、下城 正、鈴木 哲、田口一郎、千明英一、外山和夫、都丸 肇、中村 浩、中沢 悟、長安盛博、温井一郎、野上丈助、能登 健、巾 隆之、原 雅信、平野進一、藤巻幸雄、前原 豊、松本浩一、本村豪章、横沢克明、財団法人大阪文化財センター、群馬県立歴史博物館、県工業試験場、県林業試験場、県立玉村高校（山岸教諭）、自衛隊新町駐屯地部隊（陸上）、陶邑資料館、多野郡新町公民館、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター、藤岡市教育委員会（敬称略 50音順）
12. 発掘調査にあたっては、担当者、調査員の他に大勢の発掘作業員による協力があった。この方々の御協力なしでは報告書の作成は成し得なかったであろう。文末ではあるが厚く感謝の意を表したい。



凡 例

1. 遺構挿图中、セクション、エレベーションの基準標高はL=の記号で表わす。
2. 遺構挿图中におけるスクリーントーンは次のことを表わす。

 本遺跡の位置  浅間山爆裂B軽石層  遺構基盤面あるいは基盤層

 焼土炭化物が堆積する範囲  前記より特に厚い範囲

 砂層  礫層

3. 土器の拓本、実測図におけるセクションの標示は次のことを表わす。
--- 推定復元、 土器の割れ口が粘土帯と一致するもの、 粘土帯と一致しないものと書き示した。
4. 本書における遺物実測図は原則として土器 $\frac{1}{4}$ 、石製模造品類 $\frac{1}{2}$ 、白玉 $\frac{1}{4}$ 、石類 $\frac{1}{2}$ に統一してあるが、遺物によってはその限りではない。遺構の実測図は $\frac{1}{4}$ 、部分実測は $\frac{1}{2}$ にした。
写真図版は土器 $\frac{1}{4}$ 、石製模造品類 $\frac{1}{4}$ 、石類 $\frac{1}{2}$ に統一したが、遺物によってはその限りではない。
5. 土器の実測図の内外面にある短いハケ線は、成整形の差を示す。詳細な観察は各遺構の土器観察表に記述してある。
6. 本書における遺物記述のうち、土器観察については表組とした。出土位置は標高よりの高さで、床面、下位、中位、上位と区別した。遺存度は実測に対するものである。法量の項目内の数字の単位はcmである。また高=遺物の高さ、口=口縁の直径、底=底部の直径、裾=高環脚部等の裾の直径、推=推定値。色調は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務所、財団法人日本色彩研究所監修によった。
7. 遺物写真図版中の番号は遺物挿図版と同一にした。

目次

序
例言
凡例

本文目次

I	発掘調査の経過	1
II	遺跡の立地と環境	7
III	調査の方法	10
IV	基本層序	13
V	グリッド調査	13
VI	検出された遺構と遺物	
	1. 住居跡	16
	2. その他の遺構	191
	3. 溝	191
	4. グリッド出土遺物	191
VII	化学分析	195
	考 察	
	1. 住居跡の規格と規模	203
	2. 住居跡の方位	206
	3. 温井遺跡出土土器の推移	208
	4. 石製模造品について	217
	結 語	226

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡分布図	4
第 2 図	周辺の地形図	5
第 3 図	調査区域全体図	11
第 4 図	遺構基本層序	13
第 5 図	I、II区グリッド土層断面図	14
第 6 図	I ₁ 、I ₂ グリッド土層断面図	14
第 7 図	遺構配置図	15
第 8 図	第1号住居跡	16
第 9 図	第1号住居跡出土遺物	17
第 10 図	第2号住居跡出土遺物	18
第 11 図	第2号住居跡出土遺物	18
第 12 図	第2号住居跡、かまど	19
第 13 図	第3 A号住居跡	22
第 14 図	第3 A号住居跡かまど	22
第 15 図	第3 A号住居跡出土遺物	22
第 16 図	第3 A号住居跡出土遺物	23
第 17 図	第3 A号住居跡出土遺物	24
第 18 図	第3 B号住居跡	28
第 19 図	第3 B号住居跡出土遺物	29
第 20 図	第3 B号住居跡出土遺物	30
第 21 図	第4 A号住居跡かまど	34
第 22 図	第4 A号住居跡出土遺物	35
第 23 図	第4 A号住居跡出土遺物	36
第 24 図	第4 A号住居跡出土遺物	37
第 25 図	第4 B号住居跡	42
第 26 図	第4 B号住居跡出土遺物	42
第 27 図	第4号住居跡出土遺物	43
第 28 図	第5号住居跡	46
第 29 図	第5号住居跡出土遺物	47
第 30 図	第5号住居跡出土遺物	48
第 31 図	第5号住居跡出土遺物	48
第 32 図	第7号住居跡、かまど	53
第 33 図	第7号住居跡出土遺物	56
第 34 図	第7号住居跡出土遺物	57

第 3 5 区	第 7 号住居跡出土遺物	58
第 3 6 区	第 7 号住居跡出土遺物	59
第 3 7 区	第 7 号住居跡出土遺物	59
第 3 8 区	第 8 A 号住居跡かまど	67
第 3 9 区	第 8 A、8 B 号住居跡	68
第 4 0 区	第 8 A 号住居跡貯蔵穴	69
第 4 1 区	第 8 A 号住居跡出土遺物	70
第 4 2 区	第 8 B 号住居跡出土遺物	72
第 4 3 区	第 9 A 号住居跡、かまど	73
第 4 4 区	第 9 A 号住居跡出土遺物	74
第 4 5 区	第 9 B 号住居跡	76
第 4 6 区	第 9 B 号住居跡出土遺物	77
第 4 7 区	第 10 号住居跡	80
第 4 8 区	第 10 号住居跡出土遺物	80
第 4 9 区	第 10 号住居跡出土遺物	81
第 5 0 区	第 11 号住居跡	83
第 5 1 区	第 11 号住居跡出土遺物	84
第 5 2 区	第 11 号住居跡出土遺物	85
第 5 3 区	第 11 号住居跡出土遺物	85
第 5 4 区	第 12 号住居跡	88
第 5 5 区	第 12 号住居跡かまど	89
第 5 6 区	第 12 号住居跡出土遺物	90
第 5 7 区	第 12 号住居跡出土遺物	91
第 5 8 区	第 12 号住居跡出土遺物	92
第 5 9 区	第 13 号住居跡	96
第 6 0 区	第 13 号住居跡かまど	97
第 6 1 区	第 13 号住居跡出土遺物	97
第 6 2 区	第 13 号住居跡出土遺物	97
第 6 3 区	第 13 号住居跡出土遺物	98
第 6 4 区	第 14 号住居跡かまど	101
第 6 5 区	第 14 号住居跡	102
第 6 6 区	第 14 号住居跡出土遺物	103
第 6 7 区	第 14 号住居跡出土遺物	104
第 6 8 区	第 14 号住居跡出土遺物	104
第 6 9 区	第 15 号住居跡	107
第 7 0 区	第 15 号住居跡出土遺物	107
第 7 1 区	第 15 号住居跡出土遺物	107
第 7 2 区	第 16 号住居跡内配石実測区	108

第 7 3 区	第16号住居跡出土遺物	109
第 7 4 区	第16号住居跡出土遺物	109
第 7 5 区	第16号住居跡配石	110
第 7 6 区	第16号住居跡配石	111
第 7 7 区	第16号住居跡配石	112
第 7 8 区	第16号住居跡出土遺物	113
第 7 9 区	第17号住居跡出土遺物	114
第 8 0 区	第17号住居跡	115
第 8 1 区	第17号住居跡出土遺物	116
第 8 2 区	第17号住居跡出土遺物	119
第 8 3 区	第18号住居跡	120
第 8 4 区	第18号住居跡出土遺物	120
第 8 5 区	第18号住居跡出土遺物	120
第 8 6 区	第18号住居跡出土遺物	121
第 8 7 区	第21号住居跡出土遺物	123
第 8 8 区	第21号住居跡	124
第 8 9 区	第21号住居跡出土遺物	125
第 9 0 区	第21号住居跡出土遺物	126
第 9 1 区	第22、25号住居跡	131
第 9 2 区	第22号住居跡出土遺物	133
第 9 3 区	第23号住居跡炭化物出土状況	137
第 9 4 区	第23号住居跡	138
第 9 5 区	第23号住居跡出土遺物	139
第 9 6 区	第23号住居跡出土遺物	140
第 9 7 区	第23号住居跡出土遺物	141
第 9 8 区	第23号住居跡出土遺物	142
第 9 9 区	第24号住居跡	150
第 1 0 0 区	第24号住居跡出土遺物	151
第 1 0 1 区	第24号住居跡出土遺物	151
第 1 0 2 区	第25号住居跡出土遺物	153
第 1 0 3 区	第25号住居跡出土遺物	153
第 1 0 4 区	第26号住居跡	154
第 1 0 5 区	第26号住居跡出土遺物	155
第 1 0 6 区	第27、28号住居跡	157
第 1 0 7 区	第27号住居跡出土遺物	158
第 1 0 8 区	第27号住居跡出土遺物	159
第 1 0 9 区	第27号住居跡出土遺物	160
第 1 1 0 区	第27号住居跡出土遺物	160

第111図	第29号住居跡	165
第112図	第29号住居跡出土遺物	166
第113図	第29号住居跡出土遺物	167
第114図	第30、33号住居跡	172
第115図	第30号住居跡出土遺物	173
第116図	第30号住居跡出土遺物	173
第117図	第31号住居跡	175
第118図	第31号住居跡出土遺物	176
第119図	第31号住居跡出土遺物	177
第120図	第32号住居跡	181
第121図	第32号住居跡出土遺物	182
第122図	第32号住居跡出土遺物	182
第123図	第33号住居跡出土遺物	182
第124図	第35、36号住居跡	183
第125図	第35号住居跡出土遺物	185
第126図	第35号住居跡出土遺物	186
第127図	第35号住居跡出土遺物	187
第128図	第36号住居跡出土遺物	189
第129図	第1号土壇	191
第130図	I ₁ グリッド出土遺物	192
第131図	I ₂ グリッド出土遺物	192
第132図	I、Jグリッド出土遺物	193
第133図	Jグリッド出土遺物	194
第134図	Kグリッド出土遺物	194
第135図	試料実測図	196
第136図	KK α /CaK α とRbK α /SrK α による比較	200
第137図	住居規格	204
第138図	住居方位	206
第139図	各遺跡における住居跡の方位	207
第140図	土師器分類図	211
第141図	土師器分類図	214

写真図版目次

- 図版1 1) I区遺跡全景 南より
2) II区遺跡全景 南より
- 図版2 1) 遺構全景 南より 第2次調査
2) 遺構全景 南より 第2次調査
- 図版3 1) 遺構全景 南より 第2次調査
2) 遺構全景 北東より 第3次調査
- 図版4 1) 第1号住居跡かまど 西より
2) 第1号住居跡全景 南より
- 図版5 1) 第2号住居跡全景 南より
2) 第2号住居跡かまど
3) 第2号住居跡 竈出土状況
- 図版6 1) 第3A号住居跡全景 北より
第2次調査
2) 第3A号住居跡全景 北より
第3次調査
- 図版7 1) 第3A号住居跡かまど 北より
2) 第3A号住居跡 遺物出土状況
3) 第3A号住居跡 遺物出土状況
4) 第3A号住居跡 遺物出土状況
- 図版8 1) 第3B号住居跡 炭火物出土状況
南より
2) 第3B号住居跡全景 南より
- 図版9 1) 第3B号住居跡貯蔵穴 西より
2) 第4A号住居跡かまど 西より
3) 第4A号住居跡 遺物出土状況
- 図版10 1) 第4A号住居跡全景 西より
2) 第4A号住居跡全景 西より
- 図版11 1) 第4B号住居跡 遺物出土状況
2) 第4B号住居跡全景 東より
- 図版12 1) 第5号住居跡全景 南より
第3次調査
2) 第5号住居跡全景 南より
第2次調査
- 図版13 1) 第5号住居跡かまど 南より
第3次調査
2) 第5号住居跡 遺物出土状況
- 第3次調査
3) 第5号住居跡 遺物出土状況
- 図版14 1) 第7号住居跡 遺物出土状況
2) 第7号住居跡全景 西より
- 図版15 1) 第8A、8B号住居跡全景 南より
2) 第8A号住居跡かまど 南より
3) 第8A号住居跡貯蔵穴 南より
4) 第8A号住居跡 遺物出土状況
5) 第8A号住居跡 遺物出土状況
- 図版16 1) 第9A号住居跡全景 北より
2) 第9A号住居跡かまど 北より
3) 第9A号住居跡 遺物出土状況
- 図版17 1) 第9B号住居跡かまど 西より
2) 第9B号住居跡全景 西より
- 図版18 1) 第10号住居跡 遺物出土状況
2) 第10号住居跡全景 北より
- 図版19 1) 第11号住居跡全景 西より
第2次調査
2) 第11号住居跡全景 南より
第3次調査
- 図版20 1) 第11号住居跡かまど 西より
第2次調査
2) 第11号住居跡 遺物出土状況
3) 第11号住居跡 遺物出土状況
4) 第11号住居跡 遺物出土状況
- 図版21 1) 第12号住居跡全景 東より
第2次調査
2) 第12号住居跡全景 西より
第3次調査
- 図版22 1) 第12号住居跡かまど 西より
2) 第12号住居跡かまど
3) 第12号住居跡 遺物出土状況
- 図版23 1) 第13号住居跡全景 西より
2) 第13号住居跡全景 東より
- 図版24 1) 第14号住居跡かまど 南より
2) 第14号住居跡全景 南より

- 図版25 1) 第15号住居跡かまど 西より
2) 第15号住居跡全景 北より
- 図版26 1) 第18号住居跡全景 東より
第2次調査
2) 第18号住居跡全景 北より
第3次調査
- 図版27 1) 第21号住居跡全景 西より
第2次調査
2) 第21号住居跡全景 南より
第3次調査
- 図版28 1) 第21号住居跡 遺物出土状況
2) 第21号住居跡 遺物出土状況
3) 第21号住居跡 遺物出土状況
- 図版29 1) 第22、25号住居跡全景 西より
2) 第22号住居跡 遺物出土状況
3) 第22号住居跡 遺物出土状況
4) 第22号住居跡 遺物出土状況
- 図版30 1) 第23号住居跡全景 南より
2) 第23号住居跡 遺物出土状況
3) 第23号住居跡 遺物出土状況
4) 第23号住居跡 遺物出土状況
5) 第23号住居跡 遺物出土状況
- 図版31 1) 第24号住居跡かまど 西より
2) 第24号住居跡全景 南より
- 図版32 1) 第25号住居跡 遺物出土状況
2) 第25号住居跡全景 西より
- 図版33 1) 第26号住居跡全景 西より
2) 第26号住居跡かまど 西より
3) 第26号住居跡 遺物出土状況
4) 第26号住居跡 遺物出土状況
- 図版34 1) 第27号住居跡全景 西より
2) 第27号住居跡 遺物出土状況
3) 第27号住居跡 遺物出土状況
- 図版35 1) 第29号住居跡かまど 南より
2) 第29号住居跡全景 南より
- 図版36 1) 第29号住居跡 遺物出土状況
2) 第29号住居跡 遺物出土状況
3) 第29号住居跡 遺物出土状況
- 4) 第29号住居跡 遺物出土状況
5) 第29号住居跡 遺物出土状況
- 6) 第29号住居跡 遺物出土状況
7) 第29号住居跡 遺物出土状況
8) 第29号住居跡 遺物出土状況
- 図版37 1) 第30号住居跡かまど及び
遺物出土状況
2) 第30号住居跡全景 西より
- 図版38 1) 第31号住居跡貯蔵穴
2) 第31号住居跡 遺物出土状況
3) 第31号住戸跡 遺物出土状況
4) 第31号住居跡 遺物出土状況
5) 第31号住居跡 遺物出土状況
6) 第31号住居跡 遺物出土状況
- 図版39 1) 第31号住居跡全景 東より
2) 第32号住居跡全景 北より
- 図版40 1) 第32号住居跡 遺物出土状況
2) 第32号住居跡 遺物出土状況
3) 第32号住居跡 遺物出土状況
- 図版41 1) 第35号住居跡 遺物出土状況
2) 第35号住居跡全景 東より
- 図版42 1) 第35号住居跡貯蔵穴 西より
2) 第36号住居跡全景 北より
- 図版43 1) I₄グリッド 遺物出土状況
2) I₄グリッド 遺物出土状況
3) I₄グリッド 遺物出土状況
- 図版44 1) I₄、I₅グリッド 遺物出土状況
2) I₄、I₅グリッド 遺物出土状況
3) I₅グリッド 大木出土状況
- 図版45 第2号住居跡 出土遺物
第3A号住居跡 出土遺物
- 図版46 第3A号住居跡 出土遺物
第3B号住居跡 出土遺物
- 図版47 第4A号住居跡 出土遺物
- 図版48 第4A号住居跡 出土遺物
- 図版49 第4B号住居跡 出土遺物
第5号住居跡 出土遺物
- 図版50 第5号住居跡 出土遺物

	第7号住居跡	出土遺物		第21号住居跡	出土遺物
図版51	第7号住居跡	出土遺物	図版63	第21号住居跡	出土遺物
図版52	第7号住居跡	出土遺物		第22号住居跡	出土遺物
	第8A号住居跡	出土遺物		第23号住居跡	出土遺物
図版53	第9A号住居跡	出土遺物	図版64	第23号住居跡	出土遺物
	第10号住居跡	出土遺物	図版65	第23号住居跡	出土遺物
図版54	第10号住居跡	出土遺物		第24号住居跡	出土遺物
	第11号住居跡	出土遺物		第25号住居跡	出土遺物
図版55	第11号住居跡	出土遺物		第27号住居跡	出土遺物
	第12号住居跡	出土遺物	図版66	第27号住居跡	出土遺物
図版56	第12号住居跡	出土遺物		第29号住居跡	出土遺物
図版57	第12号住居跡	出土遺物	図版67	第29号住居跡	出土遺物
	第13号住居跡	出土遺物		第30号住居跡	出土遺物
図版58	第15号住居跡	出土遺物	図版68	第31号住居跡	出土遺物
	第16号住居跡	出土遺物	図版69	第32号住居跡	出土遺物
図版59	第16号住居跡	出土遺物		第35号住居跡	出土遺物
図版60	第16号住居跡	出土遺物	図版70	第36号住居跡	出土遺物
図版61	第16号住居跡	出土遺物		I ₄ グリッド	出土遺物
	第17号住居跡	出土遺物	図版71	Iグリッド	出土遺物
図版62	第18号住居跡	出土遺物		Jグリッド	出土遺物

温井遺跡

I. 発掘調査の経過

遺跡は表面採集調査でも、地形的にも遺跡として周知されていない地域であった。しかし温井川の護岸工事の際、数点の土器が出土したとの情報から、調査対象地域となった遺跡である。

発掘調査は藤岡市教育委員会、多野郡新町公民館の協力を得て第3次にわたり実施した。

第1次調査（昭和48年11月22日～昭和48年12月26日）

発掘調査前の地形測量では、調査対象区域の大半が田地で占められ、付近の畑地との比高差はわずか30cm程であった。このため調査区域は温井川の氾濫原であり、遺構の存在する可能性は非常に少なく土壌の堆積及び河川の氾濫状況を知る程度にとどまるであろうと判断した。

発掘調査を開始するにあたり、調査対象地域が細長い（全長170m、最大幅110m、最小幅60m）ことと、遺跡のほぼ中央部に温井川を挟むことからこの川を境にして、南側をI区、北側を国鉄高崎線の間までをII区とした。調査対象地域の全体の状況を適確に早く把握するため、グリット調査法を採用した。（第3図）

調査はII区より開始した。グリットは南北方向Rラインを、東西方向はII区のほぼ中央部の31ラインをそれぞれ10m間隔に、Sラインは20m間隔で試掘した。試掘は砂利層又は砂礫層に至るまで掘り、浅い所では1～2m、深い所で約5mを測る。土層は大概表土～浅間山B軽石層～褐色粘土層～砂礫層の堆積状況を示し、河川の氾濫原の様相を呈していた。

I区は宅地、工場、ビニールハウス、つげ畑等の未解決用地を除き試掘した。試掘はII区と同様の調査法を取り、G、I列、11、31列を基本的に入れ、他は適宜必要と認めた場所についてグリット調査をした。G₉-11では約3mまで掘り下げたが遺物の出土も殆んどなく砂礫層となった。H₉-11以东の水田及び桑畑はII区と同様、河川の氾濫原であった。I₉-11では深さ約2.5mで砂層に土器が多量に出土した。さらに土器の出土状況を調査するためI₉-12、I₄-11～20までトレンチをあげる。

I₉-25では土器片と炭化物が出土した。遺構の存在が推定され、I₉-24を南へ拡張したが、しかし遺構の存在する確証もつかめず一担保留にした。このような状況はI₉-41、I₉-31、J₉-26にも言える。

G₉-58では焼土を検出し、この焼土を中心にG₉-59をあげ、さらに必要に応じて拡張していった。この結果焼土はかまどとなり、住居跡の存在を確認した。このことにより遺物の出土したグリットについて再点検を行なった。

第2次調査（昭和49年1月9日～昭和49年5月20日）

第1次調査では河川の氾濫と土壌の堆積状況を調査するととどまると推測されたが、第2次調査では集落跡の調査へと視点に移っていった。

G₉-58の拡張と遺物出土グリットの全面拡張を行った。全面拡張は未解決用地、宅地を除く範囲で、調査範囲は非常に限定され（第3図）面積は約860㎡で平面地形はL字形を呈する。

検出遺構は古墳時代の住居跡23軒、このうち完掘できた住居跡は12軒で他の住居跡は未解決用地内に入り不完全な調査となった。遺構の範囲は宅地、つげ畑、ビニールハウスに広がるのが予測され、

1 発掘調査の経過

未解決用地については後日調査するというので、日本道路公団と話し合いがついた。(注1)

第3次調査(昭和52年11月14日～昭和53年1月31日)

第3次調査では未解決用地の調査を行なった。第2次調査との間に約3年半の空間があり、その間関越自動車道建設工事は着実に進み、本線は土盛りがなされ完成に近づきつつあった。調査のため現地に赴くと原状は一変し、遺跡の位置も確認し難い程であった。宅地の部分は本線道路と河築になり、これに伴い道路の付け替えが行なわれていた。ビニールハウスは工事用搬入道路となり、わずかにつげ畑が完存していた。

調査を再開するにあたり、前回の調査の基本杭を求めると、その位置は本線の中央部で遺構との比高差約10mを測る。この地点は工事用のダンプが頻繁に走り到底利用できるものではなかった。

結局道路の用地杭から遺跡の範囲を割り出すことにした。

調査区は土砂崩れと工事の危険性から、つげ畑とビニールハウスの範囲とした。

調査は調査区内にも土盛の土砂が流れ込み、その排土作業から始め、ビニールハウスの位置も出来る限り拡張し調査を行なった。

検出遺構は新たに古墳時代の住居跡、つげ畑で22号～33号住居跡の12軒、ビニールハウスで35号と36号住居跡の2軒であった。

最後に本遺跡での遺跡対象面積は21,329㎡、調査面積1,846㎡、遺構拡張面積は1,535㎡であった。検出遺構は古墳時代住居跡37軒、同時代ピット1ヶ所、同時代溝2条であった。

調査日誌

- 昭和48年11月22日 第1次調査開始。調査対象地域をI、II区に分け、II区のグリット設定開始。太杭を20m、細杭を10m間隔に打つ。
- 11月26日 II区グリット設定完了。グリット調査開始。
- 11月30日 G₅-11を20cmまで下げる。砂礫層より土師器出土。摩滅し器形、時期不明。J₅-11を100cmまで下げる。土師器出土、同上。
- 12月5日 G₅-11を300cmまで下げる。縄文土器小破片出土。摩滅のため時期不明。
- 12月6日 G₅-58を130～175cm下げる。暗褐色土層より土師器片出土。東壁北隅より焼土検出。G₅-59を拡張、かまどの可能性あり。
- 12月7日 G₅-58、59 拡張継続、-175cm付近より堅い面検出。床面の可能性あり。焼土確認のため北へ約1mをさらに拡張。第1号住居跡と命名。
- 12月11日 I₅-41、-190cm付近精査。土師器、甕出土。遺構としての確認つかめず。I₅-11より多量の土器出土、このためI₅-12を設定調査。
- 12月12日 I₅-11に接し、I₄-11設定、トレンチ的に拡張。土器出土。
- 12月15日 J₅-31、-160cmより炭化物、坏出土、住居跡の可能性あり。
- 12月18日 II区グリット実測、I区より、今まで住居跡4軒確認。今後の調査について会議。
- 12月21日 J₅-31、-130cm付近より遺物出土。-140cmに2ヶ所の落ち込み検出、住居跡の可能性あり。

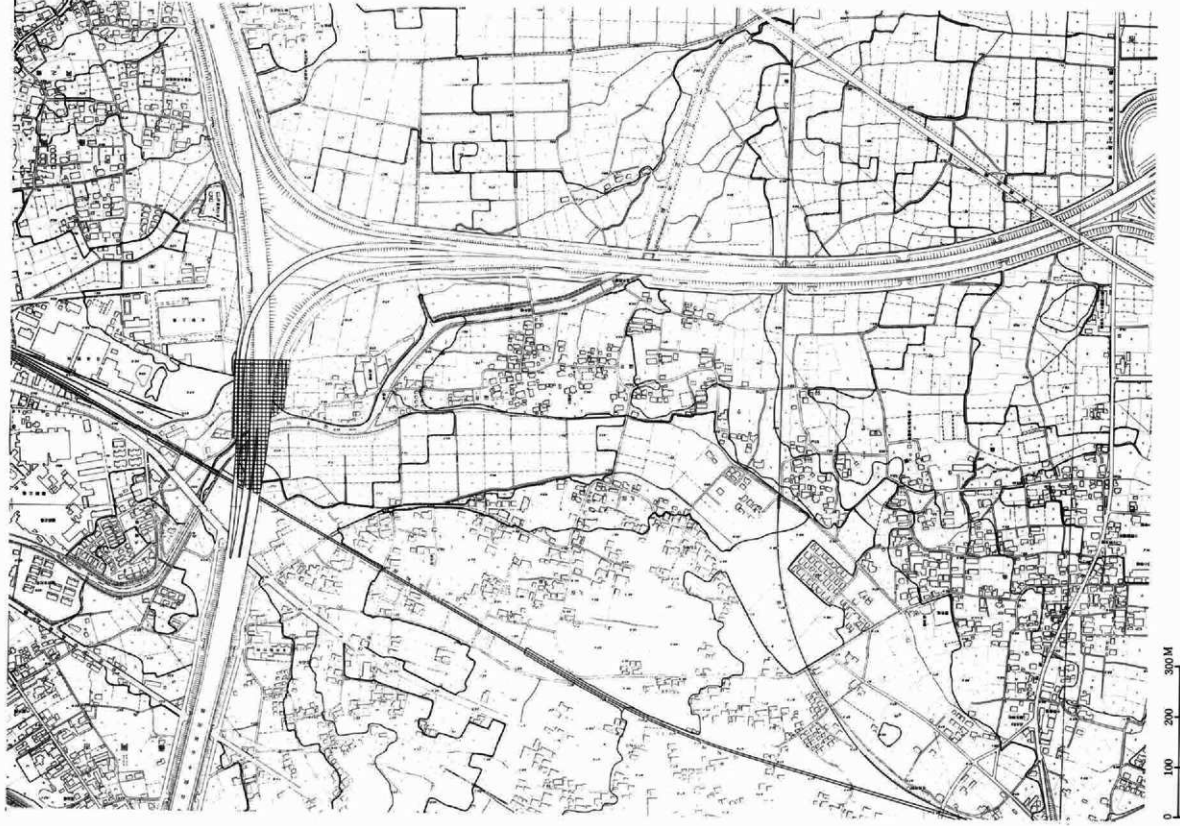
I 発掘調査の経過

- 12月25日 I、II区内の遺構の検出しないグリットの埋め戻し作業開始。
- 12月26日 危険箇所の標示、立ち入り禁止区域の設定。本調査対象地域内に集落跡の存在を確認。第1次調査を終了する。
- 昭和49年1月9日 本遺跡の第2次調査開始、調査範囲は未解決用地を除く範囲。日本道路公団高崎工事区用地係に今後の作業計画を連絡。
- 1月16日 I₄グリットを北へ15m拡張、トレンチ調査となる。地表下100cm付近から多量の土師器片が出土。
- 1月28日 住居跡が存在する可能性がある地域(K、J区)の拡張及び遺構検出作業。
- 2月1日 第2号住居跡調査開始。本日より遺構検出作業と住居跡の調査が併行して始まり、本格的な調査開始となる。
- 2月6日 I₅-11の西側より大木出土。植物鑑定依頼。
- 2月14日 県立玉村高校、山岸教諭、花粉分析の資料採取。
- 2月16日 県立高崎女子高校、鈴木哲教諭、木材の鑑定に来る。木林の表皮が遺存せず材質不明。
- 2月19日 大木の切り出し作業、I₄、I₅調査終了。
- 3月1日～4日 県林業試験場職員、大木を取り上げに来る。大きすぎて引き上げ作業ならず。
- 3月8日 陸上自衛隊、大木引き上げ作業に来る。
- 3月14日～30日頃 1日に7～8軒の住居跡調査が併行にすすむ。
- 3月28日 48年度作業終了。
- 4月3日 49年度作業開始。
- 4月26日 今後の作業計画を立てる。
- 5月1日 この頃より床面精査等、調査終了に向かって歩みだす。
- 5月13日 未解決用地、つげ畑の件で用地第2課長来訪。
- 5月15日 不用器材及び遺物の搬出開始。
- 5月20日 器材撤収、第2次調査終了。
- 昭和52年11月14日 第3次調査開始。器材の搬入及び整理、テストビット2ヶ所設定。3年6ヶ月ぶりの調査となる。遺跡周辺は一変し、関越自動車道工事内の空地を調査する感が強い。
- 11月15日 重機導入、関越自動車道工事による盛土を排除。遺跡内清掃。
- 11月16日 調査事務所設立。前回の調査と図面を照合するため、基本杭設定。
- 11月18日 遺構検出作業の開始。
- 11月29日 第22号住居跡調査開始。本日より遺構検出作業と住居跡の調査が併行して進む。
- 12月10日 最終遺構検出作業完了。
- 昭和53年1月24日 遺跡の全景写真撮影。

I 発掘調査の経過



第1図 周辺の遺跡分布図



第2図 飯井遺跡周辺の地形図

II 遺跡の立地と環境

- 1月25日 遺構調査完了。
- 1月26日 遺物整理及び器材の点検。
- 1月27日 遺物整理及び不用器材の搬出。
- 1月31日 遺物、器材の搬出。本遺跡調査終了。

II. 遺跡の立地と環境 (第1、2図)

温井遺跡を含む藤岡市は東を神流川、西を鑛川、北を烏川の河川によりかこまれている。鮎川は藤岡市の最南西、赤久繩山系の杖植峠付近に源を発し、国指定史蹟七奥山古墳の所在する落合地区で鑛川に注ぐ、さらに鑛川は本遺跡の北西で烏川と合流する。烏川遺跡の北方を東流して、やがて北流する神流川と合流する。

鮎川は西平井地区付近を要として上栗須、中栗須、下栗須を末端とする扇状地を形成している。

栗須地区から烏川沿いの立石地区間は水田地帯で、この水田地帯は鮎川による扇状地の地形とは異なり、鑛川側を高くする西高東低を示し、立石地区にも及んでいる。西高東低の地形の鮎川扇状地の影響を受けながら鑛川と烏川の氾濫による所産と考えられる。これにより立石地区に自然堤防が形成され、この上に現在の集落が営まれている。

温井遺跡はこの自然堤防の東南端に位置し、周辺は水田である。本遺跡中央部を横断する温井川は鮎川より分水し水田地帯の中央部、栗須地区北端、立石地区南端を通り、水田の取水河川として利用され、温井地区南西でそれぞれが合流しやがて、多野郡新町の北方で烏川に注ぐ。

本遺跡は群馬県藤岡市岡之郷字温井に所在する。藤岡市の北東端に位置し、多野郡新町と境を接する。本遺跡の標高は約65mで、高崎市N-12.3、W-14.0(1/50000)で国家座標はX=+30.4~30.6km、Y=-66.0kmの地点である。

藤岡市は古墳の多い地域で知られ、戦前より分布調査としての研究が盛んに行われて来た。しかし集落跡としての調査例は少ない。遺跡の分布は第1図と表にまとめておく。^(注2)

藤岡市が本格的に遺跡調査が実施されるようになったのは昭和52年度以降で、今後の調査成果が期待される。

古墳の分布は主に神流川を流域とする神田(57)、本郷(23)、根岸(5)、小林(61)、下戸塚(20)地区鮎川を流域とする東平井(136)、鮎川(15)、白石(70)、中大塚(7)、下大塚(2)、本動堂(9)、落合(2)、篠塚(6)地区、藤岡台地の縁辺部は中栗須(4)、下栗須(6)、藤岡(12)地区等に大小の古墳群が知られ、古墳群は主に河川流域の台地上に築造されている。古墳は古墳時代後期のものが多い。集落跡としては各古墳群の周辺に土師器の散布がみられ、集落跡が存在する可能性が高い。集落跡の調査例としては東平井古墳群と白石古墳群の付近で竹沼遺跡が調査され、古墳時代の集落跡としての成果をあげている。^(注3)^(注4)^(注5)

本遺跡の周辺は従来河川の氾濫による河成平野で、鑛川と烏川の合流付近と想定され、遺跡の存在は疑問視され遺物も散布していない。しかし本遺跡が発見されたことにより、低台地上はもちろんのこと、水田地帯にも調査対象地域としての視点があてられるようになった。

上越新幹線工事に伴う調査として、古墳時代~奈良時代の集落跡を検出した森遺跡、平安時代の集落跡を検出した中I遺跡、奈良時代の溝、土竪などを検出した中II遺跡が調査されている。また最近^(注6)^(注7)^(注8)

II 遺跡の立地と環境

の調査例では水田地帯のほぼ中央部より浅間山爆裂B軽石降下面より、平安時代の水田跡が調査されている。本遺跡を始め、調査された遺跡から見ると立石地区を中心とする一帯も河川による氾濫の影響を受けながら、古墳時代から奈良、平安時代にかけて集落が営まれていた。今後の調査例の増加に伴い、歴史的環境はさらに解明されるであろう。

参考文献

- 注1 横沢克明、石塚久則、都丸 肇、真下高幸「温井遺跡」『関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ・Ⅴ』群馬県教育委員会
- 注2 「上毛古墳総覧」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯』1938年
- 注3 「群馬県遺跡台帳Ⅱ」群馬県教育委員会
- 注4 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」
- 注5 前原 豊 穂貫銀次郎「竹沼遺跡」1978年 藤岡市教育委員会
- 注6 横倉興一「森遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』群馬県教育委員会
- 注7 長谷部達雄 細野雅男 能登 健「中遺跡」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』群馬県教育委員会
- 注8 同 上
- 注9 前原豊 古郡正志「小野地区遺跡群」—平安時代の水田址と住居址の調査— 藤岡市教育委員会

本文中の()は古墳数を示す。

(1000番台の番号は群馬県教育委員会発行の「群馬県遺跡台帳Ⅱ、および群馬県遺跡地図より掲載●は古墳であるが名称のないものである。)

番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
1	温 井 遺 跡	藤岡市岡之郷字温井	「関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」
2	岡 之 台 遺 跡	藤岡市岡之郷	古墳時代集落
3	下 川 前 遺 跡	藤岡市岡之郷	平安時代
4	小野地区遺跡群	藤岡市小野	「小野地区遺跡群」1980年 藤岡市教育委員会
5	沖 遺 跡	藤岡市中栗須	平安時代
6	森 遺 跡	藤岡市森	「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ」
7	中 I 遺 跡	藤岡市中	奈良～平安時代集落
8	社 宮 寺 遺 跡	藤岡市藤岡	
9	中 II 遺 跡	藤岡市中	奈良、平安時代の溝、土壇
10	八 反 畑 遺 跡	藤岡市中栗須	平安時代集落
11	神 明 遺 跡	藤岡市中栗須	散布地
12	篠 塚 古 墳 群	藤岡市篠塚	
13	北 原 遺 跡	藤岡市下大塚	平安時代集落
1199	田 中 古 墳	藤岡市塚原83	現在あとごめ一部残存のみ、一部くずれた事あり。
1230	へ ソ ノ ヤ マ	藤岡市中里586	円墳東西12.2m、南北12m、高さ1.2m、封土大きく採取された墳丘上は平坦となっている。
1238	奥 浅 間	藤岡市藤岡高崎道西1152	円墳東西29m、南北23m、高さ4.6m、南西部の一部を欠いている。
1239	浅 間 神 社	藤岡市藤岡高崎道西1152	円墳東西43m、南北38m、高さ4.5m。

II 遺跡の立地と環境

番号	遺跡名	所在地	備考
1242	お熊さま	藤岡市上戸塚熊野363	前方後円墳、前方部壇あり、石室開口、横穴式石室、全長393m(東西)前方径39.2m(南北)後円径26.2m(南北)高さ4m、墳丘上にお宮あり、(戸塚神社古墳とも呼ばれる。)
1245	観音堂	藤岡市下栗須観音堂96	円墳東西22m、南北29m、高さ3.7m、南北に落込みあり。
1253	天手長神社	藤岡市下栗須大道南192	円墳東西23m、南北24m、高さ2m、墳丘上に天手長神社を祀る。
1281	平地神社古墳	藤岡市中大塚宮前1203	円墳、稲荷祀をまつる。北側西側は石垣で補強してある。昭和43年人骨出土。
1284	天神塚	藤岡市中大塚天神882	
1292	七興山古墳	藤岡市上落合七興甲831 他6筆	前方後円墳。全長140m、前方部幅約100m、高さ18m、後円部径約80m、高さ約17m、周濠をめぐらしているが、最近の調査で二重であることを確認している。墳丘上に近世の釈迦三尊、五百羅漢石像がある。羊太夫の伝説で有名。昭和2年6月14日国指定史跡。
1293	伊勢塚古墳	藤岡市上落合同甲318 他4筆	円墳東西27m、南北26m、高さ5m、横穴式石室開闢張プランとなっており、壁はアーチ型に曲線的に築造されている。壁石は自然石の小規模な石で模様積みしている。用石、石室構成上から全国的にも稀にみる貴重な古墳である。昭和48年8月21日県指定史跡。
1294	稲荷山	藤岡市上落合長津474	円墳、周囲の耕地等に大分浸蝕されている。径東西9m、南北12m、高さ2.5m。
1297	地蔵堂	藤岡市根岸高江原8	円墳東西8.3m、南北12m、高さ2m。
1316	ひょうたん塚	藤岡市本郷本郷塚原321	円墳東西28.7m、南北20.5m、高さ3m。
1321	堂山	藤岡市本郷本郷別所1302	円墳東西29.4m、南北18m、高さ3m。
1322	かね塚	藤岡市本郷本郷別所1247	円墳
1471	長塚	藤岡市東平井寺西1616	円墳
1540	金堀り塚	藤岡市鮎川大歩625	円墳東西8.2m、南北9.0m、高さ2m。
1547	コウモリ穴	藤岡市鮎川下の段甲 995-3	円墳東西12.6m、南北16.6m、高さ25m、玄門部で開口羨道部落封土くずれ墳丘上に石材露出、玄室幅2m長さ6m高さ2m、天井石3枚、側壁、自然石乱石積。
1549	柔師塚	藤岡市緑久保292	円墳東西12.2m、南北16m、高さ5m
1572	天王塚	藤岡市白石洞2129	円墳東西28.5m、南北23.9m、高さ4m、墳丘上を平坦にして天王神社をまつる。
1582	堀越塚	藤岡市白石滝1948	玄室開口、奥壁南一部欠、羨道全欠。
1585	江原塚	藤岡市白石滝甲1915	円墳東西26m、南北23m、高さ3m、玄室開口、羨道西側のみ残り東側滅失す。玄室長4m、幅2.4m。
1601	オソナエ塚	藤岡市白石滝1861	円墳東西20.6m、南北18.2m、高さ4m。

III 調査の方法

番号	遺跡名	所在地	備考
1624	皇子塚	藤岡市三ツ木東原247	円墳東西32.3m、南北27.6m、高さ6m、玄室部開口、横穴式複室、石室、奥室幅2.3m、長さ5m、前室幅2m、羨道5m、奥室切石積み、前室自然石積。
1625	稲荷山古墳	藤岡市白石稲荷原1374	前方後円墳、全長92.5m、前方部幅41m、後円部52.5m、高さ12m、葺石、円筒埴輪列がある。昭和8年群馬県と帝室博物館で発掘調査。後円部の東西に礎床が並列。石枕、鏡、玉類、石製模造品など副葬品が豊富。5世紀代の古墳とみられる。後藤守一、相川龍雄『多野郡平井村白石稲荷山古墳』
1626	十二天塚	藤岡市白石荷原1346	前方後円墳。
1627	喜蔵塚	藤岡市白石中郷753	円墳東西20m、南北20.7m、高さ6m、石室開口、玄室幅2m、長さ2.5m、羨道幅1m、長さ4m、載石切組積両袖型横穴式石室。
1648	一本松	藤岡市藤岡外の平2859	南に突出する舌状台地で西から第二番。松の根かたー1.2m。須恵器出土？開墾桑園より土師、須恵、薄手土師、表面採集。
1674	猿田遺跡	藤岡市白石猿田1490	土師器散布。

III. 調査の方法 (第3図)

I、II区の基本杭は日本道路公団のセンター杭をそれぞれ利用し、調査対象地域全面に方眼を組み、南東隅に基点を置いた。

東西方向は10mを1区画とし、アルファベット(A～L)をつけた。さらに1区画の中を5分割(1～5)した。南北方向は2mを1単位として南から北へ通し番号をつけ、この方法により最少単位の2m四方のグリットを設定した。これは試掘の都合上組んだものである。各グリットの呼称はアルファベット、5分割、南北方向の単位と順次読む。例えば最南端のグリットはG₅-6と呼称。

調査の方法は2m四方の試掘から開始し、遺構の確認できた部分に対しては全面発掘を行うこととした。II区に関しては遺構の確認がなく試掘のみであった。I₅-10では土器の集積が見られ、I₅-11、I₄のトレンチを設定し、拡張調査を行なった。I₅-24、25、30、40とJ₅-25、30は遺構の可能性があり、可能な限り拡張し発掘を行なった。

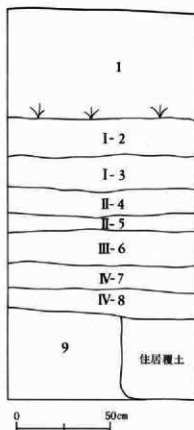
第3次調査では前回の調査で層位や遺構検出面までの深さが判明しており、テストピット2ヶ所を穿ち、機械により表土を除去した。

基準杭は道路幅の用地杭を前回の図面から、第2次調査までの杭を再現し、最少単位2m四方のグリットを設定した。グリットの呼称は前回と同様である。



第3图 出井渡跡調査区域全体图

IV. 基本層序 (第4図)



第4図 遺構基本層序

本遺跡の上面を覆う基本土層は下記の通りである。(トレンチ、グリッド調査の範囲は別記)

- 1) 関越道建設工事に伴う盛土。
- 2) 浅間山爆裂A軽石(天明3年、1783年)を含む暗褐色土層。
- 3) 浅間山爆裂A軽石、マンガ、鉄分凝集、炭化物粒を含む。耕作土層。
- 4) 浅間山爆裂B軽石(天仁元年、1108年)が多量に降灰している層。
- 5) 浅間山爆裂B軽石が水の浸透作用による茶褐色土層。
- 6) 鉄分凝集がみられる黄褐色粘土質土層。
- 7) 6)層にマンガ凝集が厚く水平堆積している暗褐色粘土質土層。
- 8) マンガ凝集が処々にみられる暗褐色土層。
- 9) 遺構基盤層。基盤層は沖積地のため遺構によりそれぞれ異なった土質を占めている。

本文土層図では、

- I層 A軽石を含む層(2、3)
 II層 B軽石を含む層(4、5)
 III層 黄褐色粘土層(6)
 IV層 マンガ凝集を含む層(7、8)に大別している。

V. グリット調査

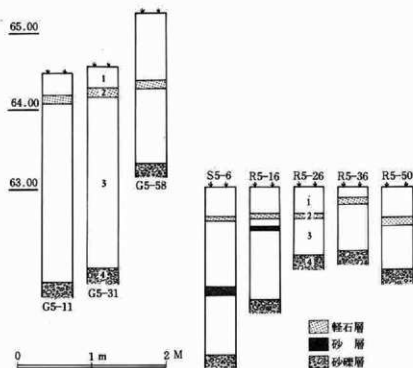
I区(第5・6図)

一般的な堆積状況は第1層は表土層、第2層は浅間山爆裂B軽石層、第3層は茶褐色又は暗褐色粘土層で、場所によっては砂層を含むなど相当複雑な変化をしている。第4層は砂礫層で時々摩滅した土師器、縄文土器片を含む。例としてG₅-11、31、58を提示した。

第2層は本遺跡に普遍的に存在することから軽石降下時には、すでに安定した地形を形成していたものと考えられる。第3層の形成は3ヶ所とも同一時期であることを証明する資料は全く皆無であり、むしろ粘土の堆積が非常に変化し、土色も異なることから、異なった時期のものと考えられるようである。この一帯の河成平野は麻状に乱れた小河川の流路の変化を充分に考えさせられ、流路の変化を考えるうえでI₁、I₅-11(第6図)を掲げることができる。

第1層は現水田耕作土、第2層は鉄分凝集を含む水田耕作の安定土、第3層は浅間山爆裂B軽石層を含む黒褐色土層、4層上面はB軽石が水の浸透作用により黒味を帯びる。土質的には下面と同じ、4層下面は非常に良くしまっている黄褐色粘質土層、5層はマンガ凝集がみられる暗褐色粘質土層

V グリッド調査



第5図 I、II区グリッド土層断面図

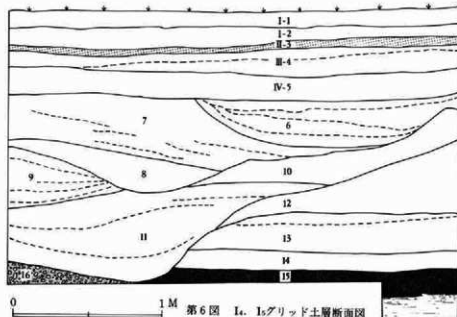
も河川の流路が認められた。

II区 (第5図)

温井川の旧河床面で、17ヶ所のグリッドを発掘したが川筋に直交するような5ヶ所について説明し、第II区の調査のまとめとしておきたい。第1層の表土層の下に浅間山爆裂B軽石層、第3層は暗褐色又は茶褐色粘土層となり、第4層の砂礫層に達する。

第2層のB軽石以前に現在の温井川方向に深くなる川筋が確認された。

遺構としてはO₅-31より、先を円錐状にとがらせた径10cm、残存長70cmの杭が第1層下部より打ち



第6図 I4、I5グリッド土層断面図

である。6層以下は河川の流路による堆積状況をしめす。第10層～第16層までは無遺物層であった。

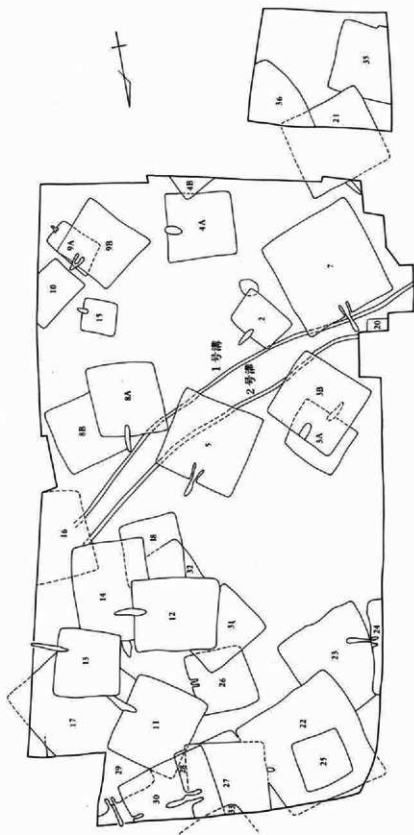
第12層～第15層までの正堆積を第10、11層が切り、第9、10層の堆積を第7、8層が切る。さらに第7層の堆積を第6層が切っている。流路は第5層ではほぼ安定し、B軽石降下時には平坦面が出来あがっている。

なお第9層は遺構の基盤面とほぼ同一の性格を有するもので、集落の周辺を川が流れていたと解釈することもできる。G₅-11、G₅-31

込まれているが、使用目的は不明である。R₅-11第3層下部より摩滅した土師器片が出土した。

各グリッド検討の結果、第II区に於ては、遺構と認定し得るものはなかった。

V グリッド調査



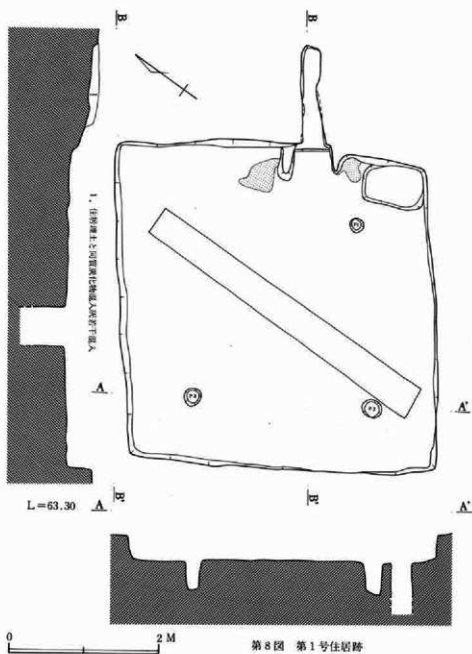
第7図 遺構配置図

VI. 検出された遺構と遺物

1. 住居跡

第1号住居跡 (第8・9図)

本住居跡は他の住居跡群とは異なった拡張区にある。第1次グリット調査の際北側は温井川、西側は宅地、南側は道路とわずかの空地 (I₂-55) に駄目押しとして一番最後に入れたものである。このグリットによって始めて焼土 (かまど) にあたり、遺跡の再検討が始まった。本住居跡の周辺にも住居跡の存在する可能性も考えられた。しかし付近のI₂-49、J₂-59グリットでは遺構にあらず、遺



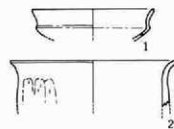
1. 住居跡(第1号)

構の数が無いことが予測された。住居跡現地表下約1.7mにあることや、住宅、道路にはばまれこの空地(桑畑)の全面拡張より、他の調査区の拡張に力を入れた。

住居跡の平面形は各壁ともほぼ一直線上に掘り込まれているが、かまどの左右壁は幾分外へ張り出している。北、南コーナーは鋭角で、東、西コーナーは鈍角を呈する。規模は4.2×4.3mを測る。やや歪んだ正方形住居跡である。方位はN-35°-Eを測る。壁はやや粘質をもつ灰褐色土層で、壁上端部では処々崩壊しているが、全体的にはほぼ垂直に立つ。遺存度は良好で壁面もほぼ平坦である。残存壁高は各壁とも30cmを測る。

床面はほぼ平坦で、住居中央部から南寄り及びかまど周辺は堅く踏み込まれている。床面の状態は良好である。床面上には柱穴、貯蔵穴を検出した。周溝は不明。柱穴はP₁-P₂の3ヶ所を確認した。他の1ヶ所はグリッド調査の際床面下調査で消失した。各柱穴の規模はP₁18×18cm、深さ45cm、P₂26×24、深さ43cm、P₃24×24cm、深さ38cmを測る。各柱穴間はP₁-P₂は2.5m、P₂-P₃は2.4mでほぼ等間隔を呈する。また住居跡の平面形と柱穴の位置関係は規格性をもっている。貯蔵穴はかまどの右側、住居跡のコーナーに掘られている。規模は80×50cmの長方形を呈す。覆土は炭化物、焼土を含む砂質土壌である。

かまどは東壁の右コーナー寄り約1/2付近に付設し、袖部は住居壁に対してほぼ直角に構築している。よってかまどの中軸線も壁に対して直角となる。燃焼部は住居跡内に設け、火床は床面とする。燃焼部の平面形は奥壁幅48cm、焚口幅58cm、奥行45cmを測りやや台形を呈している。袖部は灰白色粘土と暗褐色土との混土で遺存状態は悪く床面付近に、幅約20cmでわずかに基部を残す。かまど周囲の床面は焼土、灰が散乱している。またかまど両袖外側には厚さ約3cmの焼土と灰の堆積がみられた。煙道部は住居壁を床面から奥行10cm、高さ10cm、傾斜45°で一旦掘り、その後奥行50cmまで傾斜18°で登る。



第9図 第1号住居跡出土遺物

煙道部尻はほぼ平坦となる。残存長は1.3m、幅25cmを測る。煙道部内壁及び底面は良く焼け、覆土と一別できる。煙道部内覆土はやや粘質をもつ灰褐色土層で炭化物、焼土を混入する。

住居跡覆土は床面より約16cm付近までは煙道部内と同質で、その下は砂質土壌となる。

遺物はグリッド調査の際、土師器の出土が数点見えた。住居跡調査時にかまど周辺から環、高環、甕が出土している。高環については小破片で実測不可能であった。遺物の出土量は非常に少ない。

遺物観察表 (第9図)

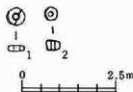
図版番号	器形	出土位置 遺存状態	法量	粘土・堆成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
9-1	環	かまど付近 堀	口 13.0	胎 細砂粒混入 焼 暗褐色 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部に外壁をもち、口縁部は外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は指面による横溝で、底部は不定方向縦溝。内面、口縁部は横溝で。	
9-2	甕	かまど付近 堀	口 17.8	胎 砂粒混入 堆 暗褐色 色 褐色	口縁部で薄くなる。胴部で直立し口縁部は緩やかに外反する。口縁部は指面溝でにより丸みを帯びる。	外面、口縁部は横溝で、口縁部中位から底部にかけて下→上方向縦溝。内面、口縁部は横溝で、底部は鋭利な縦溝で。	

第2号住居跡 (第10~12図)

本住居跡は7号住居跡の東側に位置する。平面形は南北壁を長辺とする横長の住居跡である。壁は南壁を除いて、ほぼ一直線状に掘り込む。北壁の両コーナーに交差する軸線は直角であるが、掘り方としてはやや隅丸方形住居跡となる。南壁側は南西コーナーの土壇と重複しこの付近は少し乱れていた。検出された壁長は東西2.6m、南北3.8mであった。壁は黄褐色粘土質で遺存状態は南壁側を除いてはほぼ垂直に立ち上がる。住居跡内の覆土と壁との土質差は明確で、壁面では土が剥離する。残存壁高は約55cmを計測する。方位はN-28°-Wを測る。

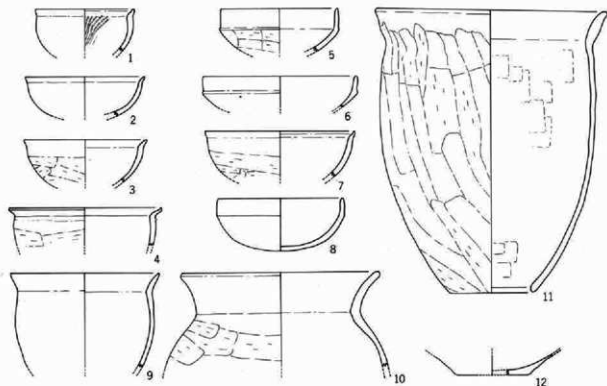
周溝は壁直下に幅約12cm、深さ約4cmで全周し、東西壁下は南北壁下にくらべて幅が狭い。周溝はかまどの両袖下で途ぎれ、燃焼部内には認めることができない。覆土は炭化物粒、焼土を含みやや粘質をもった灰褐色土である。処々壁崩れの黄褐色粘質土が混入している。

床面はほぼ平坦である。かまど焚口部周辺及び住居中央部は良く踏み詰められているが、壁側に向うにつれ次第に軟弱になる。この床面は炭化物粒、焼土を含む灰褐色粘質土で薄く覆われていた。おそらく生活時において自然堆積したものと考えられる。灰褐色粘質土の下は壁と同質の黄褐色粘質土であった。床面上には2ヶ所のピットが検出され、P₁は30×30cmの円形で深さ36cm、P₂は25×25cmの円形で深さ42cmを測る。覆土は炭化物を含む褐色粘質土で、掘り方はほぼ垂直であった。いずれも壁との位置関係、覆土の状態、深さから見て主柱穴と考えられる。



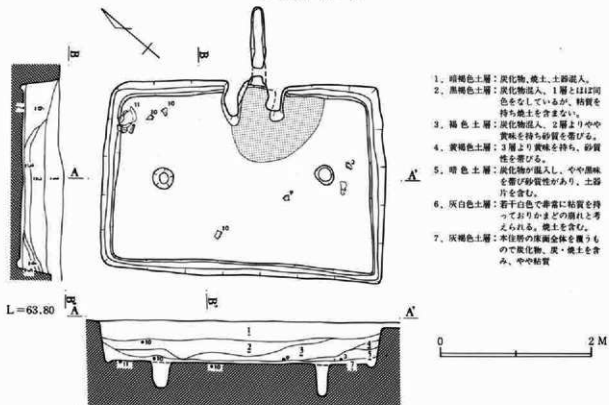
第10図 第2号住居跡出土遺物

かまどは東壁中央部に付設し、遺存状態は比較的良好で、燃焼部は住居壁に対し直角に設置している。火床は床面とする。平面形は焚口幅40cm、奥行40cmのほぼ正方形を呈し袖長は比較的短い。燃焼部内には焼土、炭

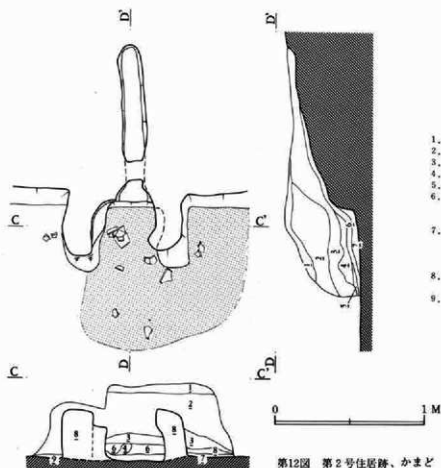


第11図 第2号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第2号)



1. 暗褐色土層: 炭化物、焼土、土器混入。
2. 黒褐色土層: 炭化物混入。1層とはほぼ同色なしているが、粘質を持ち焼土を含まない。
3. 褐色土層: 炭化物混入。2層よりやや黄味を持ち砂質を帯びる。
4. 黄褐色土層: 3層より黄味を持ち、砂質性を帯びる。
5. 暗色土層: 炭化物が混入し、やや黒味を帯び砂質性があり、土器片を含む。
6. 灰白色土層: 若干白色で非常に粘質を持っておりかまどの遺れと考えられる。焼土を含む。
7. 灰褐色土層: 本住居の床面全体を覆うもので炭化物、灰・焼土を含み、やや粘質。



1. 炭化物を含む: 住居遺土
2. 暗褐色土層: 炭化物等は含まない。
3. * : 炭化物混入。
4. 赤褐色土層: 天井部落土。
5. 炭化物層: かまどの焼土、砂質焼土
6. 黒褐色土層: 立ち上がり附近から煙道にかけては軟質ソフトで焼土炭化物等が混在する。
7. 暗黒灰色土層: 炭化物及び灰 (かまど使用中に運搬された物) 床面は非常に良く焼成され焼土塊が時々に見られる。
8. 灰白色土層: かまどの地及び袖の遺出したものでやや粘質。
9. 灰褐色土層: 住居の床面直上に置かれる焼土、やや粘質を持つ炭化物層、焼土ブロックが若干混入。

第12図 第2号住居跡、かまど

VI 検出された遺構と遺物

化物が厚さ約10cmと厚く堆積し、鳥骨が出土しているのが目立つ。袖部は灰白色粘土で構築されている。左袖の外壁と右袖の内壁は遺存が悪く、左袖の内壁と右袖の外壁は遺存が良い。左袖内壁はほぼ直角に立ち上がり、良く焼かれて壁面は幼黒色を呈している。ただし上半部はかまど天井部の崩落に伴って一箇に崩れた様子がうかがわれ、燃焼部内には多量の焼土ブロックが検出された。かまどは左方向からの外的要因によって崩れたのではないかと考えられる。煙道部は燃焼部の奥壁を高さ約15cm残し、約15°の傾斜で長さ約65cmを削り、その後ほぼ水平にして煙出し孔につなぐ。煙道部の全長は約2.2m、内法幅約24cmを測る。煙道部の一部には天井部が約25cm残存していた。内壁の立ち上がりはほぼ直角で、天井部はかまどこ状を呈し、煙出し孔は丸味をもっている。

住居跡覆土の床面直上は炭化物、焼土を含む灰褐色粘土質で覆われ、壁直下は崩壊土の黄褐色粘土層が堆積している。この時点で一旦安定し、その後炭化物、焼土、土器片を含む黒色土層が短期間に埋没している。この黒色土層は7号住居跡に認められたものと同質と考えられる。

遺物はかまど内と、北西コーナーより甌が出土している。本住居跡に伴うと考えられる土器はNo.3、9、11である。No.10は覆土中位から床面まで出土している。No.6は覆土中位に出土している。

白玉は2点出土し直径3.5~4.5mm、厚さ1.5~2.5mmを測る。いずれも中央部に稜線が認められず、管玉を切断したような円筒状を呈する。表、裏、側面は研磨されている。

遺物観察表 (第11図)

図版番号	器形	出土位置 遺存状態	法量	胎土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
11-1	杯	覆土層	口 10.6	胎 微細粒混入 地 堅緻 色 橙色	胴部に厚みをもつ。胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短くやや直立に近い。	外面、口縁部は指面による横溝で、胴部は寛り後多少研削。 内面、口縁部は横溝で、胴部に狭い稜をもつ。胴部は寛調整後研削。	
11-2	杯	覆土層	口 12.8	胎 微細粒混入 地 軟弱 色 橙色	胴部は均一した厚みをもち口縁部で薄くなる。胴部はやや丸みをもち、口縁部は短く緩やかに外反する。	外面、口縁部は指面による横溝で、その他は整形不明瞭。	
11-3	杯	床面層	口 13.2	胎 砂粒混入 地 軟弱 色 濃い橙 色	胴部に厚みをもつ。体部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横溝で、口縁部はつまみ池で、体部は左→右方向寛り。 内面、口縁部は横溝で、体部は整形が不明瞭だが横溝でと思われる。	
11-4	碗	覆土層	口 16.4	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗褐色	胴部に厚みをもつ。胴部は直立ぎみに立ち、口縁部は屈曲し外反する。	外面、口縁部は指面による横溝で、胴部は横方向寛り。 内面、口縁部は横溝で、胴部に狭い稜をもつ。胴部は寛溝で。	
11-5	杯	覆土層	口 12.6	胎 微細粒混入 地 軟弱 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は緩やかに立ち上がり、外稜をもつ。口縁部は長く直に立ち上がる。	外面、口縁部は横溝で、稜は寛整形、体部は右→左方向寛り。 内面、口縁部は横溝で、体部は右→左方向寛調整。	
11-6	中位片	中位層	口 16.4	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は扁平を呈し、胴部に外稜をもつ。口縁部は直に立ち上がる。	外面、口縁部は横溝で、稜は寛調整胴部は不定方向寛り。 内面、口縁部は横溝で、胴部は横溝で。	
11-7	杯	覆土層	口 16.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗赤褐色	胴部はほぼ均一した厚みもち口縁部で薄くなる。胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は指面による横溝で、胴部上位は横溝で、中位付近は左→右方向寛り。 内面、口縁部に狭い稜があり口縁部は横溝で、胴部は寛り横溝で。	胴部内面に黒色の腐付層

1. 住居跡(第3A号)

図版番号	図形	出土位置 遺存状態	法量	土・地成・色調	図形の特徴	整形の特徴	備考
11-8	環	覆土 片	高 5.5 口 13.4	胎 砂粒混入 縁部片岩 含む 黄褐色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部はやや平坦で、最大幅を口縁部下にもつ。口縁部は直立する。	外面、口縁部は指頭による積物で、胴部は厚層り後多少研磨。 内面、口縁部は積物で、底部に硬い積物をもつ。胴部は厚層調整後研磨。	
11-9	小型甕	床面 片	口 16.0	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 外一褐色 内一ぶ い褐色	胴部に厚みをもつ。胴部中央位はすばまる。胴部上位に最大幅をもつ。口縁部は短く緩やかに外反する。	外面、口縁部は指頭による積物で、胴部は下一上方向厚層り。 内面、口縁部は厚層り後積物で、底部の積物は硬い。胴部は横方向厚層り後積物で。	
11-10	甕	床面 片	口 21.0	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 外一褐色 内一暗褐色	口縁部に厚みをもつ。最大幅を胴部上位付近にもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、口縁部は積物で、口端部は厚層り。 胴部は右一左方向厚層り。 内面、口縁部は積物で、底部の積物は硬い。胴部は横方向厚層り後積物で。	整形順序 胴部→口縁部
11-11	甕	床面 完形	高 29.5 口 24.7 孔 8.8	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 灰茶褐色	口縁部に厚みをもつ。胴部はやや丸みをもつ長胴形。口縁部は緩やかに外反する。 孔は焼成前に開けられたと思われる。	外面、口縁部は指頭による積物で、胴部は下一上方向厚層り。 内面、口縁部は積物で、積物は硬い。 胴部は厚層調整後積物で、孔は回転削り1段削り。	
11-12	甕	覆土 片	底 7.6	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 灰褐色	底部周辺に厚みをもつ。 底部は平底で胴部に移行する。	外面、底部から胴部下位は厚層り。 内面、積物で。	

第3A号住居跡(第13~17図)

本住居跡は3B号住居跡と棟方向を同じくし90%以上が重複している。このことから3B号住居跡と同様に調査をした。重複の範囲は南東コーナーを中心として東壁側2.8m、南壁側2.9mを測る。床面の比高差は本住居跡の方が約10cm高い。平面形で南東壁はほぼ一直線状に据られ、コーナーはほぼ直角を呈する。北壁側中央部がやや外方に張り出し、西壁では西方向に外反していく。西壁の遺存は悪く他壁は良好であった。規模は東西3.7m、南北3.6mを測りほぼ正方形の住居跡である。方位はN-45°Wを測る。壁及び床面は3B号住居跡と重複する部分については、本住居跡の覆土より黒味をもち、重複以外は黄褐色土壌である。壁の遺存はほぼ良好であるが上端部に崩落がみられる。

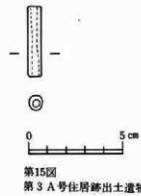
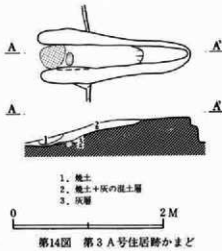
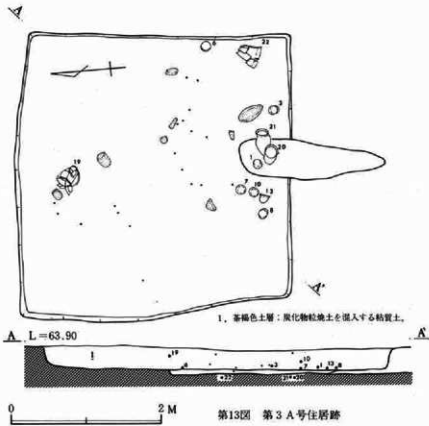
床面はほぼ平坦で、かまど周辺は良く踏み込まれ堅いが、3B号住居跡と重複する部分は軟弱となる。床面上には周溝、主柱穴等は検出し得なかった。

かまどは南壁のほぼ中央部に付設されている。南壁にかまどを持つ住居は本住居跡のみで、かまど上半部はすでに滅失し燃焼部と煙道部の一部を残すのみであった。袖部は灰白色粘土を持って住居壁に対し直角に構築している。よってかまどの中軸線も直角となる。燃焼部は住居跡内にもち、平面形は奥壁幅30cm、焚口幅40cm、奥行70cmの長方形を呈する。火床は床面とする。火床面中央やや右寄りに深さ8cm掘り下げ18×10cmの楕円形の川原石を立てていた。この石は焼けていることから、支脚として使用したものと考えられる。燃焼部内覆土は焼土、灰等の堆積が多量に見られた。煙道部は住居壁を床面から高さ10cm、奥行10cm、傾斜45°で外反ぎみに削り、その後高さ30cm、奥行70cm、傾斜10°で登る。この付近で底面は消失する。

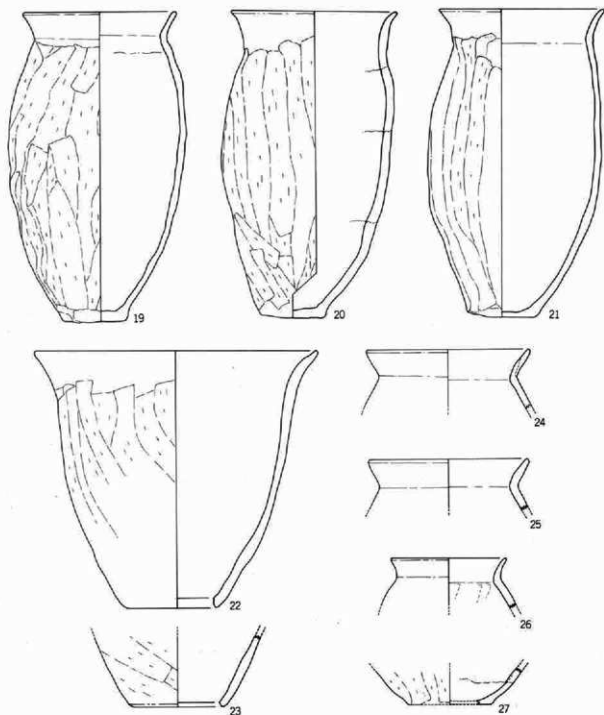
VI 検出された遺構と遺物

煙道部残存壁長は約40cm、内法幅約20cmを測るが、焼土の拡がり具合から約1.5mは存在していたものと考えられる。

住居跡覆土は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土層が短期間に埋まっている。土層断面では分層できなかった。



1. 住居跡 (第3A号)

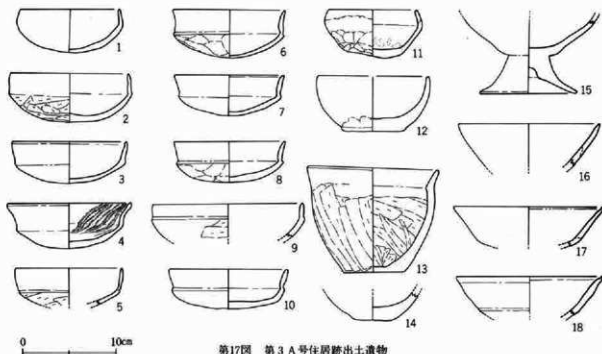


第16図 第3A号住居跡出土遺物

遺物はかまど内及びその周辺と、南西コーナー付近に出土している。本住居跡に伴うと思われるものは環No3、6、7、8、10、甕No13、20、21である。No19は中位、No2、9、15、24は上位からそれぞれ出土している。

管玉、碧玉質、両面穿孔で孔の中央部が細くなっている。上下両面の稜線は比較的鋭い。上下面の孔端はやや摩滅している。

VI 検出された遺構と遺物



第17図 第3A号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第16、17図)

図版番号	器形	出土位置 遺存状況	法量	胎土・地色・色	器形の特徴	整形の特徴	備考
17-1	坏	覆土 完形	高 4.6 口 10.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 明赤褐色	口縁部でやや内湾する。全体に球形を呈する。	外面、口縁部は横溝で、底部に指痕による押圧痕あり、その後発調整、体部直削り。 内面、全体丁寧な体で。	
17-2	坏	上位 片	高 5.2 口 12.7	胎 濃砂粒混 入 地 堅緻 色 明赤褐色	体部は丸底で口縁部はやや内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は発削り後横溝で、口唇部はつまみ指で、体部は不定方向直削り。 内面、口縁部は横溝で、底部は1.5cm幅の直削りを施す。	調整順序 体部→口縁部
17-3	坏	かまど周辺 完形	高 4.4 口 12.2	胎 砂粒少量 混入 地 堅緻 色 明赤褐色	深みのある体部で口縁部は直立する。口縁部が薄く尖い、比較的薄い土器。	外面、口縁部は左→右方向横溝で、体部は直削り。 内面、体部は横溝で、口縁部は直削りによりやや尖い。 内面、丸くする意図が見られる。	
17-4	坏	覆土 片	高 4.8 口 13.4	胎 細砂粒多 量混入 地 堅緻 色 赤褐色	口縁部中央が指痕状で一且くびれ更に外反する。全体的に深みのある土器。口唇部はやや厚い口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、体部は直削り後に発調整を加え鋭い。 内面、体部は横溝で、口縁部は直削りのため調整に変化を生ずる。	
17-5	坏	覆土 片	口 11.4	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 明赤褐色	体部は緩やかに外反する。口縁部は外縁きみに立ち、中央部で厚みをもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は右側方向横溝で、体部から底部にかけて直削り。後には直調整。 内面、体部は不定方向横溝で。	

1. 住居跡(第3A号)

図版番号	器形	出土位置 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
17-6	杯	床面 完形	高 5.1 口 12.0	胎 濃細粒混 入 焼 中や強織 色 褐色	体部は内湾ぎみに立つ、口縁部はほぼ直立し、口唇部でやや外反する。	外面、口縁部は横撫で、体部は浅削り後撫で、後は寛調整。 内面、寛調整後撫で、内面を丸く深くする意図がある。	
17-7	杯	かまど周辺 完形	高 4.3 口 11.6	胎 濃細粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平に立ち、口縁部ではほぼ直立する。口唇部でやや外反する	外面、口縁部は横撫で、体部は粗い寛撫で、口縁部の縁は寛調整により鋭い。 内面、全体は撫で、頸部の沈線は深く明確。	
17-8	杯	かまど周辺 完形	高 4.3 口 11.5	胎 細砂粒混 入の.2mm 焼 堅緻 色 褐色	体部が厚く、口縁部は薄い。体部は扁平に立ち口縁部ではほぼ直立する。口唇部でやや外反する。	外面、口縁部は寛調整後左廻りの撫で。口縁部は鋭く寛押え。体部は不定方向寛削り。縁は寛調整により鋭い。 内面、頸部は沈線明確。寛削り後撫で。	
17-9	杯	上段 片	口 16.0	胎 砂粒多量 焼 堅緻 色 明赤褐色	口縁部がほぼ直立し、外縁をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は左→右方向横撫で。体部は寛削り。縁はやや丸い。 内面、全体を横撫で。	
17-10	杯	かまど周辺 完形	高 4.2 口 12.6	胎 細砂粒混 入 焼 軟弱 色 淡褐色	口縁中央部に厚みをもつ。底部がやや平直で、頸部が強くしまり、口縁部で外反する。	外面、口縁部は寛による横撫で、体部は不定方向寛削り。縁は寛調整。 内面、口縁部は寛調整により鋭い。頸部は寛調整後指頭による撫で、仕上げは丁寧である。	
17-11	甗	甗土 ほぼ完形	高 4.9 口 9.4 底 4.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部が不安定で頸部との境は不明瞭。口縁部で急に内傾する。	外面、口縁部から体部上半に接合痕が残る。体部は細かな寛削り。 内面、口唇部に寛調整痕が残る。底部に指痕。仕上げは丁寧であるが成形は悪い。	一部黒炭あり、
17-12	甗	甗土 片	高 5.9 口 11.7 底 6.6	胎 濃細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色 底部黒色	底部は平底で立ち上がりをもつ。頸部から口唇部に至るまで内湾。口唇部は平直である。器内は口縁に向うに鋭い溝となる。	外面、口縁部は横撫で、体部は寛削り後横撫で、底部中心から外方へ延びて引き、粘土の裏れが頸部にのびる。器面は摩滅している。	
17-13	小型甗	かまど周辺 完形	高 11.4 口 14.1 底 5.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 灰白色	底部は平底で頸部上位は丸く、口縁部は直線的に外反する。内面に鋭い縦線を有する。	外面、口縁部は左→右方向横撫で、体部は下→上方向寛削り。底部は下→上方向寛調整。 内面、口縁部は横撫で、頸部は右→左方向寛削り。胴上半部は左→右上方方向寛削り。底部中心より寛めて引き	整形順序 外側部→底 * →口縁部
17-14	甗	甗土 片	底 3.3	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明褐色	底部立ち上がり付近に最大厚をもつ。底部は小さくやや上げ底ぎみである。	外面、胴部は寛削り。底部は横撫で。内面、不明瞭。	
17-15	台付甗	上段 ほぼ完形	高 10.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	胴部は短く外反する。体部は丸みをもち立ち上がる。接合面で割線、割線部に沈線が見られる。	体部内外面、横撫で。 胴部外面、上→下方向寛削り。 内面、指痕による孔あり。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	部 形 の 特 徴	製 形 の 特 徴	備 考
17-16	高 杯	覆土 区	口 15.1	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	口縁部は直線的に外反し、口縁部は鋭い。	内外共に無施で、	
17-17	高 杯	覆土 区	口 16.0	胎 砂粒少量 混入 焼 軟弱 色 褐色	体部から口唇部にかけて薄くなる。口縁部は直線的に外反し、口唇部で軽く返る。口縁部は鋭い。	器面は磨きであるが丸い整形は不明瞭。施でを施したと考えられる。	
17-18	高 杯	覆土 区	口 15.6	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 褐色	比較的厚みがあり大きく外反する。口唇部はやや内湾する。	外面、口縁部は指頭による施で、口唇部はつまみ指で、体部に寛疵が認められる。 内面、口縁部は指頭による施で、	
16-19	盃	中位 ほぼ完成形	高 32.8 口 16.5 底 6.8	胎 砂粒混入 2mm 焼 やや堅緻 色 茶褐色	底部は平底で、胴上半部に厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。肩部に内稜あり、口縁部は丸い。	外面、口縁部は横施で、胴上半部は下→上方向、胴下半部は上→下方向。底部は軽い寛削り、立ち上がり部は横方向に削り、不安定。 内面、全体施で、底部は削削り、削り痕が軽となっている。	
16-20	盃	かまど 完成形	高 32.5 口 17.8 底 6.5	胎 砂粒混入 5mm 焼 やや堅緻 色 褐色	底部は平底で胴上半部に最大幅をもつ反胴形を呈する。口縁部は直立きみに立ち、口唇部で急に外反する。口縁部は丸い。底部から腰部へは急に開く。	外面、口縁部は寛削り横施で、体部は下→上方向、腰部は上→下方向に削削り。 内面、口縁部から底部にかけて縦施で、底部は削削り、不安定。	整形扁平 口縁部→底部 胴部縦、口縁部 の輪轆痕。
16-21	盃	かまど 完成形	高 32.5 口 17.5 底 7.2	胎 砂粒多量 混入、2 mm 焼 堅緻 色 明赤褐色	比較的小さな平底からなだらかに立ち上がり、胴中央付近に最大幅をもつ。口縁部はなだらかに立ち上がり、口縁部は薄く丸い。肩部に後稜が見られるが寛削りにより丸みをもつ。	外面、口縁部は横施で、肩部は下→上方向に削削り。胴部は削削り。 内面、口縁部は横施で、胴部は縦施で、輪轆痕	
16-22	瓢	床面 完成形	高 27.4 口 29.2 孔 8.7	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	体部中央で器内が薄くなる。腰部からなだらかに外反し、胴中央部で急に張り、口縁部で一層外反する。頸部にはしまりが少ない。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横施で、体部は上→下方向に削削り。 内面、無施で、孔は焼成前2段階調整。	底部に厚稜あり、
16-23	瓢	覆土 区	残存高 7.5 孔 9.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 明褐色	ほぼ均一した厚みをもち、胴部は直線的に立ち上がる。	外面、立上→下方向に削削り。 内面、無施で、孔は焼成前1段階調整。	一部に厚付着
16-24	盃	上位 区	口 17.4	胎 砂粒多量 混入、硬 が目立つ 焼 堅緻 色 褐色	口縁部が「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は左→右方向横施で、頸部に寛疵が残る。胴部は削削り。 内面、体部は無施で、ところどころに寛疵あり。稜はなだらか。	
16-25	盃	覆土 区	残存高 5.3 口 17.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 明褐色	比較的厚みのある上部で口縁部が「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は左→右方向横施で、口唇部は削削り。肩部は指頭施で。 内面、口縁部は無施で、	
16-26	小型盃	覆土 区	口 12.2	胎 砂粒少量 混入、6mm 焼 やや堅緻 色 褐色	頸部にやや厚みをもち、なだらかに外反する。内稜は無施でにより鋭さが欠ける。口縁部は丸い	外面、口縁部は左→右方向横施で、内面、口縁部は横施で、軽い寛削り寛疵が残る。胴上半部は無施で。	

1. 住居跡（第3B号）

図録番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	壁形の特徴	備考
16-27	炭	覆土区	底 8.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗褐色	体部より底部の方が器内が薄く中央部において最も薄くなると思われる。	外面、体部は上→下方向に傾り、底部は垂直。 内面、体部は垂直で、粘土接合痕が見られる。	

第3B号住居跡（第18～20図）

本住居跡の北西コーナー上には、棟方向をほぼ同じくする3A号住居跡が重複する。重複の範囲は本住居跡の北を占める。よってこの部分の壁は他壁より残存高は少ない。平面形は北壁、西壁はほぼ一直線状であるが、東壁中央部はやや外側に張り出し、南壁においては軸線上よりやや南北に振れる。検出された壁長は東西5.1m、南北5.3mとやや南北に長い方形住居跡である。壁の遺存状態は北壁の西寄りと南壁の西寄りの一部分がやや外方に立ち上がるが、その他の壁はほぼ垂直である。壁は炭化物等一切含まない暗褐色土層である。残存壁高は最も高い所で30cm、低い所は3A号住居跡と重複した部分で約10cmを計測する。方位はN-62°-Eを測る。住居跡の施設としては北壁中央部にかまどを、南東コーナーには円錐状の貯蔵穴を持つ。

床面上には多量の炭化物、焼土がみられる。炭化物の中には幅20cm、長さ2.3mを測る建築部材と考えられるものが出土している。炭化物の散乱状況から火災に遇い、上屋がそのまま住居跡内に落ち込んだものと考えられる。炭化物下の床面は壁と同質の土層で、ほぼ平坦である。住居跡の中央部、かまど周辺及び貯蔵穴付近は特に堅く、壁に近づくにつれて次第に軟弱となる。壁直下に見られる周溝は検出し得なかった。床面上には10ヶ所のピットが検出された。このうち主柱穴と考えられるのは、深さ、位置、覆土の状況からP₁-P₄である。主柱穴は各ピット間、各壁との位置から規格性をもって柱の位置が決められたものと推察される。

貯蔵穴は1.2×1.0mのやや楕円形を呈している。断面は三角形で深さ約40cmを計測する。貯蔵穴の底面にはほぼ完形の環が密着した状態で出土した。貯蔵穴内に見られる建築部材の炭化物は火災の際床面のものと同時に落ち込んだものと考えられる。覆土は底面より焼土層、炭化物と焼土の混土層となり、その上面は住居跡内の覆土と同質のものである。

かまどは、3A号住居跡構築の際本体の大部分を遺失している。遺存している残存高は約10cm程度で、左袖の一部分と燃焼部の周辺のみである。左袖は幅約20cm、長さ1mを測るが、遺存状態は悪い。燃焼部内には多量の焼土、灰、炭化物を検出した。燃焼部の奥壁は住居壁としている。煙道部の大部分も遺失しているが、3A号住居跡の北壁に煙出し孔の付近がわずかに遺存していた。煙道部幅約20cm、長さ推定1.2m、勾配約12°で立ち上がる。

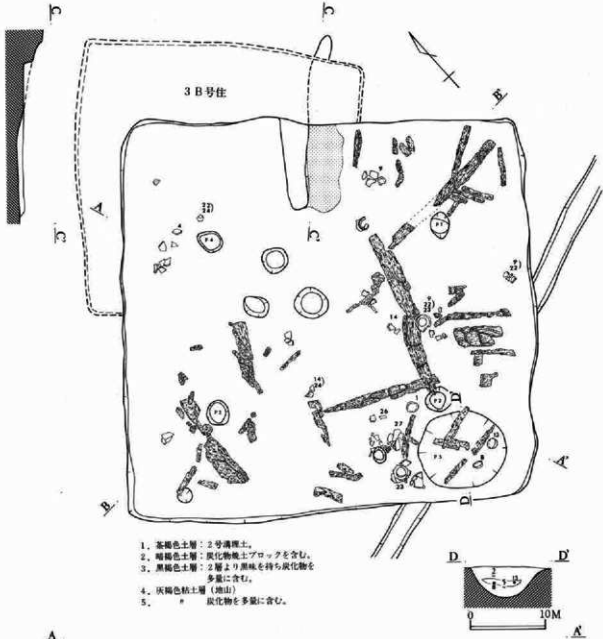
住居跡覆土は壁直下に火災時の炭化物、焼土が厚く堆積する。中央部下層は炭化物層、中層は住居周辺の炭化物が流れ込む。相対的に一括と考えられ、炭化物の量は上層になるほど次第に少なくなる。

遺物は坏、埴、高坏、甕、砥石が出土している。

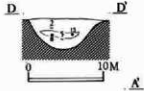
出土土器のなかでNo.4、8、9、13、22、24、27は床面及び貯蔵穴内より、No.1、2、14、15、19は覆土中上位から出土している。またNo.9、22、24は散乱していた。

遺物の出土状況は散在的であった。砥石、泥岩質、最大長15cm、幅7cm、厚さ2cm、6面とも良く摩耗され、S字状を呈する。長期間にわたり使用した状況がうかがわれる。上下面の小口はほぼ平坦

VI 検出された遺構と遺物



1. 茶褐色土層：2号溝埋土。
2. 暗褐色土層：炭化物焼土ブロックを含む。
3. 黒褐色土層：2層より黒味を帯び炭化物を多量に含む。
4. 灰褐色粘土層（地山）
5. * 炭化物を多量に含む。



A
L=63.90



B

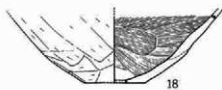
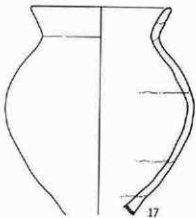
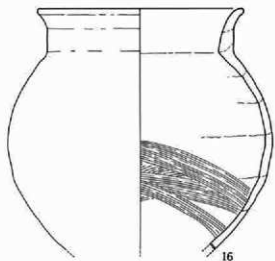
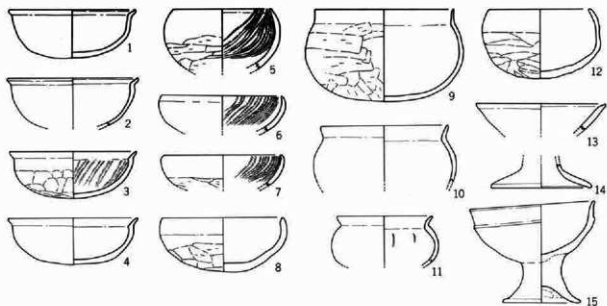


B

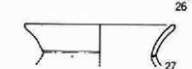
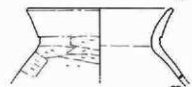
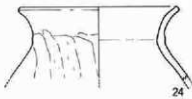
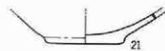


第18図 第3B号住居跡

I. 住居跡 (第3B号)

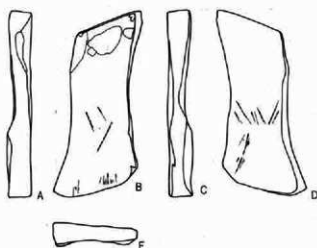


0 10 cm



第19图 第3B号住居跡出土物

VI 検出された遺構と遺物



第20図
第3B号住居跡出土遺物

で、A～D面は摩耗し内湾している。

色調は、暗黄灰色を呈する。石の目は砥石長軸、水平にほぼ一致している。

表面は平滑であるものの、原材に軟、硬部があるために若干の凹凸が生じている。少なくとも、表面を、合せ砥を用いて再調整した形跡はない。裏面は使用中か採取時に生じた割れ口のままだになっている。両側面は、著しい研磨により糸巻状を呈す。両小口面を研磨された平滑面を持つ。

遺物観察表 (第19図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
19-1	環	上位 完形	高 5.1 口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	体部は丸みをもちながら外反し、肩部付近で直立し、口縁部で外反する。口縁部でやや内湾する。	外面、口縁部は横撫で、口端部はつまみ撫で。体部は寛削り。 内面、口唇部は圓調整。体部は撫で後放射状研削。	
19-2	環	上位 片	口 14.0	胎 砂粒少量 混入 焼 軟弱 色 橙色	肩部に厚みをもつ、頸部は強く外反する。	外面、口縁部は横撫で、口唇部はつまみ撫で。体部は寛削り。 内面、体部は右上がり研削。後には撫でにより鋭い。	
19-3	環	覆土 完形	高 5.0 口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 内 橙色 外 明赤 褐色	底部から口縁部にかけてなだらかに外反し、口縁部で更に強く外反する。口端部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で、体上半部は圓調整後横撫で、下半部は2cm幅の不定方向寛削り。 内面、体部は粗い斜方向研削。	整形順序 寛削り後横撫で。
19-4	環	床面 片	高 4.9 口 13.9	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 橙色	底部はやや広くなだらかに外反し、頸部で直立し、口縁部で大きく外反する。口端部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で。体部は不定方向寛削り。 内面、体部は研削が施されていたと考えられる。後には撫でにより鋭さが欠ける。	
19-5	環	覆土 片	残存高 6.4 口 10.4	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 外 赤褐色 内 黒色	全体に球形を呈し、口縁部は内湾する。口端部は丸みをもつ。	外面、口縁部は横撫で。体部は不定方向寛削り。 内面、横撫で後左下→右上方向研削。	
19-6	環	覆土 片	残存高 3.8 口 12.9	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 茶褐色	体部は緩やかな丸みをもち、口縁部で内傾する。口唇部で急に薄くなり丸みをもつ。口縁部との境にわずかに外縁が見られるが全体として丸い。	外面、口縁部は横撫で、口唇部はつまみ撫で。体部は寛削り。 内面、全体は斜方向研削。	

1. 住居跡 (第3B号)

図録番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
19-7	坏	覆土 区	残存高 3.3 口 12.5	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	体部から緩やかに内湾し口唇部 で急に内傾する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、体下半部は直 削り、上半部は左廻り直溝で、口唇 部は急に細く丸い。 内面、寛で器面を寛調整後焼で、全体 を研磨。	
19-8	坏	貯蔵穴 完形	高 5.7 口 13.0	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部は丸底で厚みをもち、口唇 部はやや内湾し、口唇部は直立 し鋭い。口縁部は荒れている。	外面、口縁部は左一右方向横溝で、体 部は右一左方向直削り。 内面、口縁部と体部は溝でにより区分、 体部は溝で、寛で全体を丸く調整する。	
19-9	小型甕	床面 区	高 9.7 口 14.8 底 6.0	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 褐色	体部は球形の丸底で、口縁部は 直立する。口縁部はやや丸い。	外面、口縁部は横溝で、体上半部は右 一左方向粗い直削り、底部は細かな下 一上方向直削り。 内面、体部は溝で、横は溝でにより鋭 い。	
19-10	小型甕	覆土 区	口 13.6	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 ぶい橙	口縁部がなだらかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、口縁部から前 部まで溝を種し特に口縁部は丁寧、 器面が荒れ方向不明だが直削り。 内面、全体は溝で、横は丸みをもち溝 後を意匠し調整。	
19-11	甕	覆土 区	残存高 5.0 口 10.2	胎 微細粒混 入 焼 軟弱 色 黒褐色	唇部が張り口縁部は強く屈曲す る。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、体部は器面が 荒れ整形不明瞭。 内面、体部は直溝で、直削りあり。横は 丸い。	二次焼成を受けた 黒灰あり、器面は もろい。
19-12	甕	覆土 完形	高 7.4 口 10.8	胎 微細粒混 入 焼 やや堅緻 色 ぶい橙	丸底で球形に立ち上がる。口唇 部付近でやや内湾する。口縁部 は厚く丸い。溝みのある土部。	外面、口縁部は横溝で、底部から口唇 部2cm付近まで幅の狭い細かな直削り、 その後全体を溝で。	底部付近に径9cm の黒灰。
19-13	高坏	貯蔵穴 区	残存高 2.8 口 13.8	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 明赤褐色	直線的に外反し口縁部は鋭い。	外面、荒れ整形不明瞭。 内面、口唇部直調整。	
19-14	高坏	上位 区	残存高 2.6 底 10.8	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 明赤褐色	脚柱部と底部との境は比較的上 にある。	底部外面、直溝で、その後横溝で。 内面、直溝で、焼粘土が返る。	
19-15	高坏	上位 完形	高 10.4 口 13.3 底 8.7	胎 細砂粒混 入、雲母 含む。 焼 堅緻 色 ぶい橙	坏部が内湾さみに立ち上がり、 口唇部がわずかに外反する。脚 部は太く底部で開く。脚部接合 はさし丸型。	坏部外面、口縁部は直削りによる横溝で、 口唇部は横溝で、体部は直削り、体部 と口唇部の境は寛調整。脚部は溝で、 内面、体部は溝で、脚部は寛調整後焼 で。	
19-16	甕	覆土 区	残存高 25.5 口 21.8	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 褐色	底部に最大厚をもつ。胴部中央 付近に最大幅を有し球形を呈す る。口縁部はほぼ直立し、口唇 部付近で外反する。口縁部は丸 い。	外面、口縁部は寛調整後焼で、胴部は 直削りを通すが砂粒の露出が目立ち方 向は不明瞭。 内面、胴下半部は直溝で底が顕著に残 る。横は鋭い。	胴下部に黒灰あり、
19-17	甕	覆土 区	径口 13.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 浅黄褐色	胴部に比較し口縁部は厚い。胴 上半部に最大幅をもち、なで肩 である。口縁部は緩く外反する。 口縁部は丸い。	外面、口縁部は直削り後横溝で、胴部 は下一上方向直削り。 内面、胴部は直溝で、内外面共に整形 は丁寧である。	胴下部に黒灰あり、

VI 検出された遺構と遺物

図番番号	器 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・地色・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
19-18	甕	覆土 底	残存高 6.8 底 6.4	胎 砂粒多量 混入 地 堅緻 色 褐色	底部中央が薄くなだらかに外反し球形を呈す。	外面、胴部は上→下方向に削り、腰部は左→右方向に削り、内面、朝毛目状の削り痕が残る。腰部から胴部に向かって削って行く。全体に仕上げは無い。	
19-19	甕	中位 底	残存高 2.3 底 4.8	胎 砂粒混入 3mm 地 堅緻 色 茶褐色	底部に厚みをもつ扁平的な平底である。	外面、胴部は上→下方向に削り、底部は削り、腰部は削りにより造り出し、輪郭線はなだらか。底部は削り、内面、底部に削り痕が残る。	
19-20	甕	覆土 底	残存高 5.5 底 5.1	胎 砂粒少量 混入 地 堅緻 色 赤褐色	平底で球形を呈する体部をもつ。体部の器内は滑い。	外面、腰部は筒状でによりやや光沢をもつ。胴部は上→下方向に削り、底部は削り、腰部の輪郭は明確。内面、胴部は削り、器面全体を丁寧に仕上げている。	
19-21	甕	覆土 底部完形	底 9.4	胎 砂粒混入 石灰、金 雲母、緑 泥片を含む 地 堅緻 色 外褐色 内 橙色	底部に厚みをもつ。底部に立ち上がり部をもち、胴部は扁平に開く。	外面、胴部は削り、底部は上→下、左廻り、右廻り3方向に削り、内面、全体を筒状で後削り。	
19-22	甕	塚面 底部完形	残存高 3.9 底 7.2	胎 砂粒多量 混入 地 堅緻 色 外 褐色 内 赤褐色	底部が厚くやや直線的に開く。	外面、短い筒状、腰部調整後底部は削り、内面、筒状。	
19-23	台付甕 台部	塚面 底	残存高 3.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗褐色	台中央部がやや薄く「ハ」の字状に開く。	外面、調整整、朝毛目状が残る。内面、筒状、底部は朝毛目調整後削り。	S字口縁台付甕。
19-24	甕	塚面 底	残存高 7.0 口 17.0	胎 砂粒少量 混入 3mm 地 堅緻 色 にぶい褐色	口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部は筒状で、口縁部は調整後削り、胴部は削り、内面、胴部は筒状で、後削りにより仕上げが欠ける。	
19-25	甕	覆土 底	残存高 7.5 口 15.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	胴部は比較的張り、頸部を境に「く」の字状に外反する。口縁部はやや丸い。	外面、口縁部は右→左方向に削り、口縁部は調整後削り、胴部は削り、内面、口縁部から胴部にかけて削り、後削りにより仕上げが欠ける。胴部は筒状。	
19-26	甕	覆土 底	残存高 6.7 口 17.4	胎 砂粒多量 混入、緑 泥片を含む。 地 堅緻 色 褐色	肩部がやや張り、頸部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部でやや内湾する。	外面、口縁部は筒状で、頸部は削り、内面、胴部は削り、胴部は削り、後削りにより仕上げが欠ける。全体は筒状。	
19-27	甕	塚面 底	残存高 3.2 口 16.0	胎 砂粒多量 混入 地 堅緻 色 赤褐色	口唇部でやや厚みをもつ。口縁部はなだらかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は筒状で、胴部は削り、内面、口縁部は筒状。	

1. 住居跡（第4A号）

第4A号住居跡（第21～24図）

本住居跡は遺跡の南側に位置し、4B号住居跡と南壁の一部で重複する。平面形は北壁を除いてほぼ一直線状に掘り込んでいるが、北壁の西側はやや内側に偏している。東壁の両隅はほぼ直角に曲折しているが、西壁の両端はやや隅丸を呈する。検出された壁長は東西4.5m、南北4.7mとやや南北に長い方形住居跡である。壁の遺存状態は東側半分はほぼ直立し、西側半分は外方に立ち上がる。特に西壁の上半部の崩れが目立つ。残存壁高は東側で約48cm、西側で約34cmを測る。壁は炭化物等を含まない灰褐色粘土層である。方位はN-84°-Wを測る。

床面上には7ヶ所のピットが検出され、このうち主柱穴と考えられるのは、位置、深さ、土層状態等から、e、f、g、hである。主柱穴の各深さはe-68、f-44、g-65、h-53cmを測る。位置関係はe,hは東壁寄り1.1m、e,fは南壁寄り1.4m、g,hは北壁寄り1.3mをそれぞれ測る。主柱穴間は東西2.0m、南北1.9mである。これらの計測値からみて規格性を持った住居跡と考えられる。南東コーナー付近と南西コーナー付近に1ヶ所づつの貯蔵穴を持つ。

かまどの施設としては東壁中央部のやや左寄りにかまどを付設している。袖部は壁と直角に構築し、燃焼部を住居跡内にもつ。燃焼部の平面形は奥壁幅12cm、焚口幅35cm、奥行50cmを測る長台形である。火床は床面とする。火床面は舟底状に約4cmくぼんでいる。袖部は灰白色粘土を用いて構築し、袖部は比較的細い。遺存度は右袖の方が良好で、内壁は良く焼け、ほぼ直角に立ち上がる。燃焼部内覆土の火床面付近は灰、焼土、炭化物の混土で、その上面は焼土ブロックと炭化物の混土層である。煙道部は住居壁を床面から掘り込み傾斜約30°で登って行く。煙出し孔付近は削平され不明である。残存長70cm、煙道部幅は内壁法18cmを測る。右袖部外側には16×25cmの長方形に近いピットがあり、中には多量の炭化物、焼土、灰が混入していた。おそらく本かまど使用時には空いていたものと考えられる。炭化物はかまど周辺にも多量に堆積している。貯蔵穴は2ヶ所ありいずれも深さ50～60cmを測り覆土は炭化物、焼土を混入する暗褐色土層であった。

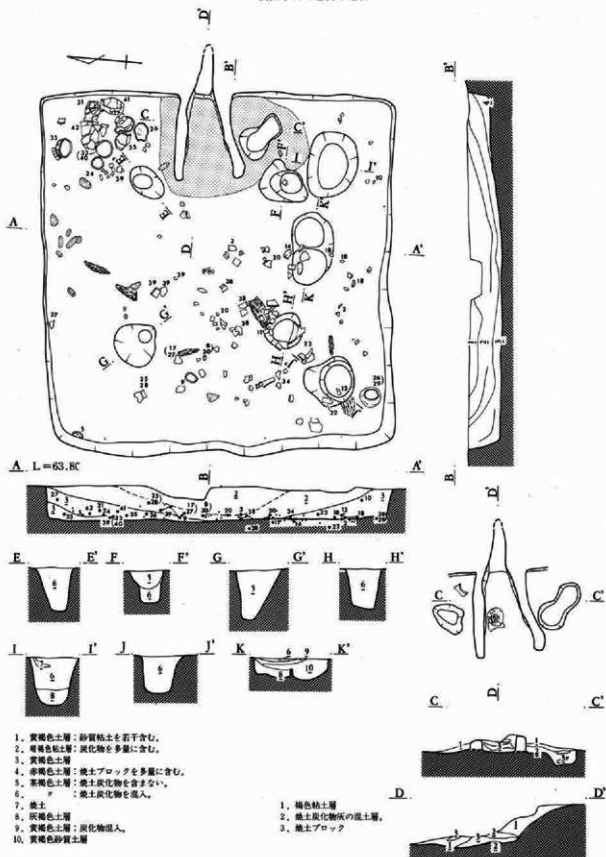
住居跡覆土は壁直下付近に壁崩れの一部が堆積し、その他は暗褐色粘土層が短期間に埋没している。覆土中央部付近には微妙な堆積状況が見られるが、同一土層である。住居跡内にみられる炭化物は上層になるに従い次第に薄くなる。

遺物は床全面に出土しているが、特にかまど左側にまとまって出土している。出土遺物は環、瓿、高環、甕、であった。このうち環、甕が圧倒的に多く出土している。

出土土器のなかでNo1～3、5、6、8、9、11、13、14、17、18、20、22、23、27、29、30、34は床面上より、No24、31、33、35、36はかまど左袖外側、No16はかまど内、No32はかまどの支脚として使用していた。No10、25、28、37、39～42は覆土中位より出土している。No37は口経約40cmを測る大型の甕である。床面上から出土している土器は20点を数えるが、器種に富み、覆土の状況から屋外から流れ込んだものであろうと考えられる。

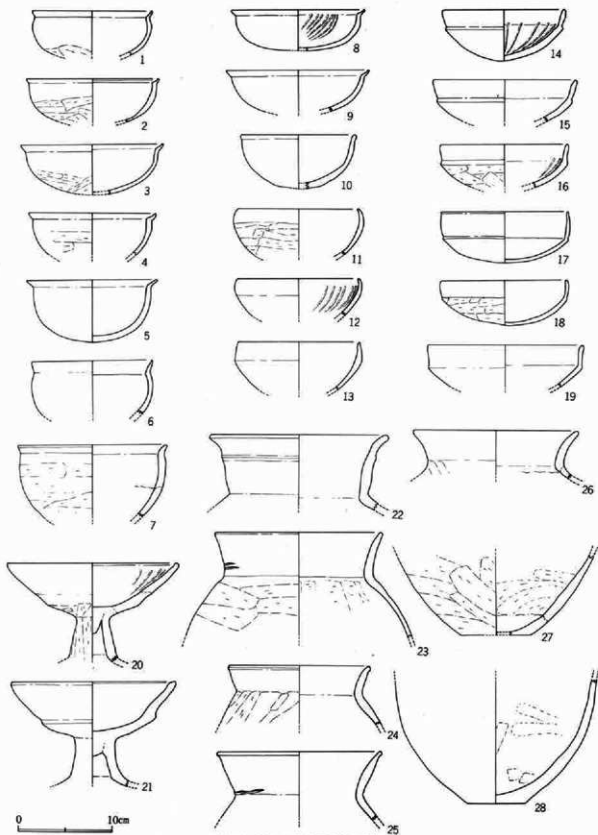
住居跡内に認められた石材は11点あり、紡錘形および不定形である。特に住居北壁下には幾分の集石的な傾向が見られる。この北壁下における自然石の出土位置は、床面出土の土器群の位置より西側にあり、住居跡内の在り方に違いが考えられよう。

VI 検出された遺構と遺物



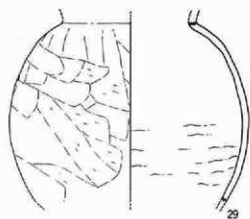
第21図 第4A号住居跡、かまど

1. 住居跡 (第4A号)

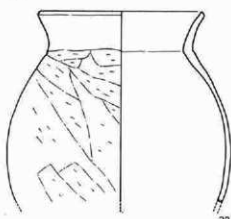


第22图 第4A号住居跡出土遺物

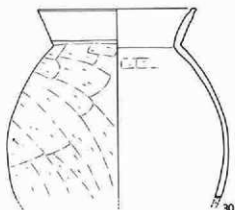
VI 検出された遺構と遺物



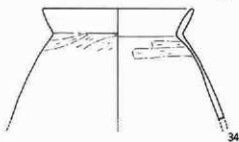
29



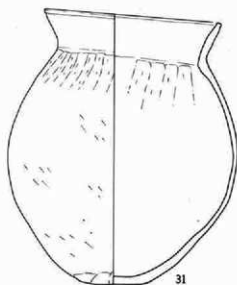
33



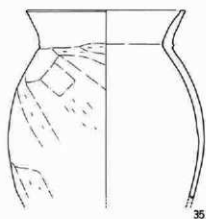
30



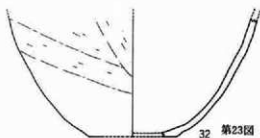
34



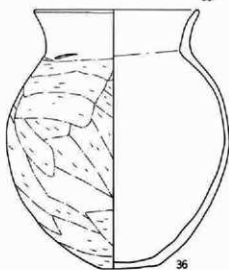
31



35



32

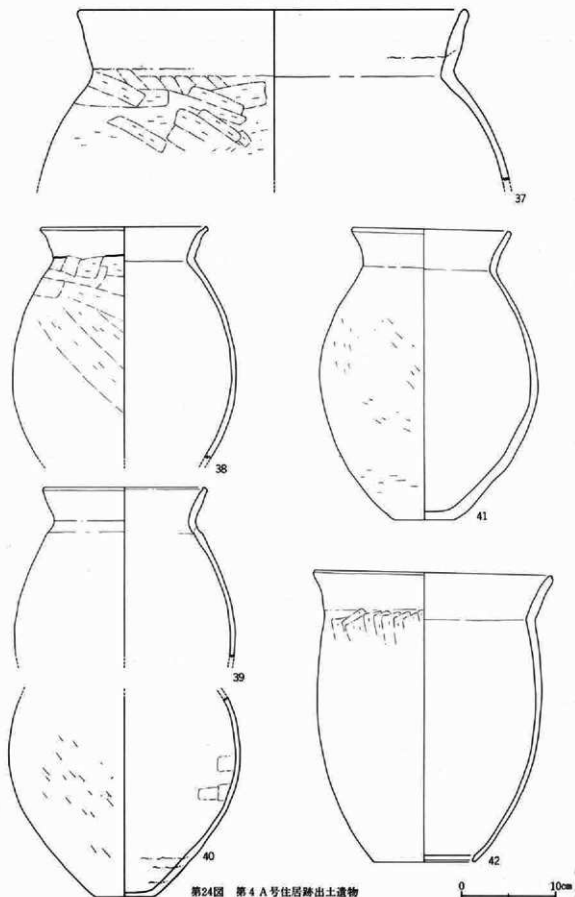


36

第23図 第4 A号住居跡出土遺物

0 10cm

1. 住居跡 (第4A号)



第24图 第4A号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

遺物観察表 (第22、23、24図)

図版番号	図形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
22-1	坏	床直 写	高 4.7 口 12.8	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	体中央部に緩やかな丸みをもちながら口縁部に絞く、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部で立ち上がる、口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で、体部は左→右方向磨削。 内面、横撫で。 全体に造りは丁寧。	
22-2	坏	床面 写	高 4.5 口 14.2	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 褐色	体上半部に厚みをもち底部は薄くなる。	外面、口縁部は横撫で、体中央部は左→右方向磨削。底部は上→下方向磨削。口縁部はつまみ撫で。 内面、丁寧撫で。	
22-3	坏	下位 写	残高5.3 口 15.0	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 褐色	底部はやや平底さみで、頸部付近で立ち上がる。口縁部は外反し口唇部で内湾さみに立ち上がる。	外面、口縁部は横撫で、体上半部は横で、下半部は左上→右下方向磨削。底部は上→下方向磨削。 内面、わずかに研磨が認められる。接は鋭い。	内外面に黒斑あり。
22-4	坏	覆土 写	口 13.5	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 褐色	やや厚みがあり頸部付近で直に立ち上がる。口縁部は短く、口唇部はやや内湾さみである。	外面、口縁部は横撫で、体部は左→右方向磨削。 内面、研磨痕あり。	
22-5	坏	下位 写	高 6.6 口 14.0	胎 微細粒少 量混入 焼 堅緻 色 褐色	口はほぼ均一した厚みをもち、口唇部で外反する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で、体部は左→右方向磨削。 内面、口縁部は横撫で、体部は横で、接はやや丸みをもち、研磨調整は丁寧である。	
22-6	坏	床直 写	残存高 5.7 口 12.9	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	体中央部に拡大帯をもち、口唇部で緩やかに外反する。口唇部は心もち内湾に返る。頸部外面に丸みをもち、口縁部は鋭い。	外面、体部は横撫でを施し、頸部に横で直が残る。 内面、外面に比して一層丁寧撫でを施す。接は鋭い。	
22-7	坏	覆土 写	残存高 7.6 口 16.0	胎 砂粒少量 混入 焼 やや堅緻 色 褐色	丸みをもち比較的厚い。口縁部は緩く外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部はつまみ撫で。体部は右→左方向粗い磨削。 内面、口縁部及び体部は横撫で、接は横でより丸い。	内外面一部に黒斑あり。
22-8	坏	床面 写	残高4.3 口 14.4	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部はやや平底さみで頸部付近で立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、口縁部から体上半部にかけて横撫で、口縁部はつまみ撫で。体部は磨削。 内面、口唇部付近のみ研磨。	
22-9	坏	下位 写	口 15.4	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 褐色	やや扁平な器形で口縁部はなだらかに外反する。口縁部はやや鋭い。	外面、口縁部は横撫で、体部は磨削。 内面、口縁部はつまみ撫で。体部はわずかに研磨が認められる。接は横でよりやや丸みをもち。	
22-10	坏	上位 写	残高5.7 口 12.2	胎 微細粒少 量混入 焼 堅緻 色 褐色	全体に丸みをもち、口唇部付近でやや直立する。口縁部は丸い。	外面、口唇部を横撫でつまみで撫でを施す。体部は横撫でその横撫で。 内面、荒れているため整形不明瞭。	外面に口縁部から底部付近まで2次焼成。
22-11	坏	床面 写	残存高 4.9 口 12.8	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 外赤色 内赤褐色	内湾さみに立ち上がる。口縁部と体部の境は横でより区分。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、体部は細かな磨削。 内面、口唇部から体部にかけて横撫での横わずかに研磨が認められる。内面の仕上げは丁寧。	

1. 住居跡(第4A号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎 土・焼成・色質	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
22-12	杯	覆土 1/2	口 13.0	胎 細砂粒混 入 焼 中や堅焼 色 濃い褐色	なだらかに立ち上がり口縁部で 内湾する。口縁部は薄く丸い。	外面、体部は器作り一部に刷毛目痕が 残る。 内面、右上→左下方向研磨。口縁部 と体部の境を撫でにより区分。	
22-13	杯	下位 1/2	残存高 5.2 口 13.0	胎 砂粒多量 混入 焼 中や堅焼 色 褐色	底部に最大厚をもつ。口縁部は やや内湾さみに立つ。口縁部は 鋭い。	外面、口縁部は横撫で。体部は右→左 方向研磨り。 内面、撫で。	
22-14	杯	床面 1/2	高 5.4 口 13.2	胎 砂粒少量 混入 焼 軟部 色 明褐色	なだらかに外反し口縁部でやや 直に立つ。口縁部はやや丸い。	外面、底部から口縁部にかけて順次不 定方向粗い研磨り。口縁部と体部の境 に瓦調整で有段。 内面、口縁部は横撫で。頸部に瓦調整 による有段。体部は磨り研が認めら れる。口縁部と体部境にくぼみ。	
22-15	杯	覆土 1/2	残存高 4.4 口 15.2	胎 砂粒多量 混入 焼 堅焼 色 褐色	なだらかに立ち上がり口縁部で いったんくびれ、更に外反する。 口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。体部は器作り。 内面、全体は横撫で。口縁部に指痕に よるくぼみがある。	
22-16	杯	かまど 1/2	残存高 4.6 口 13.5	胎 砂粒少量 混入 焼 堅焼 色 褐色	底部より内湾さみに立つ。口縁 部境で厚みをもち外反する。口 縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で。体部は不定方 向研磨り。縁は比較的鋭い。 内面、撫で後左上がり研磨。比較的 平滑である。縁は指痕撫でによりやや くぼむ。	
22-17	杯	床面 完形	高 5.4 口 13.5	胎 細砂粒混 入 焼 堅焼 色 赤褐色	全体に丸みをもち口縁部は内湾 さみに立ち上がる。口縁部は鋭 い。	外面、口縁部は横撫で。体部は器作り。 体部と口縁部境に瓦調整による有段。 内面、全体は撫で。	
22-18	杯	床面 ほぼ定形	高 4.8 口 13.5	胎 砂粒多量 混入 焼 堅焼 色 赤褐色	底部は薄く内湾さみに立ち口縁 部ではほぼ直立する。口縁部は薄 く丸い。底部内面はややくぼむ。	外面、口縁部は横撫で。体部は左→右 方向研磨り。 内面、口縁部に撫で痕が認められるが その痕は見え不明。口縁部と体部は明 確に区分するが痕は認められない。	
22-19	杯	覆土 1/2	口 16.6	胎 砂粒少量 混入 焼 軟部 色 褐色	なだらかに外反し口縁部で直立 口縁部は厚く丸い。内外縁共明 瞭。口唇部で更に外反する。	外面、砂粒が内外に見られ整形状態は 不明瞭だが器作りの痕跡が認められる。 内面、横撫で。	
22-20	高杯	床面 1/2	残存高 10.0 口 18.1	胎 砂粒多量 混入 焼 堅焼 色 褐色	杯部底部に厚みもち次第に薄 くなる。口縁部は丸い。	杯部外面、口縁部は横撫で。底部は左 →右方向研磨り。 内面、横撫で後研磨。研磨の単位は 1.5-1.7cm、荒れているため終始不明瞭。 口唇部は鋭い指痕による横撫で。 脚部外面、上→下、右→左方向研磨り。 巻き上げ手法。	
22-21	高杯	覆土 脚部欠損	残存高 11.8 口 17.5 杯 6.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅焼 色 褐色	杯部は丸底で口縁部は曲線上に 立ち上がる。口縁部は鋭い。	杯部外面、直磨り。 内面、口唇部は鋭い撫で。胴部に放射 状研磨りがわずかに認められる。 脚部内面、輪脚成形は指痕による押え だけで瓦調整は施していない。	

VI 検出された遺構と遺物

図面番号	形 影	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・焼成・色調	器 影 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
22-22	甕	下位 片	残存高 7.7 口 19.2	胎 砂粒少量 混入、緑 泥片若否 む。 焼 堅緻 色 緑色	頸部から縦やかに立ち上がり口 唇部付定で急に外反する。口縁 部中位に幅約8mmの有段あり。	外面、口縁部は回転手法を用いたと思 われる横溝で、肩部は直削り。 内面、底縁は内傾り寛押え。頸部に 直溝で、縁はやや丸みをもつ。	
22-23	甕	床面 片	残存高 11.0 口 18.0	胎 砂粒少量 混入 焼 軟弱 色 緑色	胴中央部付近に最大厚をもつ。 口唇部は薄い。	外面、口縁部は横溝で、頸部に直溝あ り。胴部は左→右方向直削り。 内面、口縁部は内傾り寛押え。頸部に 直溝で、縁はやや丸みをもつ。	
22-24	甕	かまど左袖 外側 定形	残存高 6.1 口 15.3	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	口縁部に最大厚をもち口唇部で 薄くなる。球形胴を呈すると考 えられる。口唇部に沈澱がある。	外面、口唇部は直調整。頸部に直溝あ り。肩部に幅2.5cmの直削り後横溝で。 内面、横溝で。	
22-25	甕	上位 片	口 17.6	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 緑色	口縁部中位に最大幅をもち口唇 部はつまみ状により薄くなる。	外面、直削り。 内面、横溝で。	
22-26	甕	覆土 片	残存高 4.6 口 17.6	胎 砂粒多量 混入。2 ~10mm 焼 堅緻 色 緑色	口縁部が厚く体部は薄い。口縁 部は失い。	外面、口縁部は直削り後横溝で、肩部 に直削りが見られる。 内面、横溝で。縁がわずかに見られる。	
22-27	甕	床面 片	残存高 8.4 幅底7.4	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 緑色	底部は平底で高く、腰部は比較 的に厚い。	外面、胴部は右下→左上方向直削り。 底部は直削り。 内面、横方向直溝で。	
22-28	甕	上位 片	残存高 13.0 底 6.0	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 外橙色 内黒色	底部は平底で胴部は球形を呈す る。	外面、腰部は直調整後、底部の溝でを 施す。輪郭は明瞭さが欠ける。 内面、腰部は直調整後指痕による横溝 で、引き上げ溝を施す。底部は直削 りにより直線的に右部を造る。頸部が 残る。小型底部。	
23-29	甕	床面 片	残存高 19.0	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	一定の厚みをもち球形を呈する。	外面、頸部は横溝で、肩部は刷毛目状 あり。体部は右下→左上方向直削り。 内面、全体に横い直溝で、輪郭に 粘土帯状合痕が見られる。全体に調整 は悪い。	
23-30	甕	床面 片	残存高 高 20.0 口 17.0	胎 砂粒多量 混入 焼 堅緻 色 緑色	球形胴を呈し口縁部で最も厚み をもつ。口唇部で薄くなる。口 縁部は平角寛押え。	外面、口縁部は横溝で、胴部は右下→ 左上方向直削り。肩りは頸部で直線的 に止めている。 内面、頸部に直削りを行い、縁は鋭い。 その下丁車直溝で、外面に比し整形は 丁寧である。	
23-31	甕	かまど左袖 外側 定形	高 28.8 口 19.0 底 7.6	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	胴中央部に最大幅をもち球形を 呈する。口縁部は「く」の字状に 外反する。口縁部は直押え。底 部は小さな平底で不安定。	外面、口縁部は横溝で、頸部は下→上 方向直削り。胴上部から腰部は直溝 で、底部に直削りが見られる。 内面、口縁部は横溝で、頸部は下→上 方向直削り。胴上部は横溝で。	

1. 住居跡 (第4A号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	注 記	粘土・地色・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
23-32	甕	かまど支脚 片	残存高 12.5 底径 9.2	胎 砂粒多量 混入 地 厚織 色 濃い橙 色	底部は薄い平底。体部は平均し た厚みをもつ。	外面、体部は右→左上方向覆り。 内面、腹側で、底部付近には明確な仕 痕がある。整形は粗雑。	
23-33	甕	かまど左袖 外側 片	残存高 20.3 口 17.9	胎 砂粒多量 混入 地 厚織 色 赤褐色	胴中央部付近に最大幅をもつ。 口唇部はやや内湾し鋭い。	外面、口縁部は覆りて鋭さを出し、 その後横側で。 内面、底部は覆り、鋭は鋭い。	
23-34	甕	床面 片	残存高 11.7 口 16.0	胎 砂粒多量 混入 地 やや軟密 色 褐色	胴中央部に最大幅をもつ。底部 が「く」の字状に外反する。口縁 部は厚い。口縁部はなでにより 丸い。	外面、口縁部は横側で、底部は上→下 の覆りが見られる。体部は覆りて施 したと思われるが覆れているため不明瞭。 内面、口縁部は横側で、底部はか→右 方向覆り。幅1cm長さ5cmの遺痕が 見られる。鋭は鋭い。	
23-35	甕	かまど左袖 外側 片	残存高 19.8 口 17.0	胎 砂粒少量 混入 地 厚織 色 茶褐色	胴部に最大幅をもち、口縁部で 最も厚い。口唇部は強い力でに よりややくぼむ。	外面、口縁部は覆り、口縁部は横 側で、底部から胴部にかけて左→右上 方向覆り。底部で覆りを一旦止め横 に反す。胴下半部は上→下方向覆り。 底部は見調整により段差をもつ。 内面、丁家な横側で。	整形順序 口縁部→底部
23-36	甕	かまど左袖 外側 ほぼ定形	高 27.4 口 17.8 底 6.1	胎 砂粒少量 混入 地 厚織 色 赤褐色	胴中央部に最大幅をもち、底部 はしまり外反する。口縁部は丸 い。	外面、口縁部は横側で、胴上半部は右 下→左上方向、中央部へ下半部は上→ 下方向、底部は右方向覆り。 内面、底部は覆り、鋭は鋭い。胴部 は底部付近のみ横側で、その後全体を 横側で。	
24-37	甕	下段 片	残存高 24.5 口 41.6	胎 砂粒多量 混入 地 やや軟密 色 褐色	口縁部中位に厚みをもち、口唇 部で薄くなる。	外面、口縁部は横側で、体部は右→左 方向細かな覆り。 内面、口縁部は横側で、口唇部におす かなくばみを示し底部付近に幅2cm位 の粘土の盛り上がりが見られる。口縁 部に粘土帯の接合痕が見られる。	
24-38	甕	床面 片	残存高 24.5 口 17.6	胎 砂粒多量 混入 地 厚織 色 褐色	口縁部に厚みをもち、口唇部で 急に薄くなる。	外面、口唇部を距で平直にし、その後 指で強く横側で、仕上げに粗い横側で。 口縁部は覆り、胴部は右→左上方 方向覆り。底部で意識的に止め遺痕が 明確に残る。 内面、全体は横側で、鋭は鋭い。	
24-39	甕	かまど左袖 外側 片	残存高 18.0 口 17.1	胎 砂粒多量 混入 地 厚織 色 褐色	口縁部はなだらかに外反し、最 大厚をもつ。	外面、鋭れ整形は不明瞭だが左→右 上方向の覆りが認められる。 底部は指頭による強い力で、口縁部は 覆り、 内面、底部は横側で鋭が認められる。	
24-40	甕	かまど左袖 外側 片	残存高 21.0 底 6.2	胎 細砂粒多 量混入 地 厚織 色 暗褐色	底部は平底で小さく体中央部に 最大幅をもつ。	外面、覆りて施しているが、底部が 鋭れ整形方法は不明瞭。 内面、体中央部に横側で鋭が残り、底 部付近に輪軸痕が見られる。底部は覆 りて後体下半部の調整。	整形順序 輪軸後丁家の側で。

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状況	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
24-41	甕	かまど左袖 外側 完形	高 30.8 口 16.6 底 6.2	胎 砂礫混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部に向うにつれ厚みをもつ平底。側中央部に最大幅をもち肩部がくびれ外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴上半部は下→上方向、中央部は左上→右下方向、下半部は左→右方向圓筒形。 内面、口唇部は整形調整で平坦。胴部は直筒での痕跡が見られる。	
24-42	甕	かまど左袖 外側 完形	高 30.5 口 25.5 孔 10.7	胎 砂礫多量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	肩部付近が最も厚く底部方向に下につれ薄くなる。	外面、口唇部に整形調整痕、口縁部中位から体部まで下→上方向圓筒形。 内面、口唇部及び口縁部は横溝で、緩やかな後をもつ。体部は横溝で、縦孔は2段調整。	整形順序 口縁部→肩部→ 体下半部→ 一部

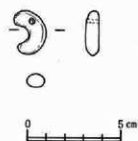
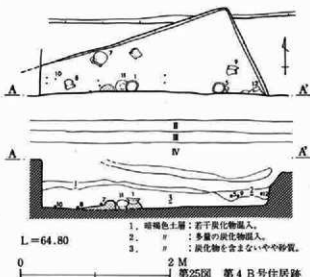
第4B号住居跡（第25～27図）

本住居跡は遺跡の南端にあり、北東コーナーは4A号住居跡と重複する。この住居跡の調査は第2次調査で行なったもので、住居跡の大半が未買収地区のビニールハウス内に入る。よって確認規模は北壁2.6m、東壁1.3mであった。両壁とも一直線に掘られ、壁はほぼ直角に交わることから、方形を呈していたと考えられる。残存壁高は約25cm、確認壁高は50cmを測る。土層断面から判断すると壁の掘り込みは床面上から約60cmまで確認でき、本遺跡全面を覆うマンガン凝集層面下で完全に不明となる。壁は暗褐色粘土層で遺存状態は良くほぼ垂直に立ち上がる。断面で見ると壁は上半分に壁崩れの様子が見られる。方位はN-62°-Eを測る。

床面は4A号住居跡よりわずかに低い位置にあり、比較的堅く平坦である。また床面上には多量の炭化物や焼土が処々に堆積している。炭化物、焼土はかまどから流れたものと同質のものもみられるが、火災に遭遇していることも考えられる。

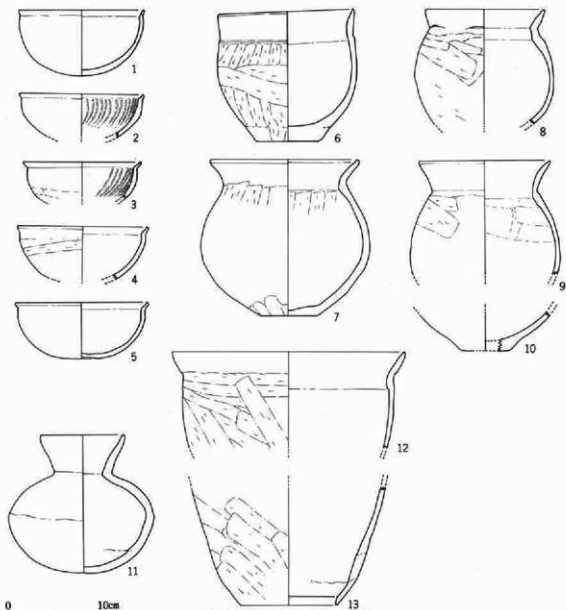
住居跡覆土は床面直上部を除く、下層面には炭化物を含まない暗褐色土層の堆積がみられ、上層には炭化物の混入層が認められる。

遺物は遺構検出面積の割には比較的多量に出土した。出土遺物は坏、埴、小型甕、甕、甑、碧玉質勾玉であった。



1. 住居跡 (第4B号)

出土土器のなかでNo.1、5、7、8、10、11は床面より、No.9、12は覆土中位より出土している。勾玉、碧玉質で色調は草色を呈す。全面研磨され削痕は認められない。比較的丸味を持ち、仕上げは丁寧である。開孔部には径約4mm、深さ約1mmの小凹痕がみられる。孔は片面穿孔と思われる。



第27図 第4B号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第27図)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	新土・地成・色調	器形の特徴	整形の特徴	特備 備考
27-1	坏	下位 完形	高 6.9 口 13.3	胎 細砂粒多 層混入 焼 堅緻 色 内灰色 外明棕色	底部は丸底で体部は半球形状を呈する。口縁部は直立に近くやや外反する。口縁部は薄く丸い。	外面、底周りに浅い凹線あり。内面、胴部は撫で、全体的に荒れ整形技法は不明瞭である。	

Ⅶ 検出された遺構と遺物

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	注 量	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
27-2	杯	覆土 % 残存高 4.6 口 13.2	胎 細砂粒多 量混入 焼 厚鉄 色 褐色	口縁部が短く外反し、口縁部でわずかに直立する。	外面、口縁部は横撫で、口唇部をつまみ撫で、底部より体部にかけて順次圓筒形。 内面、撫で後研削、研削間は細く多量。		
27-3	杯	覆土 % 残存高 4.0 口 12.6	胎 砂粒少量 混入 焼 厚鉄 色 に薄い赤 褐色	体部上半に最大厚をもつ。口縁部は短く外反し、口唇部は薄くやや直立さみである。	外面、口縁部は横撫で、底部付近にわずかに圓筒形が見られる。 内面、撫で後左上がり研削。		
27-4	杯	覆土 % 残存高 5.5 口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	口縁部が短く口唇部でやや内湾さみである。口唇部は丸い。	外面、頸部は指面による強い撫で。体部は右下→左下方向圓筒形。刷毛目が見られる。 内面、撫で。		
27-5	杯	床面 % 高 5.9 口 14.2	胎 細砂粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	底部は丸底で中央部がややくぼみ。口縁部が短く外反し、口唇部でわずかに内湾する。	外面、口縁部は丁寧な横撫で。体部は不定方向圓筒形。 内面、口縁部は丁寧な撫でを施し、底部付近は雑になる。撫で後研削を施しているが不明瞭。 残は撫でによりやや丸みをもつ。		
27-6	小型甕	覆土 完形 高 13.7 口 14.8 底 7.0	胎 砂粒多量 混入 3mm 焼 やや軟弱 色 赤褐色	底部は厚みをもつ。底部は小さな平底で胴部と口縁部はほぼ同じ幅をもつ。口唇部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で。肩部は左→右方向圓筒形。頸部に縦線あり。体部中央部は右下→左上方向圓筒形。 内面、胴部は縦線撫で。底部と腰部の境は丸みをもつ。	胴部外面一部に黒炭あり。	
27-7	小型甕	床面 完形 高 16.5 口 16.0 脚 13.1 底 6.0	胎 砂粒混入 5mm 焼 やや軟弱 色 赤褐色	底部は小さな平底で胴部はやや球形を呈する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部で直立する。	外面、口縁部は横撫で。胴部は下→上方向圓筒形。腰部には縦線が顕著に残り底部の輪郭は不明瞭。 内面、頸部に下→上方向圓筒形。肩により残が残る。その後体部の横撫で。	底部付近に黒炭あり。外面一部に煤付着。	
27-8	小型甕	床面 % 残存高 12.2 口 12.7	胎 細砂粒少 量混入 焼 厚鉄 色 赤褐色	胴部付近に最大厚をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で。頸部は右→左方向圓筒形。頸部には縦線あり。頸部には丸みが見られる。 内面、口縁部は横撫で。頸部は指面による強い撫で。胴部は撫で。	整形順序外面、 胴部→頸部→口縁部 整形順序内面 胴部→口縁部	
27-9	甕	中位 % 残存高 12.0 口 14.0	胎 砂粒多量 混入 炭屑含む 焼 やや軟弱 色 に薄い藍	体部中央に最大厚をもち、口縁部はなだらかに外反する。口唇部はやや直に近い立ち上がりを見せず。	外面、口縁部は横撫で。砂粒が露出し整形は不明瞭であるが圓筒形を行っている。 内面、全体は撫で。外面に比して平滑な整形を行う、ところどころに黒炭が残る。		
27-10	甕	床面 % 残存高 3.7 底 5.4	胎 砂粒多量 混入 焼 厚鉄 色 内明赤褐色 外赤褐色	底部と体部の接合部に厚みをもつ。球形を呈すると考えられる。	外面、圓筒形。 内面、横撫で。	内面一部に黒炭あり。	
27-11	甕	床面 ほぼ完形 高 14.6 口 9.1 脚 6.2	胎 砂粒少量 混入 3mm 焼 やや軟弱 色 赤褐色	最大幅は中央部よりやや上になり扁平を呈する。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部付近でやや内湾する。やや曲線的に立ち上がる。	外面、口縁部は横撫で。頸部の一部に圓筒形が見られる。体上半部は横撫で、下半部は圓筒形。 内面、口縁部は横撫で後研削。		

1. 住居跡 (第5号)

図番番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	土質・焼成・色調	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
27-12	竈	中位 層	残存高 10.2 口 25.4	胎 砂礫多量 混入 焼 軟弱 色 褐色	筒形で胴部が張らず、頸部付近に最大厚をもち口縁部はむだらかに外反する。口唇部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は右下→左方向傾い貫削り。 内面、口縁部は横溝で、胴部は丸くれているため不明瞭。口縁部調整の際の珪粘土を塗でつける。	
27-13	竈	覆土 層	高 12.4 孔 10.7	胎 砂礫混入 石灰、緑 泥片岩含 む 焼 堅緻 色 褐色	腰部がやや薄く斜方向に立ち上がる。穿孔は回転貫削り2段調整。	外面、左上→右方向傾削り。 内面、丸削り横溝で。	

第5号住居跡 (第28～31図)

本住居跡は遺跡のほぼ中央部にあり、重複していない数少ない住居跡である。第2次調査で南側を第3次調査で残りの北側半分を調査した。東壁と南壁は一直線状に掘り、かまどを設置する北壁西半分は軸線上より外側にやや張り出す。また西壁の中央部は内側に入り込んでいる。各壁のコーナーはほぼ直角を呈しているが、南西コーナーは幾分丸味を持つ。規模は東西5.5m、南北5.5mの正方形を呈する。方位はN-35°-Eを測る。壁は暗灰色粘土層で、各壁ともわずかに傾斜をもちながら直線的に立ち上がる。ただ北壁のみはその傾斜が幾分緩い。壁面は各壁ともほぼ平坦で遺存度は良好である。残存壁高は約50cmを測り、他の住居跡に比較し深い。周溝は検出し得なかった。

床面は全体に遺存は良くほぼ平坦であるが、かまど周辺はレベル的には低くなっている。床面はかまど周辺と住居中央部が特に堅く、壁側になるにつれて軟弱となっていく。床面上には4ヶ所のピットが検出された。いずれも約45×35cmの円形で深さ60cm前後を測る。位置的にも深さ的にも主柱穴と考えられる。主柱穴間は約3.3mを測る。

かまどは北壁中央部に付設し、袖部は壁に対して「ハ」の字状に構築している。かまどの中軸線は壁に対して直角となる。燃焼部は住居跡内にもち平面形規模は奥壁幅20cm、焚口幅50cm、奥行85cmを測る長台形で、火床は床面とする。火床面は住居床面よりやや低く舟底状にくぼんでいる。袖部は灰白色粘土と暗褐色土との混土層で、袖部上半はすべて崩壊され、基部を残すのみであった。袖部外壁は崩れ内壁の焼成もあまり良くない。煙道部は住居壁を約10cm残し、傾斜18°で煙出孔まで続く。煙道部長約1m、幅20cmを測り、煙道内壁は直に立ち上がる。煙出孔付近はやや崩れている。燃焼部内の覆土は火床面に焼土ブロックが堆積し、その上層は炭化物、焼土、灰を含む暗褐色土層である。上半部は住居跡内の覆土と同質で、堆積状況は煙道部側から序々に流れ込んだ様子が認められた。

住居跡覆土は、炭化物を含む暗褐色土層が短期間に埋まっている。

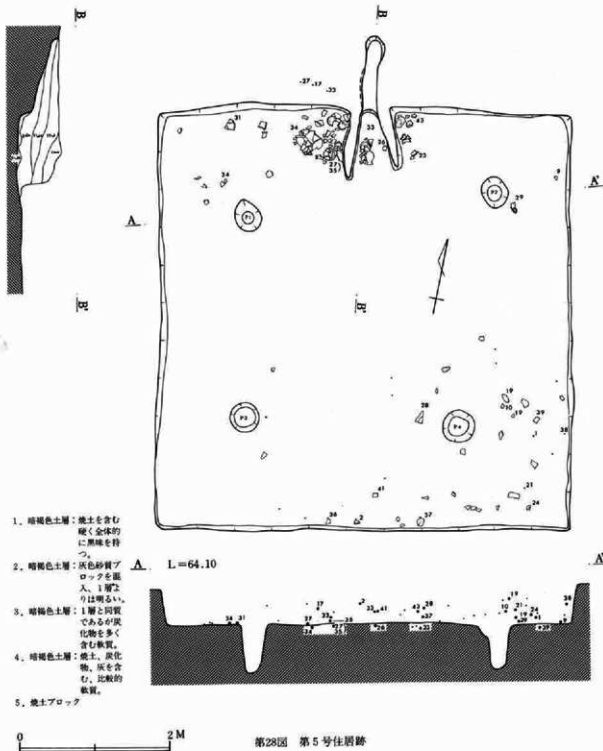
遺物はかまど周辺にまとまり、南東コーナー付近には散乱したような状態で出土した。出土遺物は環、埴、高環、甕、甗、紡錘車、管玉であった。

出土土器のなかでNo.1、3、8、9、11、12、15、19、23～25、27、29、31、35～37、39、41、43は床面上より、No.4、26、33、34はかまど内より出土している。No.2～10、21は覆土中位であった。No.31、32は甗と考えられる。No.30の埴は推定復元した。No.17は壁外出土。No.27、33は壁外のかまど煙道部左側から床面下まで流れ込んでいる。No.19は覆土中位と床面出土とが接合し、No.32はかまど左袖

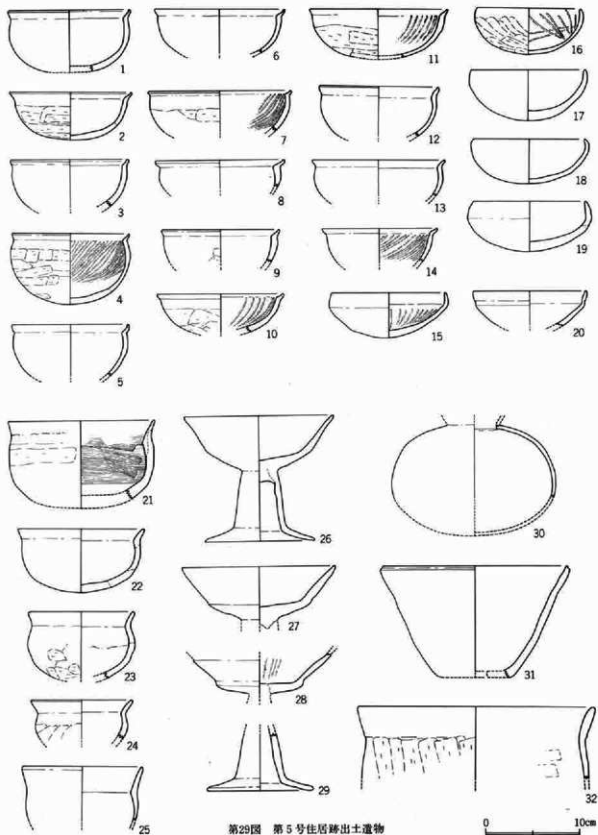
VI 検出された遺構と遺物

左側と床面が接合する。

紡錘車、黒褐色を呈し、滑石質である。形状は載頭円垂形で、底面に平行して石の目が走る。上面径は復元直径2.4cm、下面径は復元直径5.6cmを測る。穿孔は下面側がやや大きく0.75cm、上面側が0.6cmの復元直径を測ることができる。下面はその中央部に放射状の条痕が認められ、粗調整時の整

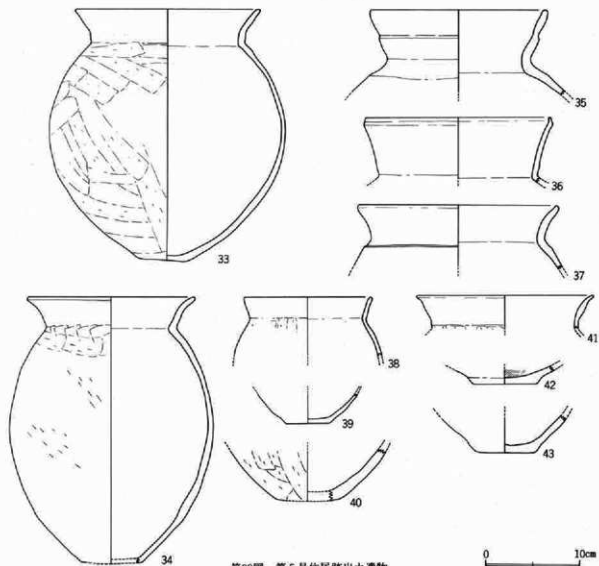


1. 住居跡 (第5号)

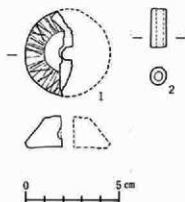


第29图 第5号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



第30図 第5号住居跡出土遺物



第31図 第5号住居跡出土遺物

形痕である。下面の縁辺にも、縁辺に沿って同様の条痕がめぐっている。下面はその粗調整時の整形の後に研磨がほどこされ平滑面となっている。側面の周囲は鋭利な工具により幅0.15cmの単位で縦方向の削り痕が見られ、後に回転を用いた再調整の削り（研磨）条痕がある。この上に鋸歯状と平行状の細い文様が線刻されている。

管玉、碧玉質で貝灰色の色調をおびる。完成品である。穿孔は両小口から穿かれているため孔の中央部が細くなっている。測面には長軸方向と同じく研磨による痕跡が見られる。上下面は平滑で稜も比較的鋭い。

遺物観察表 (第29、30回)

図録番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	土・地・色・調	器形の特徴	整形の特徴	備考
29-1	環	床面 % 残存高 6.6 口 12.6	胎 砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 赤褐色	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち頸部でやや薄くなる。胴部は球形、口縁部は「く」の字状に外反する。頸部内面になだらかな稜をもつ口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛調整後横飾で、胴部は寛調整後横飾で、底部は直前か浅る。内面、口唇部は寛調整により平滑、口縁部はつまみ飾で、体部は丁寧な飾で器面内外がやや反れている。内面に研磨が見られるが不明瞭。	底部付近に床付痕
29-2	環	中位 % 高 5.0 口 13.1	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもち内湾さみに立ち上がる。口縁部はなだらかに外反し鋭い内稜をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は胎頭による横飾で、胴部は寛調整後丁寧な飾で、底部は不定方向直削り。内面、口唇部は平滑、口縁部はつまみ飾で、胴中央部から頸部にかけて横飾で、胴底部付近は飾で。	
29-3	環	床面 % 口 12.6	胎 砂粒混入 焼 明赤褐色 色 明赤褐色	胎 砂粒混入 焼 明赤褐色 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち口縁部で薄くなる。胴部は内湾さみに立ち上がり口縁部でなだらかに外反する。口縁部は短く直立し鋭い。	外面、口縁部は横飾で、胴部は細かい丁寧な飾方向直削り。内面、口唇部は寛調整後飾で、強い稜が見られる。口縁部はつまみ飾で。	
29-4	環	かまど % 高 7.5 口 12.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	寛部と頸部に厚みをもち胴下部が薄い。胴部は球形を呈し、頸部は強く屈曲する。頸部内面に強い稜をもち、口縁部でやや直立する。	外面、口縁部は横調整後横飾で、胴部は左→右方向直削り、底部は不定方向直削り。内面、口唇部は平滑で、口縁部は飾で、体部は寛調整後飾で、最後に約 1.5mm 間隔の右上がり研磨。	底部に楕円形の痕跡あり。
29-5	環	覆土 % 口 12.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	頸部付近に最大厚をもつ。胴部は球形を呈し頸部は強く屈曲する。頸部内面に稜をもつ口縁部は直立する。	外面、口縁部は寛調整、胴部は寛調整後丁寧な飾で、内面、口唇部は寛調整や平滑、口縁部はつまみ飾で、胴部は飾で後右上一左下方向研磨。	
29-6	環	覆土 % 口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 橙色	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 橙色	胴部はほぼ均一の厚みをもち、口縁部で薄くなる。胴部は内湾さみに立ち上がり口縁部は屈曲する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は寛調整後飾で、胴部は寛調整後稜が見える。胴部は直削り。内面、口唇部は寛調整後飾で、口縁部はつまみ飾で、胴部は丁寧な飾で。	
29-7	環	覆土 % 口 15.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 よい橙 色	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 よい橙 色	ほぼ均一した厚をもつ。胴部は内湾さみに立ち上がり、口縁部は屈曲外反する。頸部内面に強い稜をもつ。口縁部は直立する。	外面、口縁部は寛調整後飾で、胴部は左→右方向直削り。内面、口唇部は寛調整により平滑、口縁部はつまみ飾で、胴部は飾で後右上一左下方向細かい研磨。	
29-8	環	床面 % 口 13.8	胎 細砂粒多 量に混入 焼 堅緻 色 よい橙 色	胎 細砂粒多 量に混入 焼 堅緻 色 よい橙 色	頸部に最大厚をもち、胴部は強く屈曲する。口縁部は鋭い。頸部に強い稜をもつ。	外面、口縁部は寛調整後飾で、胴部は寛調整。内面、口唇部は寛調整により平滑、口縁部はつまみ飾で、胴部は丁寧な飾で。	
29-9	環	床面 % 口 12.5	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	胴部は内湾さみに立ち上がり口縁部でなだらかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横飾で、胴部は下→上方向直削り。内面、口唇部は丁寧な飾で、胴部はなで後細かい右上がりの研磨、見れているため詳細は不明瞭。	
29-10	環	中位 % 口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚をもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部で外反する。頸部は強い稜をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び頸部は寛調整後横飾で、胴部は左→右方向直削り。内面、口唇部は寛調整後飾で、口縁部はつまみ飾で、胴部は丁寧な飾で、その後底部付近は直削り、胴上半部は左→右下方向研磨。	

VI 検出された遺構と遺物

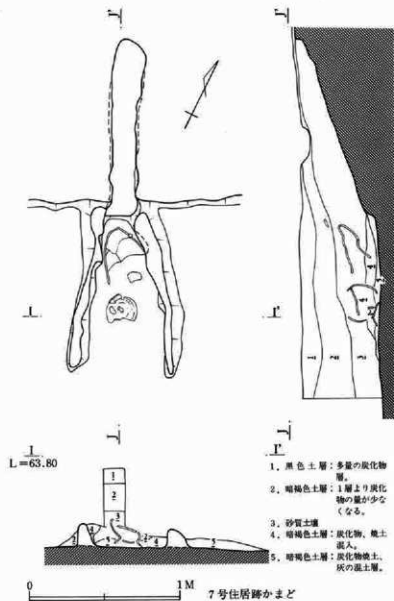
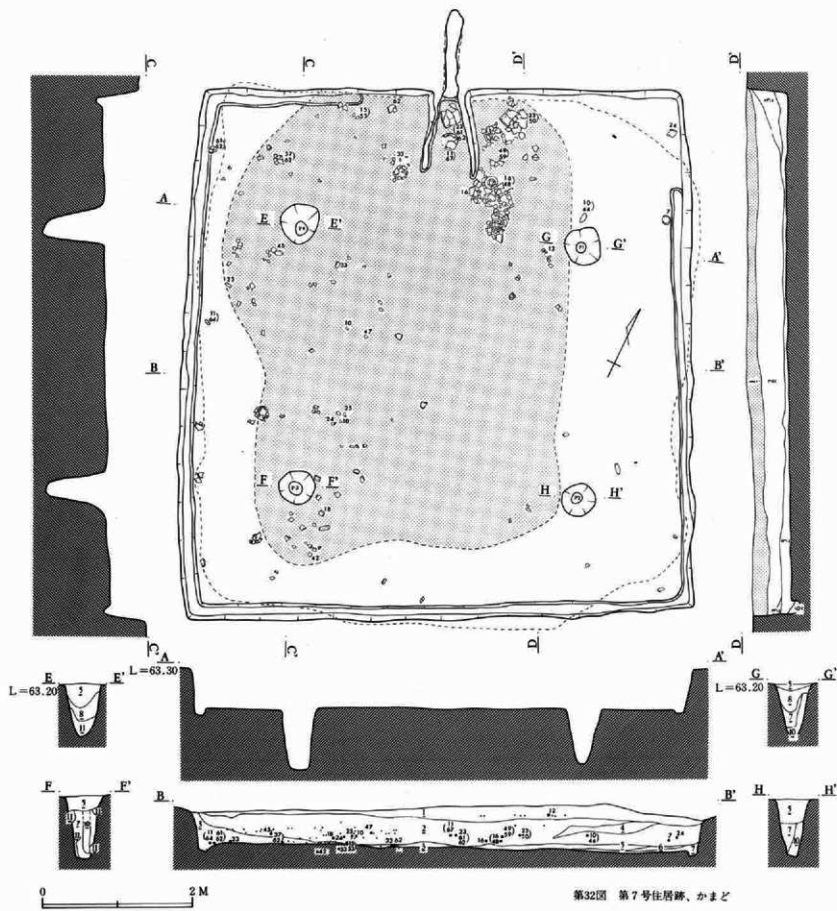
図録番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・地成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
29-11	罎	下位 瓦	口 14.8	胎 細砂粒多 量混入 焼 厚灰 色 赤褐色	胴部に最大厚をもち、底部にかけて薄くなる。胴部は内湾しみに立ち上がり、口縁部でなだらかに外反する。胴部内面に強い稜をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛調整後焼で、胴部は寛調整後焼で、底部は寛用り。内面、口縁部は寛調整により平滑。胴部は焼後後傾研磨。	
29-12	罎	床面 瓦	口 12.8	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	胴部付近に最大厚をもつ。体部はやや球形を呈し、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は指頭による横焼で、体部は寛調整後焼で、内面、口唇部および胴部は寛調整後焼で、口唇部の稜は焼によりやや丸い。体部は焼後後研磨。	
29-13	罎	覆土 瓦	口 14.2	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 褐色	胴部に最大厚をもつ。胴部は内湾しみに立ち上がり、口縁部で外反する。胴部内面に稜をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は寛調整後焼で、内面、胴部は丁寧な焼で、口唇部は寛調整後強い焼によりやや丸みをもつ。	
29-14	罎	覆土 瓦	口 12.4	胎 細砂粒混 入 焼 厚灰 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は内湾しみに外反する。胴部に強い稜をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛調整後焼で、胴下部は寛用り。内面、口唇部は寛調整により平滑。胴部は焼後後右上一左下方向研磨。内面の仕上げは丁寧。	
29-15	罎	床面 定形	高 4.8 口 12.0	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 暗褐色	胴部に最大厚をもち次第に薄くなる。胴部は急に立ち上がり口縁部でやや内湾する。底部は小さく安定感がない。全体に三角状を呈する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部と胴部の境は寛調整によるわずかな稜が見られる。胴部は寛調整後全体を丁寧な焼で両方向不明瞭。内面、口唇部は寛調整後焼で、胴部は焼後の後約5mm程度の粗い研磨。内外共に焼成研磨。	
29-16	罎	覆土 瓦	高 4.9 口 11.0	胎 細砂粒混 入 焼 厚灰 色 褐色	口縁部付近に最大厚をもつ。胴部は口縁部まで内湾しみに立ち上がる。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横焼で、丸みをもたせ整形。胴部は寛用り。内面、口唇部は両方向横焼で、胴部は丁寧な焼で後不定方向の研磨。	整形端子 口縁部→胴部
29-17	罎	壁外 瓦	高 5.4 口 12.0	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 明赤褐色	胴部に最大厚をもち口縁部で薄くなる。底部は丸底で内湾しみに立ち上がる。口縁部はやや直立する。全体に丸みをもつ。	外面、口縁部は横焼でにより区分。体部は寛用り後丁寧な焼で焼し、稜がわずかに見られる程度。	
29-18	罎	覆土 瓦	高 4.7 口 11.5	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚さをもち口縁部で薄くなる。胴部はやや球形を呈する。口縁部は内湾し、口縁部は鋭い。全体に球形。	外面、口縁部は焼で、胴部は寛用り後焼で、底部に寛用り痕が残る。内面、口縁部は丁寧な焼で、胴部は寛調整後丁寧な焼で。	
29-19	罎	床面 定形	高 5.2 口 12.2	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 褐色	胴部に最大厚をもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部で内湾する。胴部と口縁部の境になだらかな稜が見られる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な焼で、胴部は寛調整後丁寧な焼で、底部は寛用り。内面、胴部は丁寧な焼で、全体に仕上げは良好。	底部に径9cmの高あり。
29-20	罎	覆土 瓦	口 12.2	胎 砂粒混入 石を含む。 焼 厚灰 色 赤褐色	胴部付近に最大厚をもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部で一旦くびれ外反する。口縁部はやや丸い。	外面、口縁部は横焼で、胴部は寛調整によるわずかな稜をもつ。胴部は焼で、内面、胴部は寛調整後焼で、胴部は焼で。	
29-21	罎	中位 瓦	残存高 9.2 口 15.7	胎 微細粒混 入 焼 厚灰 色 明赤褐色	胴部及び胴部付近に厚みをもち胴中央部で薄くなる。胴部はなだらかに立ち上がり、胴上半部で直立する。口縁部はわずかに外反する。	外面、口縁部は強い横焼で、胴部は左→右方向横焼で、内面、口唇部は寛用り後横焼でで平滑。胴部内面下に塊粘土が見られる。焼は焼により強い焼。	

1. 住居跡 (第5号)

図番号	部形	出土位置・ 遺存状態	法量	土・地皮・色調	部形の特徴	整形の特徴	備考
20-22	環	覆土 Ⅴ	高 6.7 口 13.6	胎 強細粒混 入 地 堅緻 色 ぶい褐色	底部に最大厚をもつ。胴部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でなだらかに外反する。底部は丸底。口縁部は丸い。	外面、口縁部、頸部は横撫で、胴部は縦調整横撫で。底部には不定方向の寛削り痕が見られる。 内面、頸部は撫でによりなだらかな境をもつ。胴部は撫で、胴中央部と頸部に接合痕が見られる。	
20-23	環	床面 Ⅴ	口 11.4	胎 小硬混入 緑泥片岩 含む。 地 堅緻 色 黒褐色	底部付近に最大厚をもつ。底部から内湾ぎみに立ち上がり、頸部で直立し、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は内外面共に指痕による横撫で、頸部は横撫で、胴下半部は右一左方向の細かく深い寛削り。上半部は縦調整。 内面、撫で、仕上げは悪い。	断面に2次地皮が残る。
20-24	環	床面 Ⅴ	口 10.8	胎 砂粒多量 に混入、0.6 cmの石英粒 含む。 地 堅緻 色 明赤褐色	胴上半部に最大厚をもつ。胴部は内湾ぎみに立ち、胴上半部で直立する。口縁部はなだらかに外反、内縁が見られる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、胴上半部は寛削り後軽い撫で、下半部は寛削り。 内面、口縁部は強い撫でによりやや丸みをもつ。胴部は撫で。	
20-25	城	床面 Ⅴ	残存高 6.0 口 12.8	胎 砂粒多量 混入 地 やや軟弱 色 ぶい赤 褐色	口縁部に最大厚をもつ。胴部はほぼ直に立ち、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び頸部は撫で、胴部は強い寛削り。 内面、口縁部は横撫で、頸部は寛削りによる強い後、その後撫で。	
20-26	高環	かまど Ⅴ	高 13.3 口 15.9 幅 11.8	胎 強細粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	底部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや曲線で口唇部に接く。胴柱部はなだらかに開き、裾部はやや扁平に開く。頸部は薄く丸い。	底部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや曲線で立ち上がる。 内面、丁寧な撫で。 胴部外面、不定方向撫で。 胴柱部内面、寛削り、裾部との境に鋭い後、環部と胴部の接合は凹丸型。	胴部の接合点が少なく正立せし僅元実測。
20-27	高環	かまど左袖 外側 Ⅴ	口 16.4	胎 強細粒混 入 地 やや軟弱 色 赤褐色	環部に最大厚をもち、口縁部につれて厚くなる。胴部はなだらかに立ち口縁部で急に外反する。口縁部はやや丸い。	環部外面、口縁部は横撫で、表面は寛削り後撫で。 内面、口唇部は強い横撫でであすかにくぼむ。胴部は縦調整後丁寧な撫で、口縁部との境に接合痕が見られる。 胴部との接合は凹丸型。	
20-28	高環	中位 瓦俵	残存高 4.5	胎 強細粒混 入 地 堅緻 色 褐色	環部底部に最大厚をもつ。口縁部との境は段を有する。	環部外面、口縁部は横撫で、底部は寛削り。 内面、丁寧な横撫で、口縁部との境は寛削りにより段を有する。	
20-29	高環	床面 Ⅴ	高 11.4 幅 11.6	胎 強細粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴柱部は厚みに太くなり、裾部で強く屈曲し開く。裾部は丸い。	胴柱部外面、縦調整横撫で、裾部は撫で。 内面、寛削り後横撫で、裾部は丁寧な横撫で、裾部境は寛削りにより強い後をもつ。	製作技法は5-26と同一。
20-30	埴	覆土 Ⅴ	最大幅 17.5 残存高 7.8	胎 強細粒少 量混入 地 堅緻 色 赤褐色	胴部は球形を呈し、口縁部は屈曲すると考えられる。	外面、頸部は縦調整。胴上半部は寛削り。下半部は横方向寛削り。 内面、頸部は寛削り調整。胴部は縦調整。	
20-31	瓶	床面 Ⅴ	高 11.8 口 20.2 孔 7.8	胎 強細粒混 入 地 堅緻 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底で最大幅を口縁部にもつ鉢形である。	外面、胴部及び底部は縦調整後丁寧な撫で、底部の輪は明瞭。 内面、口縁部は強い撫でによりややくぼむ。口縁部は寛削りにより平滑。胴部は縦調整後丁寧な撫で、底部付近に寛削りが見られる。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
29-32	甌	覆土 写	口 25.2	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 褐色	口縁部に最大厚をもつ。胴部はほぼ直立し、口縁部でわずかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は右廻り横線で、胴部は下→上方向削り、口縁部で意識的に止める。泥底明瞭。 内面、口縁部は横線で、胴部は横方向の横線で。	
30-33	甌	かまど 口縁部写 底部定形	高 26.6 口 19.6 底 5.5	胎 砂粒多量 混入、石 英緑泥片 岩含む 地 紫褐色 色 にぶい褐色	底部と口縁部に厚みをもつ。底部は平底で最大幅を胴中央部にもち、球形を呈する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横線で、胴部は下→上方向削り、その後横線で、底部は削りて輪郭は不明瞭。 内面、口唇部は横線で、胴部は横線でより緩い線をもち、胴部は寛調整。 内面全体を丸く仕上げる。	整形順序 底部→胴部→口縁部
30-34	甌	かまど 口縁部写 底部 写	高 28.1 口 17.8 底 6.6	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 暗褐色	胴下半部と口縁部に厚みをもつ。底部は平底で最大幅を胴中央部にもつ、ややたて長の球形。口縁部は「く」の字状に外反し強い内線をもち、口縁部は丸い。	外面、口縁部は横線で、胴上半部は右→左上方向削り胴部で止める。胴部は左上→右下方削り削り。 内面、口唇部は横線で、口縁部は軽く削りて押える。胴部は寛調整。	整形順序 胴下半部→胴上半部→口縁部
30-35	甌	かまど左袖 外形 定形	残存高 8.7 口 18.6	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 褐色	胴部付近に厚みをもつ。口縁部はなだらかに外反し、口縁部中央に段をもつ。口縁部は丸い。	外面、口縁部中央部の削り方による有段口縁全体は横線で、胴部は強い横線で肩部は削り。 内面、口唇部は強い横線でよりくぼみを残す。 胴部は削りにより線を消す。残粘土を捨てつける。肩部は横線で。	
30-36	甌	床面 写	口 19.8	胎 微細粒混 入 地 紫褐色 色 褐色	肩部からほぼ直立する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は寛調整後横線で、肩部が残る。口縁部は押え、泥底明瞭。肩部は寛調整。 内面、口唇部は寛調整後横線で、くぼみが残る。	
30-37	甌	床面 写	口 21.4	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 褐色	口縁部に厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部はやや丸い。	外面、口縁部及び胴部は横線で、口縁部は削り、胴部は横方向削り削り。 内面、胴部は寛調整により丸みをもつ。胴部は削り後横線で。	整形順序 胴部→口縁部
30-38	小型甌	中位 写	残存高 6.2 口 13.6	胎 砂粒混入 地 紫褐色 色 にぶい褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、強い内線をもち、口縁部は丸い。	外面、口縁部は右廻りの横線で、胴部は削り、胴部で足を止めている。泥底が残る。 内面、口唇部は横線で、胴部は削りによる線をもち、胴部は横線で。	
30-39	甌	床面 写	底 4.6	胎 砂粒多量 混入 地 やや軟弱 色 にぶい赤褐色	底部はほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底で輪郭は明瞭。胴部は球形を呈すると考えられる。	外面、底部及び胴部は寛調整を施しているが、器面が荒れているために不明瞭。 内面、丁寧な横線で。	
30-40	甌	覆土 写	底 6.6	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 褐色	底部に最大厚をもつ。底部は平底で球形に立ち上がる。	外面、胴部は下→上方向削り、底部は寛調整。 内面、胴部は横線で、底部の輪郭は寛調整により不明瞭。	



1. 灰化層。
2. 暗褐色土層：汽化物乾入。
3. 黄褐色土層。
4. 褐色土層：炭化粒を含む赤褐色土層で、やや赤味を帯びる焼土を含む塊れ込み。
5. 灰褐色土層。
6. 灰化層：1層とは性質を異にするのか、1層との隔選性は得てない。
7. 黄褐色土層：やや赤味を帯び堅くすれを含む。(焼土)
8. 黄褐色粘質土層。炭化物乾入。
9. 黄褐色粘質土層。
10. 暗褐色土層。
11. 砂質ブロック。

第32図 第7号住居跡、かまど

1. 住居跡 (第7号)

図番番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・地成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
30-41	甕	床面 写	口 19.0	胎 砂粒混入 石灰含む 地 紫褐色 色 ぶい橙 色	なだらかに外反する。口端部は 小さな丸みをもつ。	外面、甕調整後撫摩で、底縁が残る。 内面、擦れで。	
30-42	甕	覆土 写	底 6.6	胎 砂粒多量 混入 地 紫褐色 色 赤褐色	底部は平直で胴部は肉曲ぎみに 立ち上がる。	外面、胴部は縦方向磨り、底部は一 方向磨り、輪部は明瞭。 内面、胴部は刷毛状工具による調整。	整形順序 底部→胴部
30-43	甕	かまど右袖 外側 床面 写	底 6.2	胎 砂粒多量 混入、緑 泥片管 含む 地 紫褐色 色 褐色	底部にやや厚みをもつ平底。内 面底部は丸みをもつ。	外面、胴部は横方向磨り、底部は円 形状に磨り、輪部は明瞭。 内面、胴部は刷毛状工具による左上 がりの調整。	底部整形順序 底部→胴部

第7号住居跡 (第32～37図)

本住居跡は遺跡の南西寄り2号住居跡の西側に位置している。東壁と南壁は一直線状でコーナーを直角に交えるが、北壁と西壁は軸線上より外方に拡がり南東、北西、南西の各コーナーは鈍角となる。よって各壁長はそれぞれ異なり、東壁6.8m、西壁7m、南壁6.7m、北壁6.2mを計測する。住居規模の平均値は東西6m、南北6.7mのやや方形の住居跡である。方位はN-20°-Wを測る。壁はやや砂質をもつ黄褐色土層である。各壁ともほぼ直立し遺存度は良いが、西壁の上半部に壁崩れが目立つ。南壁が最も良好で残存壁高は40～50cmを測る。

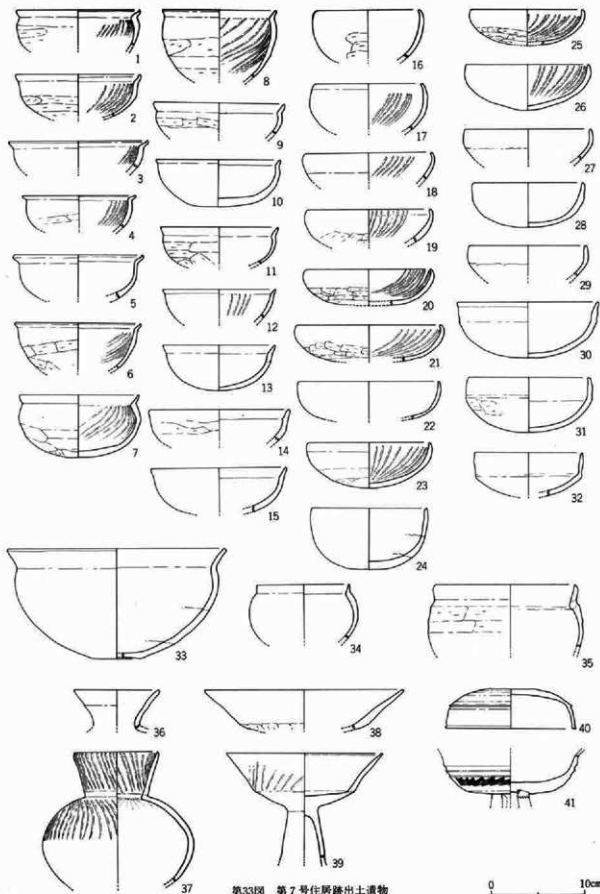
周溝の範囲はかまどの左90cmから右側、東壁北より1.2mを除いた壁下を周る。周溝幅は西壁側で16cm東壁側は狭く10cmで、深さは西壁で10cm、南壁が最も深く14cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。また周溝の末端部は自然に立ち上がり消滅する。覆土は炭化物を含む暗褐色土層である。

床面はほぼ平坦で、住居中央部とかまど焚口部は特に堅く、壁側に近づくにつれて次第に軟弱となる。またかまど周辺にはかまど構築の灰白色粘土が流出し、厚さ2～3cm堆積している。その他の床面全体には砂質土壌の堆積がみられ、南壁側に向うにつれてその厚さも増していく。床面上には4ヶ所のピットを検出し、深さは平均74cmを測る。覆土の大半は炭化物を含む暗褐色土層である。また覆土の上層床面付近はつき固められた如く非常に堅くなっている。ピットはほぼ方形に配置されているがP₁はやや南側にずれている。ピット間は東西3.7m、南北3.5mを測り東西方向にやや長い。

かまどは北壁やや中央部に付設し、袖部は壁に対し「ハ」の字状に構築している。かまどの中心線は壁に対して直角になっている。燃焼部は住居内にもち平面形は奥壁幅20cm、焚口幅50cm、奥行1.1mを測る長台形である。火床は床面としほぼ平坦を呈する。袖部は灰白色粘土と暗褐色土との混土層で構築している。袖部の上半分はすでに崩壊し、基部よりわずか10cmを残す程度であった。

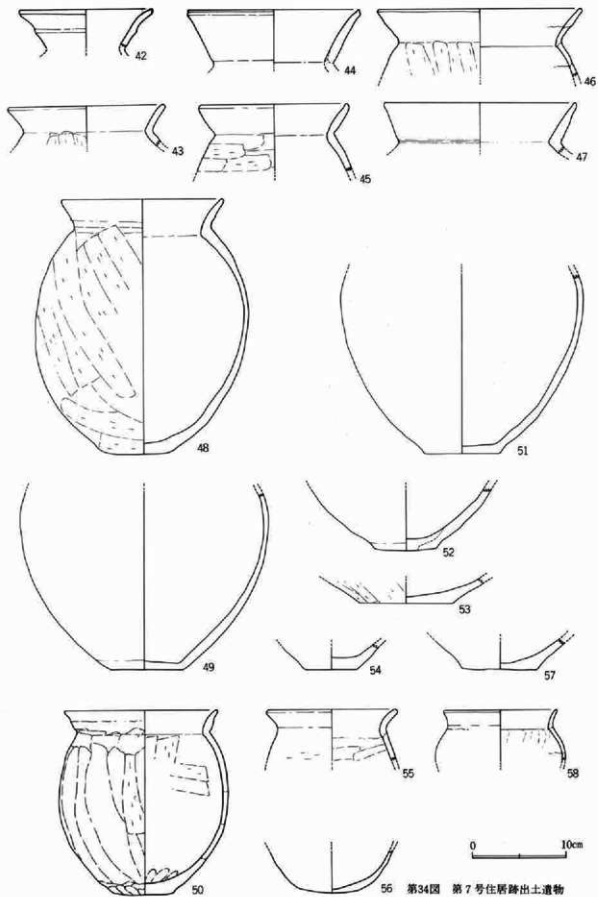
燃焼部内壁面は崩れ使用状況はつかみにくいが、かまど内に検出された焼土ブロックを見ると比較的良く使用されたものと考えられる。煙道部は住居壁を基部より約7cm残し、傾斜20°で煙出し部になく、煙道部幅18cm、長さ1.2mを測る。煙道部の内壁は遺存が良く内湾ぎみに立ち上がる。燃焼部

VI 検出された遺構と遺物



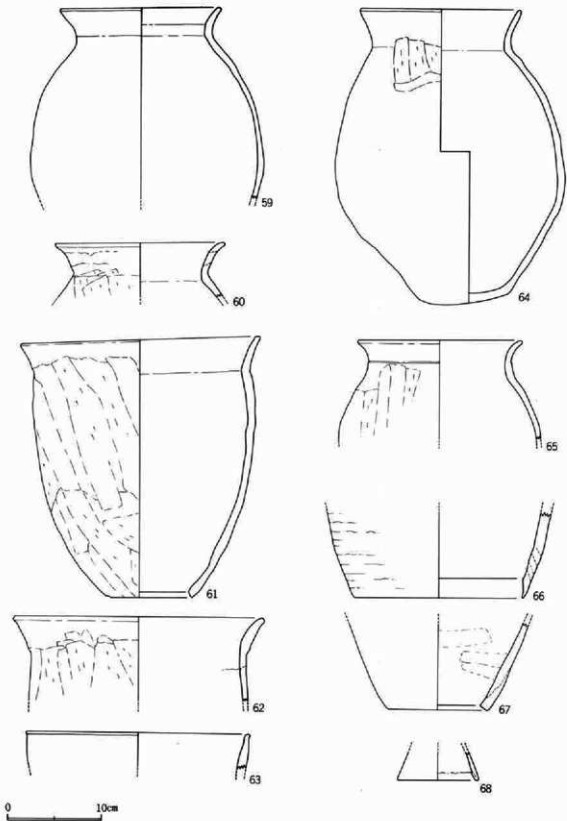
第33図 第7号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第7号)



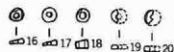
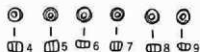
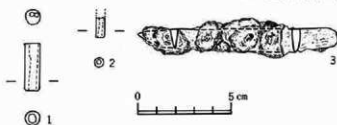
第34图 第7号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

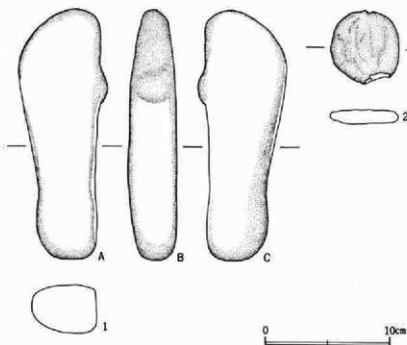


第35図 第7号住居跡出土遺物

1. 住居跡(第7号)



第36図 第7号住居跡出土遺物



第37図 第7号住居跡出土遺物

内には多量の焼土、炭化物、灰が検出された。

住居跡覆土は西壁直下は壁崩れの黄褐色土層が堆積し、中央部は灰褐色土層が厚く堆積する。覆土上半部は土器を多量に混入する炭化物層が、住居跡外より流れ込んだ状態で厚く堆積している。この炭化物層の状況は2号住居跡に認められるものと同質である。平面図の破線は炭化物層の範囲、網点は炭化物が最も厚い範囲を示す。

遺物はかまど内及び袖部右側に集中的に出土している。床面上から出土しているのは破片が多い。出土遺物は坏、碗、埴、高坏、甕、甔、須恵器(壺、高坏)管玉、白玉、刀子、砥石であった。

出土土器のなかでNo.11、67はかまど内、No.16、26、48~50、59はかまど右袖外側、No.2、18、24、25、33、35、37、42、62、64は床面上、No.7、12、44、45、47は覆土中位より出土している。

このうちかまど内とそれ以外の接合関係が認められるのはNo.11、23、61、62である。No.10、24は覆土中位と床面との接合がみられる。

管玉、1、2は碧玉質、両面穿孔で、孔は一方へ片寄る。上下面の稜線は鋭い。1は上面に2孔あり一方は未貫通、上部に切断影痕線がみられる。2は上半分欠損。

白玉、直径4~5mm、厚さ2~4mm、孔径1.5~2mmを測る。ほとんど稜線は認められず、管玉を切断したような円筒状を呈する。断面形は方

VI 検出された遺構と遺物

形、長方形、台形の3種類がある。上下面とも摩滅痕は認められず逆に起伏があり未完成のものが多い。12は碧玉質で完成品、側面中央部に膨らみをもち、上下面はくぼんでいる。表面全体に光沢研磨が施こされている。

刀子、錆化が甚しく、地金は遺存しない。切先の一部と柄部に刀子としての形跡を残す。現存長11.7cm、開付近幅1.5cm、茎尻に地金らしき方形の部分がみられ、幅0.6cm、厚さ0.3cmを測る。柄部に木質が付着している木質の付着状況から背には関がないようである。

砥石、1は粒子の細かな角閃石、石英を多量に含む角閃安山岩、A-C面は摩滅し平滑、側面はやや内湾している。2は自然石で床面から出土、棒状の緑泥片岩。3は床面出土の緑泥片岩、円形で扁平を呈し上面に幅4mm、深さ2mmの摩滅痕がみられる。下面は欠損しているが鏝の可能性もある。

遺物観察表 (第33、34、35図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・地成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
33-1	環	覆土 1/6	口 13.2	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	頸部付近に厚みをもつ。胴部は球形を呈し強く外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は既調整。胴部は左→右方向内側倒り。 内面、口特部は既調整、強い稜をもつ。口端部はつまみ揃で。胴部は撫で後右→左下方向研磨。	
33-2	環	床面 1/6	口 13.4	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 淡褐色	胴部はなだらかに立ち上がり、頸部付近で直立する。口縁部は強く外反し、口端部は短く直立する。	外面、口縁部は既調整後撫で。胴部は横方向内側倒り。 内面、口特部は既調整後撫で、弱い稜をもつ。口端部はつまみ揃で。胴部は丁寧な撫で。	
33-3	環	覆土 1/6	口 15.0	胎 微細粒混入 地 堅緻 色 褐色	胴部は「く」の字状に屈曲し、強い内稜をもつ。口端部は短く直立する。	外面、胴部は横方向内側調整後撫で。胴部は撫で。 内面、口特部は既調整。口端部はつまみ揃で。胴部は撫で。	
33-4	環	覆土 1/6	口 12.2	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 濃い赤褐色	胴上半部に厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は強く屈曲する。口端部はわずかに立ち上がる。	外面、口縁部は既調整。胴下半部は左→右方向内側倒り。 内面、口特部は既調整、稜はやや強い。胴部は撫で後右側より右上がりの細かい研磨。	
33-5	環	覆土 1/6弱	口 14.0	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 明赤褐色	底部付近に厚みをもつ。胴部は球形を呈し、胴上半部で直立する。口縁部は強く屈曲し、口端部は短く直立する。	外面、口縁部及び胴部は既調整後指頭撫で。口端部は既調整より鋭い。 内面、口特部は既調整。胴部は撫で後研磨。	
33-6	環	覆土 1/6	口 13.6	胎 砂粒多量混入 地 堅緻 色 濃い赤褐色	頸部付近に厚みをもつ。胴部は曲線的に立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は既調整後撫で。胴部は横方向内側倒り。上半部は丁寧な既撫で。内面、口特部は既調整。口端部はわずかにつまんでいる。胴上半部は撫で、下半部は既調整、わずかに放射状研磨が残る。	
33-7	環	壁下中位 1/6	高 6.6 口 12.8	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部及び口縁部付近に最大厚をもつ。胴下半部はなだらかに立ち上半部で内湾する。口縁部は強く屈曲し外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は既調整後撫で。胴部は横方向内側倒り。底部は不定方向内側倒り。内面、口特部は既調整後指頭撫で。口端部は軽くつまむ。胴部は撫で、上半部のみ放射状研磨。	

1. 住居跡(第7号)

図版番号	図形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
33-8	坏	覆土 層	口 12.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	胴中央部に厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は短くならかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は既調整後横撫で、胴上半部は右→左方向既削り、下半部は左→右方向既削り。 内面、口唇部は既調整後強い、稜をもつ。胴部は撫で後右土がかり研磨。	
33-9	坏	覆土 層	口 14.0	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。胴部は湾曲に立ち上がり、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は指頭による横撫で、胴部は左→右方向既削り。 内面、口唇部は既調整後横撫で、後には胴部を意図し丸みをもたせる。胴部は横撫で。	
33-10	坏	覆土 層	高 5.0 口 13.3	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底部に最大厚をもつ。胴部はなだらかに外反し、胴上半部では前に立つ。口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な横撫で、胴上半部は撫で、底部は不定方向既調整。 内面、口唇部は横撫で、後にはやや丸みをもつ。胴部は撫で。	
33-11	坏	かまど 層	口 12.6	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。胴部は内湾みに立ち上がり、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、胴部はやや鋭い既削り、上半部は右→左方向既削り、下半部は上→下方向既削り。 内面、口唇部は強い横撫で、後には鋭い。胴部は撫で。	
33-12	坏	上位 層	口 12.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 浅黄褐色	胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は強い横撫でによりやや丸みをもつ。胴部は既削り後横撫で。 内面、口唇部は既調整で強い稜をもつ。胴部は撫で後左廻り、左上がかり研磨。	内面黒色処理
33-13	坏	覆土 層	高 4.9 口 12.2	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部はなだらかに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は横撫で、内縁は撫でにより丸みをもつ。その他内外面は摩滅し整形不明瞭	底部に黒炭あり。
33-14	坏	覆土 層	口 15.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	内湾みに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、胴部は指頭による横撫で、胴部は横方向既削り。 内面、口唇部は既調整後横撫で、胴部は撫で。	
33-15	坏	覆土 層	口 14.6	胎 微細砂混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部に最大厚をもつ。胴部は内湾みに立ち上がる。口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部及び胴部は指頭による横撫で、胴部は丁寧な横撫で。 内面、胴部は撫でにより鋭い稜をもつ。胴部は撫で、底部は放射状既調整、底痕あり。	器面は摩滅している。底部に炭片あり。
33-16	坏	かまど右側 外側 層	口 11.2	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 濃い褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。胴部は内湾みに立ち上がり、口縁部でさらに内傾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、胴上半部は横撫で、胴部は横方向既削り。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は既調整後横撫で。	
33-17	坏	覆土 層	口 11.4	胎 砂粒少量 混入 焼 堅緻 色 暗褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は内湾りする。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、口縁部は撫でにより区分。胴部は既削り後横撫で。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は既調整後研磨。	内面黒色処理

VI 検出された遺構と遺物

図説番号	器形	出土位置・ 保存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
33-18	杯	床面 片	口 13.4	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 褐色	胴部はなだらかに立ち上がり、 口縁部でわずかに内湾する。 口端部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、底部は寛作り、 内面、調整後は右上がり研磨。	
33-19	杯	覆土 片	口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 褐色	胴部付近に厚みをもつ、口縁部 で薄くなる。胴部は緩やかに立 ち上がり口縁部でやや内湾する。 口端部は丸い。	外面、口縁部は横撫でにより丸みをも つ、底部は不定方向に磨り。 内面、口唇部は調整後は強い撫で、胴 部は撫で後放射状研磨。	整形順序 口縁部→胴部
33-20	杯	覆土 片	口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 褐色	胴部付近に最大厚をもつ、胴部 は緩やかに立ち、口縁部でやや 内湾する。口端部は丸い。	外面、口縁部から胴上半部にかけて横 撫で、丸みをもつ、底部は右一左方向 に磨り。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は丁 字な撫で後、右上がり研磨。	外面一部に黒皮あり。 整形順序 胴部→口縁部
33-21	杯	覆土 片	口 15.0	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 赤褐色	胴部は扁平に立ち上がり、口縁 部でわずかに内湾する。口端部は 鋭い。	外面、口縁部は丁字な横撫で、底部は 不定方向の細かな磨り。 内面、撫で後細かく右向き右上がり研 磨。器面は光沢強い。	整形順序 口縁部→底部
33-22	杯	覆土 片	口 15.0	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 赤褐色	底部からなだらかに立ち、口縁 部で直立する。口端部は鋭くや や内湾する。	外面、口縁部は横撫で、胴部は細かな 寛作り。 内面、口縁部は強い横撫で、胴部は撫 で、口縁部と胴部は撫でにより区分。	
33-23	杯	かまど右袖 外面 片	高 4.7 口 13.0	胎 砂粒混入 焼 厚織 色 暗褐色	口縁部付近に厚みをもつ、口端 部は薄く鋭い。胴部は扁平な みに立ち上がり、口縁部でやや内 湾する。	外面、口縁部は丁字な横撫で、撫でに より胴部と区分。胴部は一定方向に磨 り。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は撫 で後右上がり研磨。	
33-24	杯	床面 片	高 6.5 口 12.2	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 上い褐色	底部に最大厚をもつ、底部から 曲線的に立ち上がり、口縁部で ほぼ直立する。口端部は鋭い。	外面、胴上半部は横撫で、口縁部との 境はない。胴部から底部は不定方向に 調整。 内面、口端部は軽く捫で磨る。胴 部は横撫で調整。内外面共丸みをもち やや光沢あり。	口縁部に黒皮あり。
33-25	杯	床面 片	口 15.0	胎 細砂粒混 入、黒赤 得合む。 焼 厚織 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、胴部 は扁平で、口縁部でわずかに内湾 するに立ち上がる。口端部は丸 い。	外面、口縁部は横撫でにより丸みをも つ、胴部は左一右方向の細かな磨り。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は撫 で後右向き右上がり研磨。	整形順序 胴部→口縁部
33-26	杯	かまど 片	口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、胴部 から内湾するに立ち上がり、口 縁部で直立する。 口端部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、撫でにより口 縁部を区分。胴部は横方向に磨り。 内面、口唇部は強い横撫で、胴部は丁 字な撫で後放射状研磨。	
33-27	杯	覆土 片	口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 厚織 色 赤褐色	胴部はなだらかに立ち上がり、 口縁部でわずかに内湾する。 口端部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、胴部は寛作り、 内面、胴部は横撫でによりややくぼ む。胴部は丁字な横撫で。	
33-28	杯	覆土 片	口 11.8	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部と胴部付近に厚みをもつ、 胴下半部から内湾するに立ち、 口縁部で直立する。深みのある 土器。口端部は鋭い。	外面、口縁部は強い撫で、粘土接合面 あり。底部は寛作り後撫で、全体に撫 で。 内面、全体は丁字な撫でにより丸み をもち、	

1. 住居跡 (第7号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・地色・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
33-29	環	覆土 層	口 12.5	胎 細砂粒混 入 地 やや軟弱 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は外反し立ち上がる。口縁部ではほぼ直立する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は寛削り。内面、横溝で。	黒色処理を施す。
33-30	環	覆土 層	高 5.9 口 15.2	胎 砂粒多量 混入 地 やや軟弱 色 赤褐色 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形状に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部は鋭い。全体を丸みに仕上げている。	外面、口縁部は寛調整後横溝で、わずかな横が見られる。胴部は不定方向寛削り。内面、口縁部は強い横溝で、胴部は寛調整。	
33-31	環	覆土 層	高 5.8 口 13.0	胎 砂粒混入 地 堅軟 色 暗褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は湾曲状に立ち上がり、口縁部は直立する。底部は丸成。口縁部は丸い。	外面、口縁部は寛調整後横溝で、わずかな横が見られる。胴上半部は左→右方向寛削り。底部は不定方向寛削り。内面、口縁部及び胴部は寛調整後横溝で、胴部は横溝によりややくぼむ。口縁部は丁寧な横溝で、胴部は寛調整。	
33-32	環	覆土 層	口 11.6	胎 砂粒混入 地 堅軟 色 褐色	底部に最大厚をもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部で直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は寛調整により横い段をつくる。底部は寛調整。内面、口縁部は横溝で、胴部は寛調整によりくぼみをつくる。胴部は丁寧な横溝で。	
33-33	鉢形	床面 層	高 11.7 口 23.4 底 5.2	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は小さな平底で、胴部は球形状を呈する。口縁部は縦やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な横溝で、胴部は寛調整によりわずかな横をもち、その後溝により丸みをもたせている。胴部は寛調整後横溝で、口縁部は軽い横溝で。 内面、口縁部は横溝で、横溝により横は丸みをもつ。口縁部は強い横溝で、横溝によりややくぼむ。胴部は横調整後横溝で。	
33-34	埴	覆土 層	口 9.9	胎 細砂粒少 量混入 地 やや軟弱 色 明赤褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。胴部は球形に立ち上がり、口縁部は短く直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は横方向の細かな寛削り。内面、口縁部は寛調整。横はやや丸みをもつ。胴部は丁寧な横溝で。	
33-35	埴	床面 層	口 16.0	胎 砂粒混入 0.2-0.5 mm 地 堅軟 色 褐色	胴部に厚みをもつ。胴部は内湾きみに立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は横溝で、胴部は右→左方向粗い寛削り。内面、口縁部は強い横溝で、横溝によりややくぼんでいる。胴部は横溝で、横溝が認められる。横は鋭い。	
33-36	埴	覆土 層	口 9.2	胎 微細粒混 入 地 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。口縁部は比較的長く、中位にわずかな横が見られる。口縁部は丸い。	内外面共に丁寧な横溝を施す。器面が摩滅し整形は不明瞭。	
33-37	埴	床面 底部欠損	残存高 14.0 口 9.0	胎 微細粒混 入 地 堅軟 色 褐色	胴中央部にやや厚みをもち、中央部に最大幅をもつ。球形を押し潰した形を呈する。口縁部は外反し、口縁部がやや内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で横研溝。胴部は横による横溝で、胴部は横溝で後半部分のみ研溝。 内面、口縁の接合部は指痕による押え、寛調整を加え横は鋭い。口縁部は横溝で横放射状研溝。胴部は横調整。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
33-38	高 杯	床面 Ⅲ	口 11.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底面に厚みをもち次第に薄くなる。胴下半部におずかな稜をもちやや曲線的に立ち上がる。口縁部は鋭い。	杯部外面、口縁部は横溝で、下半部は寛調整後物で、内面、荒れているが撫でを施したと考えられる。	整形順子 口縁部→杯部下半
33-39	高 杯	覆土 Ⅲ	口 16.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	杯部は胴部に最大厚をもち次第に薄くなる。胴部から口縁部にかけてやや曲線的に立ち上がる。口縁部は丸い。 脚部は杯との接合部に最大厚をもち次第に薄くなる。脚柱部は曲線的に広がる。	杯部外面、口縁部は丁寧な横溝で後縦方向研磨があるが終始は不明、わずかな稜が見られる。胴部は寛調整後器物で、内面、寛調整後幅 3~4mm の研磨。口唇部は強い横溝で、脚部外面、寛調整後物で、内面、横溝で、杯部との接合は指頭圧の押え。	
33-40	蓋 頭蓋器	覆土 Ⅲ	高 4.2 口 14.0	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 灰白色	天井部は比較的平らで縁は短く鋭い。口縁部は外方へ開き蓋部は平らである。器形全体に丸みがある。	ツキアゲ、ミズビキによる成形。 外面、天井部は指圧削り。 内面、回転軸で調整。	
33-41	高 杯 頭蓋器	覆土 Ⅲ	残存高 6.4	胎 石英が雲 降り状に 入る。 焼 堅緻 色 灰色	杯底部に厚みをもち口縁部付近は薄くなる。体部中位に2本の沈線。沈線下は放射文による文様帯が見られる。脚部は接合部付近のみ見られる。	杯部成形後脚部の貼り付け。 杯部外面、口縁部は回転横溝で、放射文は8本→10本1条とする幅1cm。放射文は右→左方向回転削り。 内面、回転軸で。 脚部、杯部に脚部をさし込んだ後方台形の通し。	
34-42	甕	床面 Ⅲ	口 14.2	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部中位におずかな段を有する。口縁部は丸い。	内外面は準減し整形不明、口縁部におずかな横溝での痕跡がある。	
34-43	甕	覆土 Ⅲ	口 16.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部上→下方向削り、寛削が残る。 内面、口縁部は横溝で。	
34-44	甕	中位 Ⅲ	口 18.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 濃い褐色	ほぼ均一した厚みをもち、直線的に立ち上がる。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛押え。全体は寛調整後物で、内面、横溝で、口唇部は強い横溝でによりややくぼむ。	
34-45	甕	中位 Ⅲ	口 16.6	胎 砂粒多量 混入、緑 泥片を含む。 焼 堅緻 色 赤褐色	口縁部に厚みをもち、「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は左→右方向削り。胴部で寛を止める。寛削が残る。 内面、口唇部は強い横溝でによりややくぼむ。胴部は寛調整後物で、内面、口唇部は微細土が撫で付けられる。口唇部は強い横溝でによりややくぼむ。胴部は寛物で。	整形順子 胴部外面→口縁部外面→口縁部内面
34-46	甕	覆土 Ⅲ	口 21.8	胎 砂粒混入 緑泥片を含む。 焼 堅緻 色 濃い褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部は外反し強い内稜をもち、口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は下→上方削り。 内面、口縁部は寛調整後物で、胴部には口縁部からの残土が撫で付けられる。口唇部は強い横溝でによりややくぼむ。胴部は寛物で。	整形順子 胴部外面→口縁部外面→口縁部内面

1. 住居跡 (第7号)

図番番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
34-47	甕	中位 灰	口 20.6	胎 砂粒多量 混入、粘 泥片岩含 む。 地 堅緻 色 明赤褐色	頸部に厚みもち口縁部で薄くなる。口縁部は外反し、心もち内湾する。	外面、口縁部は無施で、口縁部は底で軽く押える。 内面、口唇部は強い横施でによりややくぼむ。胴部は背調整、調整の際、横を意圖している。	
34-48	甕	かまど右袖 外側 完形	高 25.7 口 17.2 底 7.7	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 暗褐色	底部及び頸部に厚みをもつ。底部は平底であるが安定は悪い。胴中央部に最大幅をもち球形を呈する。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横施で、胴下半部は横方向、下半中央～頸部は下→上方向内湾。内面、口縁部は横施で、口唇部は強い横施でによりややくぼむ。	底部の調整順序 底部→胴下半部→ 底部肩辺の横施で、
34-49	甕	かまど右袖 外側 片	底 7.4	胎 砂粒混入 2-4mm 地 堅緻 色 褐色	底部と頸部に厚みをもつ。底部は平底で最大幅を胴中央部にもつ。体部と底部との境はやや丸い。	外面、胴部は縦方向内湾。底部は一定方向内湾。内面、全体は丁寧な横施で、胴下半部に横方向の距離が残る。	
34-50	小型甕	かまど右袖 外側 完形	高 19.5 口 16.4 底 6.2	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	底部に最大厚をもつ。底部は平底で胴中央部に最大幅をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。球形を呈する。	外面、口縁部は横施で、胴中央部は縦方向内湾。頸部で意圖し横を止める。底部付近はゆるやかな内湾。内面、口縁部は粘土接合痕が認められる。頸部は縦方向内湾。胴中央部は横内湾。底部は底内湾が残る。	整形順序 外面 口縁部→胴部 内面 底部→胴上半部→ 胴中央部→頸部
34-51	甕	覆土 片	底 8.0	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底で内湾きみに立ち、胴張りてやや球形を呈する。	外面、胴部は下→上方向内湾。底部は背調整。 内面、胴部は無施で、底部付近に横施で押え痕が見られる。	
34-52	甕	覆土 片	底 6.7	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗褐色	底に厚みをもつ平底である。	外面、胴部は上→下方向内湾。底部一定方向内湾り後調整で。 内面、底部は無施でにより丸みをもたせている。	
34-53	甕	覆土 片	底 10.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 濃い褐色	底部は平底ではほぼ直線的に外反する。	外面、胴部は下方向内湾。底部は不定方向内湾。内面、背調整横施で。	
34-54	甕	覆土 片	底 5.6	胎 砂粒混入 地 やや軟弱 色 赤褐色	底部に厚みをもつ。胴部は外反する。	外面、胴部は寛れ不明瞭であるが内湾。内面、胴部は不定方向内湾。内面、不明瞭。	内面底部に横付着。
34-55	甕	覆土 片	口 14.0	胎 砂粒混入 0.3mm 地 堅緻 色 濃い赤 褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。口縁部はなだらかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な横施で、頸部は強い横施で、胴部は横内湾。内面、口唇部は無施で、頸部は横施で、横は丸みをもつ。胴部は左→右方向内湾。内面、背調整横施で。	
34-56	甕	覆土 片	底 6.2	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	胴部に厚みもち底部は薄い。底部は丸みを呈し、胴部は球形状に立ち上がる。	外面、胴部から底部にかけて内湾りを施す。 内面、背調整横施で、寛が残る。	
34-57	甕	覆土 片	底 8.0	胎 砂粒多量 混入 地 堅緻 色 濃い褐色	底部は平底ではほぼ直線的に外反する。	外面、胴部は横方向内湾り後施で、底部を意圖し調整。底部は不定方向内湾。胴部に指跡による横施で。 内面、背調整横施でを施す。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	粘土・施文・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
34-58	甕	覆土 瓦	口 12.2	胎 微細粒混 入 施 堅緻 色 浅黄橙	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部はやや球形を呈し口縁部で外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は指須による襷織で、胴部は丁寧な襷織で、 内面、口唇部は襷織で、腹部は調整の際の残土を胴側面に塗でつける。胴部は襷織で。	
35-59	甕	かまど右袖 外側 瓦	高 21.9 口 17.3	胎 砂粒混入 施 堅緻 色 褐色	胴部に厚みをもつ。ほぼ胴中央部に最大幅をもち、やや球形を呈する。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は平坦。	外面、口縁部は丁寧な襷織で、口縁部は貫押え。胴部を意図し貫削り、貫直あり。胴部は貫削りを施していると思われるが不明瞭。 内面、胴部は貫削りにより稜を落している。胴部は襷織で直あり。	
35-60	甕	覆土 瓦	口 18.0	胎 細砂粒混 入 施 堅緻 色 に濃い橙 色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部はわずかに直立し、口縁部付近で更に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は襷織で、胴部は下→上方向貫削り。 内面、全体に襷織で、腹部は横方向貫削り直あり、その後縁で、口縁部におよぶ貫削りが見られる。	
35-61	甕	かまど 宛形	高 27.5 口 24.9 底 8.5	胎 細砂粒混 入 施 堅緻 色 茶褐色	胴上半部に最大厚をもつ。胴中央部に重りをもち腹部でややくびれ、口縁部が軽く外反する。口縁部は平坦。	外面、口縁部は襷織で、口縁部は軽い貫押え。胴上半部は下→上方、下半部は上→下方向軽い貫削り。 内面、口縁部は襷織で、口唇部は強い襷織によりややくびれ、胴上半部は縦方向、下半部は横方向貫削り。 孔は焼成前1段調整。	整形順序 口縁部→胴上半部 →胴下半部 口縁→胴部にかけ 黒陶あり。
35-62	甕	床面 瓦類	口 26.6	胎 細砂粒混 入 施 堅緻 色 褐色	口縁部に厚みをもち、胴部は薄くなる。胴部は直立立みに立ち上がり、口縁部でわずかに立ち上がる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は襷織で、胴部は胴部より縦貫削り。 内面、口縁部は軽く貫押え、意図調整丁寧な襷織で。 稜は括弧している。	整形順序 口縁部→胴部
35-63	甕	覆土 瓦	口 24.0	胎 砂粒混入 施 堅緻 色 淡褐色	口縁部中程にやや厚みをもつ。口縁部は薄く平坦。	内外面共に丁寧な襷織で、口唇部付近に指須織で。	
35-64	甕	床面 口縁部 瓦 底部 瓦	高 31.4 口 17.0 底 8.2	胎 細砂粒多 量混入 施 やや堅緻 色 褐色	底部にやや厚みをもつがほぼ均一。底部はやや丸みをもつ平坦。胴部に最大幅をもつ。	外面、口縁部は襷織で、口縁部は外面を軽く貫押え。 胴部付近は下→上方向貫削り、口縁部で意図的に止まっている。貫直あり。胴下半部は左上→右下方に砂粒の流れが見られる。 内面、胴部は意図調整後襷織で、強い稜がある。	
35-65	甕	覆土 瓦	口 17.4	胎 砂粒混入 緑瓦片若 含む。 施 堅緻 色 赤褐色	胴部に厚みをもつ。口縁部は軽く外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な襷織で、胴部は下→上方向貫削り。 内面、胴部は意図調整後襷織で、稜は丸みをもつ。胴部は襷織で。	整形順序 口縁部→胴部外面
33-66	甕	覆土 瓦	口 18.0	胎 微細粒混 入 施 やや軟弱 色 橙色	ほぼ均一した厚さをもつ。胴下半部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は丸い。	外面が厚減し内外面整形は不明瞭。粘土結合痕が残る。孔は焼成前1段調整。	
35-67	甕	かまど 瓦	口 10.6	胎 砂粒多量 混入 施 堅緻 色 橙色	底部付近に厚みをもち次第に薄くなる。	外面、胴部は上→下方向貫削り。 内面、胴部は意図調整後丁寧な襷織で、孔は焼成前定による1段調整。	外面一部に黒陶あり。

1. 住居跡 (第8A号)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
35-68	白付兼 古部	覆土 層	縦 8.7	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 藍色	ほぼ均一した厚みをもつ。直線 に開き裾端部はやや丸い。 裾内面を折り返す。	内外面、貫通で後丁取なため。	

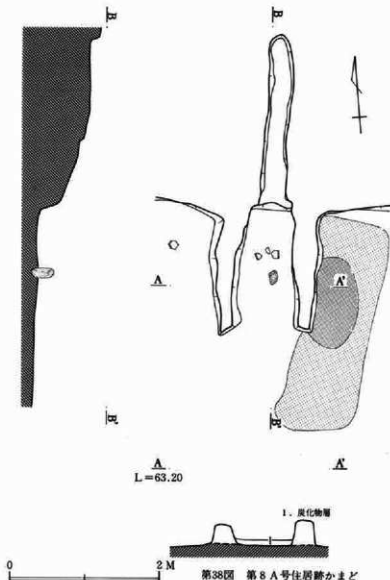
第8A号住居跡 (第38~41図)

本住居跡は中央部東側寄りに位置し、8B号住居跡と重複する。重複の範囲はかまど右側より東壁の $\frac{2}{3}$ でこの間の壁は遺存しない。西壁及び南壁東側にはほぼ一直線状に掘り込むが、南壁西側は住居跡内に入り込む。東壁は約1.5m残存し、南壁とのコーナーはほぼ直角を呈す。北壁のかまど左壁は検出し難くやや掘り過ぎの可能性があり、かまど内奥壁より推定した。住居跡の規模は東西4.6m、南北4.9mのやや縦長の方形住居跡である。方位はN-0を測る。壁及び床面は炭化物を含まない黄褐色粘質土となっている。壁面はほぼ平坦で直に立ち遺存度は良好である。残存壁高は各壁とも約40cmを測る。8B号住居跡と重複する部分は住居範囲を推定した。

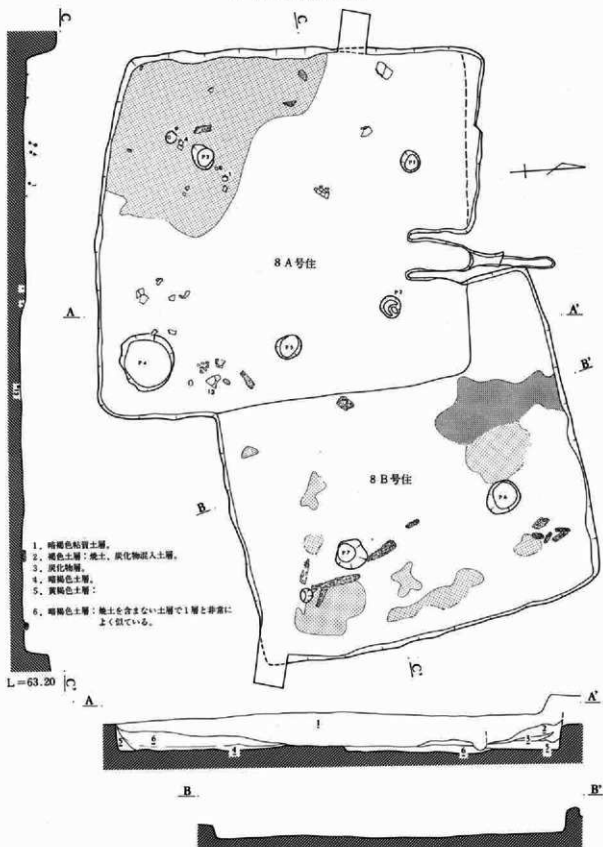
周溝は平面では不明瞭であったが、南北の土層断面により確認した。大きさは幅20cm、深さ10cmを測り、覆土は住居跡内と同質の暗褐色粘質土である。おそらく壁下を巡っていたものと考えられる。

周溝は平面では不明瞭であったが、南北の土層断面により確認した。大きさは幅20cm、深さ10cmを測り、覆土は住居跡内と同質の暗褐色粘質土である。おそらく壁下を巡っていたものと考えられる。

床面はほぼ平坦だが、南壁側は北壁側に比べ約5cm低くなっている。床の堅さはかまど焚口部付近と住居中央部は堅緻で他は軟弱である。8B号住居跡と重複している部分は他床より幾分低くなっているが、土層断面によれば本住居跡の床面の方がやや高くなっている。床面では住居跡の範囲



VI 検出された遺構と遺物



0 2 M

第39図 第8A、8B号住居跡

1. 住居跡(第8A号)

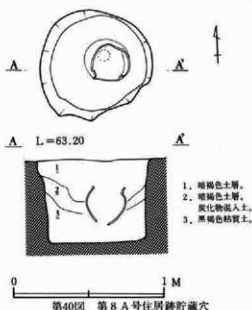
がとらえにくい。床面上には炭化物や建築部材の炭化したものがわずかに散乱している。しかし壁及び床面に焼けた痕跡がないため、本住居跡は火災住居とは断定しがたい。床面上には5ヶ所のピットを検出した。各ピットの深さはP₁-43cm、P₂-60cm、P₃-54cm、P₄-55cm、P₅-36cmを測る。これらのピットを位置、深さ、出土遺物等からみて主柱穴はP₁-P₃、貯蔵穴はP₄と考えられる。

かまどは北壁中央部のやや右寄りに付設し、袖部は壁に対してほぼ直角に構築している。焼焼部は住居跡内にもち平面形は奥壁幅27cm、焚口幅35cm、奥行75cmを測る長方形である。火床は床面とほぼ平坦である。焼焼部中央のやや手前に幅10cm、長さ15cmの川原石を火床下約7cm掘り下げ支脚として設置している。袖部

は灰白色粘土と暗褐色土との混土层でなり、遺存の良い所では袖幅20cmを測る。袖壁は内外ともほぼ直立する。内壁は良く使用され、火床とも幼黒色を呈している。焼焼部内の覆土は多量の炭化物、焼土、灰の堆積がみられ、これらの上層には天井部の落ち込みと考えられる焼土ブロックが、間層をもたず堆積している。またかまど右袖外側には厚さ5~6cmの灰層がみられるが、左袖外側には検出されないのが特徴的である。煙道部は住居壁高を約24cm残り、傾斜約17°で奥行60cmを測り、その後水平となり煙出し孔につながる。煙出しはすでに削平され立ち上がりは少ない。煙道部残存長1.1m、幅内法10cmを測る。煙道部内壁は焼焼部に比べ悪い。覆土は天井部の落ち込みがみられ、その上層は本住居跡を覆う土層である。

貯蔵穴は南東コーナーに検出した。規模は70×75cmを測り、比較的大型で掘り方断面は方形を呈する。貯蔵穴内より口縁部の一部と底部を欠損した甕が底面より約10cm上に正置した形で出土した。甕土は炭化物を混入する暗褐色土層である。

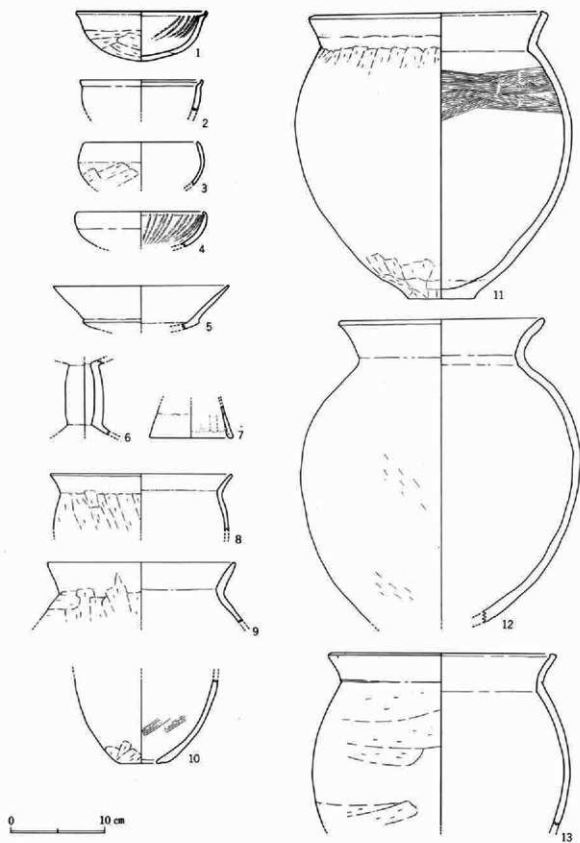
住居跡覆土は壁直下周辺に壁の崩落の黄褐色土層が堆積し、かまど周辺には炭化物、焼土の堆積がみられる。最上層は炭化物を含む暗褐色土層が短期間に埋没している。



遺物観察表 (第41図)

図面番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
41-1	甕	下位層	高 5.2 口 14.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。腰部は内湾きみに立ち口縁部は短く外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部から胴部上位は横溝で、中位から底部にかけて左→右方向彫り。底部付近は斜上→下方向彫り。内面、口縁部は窪調整。口唇部に比線が見られる。稜は鋭い。胴部は無で後斜方向研磨。	底部に黒炭あり。
41-2	甕	覆土層	口 13.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤色	内湾きみに立ち上がり、口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部から胴部上位は横溝で、下位は窪削り。内面、口縁部は窪調整。口唇部に比線が見られる。稜はなだらか。胴部は無でと思われる。	

VI 検出された遺構と遺物



第41図 第8A号住居跡出土遺物

1. 住居跡(第8A号)

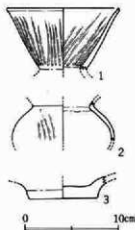
図番番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・施文・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
41-3	環	床直 片	口 12.2	胎 細砂粒混 入 施 灰緑 色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は内湾ぎみに立つ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、体部は右→左方向に削り。内面、全体は丁寧な造で。	
41-4	環	下位 片	口 13.6	胎 細砂粒混 入 施 灰緑 色 色 褐色	胴部上位に最大幅をもち、口縁部は内湾する。口縁部は薄く鋭い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は削り。内面、口唇部は横溝で、口縁部から胴部にかけて削る。	
41-5	高環	床直 片	口 18.8	胎 細砂粒混 入 施 灰緑 色 色 赤色	胴部に厚みをもつ。体部は扁平で頸部に段をもち、口縁部は直線的に外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、横は直調整。胴部は削り。内面、横溝で。	
41-6	高環	覆土 脚部完形	残高 7.5	胎 細砂粒混 入 施 灰緑 色 色 褐色	胴部全体的にやや丸みをもっている。	内外面共に調整が不明瞭。	
41-7	台付型 台部	床直 片	底 9.0	胎 砂粒混入 施 灰緑 色 色 濃い褐色	台形状に開く。	外面、台部は横溝で施す。内面、指頭丘状が折り返しをもつ。接合部が見られる。	
41-8	小型型	中位 片	口 19.6	胎 細砂粒混 入 施 灰緑 色 色 褐色	胴部はなだらかに立ち、口縁部は緩く外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部から胴部にかけて横溝で、胴部上位は下→上方に削り。内面、口縁部は横溝で、横はやや緩やか。胴部は丁寧な造で。	
41-9	甕	下位 片	口 20.0	胎 砂粒混入 施 灰緑 色 色 褐色	頸部に厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部に折り返し横溝あり。口縁部は横溝で、胴部から体部上位は下→上方、右→左方向に削り。内面、口縁部上位は横溝で、下位に横溝が浅る。胴部は削り後横溝で、横は鋭い。	
41-10	甕	床直 片	孔 3.4	胎 砂粒混入 2~3mm 施 灰緑 色 色 褐色	底部にやや厚みをもつ。胴部にやや張りをもち立ち上がる。	外面、胴部上位は削り後横溝で、底部付近は上→下方向に削り。穿孔は焼成前1段切り。内面、横溝で、一部に朝毛目直あり。	胴部に黒染あり。
41-11	甕	床直 完形	高 29.8 口 25.5 底 7.0	胎 砂粒混入 施 灰緑 色 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は円形の小さな平底で、胴部中位に最大幅をもつ。頸部はややくびれ口縁部は外反する。	外面、口縁部は直押し。口縁部は横溝で、接合部あり。頸部は下→上方、胴部は斜上→上方、胴部下位は上→下方向に削り。底部は横方向に調整。内面、口縁部から胴部にかけて横溝で、横は鋭い。胴部上位は不方向朝毛目調整。胴部から底部は横溝で、底部付近に接合部が見られる。	
41-12	甕	覆土 片	口 22.0	胎 砂粒混入 施 灰緑 色 色 褐色	胴部中位に最大幅をもち球形を呈する。頸部のくびれは強く、口縁部は外反する。	外面、口縁部から胴部にかけて横溝で、胴部上位から中位は斜上→上方、下位は下→上方に削り。内面、口縁部から頸部は横溝で、横は緩やか。胴部は横溝で。	胴部に黒付着。
41-13	甕	床直 片	口 24.0	胎 砂粒混入 施 灰緑 色 色 暗褐色	胴部中位に最大幅をもち、胴部はなだらかな丸みをもつ。頸部は「く」の字状にくびれ口縁部は外反する。	外面、口縁部は横溝で、口縁部は直押し。頸部は直調整。胴部は右→左方向に削り。内面、口唇部は直調整後横溝で、頸部はやや鋭い横をもつ。胴部は横溝で。	

VI 検出された遺構と遺物

第8B号住居跡 (第39、42図)

本住居跡は8A号住居跡により西壁を切られている。北壁及び南壁はほぼ一直線状に掘られているが東壁はやや膨張りを呈す。又西壁は約90cmを確認した。各コーナーはやや丸味を持ち、東西4.7m、南北4.5mを測るやや横長の方形住居跡である。方位はN-15°-Wを測る。壁は8A号住居跡と同質の炭化物を含まない黄褐色土層である。壁下位の床面付近は遺存度が良くほぼ直に立ち上がっているが、壁上位は崩壊している。南東コーナーはトレンチにより消失、残存壁高は各壁とも約40cmを測る。

床面は暗褐色粘質土で、8A号住居跡との床面レベル差は約5cm低い、全体にやや起伏がみられる。床面上には多量の炭化物、炭化材、焼土等が散乱している。炭化材の中には建築部材と考えられるものも見受けられ、壁及び床面上には若干焼けている部分も認められた。このことから本住居跡は火災住居跡と考えられる。とくに建築部材は東壁側に多く、西壁側は8A号住居跡との重複関係により見受けられなかった。ピットは2ヶ所検出した。いずれも規模は40×40cmの円形を呈する。深さは約85cmを測り比較的深く、覆土は炭化物を含む暗褐色土層である。これらのピットは覆土、位置等からいずれも主柱穴と考えられる。壁間はP₀-1.5m、P₁-1.7mを測る。



第42図
第8B号住居跡出土遺物

かまどは構造的には遺存せず、北壁は中央部に多量の炭化物、焼土、灰が堆積していた。この付近にかまどが存在していた可能性も考えられる。なお床面上には炉の痕跡を認めることはできなかった。

住居跡覆土は炭化物、焼土を含む暗褐色土層で、土層断面より短期間に埋没したものと考えられる。

遺物はほとんどなく、埴、甕の底部が出土している。

No 2は南壁下より出土し、本住居跡に伴うものと考えられる。

遺物観察表 (第42図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
42-1	埴	覆土 1/5	口 12.0	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 土色 色 褐色	口縁部は外反する。	外面、口縁部は磨調整。口縁部上位は滑で、中位から下位は研磨。 内面、口唇部は磨調整で、口縁部は研磨。	
42-2	埴	南壁下 1/5	残存高 4.0	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	頸部はくびれ、胴部中位に張りをもつ。	外面、頸部から胴部上位は磨調整で、胴部中位は瓦割り後研磨。 内面、頸部に接合痕あり、胴部は滑で、	
42-3	甕	覆土 1/5	底 7.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 灰褐色	円形の平底。	外面、底部は磨調整後滑で、 内面、磨調整。	一部に黒炭あり。

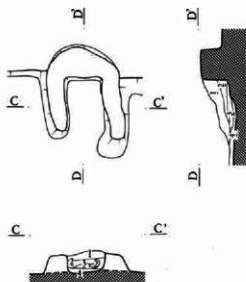
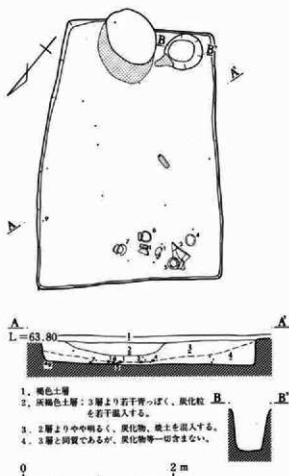
1. 住居跡 (第9A号)

第9A号住居跡 (第43, 44図)

本住居跡は北東コーナー付近に位置し、9B号住居跡の上に構築している。重複は北西コーナーを中心として北壁1.9m、西壁2.6mを測り、住居跡の%以上を占める。平面形で南東隅は鈍角であるが、他隅はほぼ直角を呈す。各壁長はそれぞれ異なり、東壁3.5m、西壁3.1m、南壁2m、北壁2.4mを測る。扁平な長方形である。方位はN-45°-Wを測る。壁は砂質土壌で、かまど左壁と東壁は壁の検出が困難で、砂質土壌を壁と推定した。他壁はほぼ一直線状に掘られ、遺存も良くほぼ直に立ち上がる。残存壁高は北壁33cm、西壁42cmを測る。

床面の重複している部分は炭化物、焼土を含む暗褐色土層で、重複以外は壁と同様砂質土壌である。床面はほぼ平坦で、かまど周辺は硬く踏み詰められ焼土、灰等が散布している。他は比較的軟質である。柱穴、周溝等は検出しえなかった。

貯蔵穴はかまどの右側に検出した。規模は45×48cmのほぼ円形で、深さ約50cmを測り断面形は方形を呈する。覆土は炭化物、焼土を含む灰褐色土層で位置的にも貯蔵穴と考えられる。また貯蔵穴の縁辺にはかまどから廃棄されたと考えられる灰が検出された。



1. 暗褐色土層：黒色土+焼土ブロック混入土かまど壁くずれ。
2. 黒褐色土層：焼土若干混入。
3. 焼土ブロック：天井部くずれ。
4. 暗褐色土層：焼土、灰、骨片等、混土層、灰層の上部に炭化物。
5. 焼土ブロック。

0 1 M

第43図 第9A号住居跡・かまど

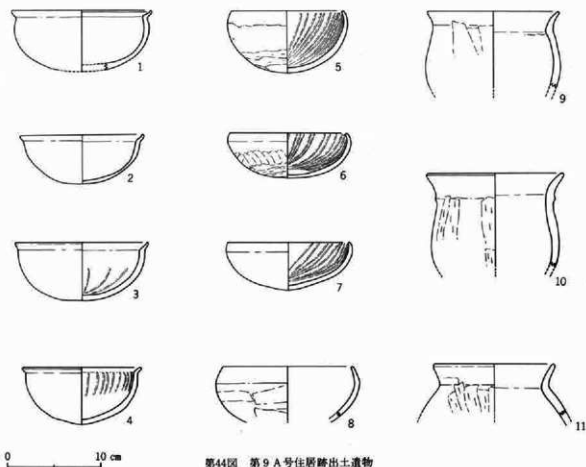
Ⅷ 検出された遺構と遺物

かまどは南壁の中央や右寄りに付設されている。遺存は悪く熱焼部のみ検出した。熱焼部は住居跡内にもち、袖部は壁に対して直角に構築している。平面形は奥壁と焚口幅は25cm、奥行約50cmの長方形を呈する。火床は床面とする。火床の焚口部付近はほぼ平坦で、中央部は灰のかき出しによるものか、わずかに舟底状を呈している。袖部は灰白色粘土で構築し、残存袖部の遺存度は比較的良好。右袖内壁は幼黒色に焼け、焼土ブロックとなっている。左袖は右袖に比べ幾分悪い。熱焼部内覆土は火床面に若干砂質を含む灰褐色土が堆積し、この中には焼土、灰が多量に含まれている。灰の厚さは約7cmを測る。上層は本かまど構築時の天井部、壁が焼土ブロックとして崩落している。またこの下層面には間層をもたず炭化物層が堆積している。煙道部はすでに遺失しているが、住居壁を約20cm残し構築していたものと考えられる。

住居跡覆土は炭化物粒、焼土を含む灰褐色土層の一括埋土と考えられるが、覆土上層では若干の堆積状況の変化が認められ分層した。かまど天井部の崩壊状況、住居内覆土の状況から本住居跡は短期間に埋没したものと考えられる。

遺物は北西コーナー付近に一括出土している。

出土土器のなかでNo.1～7、9は床面上一括出土である。



第44図 第9A号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第44回)

図録番号	器形	出土位置・ 保存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
44-1	杯	床面 片	口 15.0	胎 細砂粒混 入 焼 やや堅緻 色 棕色	底部及び頸部付近に厚みをもつ。底部から胴部にかけて扁平で、胴上半部でやや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は屈曲し、口縁部は直立する。丸みをもつ。	外面、口縁部は軽く荒押え。口縁部及び頸部は荒削り調整後、軽く横磨で、胴部は荒調整。 内面、口縁部はつまみ撫で、口唇部は荒調整で平滑。胴部は丁寧な撫で。	内面黒色処理。
44-2	杯	床面 完形	高 5.2 口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	胴上半部に厚みをもつ。底部から胴下半部は扁平に立ち、上半部ではば直に立つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、頸部は横調整後横磨で、胴部は荒削り後調整。底部は一定方向荒削り。 内面、全体は丁寧な撫で、一部に放射状研磨が見える。	
44-3	杯	床面 完形	高 6.2 口 14.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 黒褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口唇部で薄くなる。底部から胴部は球形を呈し、口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び頸部は荒調整後丁寧な撫で。胴部は荒調整。底部は不定方向荒削り。 内面、口唇部は荒調整後横磨で、頸部は撫でにより緩やかな撫をもつ。胴部は丁寧な撫で。	頸部下2cmの範囲に差こぼれ付着。
44-4	杯	床面 完形	高 6.0 口 12.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 棕色	ほぼ均一した厚みをもち、口唇部で薄くなる。底部から胴部にかけて球形を呈する。口縁部は軽く「く」の字状に外反する。口縁部は鋭い。	外面、頸部は荒調整後横磨で、胴部は縦方向撫磨で、底部は不定方向荒削り。 内面、口唇部は横磨で、横は緩い。胴上半部に細かい左上がり放射状研磨。下半部は磨面が梨地状に荒れ不明瞭。	
44-5	杯	床面 完形	高 6.6 口 12.0	胎 砂粒混入 2mm 焼 堅緻 色 棕色	ほぼ均一した厚みをもち、口唇部で薄くなる。底部から胴部は球形を呈し、口縁部で内湾する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横磨で、頸部に粘土適合痕あり。胴部は左→右方向荒削り。底部は不定方向荒削り。 内面、荒調整後右上がり放射状研磨。	
44-6	杯	床面 完形	高 4.7 口 12.7	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は丸底である。胴部は球形状に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。口縁部は丸い。 杯全体は丸みをもたせている。	外面、口縁部は丁寧な横磨で、胴上部は横磨で、中央部は縦方向荒削り。底部は不定方向荒削り。 内面、丁寧な撫で後底部中心より約3cm以上を放射状研磨。	
44-7	杯	床面 完形	高 5.0 口 13.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 棕色	均一した厚みをもつ。底部から口縁部まで内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横磨で、口縁部と胴部は左→右方向撫でにより区分。胴部は横磨で、底部は不定方向荒削り。 内面、丁寧な撫で後右上がり研磨。	黒色処理。
44-8	杯	覆土 片	口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 やや堅緻 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口唇部でわずかに薄くなる。胴部は球形を呈し口縁部で内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横磨で、胴部は荒削り後調整で。 内面、口唇部は横磨で、胴部は荒調整を施しているらしいが不明瞭。	
44-9	盃	床面 片	口 14.2	胎 細砂粒混 入、緑泥 片割合む 焼 やや堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みであるが、口唇部で薄くなる。胴部中位にやや膨らみをもち、口唇部で緩やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横磨で、胴部は縦方向荒削り。 内面、口唇部は横磨で、胴部の横は撫磨で荒れ整形不明瞭。	
44-10	盃	覆土 片	口 14.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、胴部中位に最大幅をもつ。口縁部はなだらかに立ち上がる。口縁部はやや平滑。	外面、口縁部は荒調整。口縁部は軽く荒押え。胴部は上→下方向粗い荒削り。 内面、口縁部は横磨で、頸部の横は撫でにより丸みをもつ。胴部は荒調整。	整形順序 口縁部→胴部
44-11	盃	覆土 片	口 12.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部はほぼ直に立ち、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は平坦。	外面、口縁部は横磨で、体部は上→下方向荒削り。 内面、口縁部は横磨で、体部は横磨で。	

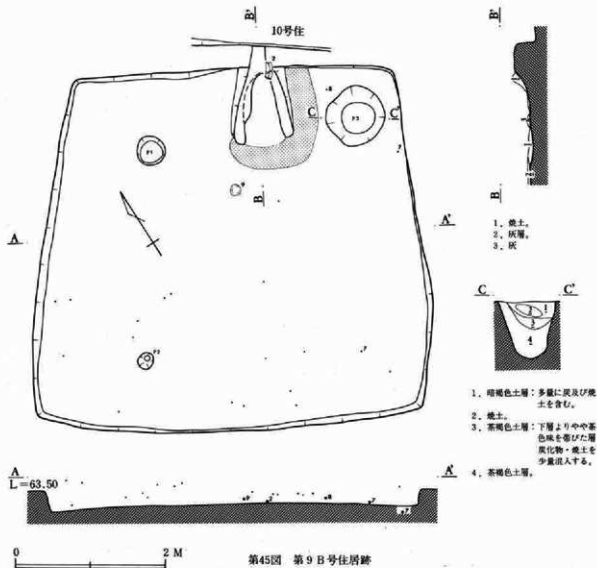
VI 検出された遺構と遺物

第9B号住居跡 (第45、46図)

本住居跡は南東コーナー付近に位置し、9A号住居跡の約15cm下に構築されている。かまどをもつ北壁はほぼ一直線状に掘り込んでいる。東壁は北側より約1mまでは一直線だがしだいに外方へ張り出す。南壁は中央部付近で最も張り出し弓型を呈する。西壁は直線的に内傾して行く、よって住居跡の隅は北東隅でほぼ直角を呈するが他隅では鈍角である。規模は東壁4.4m、西壁4.5m、南壁5.2m、北壁4.3mを測りやや変形な方形住居跡である。方位はN-47°-Eを測る。

床面及び壁は暗褐色土層で、壁面は西壁を除いてほぼ直に立ち上がり平坦である。西壁の上端部は崩落し、外傾しながら立ち上がる。遺存は良くない。壁の残存高は西壁で28cm、東壁は9A号住居跡と重複し15cmを測る。

床面は住居中央部とかまど周辺は特に堅く、壁側に向かうにつれ次第に軟弱となる。床面のレベルは住居中央部で最も高く、壁側は低くなっている。床面上には3ヶ所のピットが検出した。P₁、P₂は主柱穴、P₃は位置的にも貯蔵穴と考えられる。P₁は38×38cm、P₂は20×20cmのそれぞれほぼ円形を呈する。P₁、P₂間は2.7m、南壁北壁間との距離は約1mを測る。



1. 住居跡(第9B号)

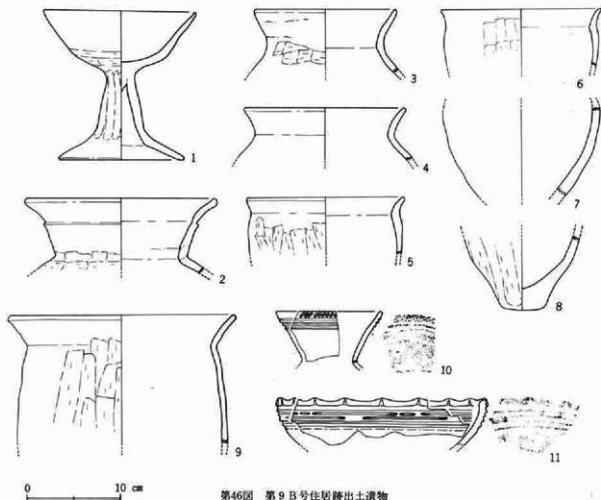
貯蔵穴は東壁とかまどの間に掘られ、規模は約80×80cmのほぼ円形を呈し、深さは床面下約75cmを測り、底面は丸底である。覆土は炭化物、焼土を含む暗褐色土層で、本住居跡内と同質のものである。

かまどは北壁中央部のやや右寄りに付設し、袖部は壁に対し「ハ」の字状に構築している。かまどの中軸線は壁に対して直角である。燃焼部は住居跡内につくられ、焚口幅約50cm、奥行約50cmの円錐形を呈している。火床は床面とする。火床面には灰のかき出しによるものか、わずかのくぼみができている。袖部は灰白色粘土と暗褐色粘土との混土層で構築している。袖部の遺存は悪い。左袖の内壁一部に壁面が検出したが、ほとんどの内壁が崩壊していた。燃焼部内覆土は火床面に灰層がある。その上層は天井部及びかまど内壁が焼土ブロックとして落ち込んでいる。焚口部からかまど右袖外側には多量の炭化物が散布していた。煙道部は住居壁の基部からやや内湾ぎみに傾斜約26°、高さ約20cm、奥行約30cmを掘りくぼめている。その後水平となり幅20cm、長さ約35cmを計測する。煙道部末端は10号住居跡により切断されている。煙道部上半はすでに削平され床面を残すのみであった。

住居跡覆土は炭化物、焼土を含む暗褐色土層で短期間に埋没している。

遺物はかまど内及びその周辺に出土している。遺物量は少ない。出土遺物は高環、甕、甗、縄文土器。

出土土器のなかでNo.2はかまど内より、No.5、7～9は床面より出土している。No.10、11は流れ込



第46図 第9B号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

みである。

No.10は口縁部から頸部にかけての破片である。器面調整は内外面ともにやや凹凸を呈し、横なである。胎土中には小砂粒を混入し、色調は褐色に近い淡褐色である。

器形はわずかに頸部が認められる口縁部破片であり、明確には把握できないが小形の壺形土器であろう。

口縁部にLRの斜行縄文を配し、縄文帯以下は篋状工具にて、3条の平行沈線を施している。沈線は下段より上段の順序で施文している。

類似資料は竹沼遺跡EH-20号住居跡から出土している。本住居跡出土遺物の年代決定は、現状の段階では疑問の余地はあろうが、一応本報告資料は弥生時代のものとして考えておきたい。

No.11は浅鉢形土器である。胎土中には少量の小砂粒を混入している。器面は淡褐色で、内面は褐色ないしは灰褐色を呈している。器内外とも調整は良好である。口縁部はやや内湾がみで、内面は肥厚化している。口縁部は間隔の狭い、波状口縁となる。波頭部には縦位の短い沈線を施している。以下4条の平行沈線をめぐらしている。沈線間をやや離すことにより、隆起線状に作出している。2条目と3条目の沈線は部分的に間隔を開け施文している。前者は沈線の切れた部分に、さらに短い沈線を施している。沈線の切れた部分は、一見瘤状の小隆起を形成している。

また上段と下段の沈線の切れた部分を、入組風に配置している。いわゆるI字文に類する紋様であり、縄文時代晩期の大洞A式段階に比定されるものであろう。

遺物観察表 (第46図)

図録番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
46-1	高杯	覆土 完形	高 15.8 口 16.3 縦 13.5	胎 細砂粒混 入 焼 紫褐色 色 褐色	杯部底部に最大厚をもち次第に薄くなる。胴部から口縁部にかけて、やや曲面的に立ち上がる。口縁部は丸い、脚柱部はやや中彫らみで徐々に広がり、底部で風尾に開く。脚端部は鋭い。杯部と脚部の比は1:1。	杯部外面、口縁部は丁寧な横撫で、口端部は軽い荒押し、胴部から底部にかけて1.8cm幅右→左方向荒削り。 内面、全体は丁寧な横撫で後、右上がり放射状研削。口唇部は横撫でによりややくぼむ。 脚部外面、脚柱部は覆削り後調整。脚部は横撫で。 内面、脚柱部は輪轉後調整。底部は撫で、杯部との接合は嵌込式。接合後ほぞには調整がない。	
46-2	壺	かまど 片	口 20.6	胎 砂粒混入 緑泥片岩 含む 焼 紫褐色 色 濃い黄 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。頸部は強い口縁部はほぼ直に立ち、中位に段をもつ。径から口端部にかけて更に外反する。口端部は平煎。	外面、口縁部は横撫で、中位に覆調整による段をもつ。口唇部は横押し、肩部に左→右方向荒削り。胴部に調整あり。 内面、口縁部中位に覆調整によるくぼみをもつ。口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。底部は覆調整による弱い横撫をもつ。胴部は覆調整後撫で。	
46-3	壺	覆土 片	口 15.4	胎 細砂粒混 入 焼 紫褐色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。頸部は「く」の字状に外反する。口端部は軽い横撫で。	外面、口縁部は横撫で、粘土接合痕が残る。底部は覆削り後横撫で。胴部は右→左方向荒削り。 内面、口縁部は横撫で、口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。横は鋭い。胴部は撫で。	

1. 住居跡 (第10号)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
46-4	甕	上段 片	口 17.4	胎 細砂粒混入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は張り口縁部は外反する。口縁部は丸い。	器面が丸い整形不明瞭。口縁部は横撫でと考えられる。	
46-5	甕	かまど石袖 片	口 17.0	胎 細砂粒混入 焼 堅硬 色 褐色	口縁部に厚みをもつ。胴部はなだらかで口縁部でわずかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。胴部は縦かいはり方向に丸めり。 内面、口唇部は調整後横撫で。胴部は調整後横撫で。	
46-6	甕	覆土 片	口 17.0	胎 細砂粒混入 焼 明瞭 色 暗褐色	底部に厚みをもつ。胴部は直に立ち、口縁部がわずかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は調整後横撫で。胴部は上→下方向に丸めり。 内面、胴部は調整後横撫で。	
46-7	甕	床面 胴部定形	胴 16.7	胎 細砂粒混入 焼 軟弱 色 赤褐色	底部付近に厚みをもつ。胴部は球形状に立ち上がる。	外面、胴部は粗い縦丸めり横撫で。 内面、調整後横撫で。 全体に造りは不良。	
46-8	甕	床面 底部定形	底 4.5	胎 砂粒混入 焼 堅硬 色 濃い褐色	底部に最大厚をもつ。胴部は小さな平底。胴部から急激にすぼまり底部となる。	外面、胴部は下→上方向に丸めり。底部は粗い丸めり。 内面、胴部は調整後横撫で。	胴下部丸めり後底部の丸めり。
46-9	甕	床面 片	口 24.2	胎 微細粒混入 焼 堅硬 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は直に立ち、口縁部で外反する。口縁部は平坦。	外面、口縁部は横撫で。胴部は調整後横撫で。 内面、口縁部は縦押之。口唇部調整後横撫で。接は丸い。胴部は横撫で。内面全体平坦。	

第10号住居跡 (第47～49図)

本住居跡は南東付近に位置し、9A号住居跡のかまど煙道部を切り構築している。東壁の一部は用地未解決地内のため不明。各壁はほぼ一直線状に掘られ、各隅とも直角を呈する。残存壁長は東壁50cm、西壁30cm南壁1.7m、北壁4.2mを測る長方形住居跡である。方位はN-53°-Eを測る。壁は灰褐色粘質土層で、南西壁付近を除いてはほぼ直立し、遺存度は良い。壁面は平坦を呈し、残存壁高は27～30cmを測る。本住居跡の掘り込み深さを土層断面で検討すると、IV層のマンガン凝集層まで認めることができる。深さは床面より約42cmを測る。

床面はほぼ平坦で全体にやや軟弱である。周溝、柱穴等は検出しえなかった。

かまどは検出壁及び床面上に、その痕跡は認められず、また炉としての痕跡もない。東壁側の未調査区内に付設されているものと推定する。

住居跡覆土は焼土、炭化物を混入する暗褐色粘質土層である。壁下付近に何層かの分層ができるが、土質的には同じで本住居跡は短期間に埋没したものと考えられる。

遺物は床面全体より出土している。出土遺物は環、高環、甕、甗、須恵器高環、土玉、石類であった。

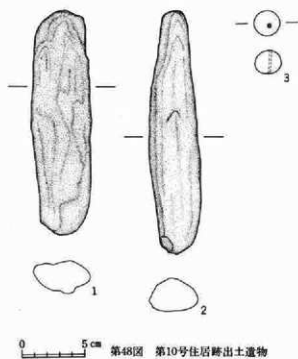
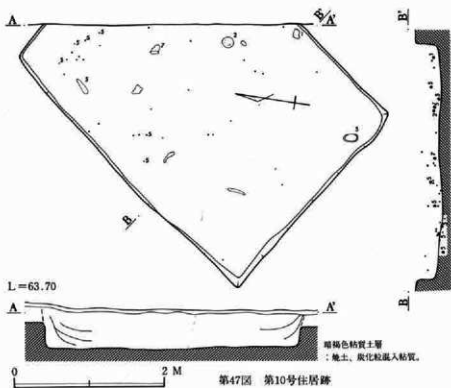
出土土器のなかでNo 1、2、5～7は床面上より出土している。

土玉、1.9×1.9cmのほぼ球形で、中心部に直径2mmの孔が貫通している。胎土は微細粒、焼成は堅

VI 検出された遺構と遺物

緻、色はにぶい橙色である。

石類、1、2は緑泥片岩で棒状を呈す。人工的加工は認められない。床面より出土。



1. 住居跡(第10号)



第49図 第10号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第49図)

図版番号	器形	出土位置・ 保存状態	法量	胎・地・色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
49-1	杯	東壁下床面 ほぼ完形	高 5.4 口 14.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	底部はやや平底で、胴部は内湾 きみに立ち上がり、口縁部は別 く外反する。	外面、口縁部は横撫で。底部は指端に よる撫で。胴部から底部にかけては圓 筒形。底部は指端により造り出す。 内面、口縁部は指調整。口唇部に沈 みあり。後は比較的全だらか。胴部は横 方向撫で。器面が荒れ不明瞭。	
49-2	杯	床面 完形	高 6.5 口 12.8	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	器内は厚い。底部は球形を呈し 口縁部は内湾する。	外面、口縁部は横撫で。底部から底部 にかけては圓筒形。 内面、口縁部は横撫で後、底部にかけ て右上がり研磨。	
49-3	杯	覆土 1/2	口 13.6	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 濃い褐色	胴部は扁平に立ち上がり、口縁 部は直立する。	外面、口縁部は横撫で。後は指調整。 胴部は横方向圓筒形。 内面、口縁部は横撫で。胴部は研磨。	
49-4	高杯	覆土 杯部完形	口 17.6	胎 細砂粒混 入 地 軟弱 色 褐色	底部は扁平を呈し、口縁部は曲 線的に立ち上がり、口唇部がわ ずかに内湾する。	外面、口縁部は横撫で後右上がり研磨。 後は指調整により造り。底部は下→上 方向圓筒形。 内面、口唇部は指端による強い横撫で。 内外面共に研磨による整形。	
49-5	無蓋 高杯 胴部	床面 完形	高 11.8 口 15.2 底 5.8	胎 緻密 地 堅緻 色 灰色	底部から口縁部にかけて内湾さ みに立ち上がり、口縁部はなだ らかに外反する。口縁部と体部 とに鋭い2本の凸線があり、凸 線間に6本1条の波状文の文様 帯がある。文様帯上に把手1対 貼り付けている。 脚部は短く外反し、4ヶ所の透 しを有する。指端部は丸い。	杯部成形後脚部の貼り付け。 杯部外面、圓筒形用。 内面、丁寧な撫で。 脚部は内外面共に丁寧な圓筒撫で。指 端部も圓筒撫でにより丸みをもたせて いる。透し孔は杯部貼り付け後外面よ り切り込む。杯部底面に切り込み指痕 が残る。	整形順序 杯部 整形→凸線→波状 文→把手
49-6	甌	床面 1/2	口 16.0	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 濃い褐色	胴部は直線的に立ち上がり、そ のまま口縁部となる。	外面、口縁部は折り返し口縁で、指端 による押圧。胴部は圓筒形。 内面、口縁部に粘土帯があり、粘土帯 の上位に指痕圧痕が見られる。胴部は 刷毛目状の調整。	口縁部一部に異色 あり。

VI 検出された遺構と遺物

図番番号	部 形	出土位置・遺存状況	法 量	粘土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
49-7	瓶	床面 %	口 25.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 濃い褐色	口縁部に厚みをもつ、頸部はわずかにしなり、口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、口唇部は指によるつまみ溝で、胴部は上→下方向に張り、 内面、口縁部から胴部上位は横溝で、胴部は凹調整後溝で。	整形順序 口縁部→胴部

第11号住居跡（第50～53図）

本住居跡は第2次、第3次と調査した。第2次調査では、かまどを含む東壁側1/6を、第3次調査では西側1/6を調査し、一軒の住居跡としてまとめた。この結果7軒の住居跡と重複していた。重複は東壁で13、17号住居跡、北壁で29、30号住居跡、西壁で26、27、28号住居跡である。いずれの中でも本住居跡が、最も新しい時期に位置づけられる。平面形は東西壁がほぼ一直線状に掘り込まれている。北壁側東半分は、やや外方に張り出す。南壁は中軸線に対して外方へ偏し、各壁隅は南西隅を除いてほぼ直角を呈している。規模は東西5.4m、南北5.5mとやや横長の方形住居跡である。方位はN-35°-Eを測る。壁は砂質土壌に構築し、南壁を除く他壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面も平坦である。南壁は壁の上端部が崩れ、やや傾斜しているが、いずれも遺存度は良好で、残存壁高は約20～30cmを測る。

床面は壁と同様、砂質土壌上に構築しほぼ平坦である。住居中央部とかまど周辺は堅いが、壁下周辺はやや軟弱である。床面上にはかまど周辺と南西コーナー付近に遺物が出土している。また南壁側に3ヶ所ピットが検出した。P₁は40×40cmの円形を呈し深さ46cmを測る。P₂は30×30cmの方形を呈し深さ20cmを測る。P₃は50×50cmの円形を呈し深さ36cmを測る。主柱穴と考えられるのはP₁のみで、P₂については掘り方、深さ等で主柱穴とは考え難い。P₃については位置、規模等から貯蔵穴の可能性も考えられるが、遺物は出土しなかった。

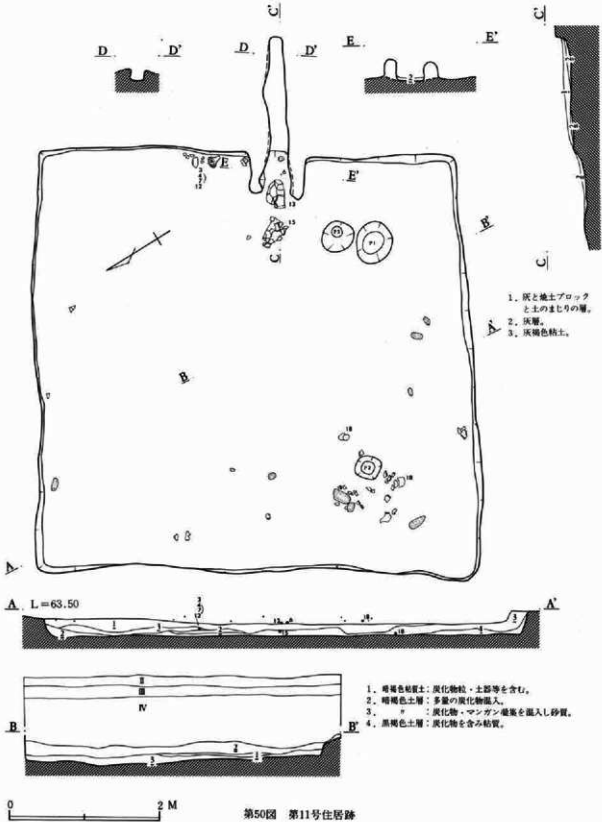
かまどは東壁中央部より、わずかに右に付設されている。袖部は灰白色粘土を用い、住居壁に対して直角に構築している。かまどの中軸線も住居壁に対し直角となる。燃焼部は住居内につくられ、火床は住居床面とする。燃焼部の平面形は奥壁幅25cm、焚口幅35cm、奥行57cmを測りやや台形に近い。焚口部付近には、灰のかき出しによるものか、深さ約5cmの舟底状のくぼみが見られた。燃焼部内には甕が焚口側に倒れた状態で出土した。燃焼部内には多量の炭化物、焼土を検出した。煙道部はかまど奥壁を基部から高さ10cm、奥行20cmで傾斜38°で削り、その後約3°の傾斜で序々に登っていく。煙道高は約25cm、長さ1.5mを測る。煙道部の残りは良く壁は直立し、良く焼けている。

住居跡覆土は壁下の床面上に、炭化物を含む黒褐色粘土層が堆積する。床面中央部を覆う土層は炭化物、マンガン凝集を含む暗褐色土層である。マンガン凝集は本遺跡全体を覆っている。マンガン(Ⅳ)と同質のものである。

遺物はかまど及びかまど周辺と南東コーナー付近で出土している。出土遺物は坏、高坏、甕、石製模造品、白玉などであった。

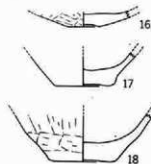
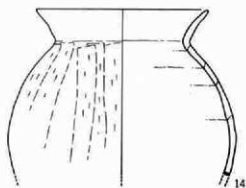
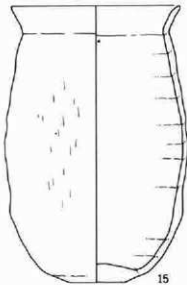
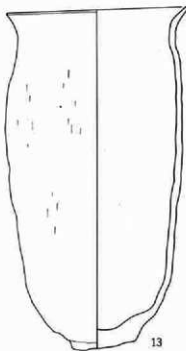
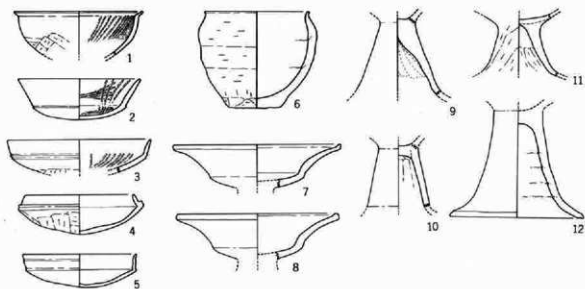
出土土器のなかでNo.1、6、10、13、15はかまど内、No.3、7、12はかまど右袖外側より出土した。石製模造品、(増形未製品)形削段階のものと考えられる。口縁部は縦方向の粗い削りて、削りの稜線が残る。断面形は三角形を呈し丸味がない。頸部は細かな削りて頸部のくびれを造る意図がみられる。

1. 住居跡 (第11号)



第50図 第11号住居跡

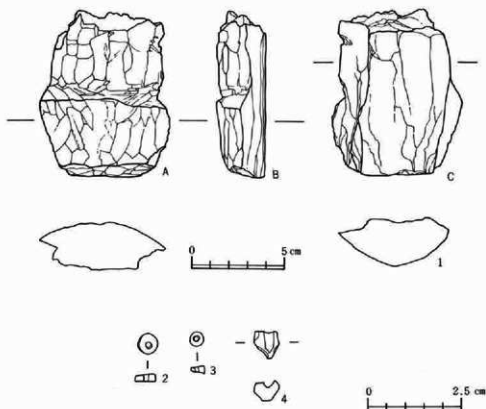
VI 検出された遺構と遺物



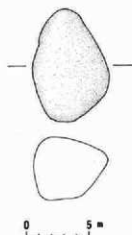
第51図 第11号住居跡出土遺物

0 10 cm

1. 住居跡 (第11号)



第52図 第11号住居跡出土遺物



第53図 11号住居出土遺物

胴部は大きな粗い縦方向の削りで器面が円形になるようにし、底部は細かな削りで丸底を意図する操作が行なわれている。

白玉、2-3は直径3.5-5.5mm、厚さ1.3-2mmを測る。いずれも側面の稜線は認められず、管玉を切断したような円筒状である。断面形は長方形を呈する。上下面とも摩耗痕はない。

石類、角閃安山岩で長円形を呈す。人工的な加工は認められない。床面より出土。

管玉未製品、白色系の砂岩質で、一方向から穿孔中破損した未製品、側面の調整は施こされていない。穿孔の大きさより管玉の未製品と考えたい。

遺物観察表 (第51図)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
51-1	杯	かまど Ⅲ	口 13.8	胎 細砂粒混 入 焼 紫褐色 色 赤褐色	胴部は多少丸みをもち、 頸部はくびれ、口縁部は短く外 反する。	外面、口縁部から胴上半部まで横溝で、 下半部は不定方向粗削り。 内面、口縁部は意調整、口唇部に沈線 が見られる。胴部は右上がり研磨。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・地皮・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
51-2	環	覆土 残	高 4.3 口 13.2	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 外暗褐色 内黒色	体部は扁平で、口縁部は長く外反する。	外面、口縁部は横溝で、後は周による調整で鋭い。胴部から底部は直筒形。内面、口縁部上位は横溝で、下位から胴部は不定方向研磨。	内面黒色処理
51-3	環	かまど右袖 外側 残	口 15.4	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 暗赤褐色	底部は扁平に立ち上がり口縁部は直立する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は直調整で浅い2本の沈線がある。底部は下→上方向直筒形。内面、口縁部は横溝で、胴部から底部は横溝で直研磨。	内面黒色処理
51-4	環	かまど右袖 外側 残	高 4.2 口 11.6	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 赤褐色	底部は扁平に立ち上がる。口縁部は短く内湾し外縁は幅が広く中央に沈線をもつ。	外面、口縁部は横溝で、後は直調整。中央部に沈線がある。底部は下→上方向直筒形。内面、口縁部から底部上位まで横溝で、底部下位は直調整。	
51-5	環	覆土 残	高 3.5 口 12.2	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 暗褐色	底部は丸底、胴部は扁平に立ち上がる。口縁部は直立する。	外面、口縁部は横溝で、中位に直調整残残る。後は直調整。底部は不定方向直筒形。内面、口縁部から底部上位まで横溝で、胴部は直調整で底部は横溝で。	
51-6	小型壺	かまど はは完形	高 10.2 口 11.1 底 5.7	胎 砂粒混入 地 堅軟 色 外にぶい 褐色 内にぶい 褐色	底部は円形の平底、胴部は内湾きみに立ち易くやや張りをもつ。口縁部は短く直立し、口唇部でおずかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は左右方向横溝で。底部は直筒形、立ち上がり部は下→上方向直筒形。内面、口縁部は横溝で、胴部上位は横溝で、接合残残る。	胴中位-下位にかけて表こぼれ付着
51-7	高環	かまど右袖 外側 残	口 18.0	胎 微細粒混 入 地 軟弱 色 褐色	環部体部は扁平で外縁をもち、口縁部は曲線的に立ち上がる。	外面、口唇部は直調整、後は直調整と思われるが摩滅のため整形不明瞭。内面、口唇部は直調整で沈線が残る。外面、口唇部は直調整、後は直調整。	
51-8	高環	覆土 残	口 17.8	胎 微細粒混 入 地 堅軟 色 褐色	環部体部は扁平で外縁をもち、口縁部は曲線的に立ち上がる。	外面、口唇部は直調整、後は直調整。その他は摩滅のため整形不明瞭。内面、口唇部は直調整。	
51-9	高環	覆土 胴部完形	残存高 8.0	胎 砂粒混入 地 堅軟 色 褐色	胴部は比較的大く裾部に向かつてなだらかに開く	外面、縦方向直筒形後縁で。内面、胴部によるもので、指痕が明瞭に残る。下位は横溝で。	
51-10	高環	かまど 胴部完形	残存高 6.6	胎 細砂粒混 入 地 堅軟 色 赤褐色	胴部は「ハ」の字状に開く。	外面、縦方向直筒形。内面、上位に指痕があり、その上に環部接合のほぞと思われる粘土が残る。中位から下位は横方向直筒形。	
51-11	高環	覆土 胴部完形	環接合部 4.0	胎 微細粒混 入 地 軟弱 色 褐色	胴部は太く高さはあまりなく「ハ」の字状に開く。	外面、上→下方向直筒形。内面、上位に指痕が残る。下位は上→下方向直筒形。	
51-12	高環	かまど右袖 外側 残	高 14.4	胎 微細粒混 入 地 堅軟 色 褐色	胴部は太く「ハ」の字状に開く。底部は小さな円形の平底。胴部は丸みをもたない長胴形で色に幅がせまくなり、口縁部はなだらかな。	外面、胴部は直筒形と思われるが摩滅のため不明瞭。胴部は直調整。内面、摩滅のため整形不明瞭。接合痕が残る。	

1. 住居跡 (第12号)

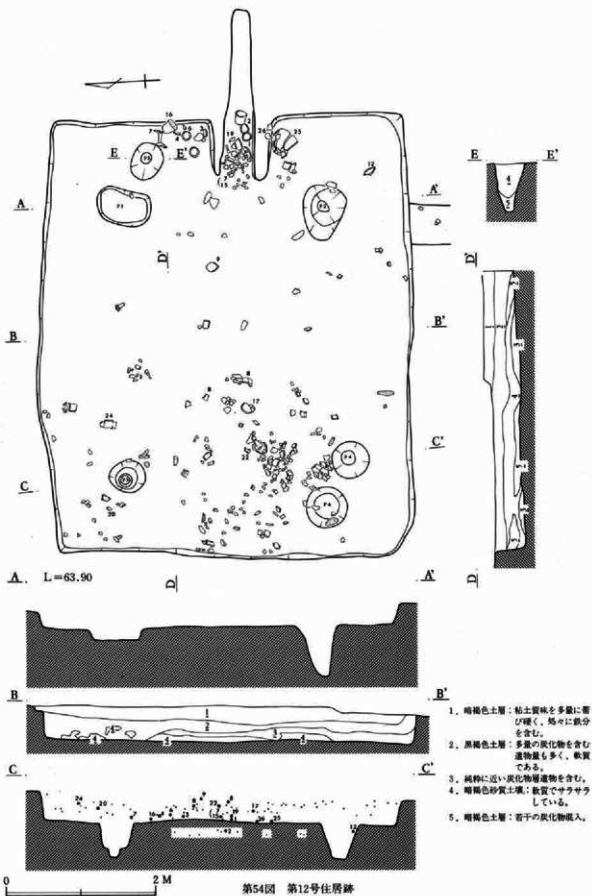
図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・地味・色調	器形の特徴	型影の特徴	備考
51-13	甕	かまど 北影	高 35.7 底 6.7	胎 砂礫混入 地 灰緑 色 橙色	底部は小さな円形の平底。胴部は丸みをもたない長胴形で急に幅がせまくなり、口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部は横撫で、胴部は下→上方向荒削り。底部に立ち上がり部をもつ。内面、全体は横撫で。	
51-14	甕	覆土 区	口 18.4	胎 砂礫混入 地 灰緑 色 緑色	胴中央部に最大幅をもちやや球形を呈する。頸部は強くくびれ、口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で、胴部は下→上方向荒削り。内面、口縁部は横撫で、壁は歯ざに欠ける。胴部は横撫で、接合痕明確に残る。	胴部上位一部に黒斑あり。
51-15	甕	かまど 胴部欠損	高 29.3 口 18.0 底 5.6	胎 砂礫混入 地 灰緑 色 濃い黄 色	ほぼ均一の厚みをもつが底部は縁部に厚い。底部は小さな円形の平底で胴部は長胴形を呈する。頸部は少しくびれ、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横撫で、胴部に輪筋状。胴部は上→下方向荒削り。内面、口縁部は横撫で、胴部に輪筋状残る。	
51-16	甕	覆土 区	底 3.3	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 外黄褐色 内褐色	底部は円形の上げ底で胴部へと張り出している。	外面、胴部下位は上→下方向荒削り。底部は荒削りによる上げ底。内面、横撫で。	
51-17	甕	覆土 区	底 6.0	胎 微細粒混 入 地 やや軟弱 色 濃い橙 色	底部は円形の上げ底を呈する。	外面、胴部は荒削りと思われるが摩滅のため不明瞭。底部は荒削り後撫で。内面、撫で。	内面に黒色物付着
51-18	甕	上位 区	底 7.0	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 外褐色 内灰褐色	底部は円形の上げ底を呈する。	外面、胴部は右→左方向、下→上方向荒削り。内面、胴部から底部は横撫で。内面、胴部から底部は横撫で。	

第12号住居跡 (第54-58図)

本住居跡は第2次、第3次と二次期にわたり調査した。第2次調査は、かまどを付設する東壁側、第3次調査では残りを行ない、この結果5軒の住居跡と重複することが判明した。重複関係は東壁で14号住居跡の上に、南壁では18、32号住居跡を切り、西壁では31号住居跡の上に構築している。これらの住居跡の中で最も新しい住居跡である。平面形は東壁と南壁は一直線状に掘り込んでいる。北壁は中央部がやや外方に張り出し、西壁で南側半分が外方へ幾分張り出す。南西壁隅を除いてはほぼ直角を呈し、南西壁隅はやや隅丸を呈する。規模は東西5.9m、南北5mを測る長方形住居跡である。方位はN-83°-Eを測る。北壁の一部は暗灰色粘質土で、他壁は住居跡の覆土としている。住居跡覆土壁は、炭化物を含む暗褐色土層である。本住居跡の覆土と他の住居跡の覆土との差は粘土の性質上、お互いが相反し壁面では剝離し壁の検出は容易であった。南壁東側半分は他壁に比べやや遺存は悪い。他壁は確認壁面上端部の一部に壁の崩落が認められるが、遺存度は良好で壁面はほぼ平坦で垂直に立ち上がる。残存壁高は25~30cmを測る。

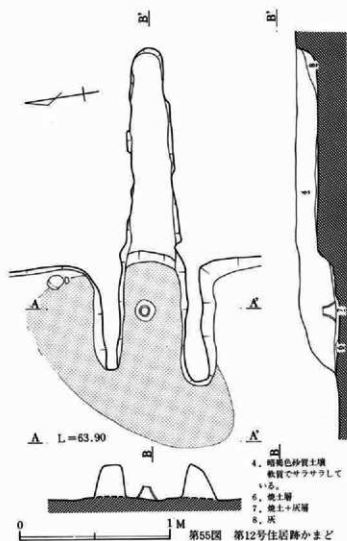
床面は暗灰色砂質土壌でやや起伏がある。かまど周辺及び住居中央部は堅いが、壁側はやや軟弱となっている。北西コーナー付近は31号住居と重複するため特に軟弱である。床面上には6ヶ所のピットが検出した。各深さは床面よりP₁-20、P₂-68、P₃-50、P₄-45、P₅-65、P₆-80cmを測る。この

VI 検出された遺構と遺物



第54図 第12号住居跡

1. 住居跡 (第12号)



うち主柱穴と考えられるのはP₂、P₃、P₄の3ヶ所であり、P₁については位置的には可能性があるが深さ的に疑問をもつ。各主柱穴は壁より約1m離れた位置につくられ、南北間の柱間はP₁-P₂で2.75m、P₃-P₄間は3.5mを測る。柱の位置関係から見て規格性があると考えられる。

貯蔵穴と考えられるのはP₅、P₆の2ヶ所で、P₅については50×40cmの楕円形で、P₆は54×50cmの円形を呈する。P₅内には土器が多量に出土している。

かまどは東壁中央部に付設されている。袖部は住居跡に対し直角に構築し、かまどの主軸も直角となる。焼焼部は住居跡内につくられている。火床は床面とする。焼焼部の平面形は奥壁幅35cm、焚口幅40cm、奥行80cmを測る長方形である。焼焼中央部が床面より約2cmの深さで舟底状にくぼんでおり、これは灰のかき出し等により生じたものであろう。焼焼中央部には土師器の高環が支脚として使用されていた。この高環は灰と焼土の混土層上に据え、簡易的に

に使用したものと考えられる。またかまど内には必要以上の土器が出土した。袖部は良く焼けておりほぼ垂直に立ち上がり遺存は良い。煙道部は住居壁を基部から奥行10cm、高さ10cmで削り、その後は平坦に煙道部を築いている。煙道部内法幅23cm、奥行1.3mを測る。煙出し孔は丸くなり、煙出し残存高は12cmを測りほぼ直に立ち上がる。煙道部覆土は煙出し孔底部付近に灰が、中央部底面には天井部崩落の焼土が見られた。

住居跡覆土は床面付近に炭化物を混入する暗褐色土層が、その上層には純粋に近い炭化物層が堆積している。本遺跡の中においては、比較的長期間にわたり埋没した類に属する。なお土層断面によると本住居跡の掘り込みはマンガン凝集層下面まで認めることが出来る。

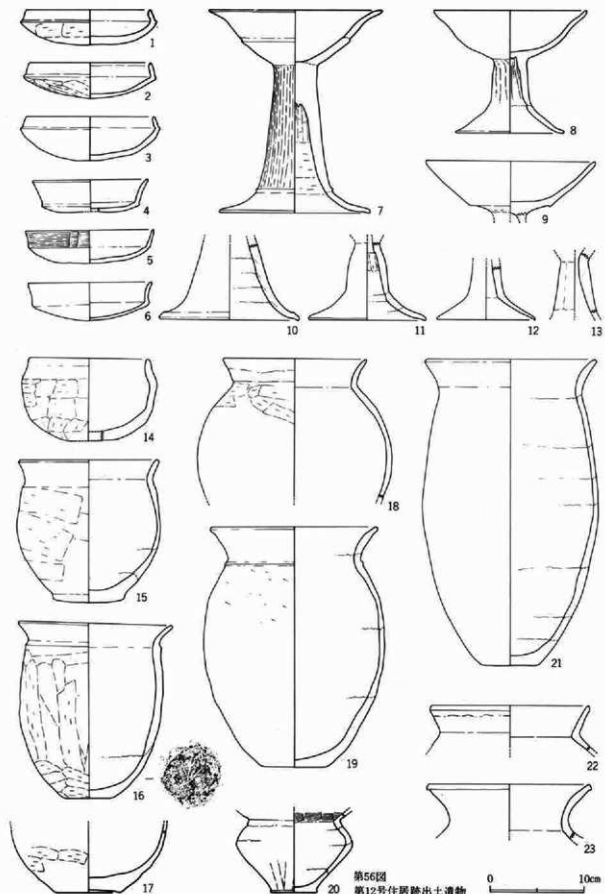
遺物は住居覆土から床面まで多量に出土している。特にかまど周辺と北西コーナー付近に多い。

出土遺物は坏、埴、高環、小型甕、甕、甗、須恵樽形甗、砥石、石が出土した。

出土土器のなかでNo.1、7、10、15はかまど内より、No.3、4、6、12、16は床面上から出土している。No.10はかまど支脚として使用されていた。

砥石、6は角閃安山岩、長さ15cm、幅8cm、高さ8cmの長方形を呈す。A~D面も摩耗し平滑である。各面の稜線は鋭く残る。砥石として使用した痕跡がある。7も角閃安山岩だが、6に比較し大きな角

VI 検出された遺構と遺物

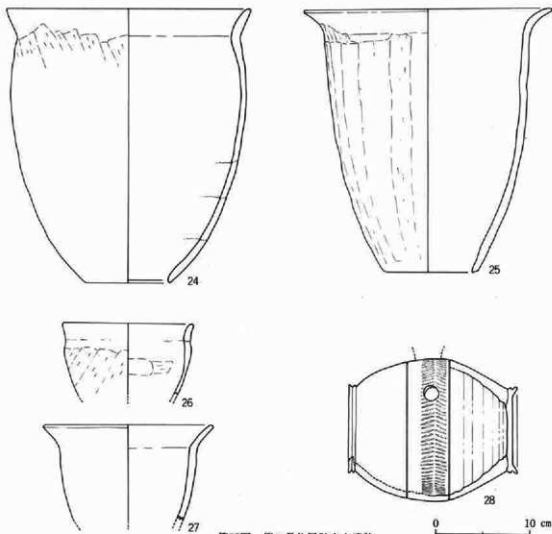


第56図
第12号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第12号)

閃石と斜長石を含む。上下面は破損している。両面とも左上から右下にかけて摩耗し、摩耗面はやや湾曲している。

石、1～5は人工的な加工は認められない自然石である。床面より出土。1は玻璃質の石基中に石英、長石を含み、流状の組織を呈することから流紋岩の一種と考えられる。床面出土。長方形を呈す。2～4は緑泥片岩で棒状を呈し、表面はほぼ平滑である。4は小口付近に剝離がみられる。5は角閃安山岩で表面は摩耗している。

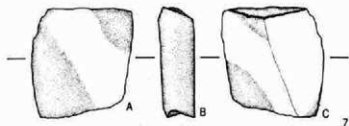
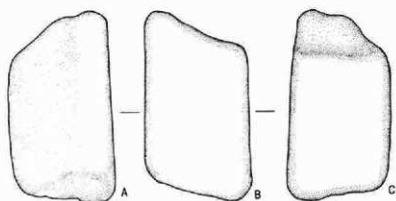
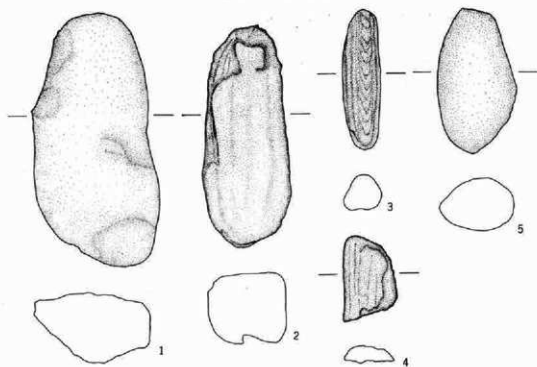


第57図 第12号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第56、59図)

図物番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
56-1	環	かまど内 完形	高 3.7 口 13.0	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	底部に最大厚をもつ。胴部は扁平に立ち上がり、口縁部は内傾する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は焼調整後横撫で。胴部は焼調整によるなだらかな段をもつ。胴部は寛れ整形不明瞭。石の動きが認められる。 内面、口唇部は横撫で。胴部は焼調整による明瞭なくぼみ。胴部は撫で。	

VI 検出された遺構と遺物



0 10 cm

第58図 第12号住居跡出土遺物

1. 住居跡(第12号)

図説番号	部 形	出土位置、 遺存状態	法 量	胎土・地味・色調	器 形 の 特 徴	装 形 の 特 徴	備 考
56-2	環	覆土 瓦	高 3.7 口 13.0	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は扁平に立ち上がり、口縁部で内傾する。口縁部は鋭い。内面底部に若干起伏がある。	外面、口縁部は横溝で、頸部は寛調整により段をもつ。底部は一定方向箇所り、その端部を横方向箇所りし、内面、口縁部は寛調整によるくぼみがある。底部は回転溝で。	
56-3	環	床面 定形	高 4.6 口 13.6	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 褐色	体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛調整後横溝で、頸部は寛調整による段をもつ。胴部は横方向箇所り。底部は不定方向箇所り。内面、口縁部は丁寧な横溝で、頸部は寛調整によりくぼむ。胴部は横溝で。	
56-4	環	床面 瓦	口 12.4	胎 微細粒混 入 地 紫褐色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は扁平に立ち、口縁部はわずかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、頸部は寛調整により段をもつ。胴部は不定方向箇所り。内面、口縁部は丁寧な横溝で、頸部は寛調整後横溝で、胴部は横溝で。	
56-5	環	覆土 定形	高 3.5 口 13.8	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 暗褐色	胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横方向箇所り、頸部は横溝で、胴部は横溝で、底部は不定方向箇所り。内面、口縁部は横方向箇所り。胴部から底部にかけて回転溝で。	
56-6	環	床面 定形	高 4.1 口 13.1	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 黒褐色	ほぼ均一した厚みをもつが、口縁部がやや厚い。胴部は扁平に口縁部中央が緩やかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は寛調整後横溝による横溝で、横溝が一部に残る。胴部は不定方向箇所り。内面、口縁部は寛調整後横溝で、横溝によるくぼみが見られる。胴部から底部にかけて丁寧な横溝で。	
56-7	高環	かまど 口縁部一部 欠損	高 21.4 口 18.6 裾 16.2	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 褐色	環部は底部から口縁部まで曲線的に立ち上がり、体部との境に段をもつ。口縁部は鋭い。脚部は円筒状で脚の向きは別々。胴部は扁平ぎみに開く。胴部は鋭い。	環部外面、体部は横溝で、口縁部は横溝で、体部との境に寛調整による段をもつ。内面、全体は横方向の丁寧な横溝で、脚部外面、横溝の鋭い縦方向箇所り。胴部との境に寛調整による段をもつ。胴部は横溝で。内面、環部と接合した最右→左方向回転箇所り。ほぞに調整痕が残る。裾部は横溝で。整形は全体に丁寧である。	
56-8	高環	中位 瓦	高 12.9 口 16.4 裾 11.6	胎 微細粒混 入 地 今や軟弱 色 褐色	環部は底部より口縁部まで、曲線をもちながら立つ。口縁部は鋭い。脚柱部は円筒台形状で、胴部は更になだらかに開く。	環部外面、口縁部は横溝で、底部は横溝で。内面、底部は横溝で。脚部外面、脚柱部は縦方向箇所り。胴部は横溝で。内面、鋭り目状上に横溝で。裾部は脚柱部に粘土を補強し成形、横溝で。	整形順序 底部→口縁部
56-9	高環	中位 瓦	口 18.2	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 褐色	底面はほぼ平坦で、環部は大きく外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、底部は横溝で。内面、器面瓦整形不明瞭。	整形順序 底部→口縁部

VI 検出された遺構と遺物

図番番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
56-10	高坏	かまど支脚 胴部完形	残存高 8.0 底 15.0	胎 細砂粒混 入 地 やや紫褐色 色 明赤褐色	胴柱部上方が厚い。胴部は接合部より次第に開き、裾部が短く外反する。	外面、器面が準直し整形不明瞭。胴端部を寛削りにより裾部を短くしている内面、4段の輪筋が明瞭に残る。裾部を底調整し、ややくはみをもつ。	
56-11	高坏	覆土 %	底 12.6	胎 濃細粒混 入 地 堅緻 色 褐色	胴柱部は円錐台形状で、胴部は更に大きく外反する。口縁部は丸い。	外面、胴柱部は横線で、胴部は横線で、内面、胴柱部上半は斜り目状、下半部は回転削り。胴部は横線で。	
56-12	高坏	床面 %	残存高 5.7 底 10.5	胎 濃細粒混 入 地 軟弱 色 褐色	胴柱部は字々に開き、裾部はなだらかに外反する。胴端部は鋭い。	外面、準直し整形不明瞭。内面、胴柱部は回転削りを通していていると思われる。	
56-13	高坏	覆土 底部一部欠 損	残存高 6.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 濃い褐色	胴柱部上半に厚みをもち、裾部につれて薄くなる。胴柱部は細く字々に開く。	外面、縦方向直線で、底部接合部は指面による横線で、内面、回転削り。	
56-14	鉢	かまど %	横高8.8 口 12.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	全体に厚みがある。胴部は球形を呈し、口縁部は短く直立する。底部は扁平平み。	外面、口縁部は底調整後横線で、胴部は右一左方向削り。底部は短く深い不定方向削り。内面、口縁部は横線で、胴部は不定方向直線で。	整形順序 口縁部→胴部
56-15	鉢	かまど 完形	高 15.1 口 15.0 底 7.6	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 濃い褐色	底部に厚みをもつ。胴部は平底で最大幅を胴部中央にもつ。口縁部はなだらかに外反する。口縁部は丸い。外面の造りはやや粗雑。	外面、口縁部及び胴部は横線で、胴部は右一左方向削り。底部は寛削り、立ち上がり部は指面直線で、内面、口縁部は横線で、口縁部は底調整後横線で、胴部は横線で。	整形順序 胴部→口縁部
56-16	鉢	床面 完形	高 18.6 口 16.5 底 5.2	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部は平底で、胴部中央付近にもつ。やや中膨らみを呈する。口縁部は短く外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横線で、胴部は底調整による段をもつ。胴上半部は上→下縦方向削り。底部には木葉痕がある。その周辺を削り調整により丸みをもつ。内面、口縁部は横線で、胴部は横方向直線で。	底部に木葉痕
56-17	鉢	中位 底部完形	底 6.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部は平底でやや上げ底平み。胴部は球形を呈する。	外面、胴部は右一左方向削り。底部は丁寧な削り、周辺は底調整。内面は横線で後横線で。	
56-18	鉢	覆土 %	口 15.4	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴中央部に最大幅をもち、球形を呈する。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横線で、胴部は右一左方向削り、底は胴部で意識的に止める。内面、口縁部は横線で、胴部は横線でよりわずかな段が見られる。胴部は丁寧な削りで。	
56-19	鉢	かまど %	高 25.5 口 18.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 明赤褐色	底部にやや厚みをもつ。底部はやや丸みをもつ平底で、胴中央部付近に最大幅をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横線で、胴部は底調整により鋭い段をもつ。胴部は指面が荒れ直方向は不明瞭。上半部の一部に右下一左方向削りが見られる。底部は底調整で調整。内面、口縁部は底調整後横線でわずかに段をもつ。胴部は直線で。	

1. 住居跡 (第12号)

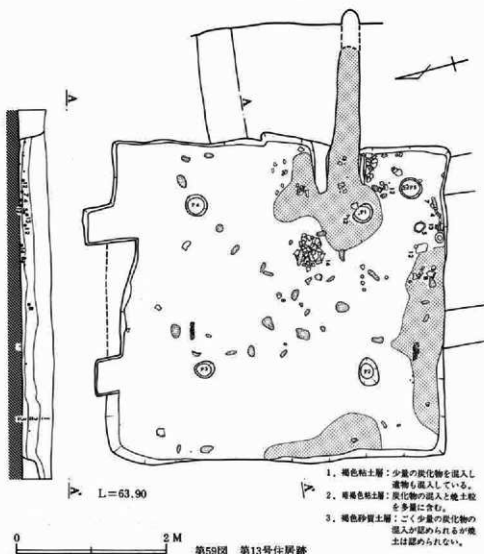
図録番号	器形	出土位置・ 保存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
56-20	小型甕	中位 片	底 5.0	胎 細砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部は小さな平底をもち、胴中央部に縦溝をめぐり、下半部には急にすばり上半部は内傾する。口縁部は強く外反する。	外面、頸部は莖調整による横溝で、胴部は粗い横溝で、底部は莖調整。立ち上がり部は指痕溝で、内面、口唇部に深い縦毛目を残す。頸部に口縁部からの残粘土を施して付ける。胴上半部は横溝で、下半部は莖調整。	成型時とも組織内面に輪痕あり
56-21	甕	覆土 片 底部完形	高 32.5 口 18.3 底 8.0	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 浅黄橙	底部と口縁部に厚みをもつ。底部は丸みのある平底で、最大幅を胴上半部にもつ長胴形である口縁部はなだらかに外反し弱い内傾をもつ。口縁部は丸い。	外面、口縁部は左右の横溝で、口縁部は軽い横溝で、胴部は縦方向莖調整。底部は莖調整より莖出し輪痕は丸みをもつ。内面、胴部から底部は施で、	写真は口縁部以下
56-22	甕	中位 口縁部完形	口 17.0	胎 細砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	胴部は強く張り、口縁部は「く」字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な横溝で、口縁部は莖押し。胴部は莖削り、削りは頸部で止める。内面、口縁部は丁寧な横溝。内面、口縁部は丁寧な横溝で、横は調整より丸い。口唇部は強い横溝でよりややくぼむ。胴部は施で、	31号住の流れ込みの可能性あり。
56-23	甕	覆土 片	口 17.6	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は曲線的に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部下に莖調整痕が残る。器面が荒れ整形不明瞭。内面、口縁部は丁寧な左廻り横溝で、横は鋭い。	
57-24	甕	中位 片	高 29.0 口 26.0 底 19.0	胎 細砂粒混入 焼 やや軟弱 色 褐色	口縁部に厚みをもつ。胴上半部に張りをもち下半部は急にすばまる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴上半部に下→上方向莖削り、頸部で止める。内面、口縁部は横溝で、胴部は丁寧な横溝で、底部穿孔は焼成前1段回転切り。	
57-25	甕	かまど右袖 完形	高 28.0 口 26.4 底 9.4	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 赤褐色	胴部は均一した厚みをもつが、口縁部で薄くなる。胴部から頸部にかけて、なだらかな曲線で立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は上→下方向莖削り、削りは口縁部で止めているが一部口縁部まで達している。内面、口縁部横溝で、胴部は縦方向丁寧な横溝で、底部から2.5cmの範囲は水で洗われた様な割欠けの乱れが見え石が露出している。底部穿孔は焼成前1段切り。	
57-26	甕	覆土 片	口 14.0	胎 細砂粒多量混入 焼 やや軟弱 色 浅黄橙	口縁部に厚みをもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部は小さく外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は莖削り。器面が荒れ整形不明瞭。内面、口縁部は軽く莖押し。全体を施で、	
57-27	甕	覆土 片	口 18.2	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部には張りがなく、口縁部は緩やかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は器面が厚成し整形不明瞭。莖削りを施していると考えられる。内面、胴部は横溝で、	
57-28	樽形罐 須色器	覆土 片	残存高 14.0 底 18.1 左胴径 9.0 右胴径 10.0	胎 緻密 1mmの黒色粒含む 焼 翠緑 色 灰褐色	口縁部は遺失している。体部は樽を横にした形をなし体側部にすばまる。体中央部に径1.3cmの四角の孔を1箇所もち、2本の沈線をもつ。間に棒状工具による割欠を2条めぐらす。	体部右側面の粘土板を造り、粘土縁の巻き上げて体部を造る。左側面は四角粘土板を外側から覆蓋する。外面、横溝は莖調整より鋭い横を2段造る。体部は丁寧な回転横溝で、内面、蓋部の取り付け痕が明確に残る。体部は回転横溝による調整。横は鋭い。	輪オリーブ系の自然熱輪が体部右側面から左側面に巻かれている。左側面を下にし焼成したものと考えられる。

VI 検出された遺構と遺物

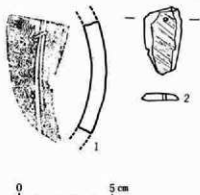
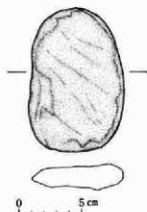
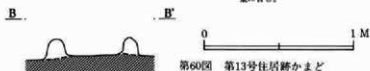
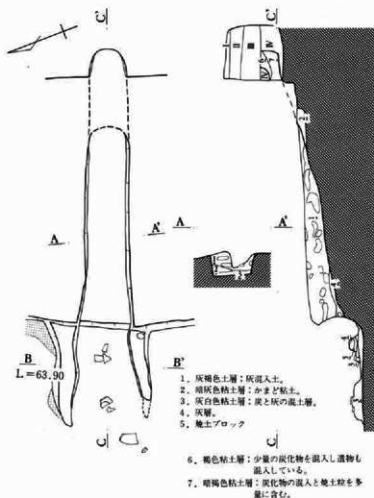
第13号住居跡 (第59-63図)

本住居跡は遺跡の北東コーナー付近に位置し、3軒の住居跡と重複する。住居跡の大半は17号住居跡上に構築し、北壁西側には11号住居跡のかまど煙道部が構築している。南壁では床面をほぼ同じくした14号住居跡を切断する。東壁と南壁はほぼ一直線状に掘り込まれ、コーナーもほぼ直角を呈する。南西コーナーもほぼ直角を呈するが西壁は、北壁方向に向うにつれて外方に張り出す。北壁は17号住居跡の重複とトレンチにより切断され北壁中央部は遺存しない。確認壁長は東壁より85cm、西壁より70cmを測る。中間壁は推定により復元した。規模は東西4.2m、南北4.5mを測り南北にやや長い住居跡である。方位はN-71°-Wを測る。東壁と南壁は炭化物を混入する暗褐色粘質土で、遺存は良くほぼ垂直に立ち上がる。西壁は壁確認上端部に壁崩落がありやや外反する。北壁は遺存状態が悪く確認は困難であった。残存壁高は東壁35cm、西壁25cmを測る。

床面はやや起伏があり、良く踏み堅められ、住居中央部及びかまど周辺は若干低くなっている。他の床は壁に向うにつれ軟弱となり、北壁側は次第に床面の確認が困難となる。かまどを中心とした範囲には多量の炭化物、焼土が検出され、またこの付近には多量の遺物が出土している。北西コーナーには60×60cmの範囲に灰白色粘土の堆積がみられた。この粘土はかまど使用のものと同質である。西



1. 住居跡 (第13号)



～南壁下にかけて炭化物が散布しており、本住居跡は火災の様子が認められないため流れ込んだものと考えられる。床面に5ヶ所のピットが検出した。P₁～P₅は覆土の状況、深さ、位置等から本住居跡の主柱穴と考えられる。比較的規格性を持った住居跡である。

かまどは東壁中央部右寄りに付設されている。本遺跡の中で最も右寄りである。袖部は住居壁に対して直角に構築し、かまどの中軸線も直角となる。焼焼部は住居跡内に持ち、平面形は奥壁幅35cm、焚口幅50cm、奥行70cmを測る方形である。袖部は灰白色粘土と暗褐色粘土との混土層で、左袖は右袖に比較し遺存は良い。内壁は良く焼けておりほぼ直に立つ。火床は床面とする。火床面は奥壁寄りに深さ約5cmの舟底状のくぼみが発見され、この中には炭化物、焼土灰が充満していた。おそらく灰のかき出し等によるくぼみと考えられる。焼焼部内覆土は火床面付近に多量の炭化物、灰、焼土で覆われている。処々に炭化物層と灰層の交互堆積がみられた。これらの灰層の上に間層を挟まず、レンガ状に焼けた内壁が覆っている。煙道部は住居壁を奥行約10cm、高さ15cm、傾斜58°で床面より削り込みその後奥行1.6m、傾斜10°で序々に登り煙出し孔で平坦となり、孔はほぼ垂直に立つ。煙出し孔は調査区域外に検出し断面調査をした。

た。確認高は約15cmで幅は11cmの円形を呈する。それ以上はマンガン凝集層内に入り不明となる。煙道は比較的長く全長1.8 m、幅30cmを計測した。煙道内の覆土は灰を混入する灰褐色粘質土層である。

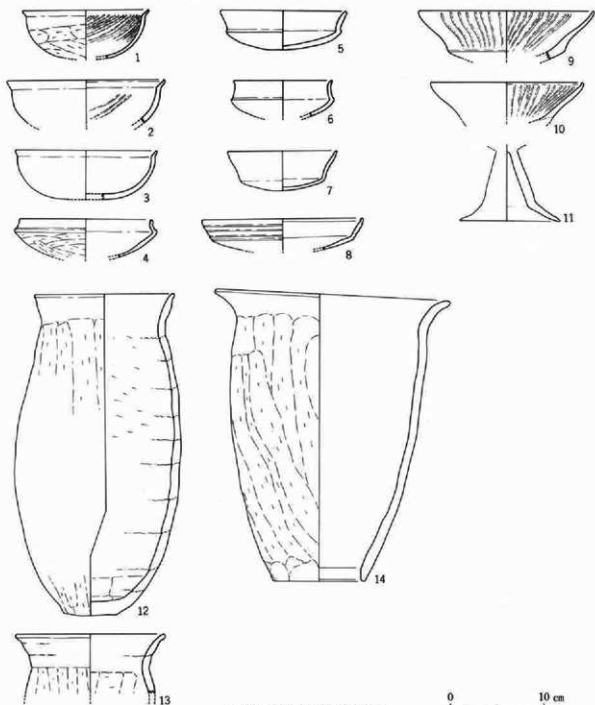
VI 検出された遺構と遺物

住居跡覆土は床面付近はわずかに炭化物を含む褐色砂質土層で覆われ、住居跡内の大半は炭化物を多量に含む暗褐色粘土層である。

遺物はかまど中心に出土している。出土遺物は坏、高坏、甕、甗、須恵樽形球、石製模造品、石であった。

出土土器のなかでNo.4～8、12～14は床面より出土している。

須恵器、樽形球、胎土は緻密で0.5～1.0mmの黒斑粒子と灰白粒子を含む。色調は暗灰色、焼成堅緻。残存部は胴部中央のみで残存長6.3cm、幅3.3cm、厚さ9mmとほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を



第63図 第13号住居跡出土遺物

0 10 cm

1. 住居跡(第13号)

呈し、胴部中央に2mm幅の平行沈線を上→下方向に施す。沈線は浅く0.5mmを測り入れ方にはよい。沈線の左側に6本単位の波状文を施し、表面には鉄分が付着する。内面は回転で整形。

剣形模造品、両面とも稜がなく水平で板状を呈している。刃部も同じ厚みを持ち、柄部は全く失なわれて剣身部のみとなっている。平面形では切先部を意識し、三角形を呈する。小孔は剣身部の基部にある。剣身両側には未調整の剝離がみられる。

石、長石を多量に含む緑泥片岩で扁平板状を呈す。人工加工は認められない自然石、床面より出土。

遺物観察表(第63回)

図番番号	器形	出土位置・ 存状物	法量	粘土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
63-1	環	覆土 区	口 13.6	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 淡褐色	胴部はやや球形を呈し、口縁部はなだらかに外反する。 口端部は鋭い。	外面、頸部は調整後指痕跡で、胴部は不定方向に削り。 内面、口唇部は調整後指痕跡で、後には無でより丸みをもつ。胴部は丁寧な手で後側か右側より右上がり研削。	
63-2	環	覆土 区	口 17.0	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 明褐色	胴部は扁平なみに立ち、胴上半部は直立なみにある。口縁部はなだらかに外反する。 口端部は鋭い。	外面、頸部は調整後指痕跡で、胴部は不定方向に削り。 内面、口唇部は調整後指痕跡によりやややくばむ。胴部は丁寧な手で、右上がり研削がわずかに見られる。	
63-3	環	覆土 区	口 15.2	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 淡黄褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は内湾なみに立ち上がり、口縁部はなだらかに外反する。 口端部は鋭い。	外面、頸部は指痕で、胴部は後方向に削り。 内面、口唇部は調整後指痕跡で、口端部は軽くつまむ。胴部は無で後右上がり研削。	
63-4	環	床直 区	口 14.0	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 黒褐色	頸部に厚みをもつ。胴部はなだらかに立ち上がる。 口縁部は内湾する。	外面、口縁部及び肩部は調整後、肩部には沈線が認められる。胴部は不定方向に削り。 内面、口縁部及び胴部は調整後指痕跡で、頸部に沈線あり。	
63-5	環	かまど周辺 口縁部欠 損	高 4.2 口 13.5	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 赤褐色	底部のみ器内は薄くなる。胴部はなだらかに立ち、頸部でしまり外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部立ち上がり部は調整後指痕跡で、胴部は不定方向に削り。 内面、口縁部は丁寧な模造で、やや膨らむ。頸部は調整し、くばむ。胴部は調整後指痕跡で。	
63-6	環	床直 区	口 10.6	胎 細砂粒混 入 地 やや軟弱 色 黒褐色	ほぼ均一の厚みをもつ。胴部はなだらかに立ち、口縁部は直立し、口端部で外反する。	外面、口縁部は調整後指痕跡で、口端部は軽く押さへ。胴部は削り。 内面、口縁部は鋭い模造で後口唇部をつまむ。胴部は調整により沈線をもつ。胴部は無で。	
63-7	環	床直 区	高 4.2 口 11.6	胎 微細粒混 入 地 紫褐色 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部及び胴部は扁平に立ち、口縁部は長く緩やかに外反する。 口端部は鋭い。	外面、口縁部は調整後指痕跡で、後がわずかに見られる。底部は不定方向に削りて凹みがある。 内面、口縁部立ち上がり部は調整後指痕跡で全体は丁寧な模造で、彫形は無でより丸みもたせている。	
63-8	環	床直 区	口 17.0	胎 細砂粒混 入 地 紫褐色 色 明赤褐色	口縁部に厚みを持ち底部は薄い。胴部は扁平に立つ。口縁部は直線的に立ち、三段の稜をもつ。	外面、口縁部の段は削り調整による。胴部は不定方向に削り。 内面、口縁部は調整後指痕跡で、口唇部は鋭い模造によりやややくばむ。	

VI 検出された遺構と遺物

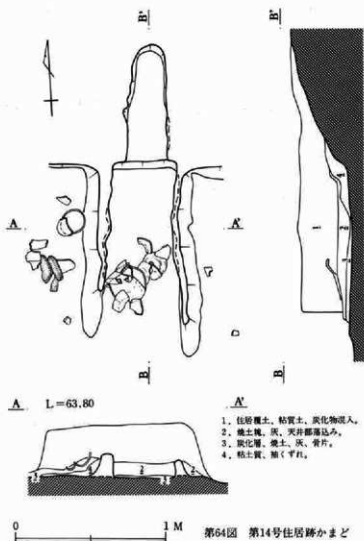
図版番号	部形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・地色・土質	部形の特徴	壁形の特徴	備考
63-9	高坏	覆土層	口 18.8	胎 濃緑粘泥 入 地 やや軟弱 色 濃い褐色	底部に厚みをもち次第に薄くなる。胴部はやや平坦で底部に紋をもち、口縁部は曲線的に立ち上がる。	外面、口縁部は横撫で後縦方向研削、口縁部立ち上がり部は横溝調整後残存。 内面、口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。全体は撫で後縦方向研削。	
63-10	高坏	覆土層	口 16.6	胎 濃緑粘泥 入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつが、口縁部で薄くなる。口縁部は曲線的に立ち上がる。	外面、器面が亂れ整形不明瞭。 内面、口唇部は強い横溝調整によりややくぼむ。全体は撫で後やや右回り研削。	
63-11	高坏	覆土層	残存高 8.0 径 10.6	胎 細砂粘泥 入 地 やや堅緻 色 褐色	胴部はほぼ均一した厚みをもつが、胴部は次第に薄くなる。口縁部は鋭い。	器面が滑らか整形不明瞭であるが外面は整形形。	
63-12	甕	かまど周辺 ほぼ完形	高 34.0 口 15.0 底 5.9	胎 砂粘泥 入 地 堅緻 色 濃い褐色	底部に最大厚をもつ。胴下半部はややすばまり中位でややゆるむ。口縁部は緩やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、口縁部は直で軽く押える。胴部は下→上方向磨削り胴下半部は上→下方向磨削り。 内面、口縁部は強い横溝調整後横撫で、胴部は強い横溝磨削り後残存。強い磨削り安定が悪い。	
63-13	甕	床直 口縁部完形	口 16.0	胎 細砂粘泥 入 地 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は直に立ち口縁部は緩やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部及び胴部は横溝調整後横撫で、口縁部は撫で、胴部は下→上方向磨削り。 内面、口縁部及び胴部は横撫で、粘土被合痕が見られる。胴部は右方向移動の例あり。	
63-14	甕	かまど周辺 完形	高 30.4 口 25.2 孔 9.7	胎 細砂粘泥 入 地 堅緻 色 灰褐色	ほぼ均一した厚みであるがやや底部付近に厚みをもつ。口縁部は緩やかに外反し胴部は幾分かゆるむが、底部付近にかけてわずかにすばまる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で、口縁部は軽く磨削り。胴部は上→下方向約3cm幅で磨削り。穿孔は焼成前左回り磨削りその後底部を磨削す。2段調整。 内面、口縁部は丁寧な横撫で、胴部は幅3.7cmの縦方向調整。	

第14号住居跡 (第64~68図)

本住居跡は4軒の住居跡と重複する。北壁は13号住居跡に切られ、西壁側は12号住居跡が上に構築している。西及び南東は16、18号住居跡と切り合う。残存壁は北壁5m、東壁6.5m、南壁3.5mを測る。西壁については不明である。平面形の北東コーナーは13号住居跡によって切断されているが、北壁、東壁は一直線状に掘られ、コーナーは直角を呈するものと考えられる。東壁南側はやや内側に入り、南壁は直線的に掘られているにもかかわらず鈍角を呈する。残存壁高は最も残りの良い北壁で10cm、他壁は住居跡と重複する関係から約5cm程度であり、残存度は全体に悪い。住居跡の規模は南北6.7m、東西推定約6mを測る比較的大きな住居跡である。方位はN-6°-Wを測る。

床面及び壁は暗褐色砂質土層である。床面はほぼ平坦で良く踏み堅められている。特にかまど周辺の床面は遺存状態が良い。床面上に4ヶ所のピットが検出した。P₁は50×50cm深さ約32cm、P₂は60×65cmのほぼ円形を呈し、深さ36cmを測る。これらのピットの覆土は炭化物を含む暗褐色土層で、深

1. 住居跡(第14号)



第64図 第14号住居跡かまど

さ、覆土、位置的に支柱穴と考えられる。P₁、P₂についての各計測はP₁-P₂間3.3m、南北壁間1.7m、東壁間1.4mを測りやや東西壁側に片寄っているが規則性がみられる。P₃、P₄については位置、深さ等から支柱穴とは考えにくい。

かまどは北壁中央部付近に付設され、袖部は住居壁に対して直角に構築している。よってかまどの中軸線も直角となる。袖部は灰白色粘土を使用している。燃焼部は住居内にあり、平面形は奥壁幅40cm、焚口幅60cm、奥行1.2mを測る。大形のかまどである。火床は床面とし、床面と火床面は同一の高さであった。燃焼部内の覆土は火床面上に約4cmの炭化物、灰、焼土が厚く堆積し、その上を間層をはさまずに、袖部内壁及び天井部がレンガ色に焼け落ちている。この上層は住居内覆土と同質のものとなる。煙道部は住居壁の基部から奥行10cm、傾斜45°で掘り込み、その後奥行58cm、高さ23cm、傾斜23°の勾配で登って行く。煙出し孔付近では平坦となる。煙道部は残存長約80cm、幅約25cmを測る。内壁の遺存は良く右側壁はほぼ直に立つ。覆土は天井部崩落の焼土がみられた。

住居跡覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土層によって、短期間に埋没していると考えられる。

遺物はかまどを中心に出土している。出土遺物は坏、埴、鉢、高坏、甕であった。

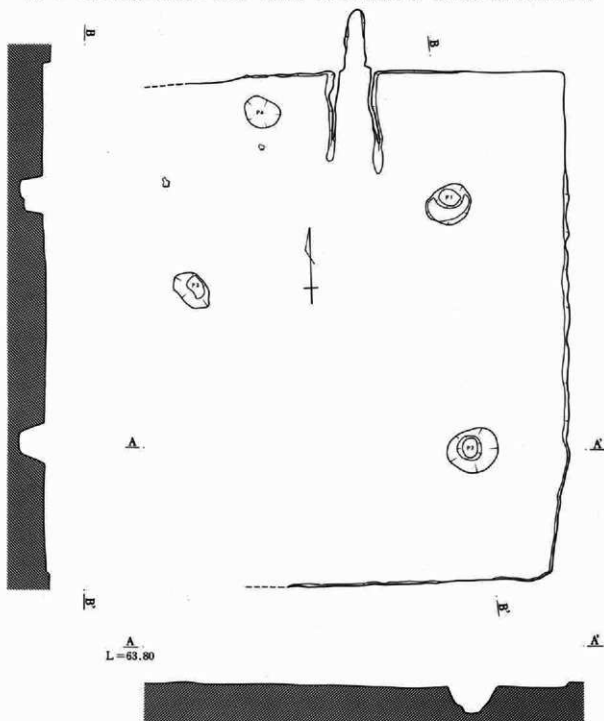
出土土器のなかでNo. 2、6~9、12、17、20~22はかまど内より出土している。

VI 検出された遺構と遺物

勾玉、絹雲母を含む滑石製。完形品だがやや扁平を呈し丁寧に研磨されている。片面穿孔と思われる。

白玉、2は直径3.5mm、厚さ2mmを測る。側面中央に稜線をもたず管玉を切断したような円筒状を呈す。上下面には摩耗痕は認められない。

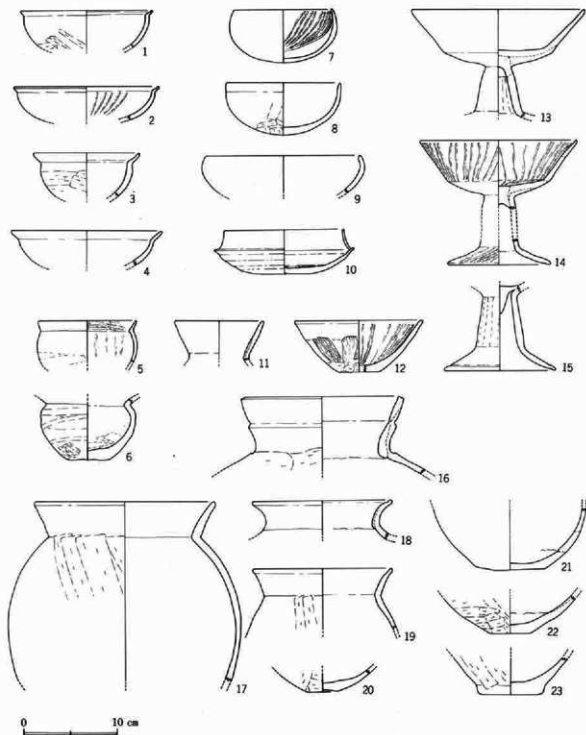
石、1～3は人工加工面は認められない自然石、1、3は緑泥片岩、2角閃安山岩。床面より出土。



0 2 M

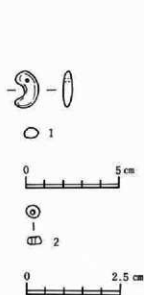
第65図 第14号住居跡

1. 住居跡 (第14号)

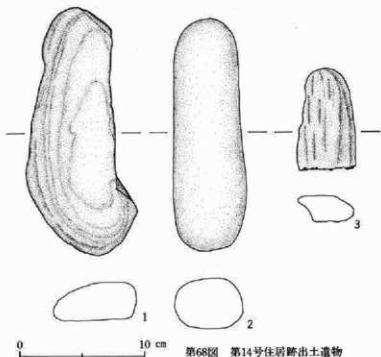


第66图 第14号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



第67図 第14号住居跡出土遺物



第68図 第14号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第66図)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
66-1	坏	覆土 %	口 14.2	胎 細砂粒混 入 焼 やや堅緻 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は短く屈曲し、口端部がやや直に立つ。口端部は鋭い。	外面、胴部は横方向調整後施で、胴部は不定方向磨削り。 内面、口唇部は調整整、口端部はつまむ。胴部は丁寧な施で。	
66-2	坏	かまど %	口 15.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は内湾きみに立ち上がり、口縁部は短く外反する。口端部はやや直に立つ。	外面、口縁部は調整後施の横施で、胴部は磨削り。 内面、口唇部は調整整、口端部はつまむ。胴部は丁寧な施で後左上がり放射状研磨。紋は鋭い。	
66-3	坏	覆土 %	口 11.2	胎 細砂粒混 入 焼 やや堅緻 色 灰白色	胴上半部に厚みをもつ。胴部は内湾きみに立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口端部はやや直に立ち丸い。	外面、口縁部は指擦施で、胴部は左→右方向磨削り。 内面、口唇部は強い横施でによりくぼむ。整形は粗施である。胴部は丁寧な施で。	
66-4	坏	覆土 %	口 16.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 灰白色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部でやや薄くなる。胴部は扁平に立ち、口縁部でなだらかに外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部及び胴部は横施で、胴部は調整整。 内面、口唇部は強い横施でによりくぼむ。胴部は鋭い。	外面一部に黒疵あり。
66-5	坏	覆土 %	口 10.5	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部で薄くなる。胴部は球形を呈し口縁部はなだらかに外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な横施で、胴部は調整整。 内面、口唇部は刷毛目状の横方向調整。胴部は調整で、わずかに研磨が見られる。紋は鋭い。	
66-6	坏	かまど %	底 4.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部に厚みもちら次第に薄くなる。底部は平底で、胴部は内湾きみに立ち上がる。口縁部は屈曲する。	外面、胴上半部は不定方向、下半部は下→上方向磨削り。底部は回転磨削り、底部中心に残粒土がある。その後施で仕上げ。 内面、全体は強い横施で、整形は粗施である。	

1. 住居跡 (第14号)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
66-7	環	かまど 完形	高 5.6 口 10.6	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 色 褐色	底部に厚みをもち口縁部で薄くなる。胴部は球形を呈し、口縁部で内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は荒削り後撫で、口縁部と胴部は撫でにより区分。胴部は不定方向旋削り。 内面、全体は丁寧な撫で後、右廻り右上がり研削。	
66-8	環	かまど 片	高 5.5 口 12.2	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 色 褐色	底部は厚みをもち、次第に薄くなる。口縁部は鋭い。全体を丸く仕上げた意図が見られる。	外面、口縁部は荒削り後撫で、胴部は不定方向旋削り。 内面、口縁部は撫で、能は撫で。	
66-9	環	かまど 片	口 16.0	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、胴部はやや球形を呈し、口縁部で内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は荒削り後撫で、胴部は縦方向旋削り。	
66-10	環 身 頭志器	覆土 片	高 4.6 口 12.8	胎 白石粒混 入 地 翠緑 色 色 青灰色	底部に厚みをもち、底部は平底で受部は鋭い。立ち上がり部は長く外湾する。口縁部は鋭い。	マキアゲ、ミズビキによる成形。 外面、受部は荒削りにより鋭い。底部は回転削り、立ち上がり部は回転削り後撫で。 内面、底部は回転削り。	
66-11	罎	覆土 片	口 9.6	胎 細砂粒混 入 地 軟弱 色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもち、胴部から長く大きく外反する。口縁部で内湾する。口縁部は鋭い。	外面、器面が荒れ整形不明瞭。撫でを施したものと考えられる。胴部は荒削り調整痕が残る。 内面、口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。	
66-12	鉢	かまど 底部一部欠 損	高 5.5 口 13.8 底 4.4	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 色 土い・褐色	底部に厚みをもち、底部は小さな平底で胴部は内湾きみに立ち上がる。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、胴部は縦方向内湾の粗い刷毛整形。底部は不定方向旋削り。 内面、口唇部は強い横撫で、全体は丁寧な撫で後幅広い広い縦方向研削。	整形順序 口縁部→胴部
66-13	高環	かまど 環部片 脚部欠	口 18.4	胎 微細粒混 入 地 やや軟弱 色 色 褐色	環部口縁部は斜上方に直線的に伸び口唇部でやや内湾する。胴部はほぼ均一した厚みをもちやや割が傾る。	環部外面、口縁部は横撫で、口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。胴部は荒削り後撫で。 内面、胴部は器面が荒れ整形不明瞭。脚部外面、荒削り。 内面、回転削り。環部との接合はほぼ四形。	
66-14	高環	かまど 環部完形 脚部欠損	高さ 13.0 口 16.8 脚 11.0	胎 微細粒混 入 地 年歳 色 色 褐色	環部底部内面はほぼ平坦で曲線的に立ち上がる。環部立ち上がり部に緩やかな傾をもつ。口縁部は鋭い。脚柱部は円柱形に定ひと考えられる。底部は先端に開く。	環部外面、口縁部は荒削り後撫で後5~8mm程度の研削。後撫でにより丸みをもつ。胴部は荒削り。 内面、口唇部は強い撫でによりややくぼむ。全体は丁寧な撫で後右廻り研削。 脚部外面、脚柱部は横撫で、底部は環部同様研削。 内面、底部は横撫で、脚柱部は縦削り接合部は四形のほぞを使いその廻りに粘土を貼り付け補強している。	
66-15	高環	覆土 片	残高 9.0 脚 11.8	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもち、脚部はなだらかに開き、底部で「く」の字状に外反する。裾端部は鋭い。	脚部外面、脚柱部は縦方向旋削り後撫で、底部は横撫で。 内面、脚柱部は縦削り、底部は横撫で、裾端部は強い横撫でによりややくぼむ 環部と脚の接合は、それぞれを造り上げ円錐形のほぞを差し込み、外面を調整し完成する。内面は接合後手加えられていない。	

Ⅶ 検出された遺構と遺物

図面番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・焼成・土 色	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
66-16	裏	裏土 1/6	口 17.4	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 橙色	底部にやや厚みをもつ。胴部は 張り、口縁部は「く」の字状に外反 し、口縁部中に段をもつ。 口縁部は平直。	外面、口縁部は既調整後焼割りにより 段をつくる。口縁部は既押し。胴部は 指張りで、胴部は右→左方向焼割り。 内面、口縁部中段は既でによりややく ぼむ。口縁部は既押し。胴部は既焼で、 口縁部既粘土を底部に付けて付ける	
66-17	裏	かまど 口縁→胴部 完形	口 19.4	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 赤褐色	胴部付近に厚みをもつ。胴部は 球形を呈し、胴中央部付近に、 最大幅をもつ。口縁部は「く」の 字状に外反する。口縁部は丸い。	外面、器面が荒れているが、口縁部は 横焼で、胴部付近は下→上方向焼割り 胴部で段を止めている。 内面、口縁部は丁寧な横焼で、段は鋭 い。胴部は横方向焼焼で。	
66-18	裏	裏土 1/6	口 15.0	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁 部は肉曲さみに外反する。 口縁部は丸い。	外面、口縁部は横焼で、胴部は横方向 焼割り。 内面、口縁部は既焼で、胴部は既焼で、 口縁部既粘土を底部に付けて付ける。	
66-19	裏	裏土 1/6	口 15.0	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 橙色	底部に厚みをもつ。胴部はなだ らからで、口縁部は「く」の字状に 外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横焼で、胴部は下→上 方向焼割り、段を器部で意識的に止 める。 内面、口縁部は横焼で、既により段 は丸みをもつ。口唇部は強い横焼で によりややくぼむ。胴部は横方向焼焼で。	
66-20	裏	かまど 底部完形	底 3.2	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 赤褐色 色 赤褐色	底部に厚みをもつ。底部は小さ くやや上げ底を呈する。	外面、胴部及び底部は不定方向焼割り。 内面、丁寧な横焼で。	整形順序 底部→胴部 胴部及び底部一部 に黒炭あり。
66-21	裏	かまど 底部付近完 形	底 7.0	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 赤褐色	底部にやや厚みをもつ。底部は 扁平な平直で、胴部は内湾さ みに立ち上がる。丸みある器形 である。	外面、胴部及び底部は不定方向焼割り後 焼で、器面が荒れ整形は不明瞭。 内面、丁寧な横焼で。	整形順序 胴部焼割り→底部 焼焼で、底部内面 上約 3.5cm以上は 黒みをもちその高 きは一定である。
66-22	裏	かまど 底部1/6	底 4.2	胎 砂粒多量 混入 焼 灰緑 色 赤褐色	底部に厚みをもつ平直である。 胴部は直線的に外反する。	外面、胴部は不定方向焼割り。底部は 焼割り後焼焼で、底部の輪郭は不明瞭。 内面、既焼で。	整形順序 胴部→底部
66-23	裏	裏土 底部1/6	底 6.8	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	底部に最大厚をもつ。底部は造 り出し。	外面、胴部は上→下方向焼割り。底部 は不定方向焼割り。 内面、既焼で。	整形順序 胴部→底部

第15号住居跡 (第69～71図)

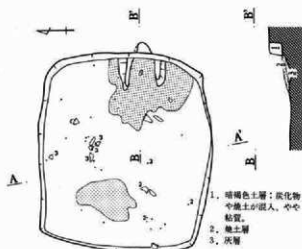
本住居跡は遺跡の南東付近で、9、10号住居跡の北側に位置する。平面形の北壁はほぼ一直線状に掘られているが、他の壁はそれぞれ住居中央部で、東壁35cm、南壁20cm、西壁16cmの張り出しを持ち各コーナーは丸味を呈する。やや胴張隅丸方形住居跡で、規模は南北壁の最大幅で2.3m、東西2.6mを測る小型の住居跡である。方位はN-65°-Wを測る。

壁及び床面は砂質土壌内に構築している。壁は確認面付近にやや崩落があるが、遺存度は良好ではほぼ直立し、壁面も平坦である。特に北壁側は良い。残存壁高は北壁40cm、南壁34cmを測る。

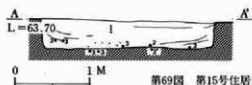
1. 住居跡 (第15号)

床面はほぼ平坦で、焼土、炭化物、土器片等が散乱し、かまど周辺部には多量の焼土があった。床面全体は堅く、特にかまど周辺部は良く踏みこまれている。

かまどは東壁中央部やや右寄りに付設している。かまどの上半部は消失し、袖部と煙道部の一部が残るのみであった。袖部は住居壁に対し直角に構築している。従ってかまどの中軸線も住居壁に対し直角となる。袖部の残存は左袖50cm、右袖42cmを測る。煙道部は住居壁を基部から壁線延長上に、奥行20cmまで平坦に掘り込みその後は垂直に立ち上がる。煙道部の残存長14cm、内法幅18cmを残すのみであった。灰はかまど右袖の外側に厚く堆積し、右側にかき出していたことがうかがわれる。

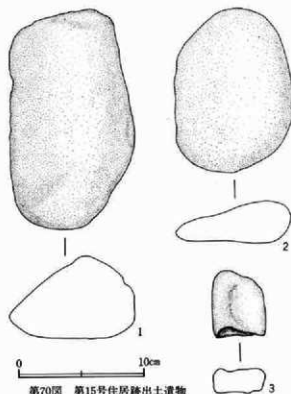


第69図 第15号住居跡

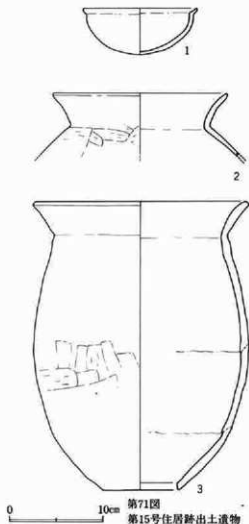


住居跡覆土は壁直下付近にわずか分層できる。覆土の大半は炭化物、焼土を混入する暗褐色粘質土層で、この土層は短期間に埋没したものと考えられる。

住居跡覆土は壁直下付近にわずか分層できる。覆土の大半は炭化物、焼土を混入する暗褐色粘質土層で、この土層は短期間に埋没したものと考えられる。



第70図 第15号住居跡出土遺物



第71図 第15号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

遺物の出土量は非常に少ない。出土遺物は環、甕、甌、石である。土器はすべて床面上より出土している。

石、1～3は角閃安山岩で粒子の細かい角閃石、石英を多量に含む。人工加工は認められない。1はかまど内より出土し、焼成を受けている。2、3は床面より出土。

遺物観察表 (第71図)

図番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形特徴	備考
71-1	環	床面 1/5	高 4.5 口 12.0	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は内湾みに立ち上がり、口縁部は短く強く外反する。口縁部は鋭い。	外面、器面が乾れ整形不明瞭。胴部に瓦調整後焼で。内面、胎で。口縁部は瓦調整。	
71-2	甕	床面 1/5	口 18.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 にぶい 黄色	胴部にやや厚みをもつ。胴部は張り口縁部は強く屈曲する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な整形で。胴部は瓦調整後焼で。瓦痕が見る。胴部は右一左方向瓦張り。内面、口縁部は積物で。焼は鋭い。胴部は瓦焼で。	整形順序 口縁部→胴部
71-3	甌	床面 口縁部 1/5 底部 完形	高 30.3 口 22.8 孔 7.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴中央部付近に最大幅をもち、口縁部はなだらかに外反する。	外面、口縁部は積瓦調整、調整痕が口縁部まで達している。胴中央部は上一下方向瓦張り、下部は瓦張り。内面、口縁部は丁寧な整形で。胴部は瓦張り後目の粗毛目調整。刷毛単位 2mm。底部孔は一段凹輪状切り。	

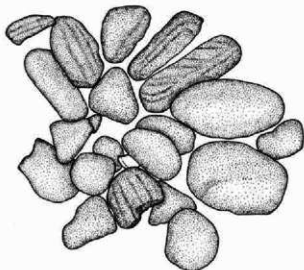
第16号住居跡 (第72～78図)

本住居跡は遺跡の東端中央部に位置し、14号住居跡と重複しているようである。本住居は床面は検出したが壁は検出し得なかった。よって住居床面の範囲から住居跡の規模を推定した。方位はN-83°-Eを測る。

床面はやや堅く炭化物、焼土がみられた。推定規模は北壁4.2m、西壁5.2m、南壁2.2mを測る。南東コーナー寄りの床面上より配石らしき石組が検出された。

配石は一部トレンチにより遺失しているが、45×推45cmの円形状を呈すると考えられる。中心部に約5～7cmの円礫を置きそれを取りまく様に長円形の石を菊花状に並べている。石の種類は角閃安山岩、緑泥片岩等を使用している。いずれも自然石である。

遺物は不、甕、須恵樽形礫、石製模造品であった。



0 15 cm 第72図 第16号住居跡配石図

1. 住居跡(第16号)

樽形須(須恵器) 胎土緻密、0.5~1mmの黒斑粒子を含む、色調暗灰色、焼成堅緻、残存部は胴中央部のみで残存長6.5cm、幅7.8cm、厚さ8mmを測るほぼ均一した厚みを持つ。

滑石模造品は紡錘車1点、剣形模造品3点、管玉1点、白玉7点が出土した。

紡錘車、1は穀頭円錐形で径45×44mm、上面23mm、厚さ14mm、孔は両面穿孔で7mmを測る。上面は艶出し研磨が施され、側面は鋭利な工具による調整が行なわれている。

剣形模造品、2は表の稜は明瞭であるが裏はほぼ水平にすられている。柄部と剣身部との区別が不明瞭で鬩と柄の部分が一緒になっている。柄部は薄くなるように削り落している。刃部の一部は鋭利につくられている。柄部に小孔を1孔穿つ。3は両面に稜を有する。柄部をほとんど失い剣身部のみになっている。小孔は剣身基部にある。剣身部両側をやや薄くしているが刃部は平滑である。4は両面とも稜がなく水平で板状を呈し、刃部も同じ厚みを持つ。柄部は全く失われ、丸味をもたせている。切先を意識し三角形を呈する。孔は剣身基部に並列して2孔を穿つ。

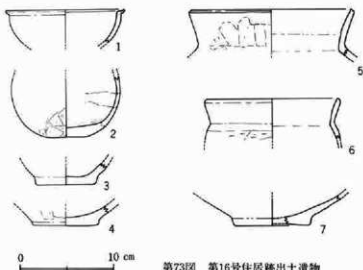
管玉は5は長さ11mm、径2.5mmで色調は明黄褐色の滑石製、孔は両面穿孔、上下面の稜線は丸味をもっている。ほぼ完成品である。

白玉、6~12はいずれも径4~4.5mm、厚さ2~3mmを測る。側面中央に稜線をもたず、管玉を切断したような円筒状のものである。

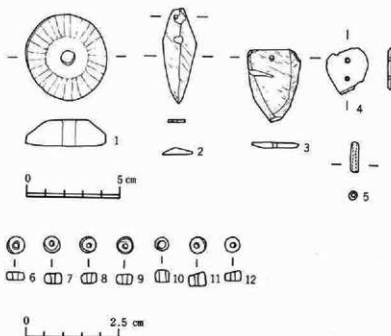
No.2、3(第78図)ともに口縁部破片である。

No.2は同様に、口縁部は波状を呈しているものと思われる。沈線間の隆起部分にも、LRの斜行縄紋が認められる。口縁部に縄文を施した後に、八条の沈線を引いている。

No.3も口縁は波状を呈し、口縁部にはLRの斜行縄文を配し、縄紋帯以下に、筒状工具ないしは棒状工具にて、横位多段の沈線を施している。口唇直下の沈線は、ほ

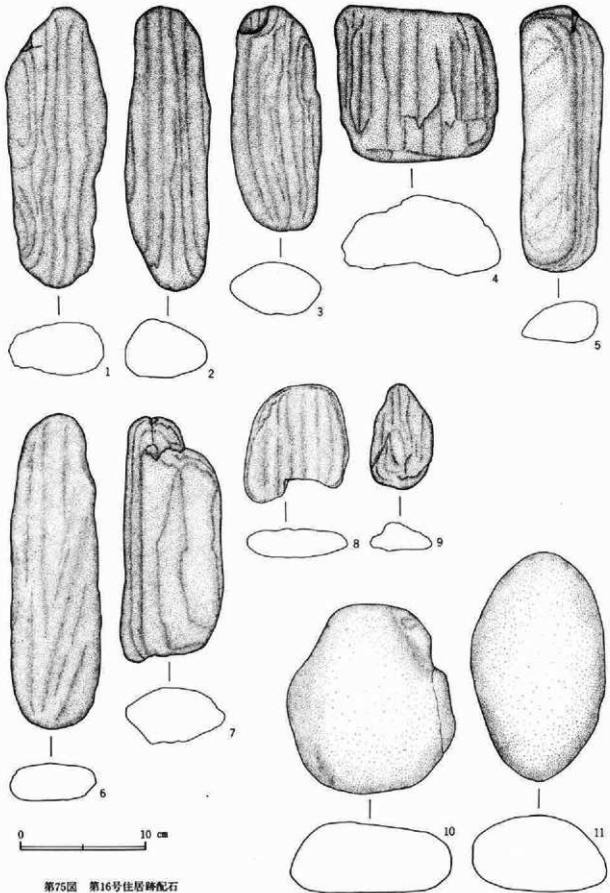


第73図 第16号住居跡出土遺物



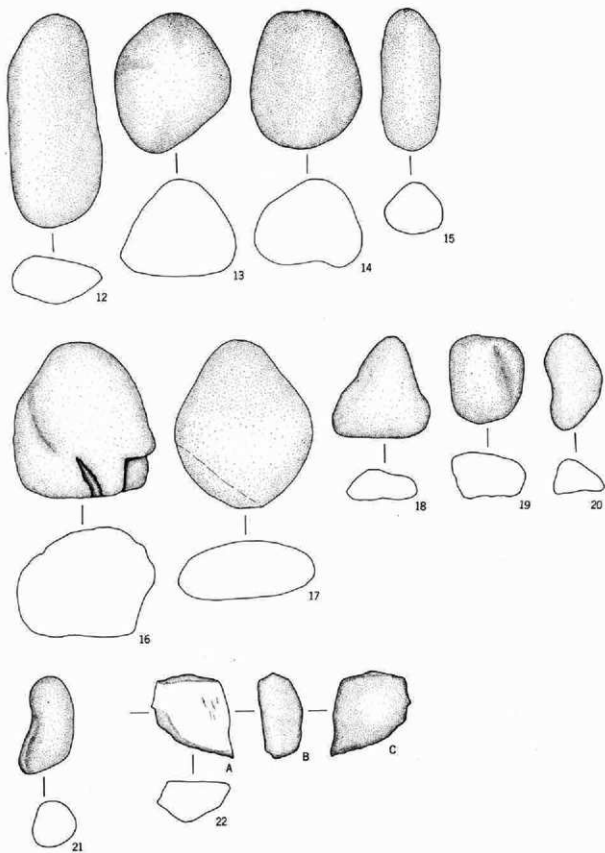
第74図 第16号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



第75図 第16号住居跡配石

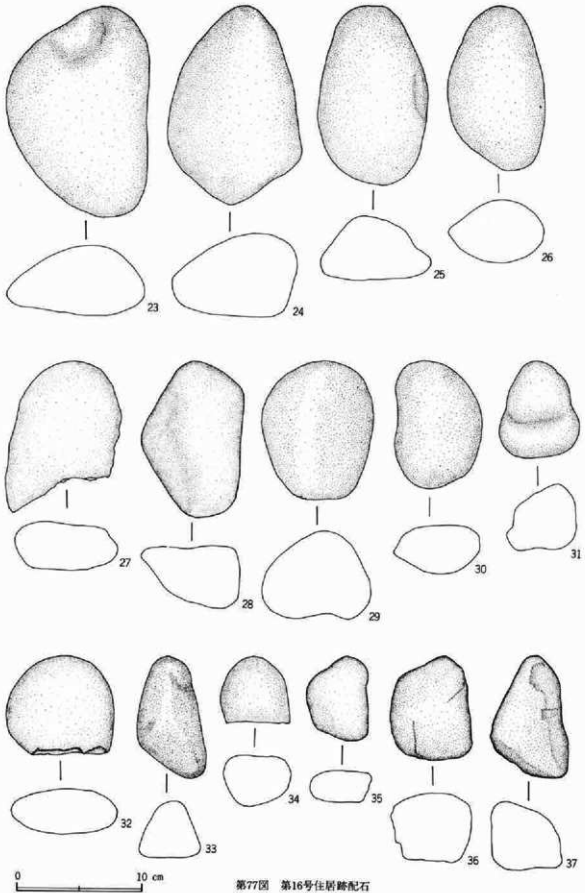
1. 住居跡 (第16号)



0 10 cm

第76图 第16号住居跡配石

VI 検出された遺構と遺物



第77図 第16号住居跡配石

1. 住居跡 (第16号)

遺物観察表 (第73回)

図類番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
73-1	罎	覆土 片	口 12.8	胎 砂粒混入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部で薄くなる。口縁部は傾曲し口唇部で直立する。胴部は内湾ぎみに立つ。口縁部は狭い。	外面、口縁部は児調整後横溝で、胴部は児調整後横溝で、体部は横方向児削り。口縁部は児押し。内面、横溝で、口唇部は児調整。	
73-2	罎	覆土 片	底 4.2	胎 砂粒混入 焼 厚軟 色 茶褐色	底部は厚い平底で、胴部は薄く球形を呈する。	外面、底部及び胴部は上→下方向児削り。内面、底部に指痕による圧痕がある。	底部より上1cm付近に煮こぼれ痕がある。
73-3	罎	覆土 片	底 6.0	胎 砂粒多量 混入 焼 厚軟 色 褐色	底部は同じ厚みをもつ平底である。	外面、胴部は児削り。底部は児削り調整。立ち上がり部は指痕物で。内面、児削りで。	
73-4	罎	覆土 底部完形	底 7.0	胎 砂粒多量 混入 焼 厚軟 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部中央は薄い。内面は丸く窪みをもたせている。	外面、胴部は下→上方向児削り。底部は不定方向児削り。立ち上がりは指痕物で。内面、窪み児削りで。	
73-5	罎	覆土 片	口 17.0	胎 砂粒多量 混入 焼 厚軟 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は長く「く」の字状に外反する。口縁部は縦く沈線をもつ。	外面、口縁部は下→上方向児削り調整。口唇部のみ横溝で、胴部は斜毛肌状。おすかに残る。胴部は上→下方向児削り。	
73-6	罎	覆土 口縁部完形	口 14.0	胎 砂粒混入 焼 厚軟 色 暗赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部はなだらかに立ち口縁部は横やかに外反する。口縁部は狭い。	外面、口縁部は横溝で、口縁部は児押し。胴部は右→左方向児削り。底は胴部で止める。内面、口縁部は横溝で、縦は狭い。胴部は児削りで。	
73-7	罎	覆土 片	底 7.8	胎 砂粒多量 混入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部中央は薄くなりやや上げ底である。	外面、器面が乱れ整形不明瞭であるが児削りと思われる。	



第78図 第16号住居跡出土遺物

ほぼ水平に引かれているが、下段の沈線は湾曲し、弧を描いている。

両者ともに第46図-10の破片に類する。胎土、色調、調整であるが、本破片は波状口縁となり、また、多段の沈線を施しているために、類似資料の抽出ができず、今後資料の増加を待ち、時期決定をおこないたい。

Ⅴ 検出された遺構と遺物

第17号住居跡（第79～82図）

本住居跡は北東コーナーに位置し、11、13、27号住居跡と重複する。11、13号住居跡に切られるが27号住居跡との重複関係は不明である。住居壁の大半は住居跡の重複と道路と未買収（宅地）地区により、平面形の全貌は不明瞭であった。壁の確認は、11、13号住居跡との間に1.5m、13号住居跡東壁側に2.2mを、また本遺跡の北東隅に2.6mをそれぞれ確認した。これら各壁がほぼ直角に交わるものと推定され、本住居跡の範囲とした。その規模は推定東西約7.5mを測る比較的大型の住居跡である。方位は $N-40^{\circ}-W$ を測る。残存壁高は各壁とも約22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がり遺存度は良好である。

床面はやや起伏があり遺存状態は良くない。平均的に軟弱で、つかみにくい部分が多い、ただし北側の道路下部分付近は炭化物、焼土、灰が検出されこの付近のみ堅い。遺物もここを中心に数点出土している。おそらくかまどが位置しているのではないかと推定できる。

周溝、柱穴、貯蔵穴等住居跡に付随する施設は検出し得なかった。

住居跡覆土は炭化物、焼土を含む暗褐色粘質土層である。

遺物は北側道路下付近で集中して出土した。出土遺物は、埴高杯、甕、甌、管玉、白玉、紡錘車、石であった。

出土土器のなかでNo.3、4、6～8、10、12、19は床面より出土、13は片口の甌として考えたい。

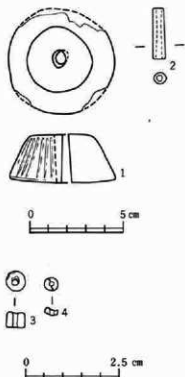
紡錘車、1は截頭円錐形で、片面穿孔である。孔は中心よりやや傾いて穿けている。上面及び側面は鋭利な工具により調整が行われている。

管玉、2は碧玉質。孔は両面穿孔で、孔の中央部がやや細くなっている。上下の稜は摩滅しやや丸味を持つ。

白玉、3は直径5mm、厚さ4mmを測り比較的大型である。断面は方形を呈する。4は直径4mm、厚さ1.5mmで断面は長方形である。いずれも管玉を切断したような円筒状で、上下面は調整されていない。

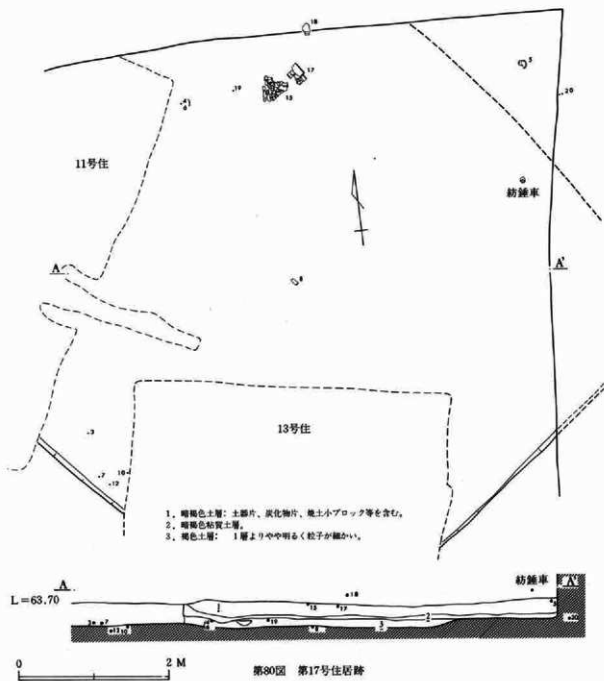
砥石、3は角閃安山岩で、小さな角閃石と斜長石が密に入りやや緑色を呈している。

石、1、2は自然石で床面上より出土。1は泥岩で半分が割れている。2は緑泥片岩でほぼ円形の扁平な石である。

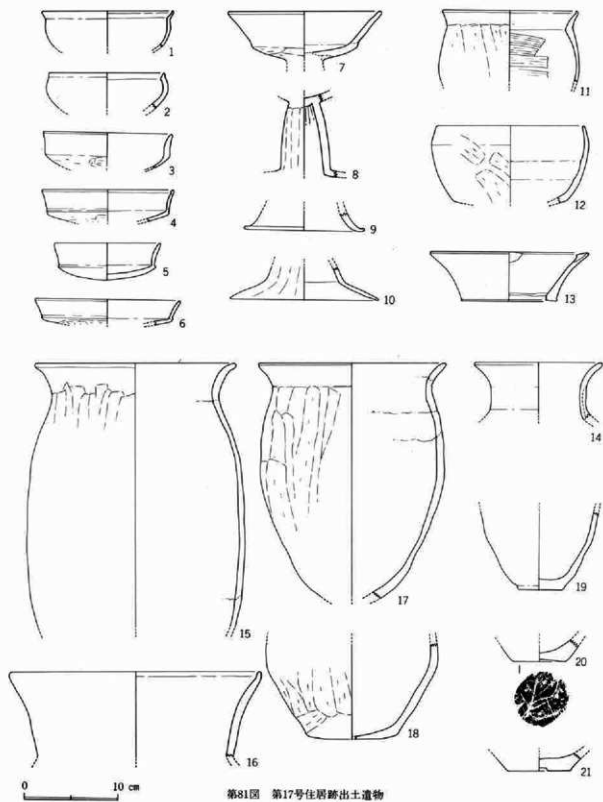


第79図 第17号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第17号)



VI 検出された遺構と遺物



第81図 第17号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第17号)

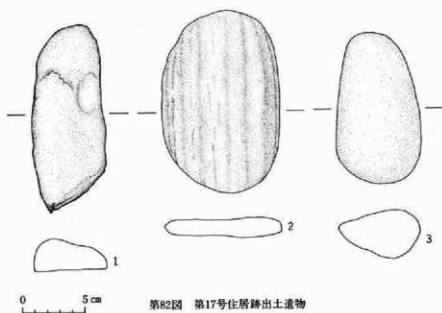
遺物観察表 (第81回)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・地色・色長	器形の特徴	整形の特徴	備考
81-1	環	覆土 片	口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 厚紙 色 棕色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部で薄くなる。胴部は球形を呈し口縁部は短く反する。	外面、胴部は調整後焼で、胴部は調整。 内面、口唇部は調整。口縁部はつまじ。胴部は丁寧な焼で、唇部がわずかに見られる。焼は良い。	
81-2	環	覆土 片	口 12.2	胎 細砂粒混 入 焼 厚紙 色 棕色	胴部はほぼ均一した厚みをもち、胴部は内湾し口縁部で直立する。口縁部は良い。	外面、胴部は指頭による積焼で、胴部は調整で。 内面、口唇部は強い積焼でによりややくぼむ。胴部は丁寧な焼で。	
81-3	環	床面 片	口 13.7	胎 微細粒混 入 地 やや厚紙 色 棕色	口縁部にやや厚みをもち、底部から胴部にかけて、扁平に立ち上がり口縁部は直立する。口縁部は良い。	外面、口縁部は指頭による積焼で、底部は横方向積焼で、焼は熱により良い。 内面、丁寧な焼で、焼は指頭による焼で。	
81-4	環	床面 片	口 13.5	胎 微細粒混 入 焼 厚紙 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、胴部は扁平に立ち口縁部はやや外反する。口縁部は良い。	外面、口縁部は調整。底による沈みがえられる。胴部は不定方向積焼。 内面、口縁部は調整後焼で、胴部は丁寧な焼で。	
81-5	環	上粒 片	高 3.9 口 11.4	胎 細砂粒混 入 焼 厚紙 色 ぶい・棕色	胴部はなだらかに立ち、口縁部は直立し口唇部がわずかに外反する。口縁部は良い。	外面、口縁部は調整後積焼で、胴部は不定方向積焼。 内面、口縁部立ち上がり調整後積焼で、胴部は調整で、口縁部を軽く蹴押し、良い。	
81-6	環	床面 片	口 15.6	胎 細砂粒混 入 地 厚紙 色 棕色	ほぼ均一した厚みをもち、底部は平で口縁部はやや外反さみに立つ。	外面、口縁部は調整後積焼で、底部は横方向積焼で。 内面、口縁部は積焼で、口唇部は調整後焼で、底部は不定方向積焼で。	
81-7	高環	床面 片	口 16.4	胎 細砂粒混 入 焼 厚紙 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもち、口縁部はなだらかに外反する。口縁部は良い。	外面、口縁部は積焼で、口唇部は特に丁寧。口縁付近は積焼で、胴柱部接合付近は積焼。 内面、全体は熱で仕上げ、口唇部は強い積焼でによりややくぼむ。	
81-8	高環	床面 胴柱部完成	残高 8.6	胎 細砂粒混 入 地 厚紙 色 暗褐色	胴柱部は内湾さみに、胴部は直に開く。	外面、胴柱部は縦方向の丁寧な焼で、胴部は不明。 内面、接合部付近は斜り目焼。胴部付近は斜め積焼後焼で、焼は良い。	
81-9	高環	覆土	径 13.0	胎 細砂粒混 入 地 厚紙 色 赤褐色	胴部はそりさみに外反し、胴部末端は上方へはねる。胴縁部は良い。	内外面共に丁寧な積焼で。	
81-10	高環	床面	径 16.0	胎 細砂粒混 入 地 厚紙 色 灰白色	胴柱部より胴部は直線的に大きく開く。胴縁部は良い。	外面、胴柱部は縦方向積焼。胴部は丁寧な積焼で。 内面、胴柱部は積焼で、胴部は積焼で。	整形順序 胴柱部→胴部
81-11	甕	覆土	口 14.6	胎 砂粒混入 地 厚紙 色 ぶい・積	胴部に厚みをもち、胴部は横やかに張る。口縁部は良い。	外面、口縁部は積焼で、胴部は下→上方向積焼。 内面、口唇部は調整後焼で、口唇部は調整。胴部は刷毛と積焼で、焼は良い。	整形順序 口唇部→胴部

VI 検出された遺構と遺物

図面番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
81-12	埴	床面 瓦	口 15.8	胎 砂粒混入 焼 やや軟色 色 明赤褐色	やや丸底さみの底部をもち、胴部は内湾する。口縁部は狭い。	外面、口縁部はわずかに横溝で、胴中央部を境にして上下斜方向に湾り、底部は直削り。 内面、口縁部は唇面による強い横溝で、胴部は縦方向に直削り。	底部がわずかに残る。
81-13	甗 須恵質	甗土 瓦	高 5.2 口 17.0 孔 10.2	胎 微細粒混入 焼 堅緻 色 明褐色	底部と口縁部に厚みをもつ。底部は平底で内面がやや上げ底。口縁部は平坦。	外面、口縁部及び体部は丁寧な横溝で、底部は直削り後横溝で。 内面、口縁部は唇面調整後横溝で、口縁部に直削りによる注口状の切り取りが見られる。体部は横溝で、底部は1段浅切り穿孔後横溝で、全体的に直く仕上げられ平底。	全体に丁寧な整形を施す。
81-14	甗	甗土 瓦	口 13.8	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁下半部はほぼ直立し、口唇部付近で急に外反する。口縁部は丸い。	内外面共に丁寧な横溝で、体部と口縁部は別々に成形し粘土を雑強し接合。	
81-15	甗	上位 瓦	口 21.3	胎 砂粒多量混入 焼 堅緻 色 褐色	口縁部に厚みをもち胴部はほぼ均一。最大幅を胴中央部にもつ長胴形。口縁部はなだらかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部付近に縦方向の直削り筋。胴部は直削りを施しているが唇面が不規則。 内面、口縁部は強い横溝でによりくぼむ。胴部は直削り。	
81-16	甗	甗土	口 27.0	胎 砂粒混入 3mm 焼 やや軟色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつが、口唇部で薄くなる。口縁部は縦やかに外反し口唇部で内湾する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、唇面が丸れ整形不明瞭。上方へ砂粒の移動が見られる。 内面、口縁部は強い横溝でによりくぼむ。胴部は左上りの横溝で。	
81-17	甗	上位 瓦	口 20.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部中央付近に最大幅をもつ長胴形。胴部がややしまり口縁部は外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、口縁部と胴部との境に唇面調整でわずかな段をもつ。胴部は下へ上方向に湾り、底部は直削りで見える。 内面、口縁部は横溝で、胴部に縮毛目筋が見える。胴部は直削り。	底部から胴部にかけて一部黒底あり。
81-18	甗	上位 瓦	底 9.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	底部中央が薄い平底。胴部は直斜状に立ち、胴中央部付近で直立する。	外面、胴部は下へ上方向に湾り、底部は深い直削りにより不安定。 内面、直削り。	
81-19	甗	床面 底部完形	底 4.8	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 黒色	底部に厚みをもつ平底。胴部は内湾さみに立つ。	外面、胴部は縦方向に直削りであるが、足付着のため方向不明瞭。底部は不定方向に直削り、立ち上がり部は唇面調整で。 内面、全体は唇面調整。	内面に足付着。
81-20	甗	甗土 底部完形	底 5.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 淡黄褐色	底部中央が薄く、底部部に厚みをもつやや上げ底状を呈する。	外面、胴部は縦方向に直削り。底部は胴部の傾りによって走り出す。 内面、唇面調整。	底部に木葉痕あり。
81-21	甗	甗土 瓦	底 6.6	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 明赤褐色	底部に厚みをもつ平底。底部中央に直径1.5×1.5cm、深さ0.3cmの円形のくぼみがある。	外面、胴部は縦方向に直削り。底部は丁寧な横溝で。 内面、直削り、直削りあり。	

1. 住居跡 (第18号)



第18号住居跡 (第83~86図)

本住居跡は第2次と第3次との2回にわたり調査した。第2次調査では平面形が掘みにくく、床面の範囲から住居跡の拡がりも推定し、第3次調査で本住居跡の全貌が判明した。この結果本住居跡の上に32号住居跡が構築され、12号住居跡が切っている。平面形は西壁及び南壁はほぼ一直線状に掘り込みコーナーは隅丸となっている。東壁及び北壁は床面より推定した。規模は推定東西5.2 m、南北4 mを測るやや横長の方形住居跡である。方位はN-8°-Wを測る。壁の残存高は約37cmを測り32号住居跡と重複する部分は約5 cmであった。各壁ともほぼ垂直に立ち上がり、遺存度は良好でほぼ平坦である。

床面には炭化物、焼土が散乱し、全体的に良く踏み詰められほぼ平坦である。また北壁の12号住居跡と重複する付近では周辺の床面よりは堅く、かまどが存在していた可能性も考えられる。又南西コーナーには建築部材の一部と考えられる炭化材が検出しているが、本住居跡が火災に遭遇していたとは考え難い。南壁側に50×60cmの楕円形を呈する深さ約10cmの円錐形のピットを検出した。位置、深さ等から柱穴、貯蔵穴等の可能性は少ない。

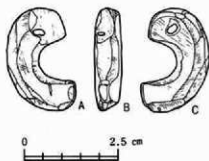
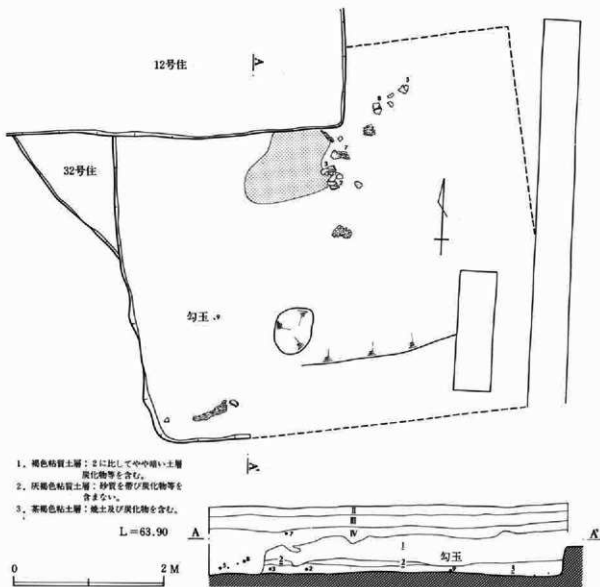
住居跡覆土は床面直上に炭化物、焼土を含む茶褐色土層で覆われ、その上面は炭化物、焼土等一切含まない灰褐色粘質土層である。

遺物は12号住居跡と重複する付近に出土している。出土遺物は環、埴、高環、甕、甌、石であった。出土土器のなかでNo. 2、3、5は床面より、No. 8は中位より出土している。

勾玉、絹雲母を含む滑石製、完形で厚みを持ち周縁部を研磨しているが、側面に削り痕を残す。孔は両面穿孔で近接して2孔を穿ち長円形を呈する。

石、1は緑泥片岩、人工的な加工面は認められない自然石、床面より出土。

VI 検出された遺構と遺物

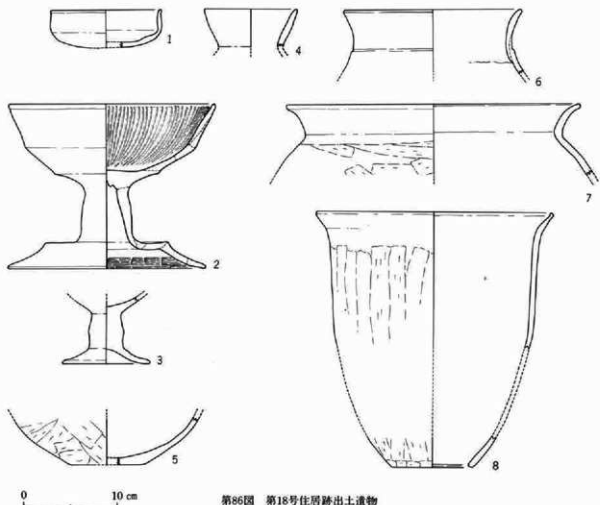


第84図 第18号住居跡出土遺物



第85図
第18号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第18号)



第86図 第18号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第86図)

図類番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土地成色質	器形の特徴	整形の特徴	備考
86-1	杯	覆土 片	残高4.6 口 11.8	胎 凝砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は扁平で口縁部が直立する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、縁は丸い。胴部は不定方向肌理あり。内面、口縁部は横溝で、胴部は横溝。	
86-2	高杯	床面 坏部片 胴部片	高 17.5 口 22.1 胴 21.2	胎 凝砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	坏部の立ち上がりは2段となり内湾みである。口縁部は丸い。胴部はやや太くなりつつ裾部は2段に開く。	坏部外面、器面が荒れ整形不明瞭、溝で補っていると思われる。内面、外面同様無地で思われる。横がい立ちがり縦溝がわずかに見られる。胴部外面、全体は丁寧な無地。内面、坏部接合後胴柱部回転痕あり。裾縁部に約2cm幅の刷毛目による文様的な整形を施す。	内外面、有段をもちながら丸みをもった整形を施す。
86-3	高杯	床面 胴部片	残存高 6.8 胴 9.4	胎 凝砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	胴柱部は粘土を同柱状にし坏部をのせる。裾部は短く「く」の字状に開く。裾縁部は軽い窪み。内面中央部がわずかにくぼむ。	外面、胴柱部は丁寧な無地で、裾部は横溝で。内面、窪み後丁寧な無地。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
86-4	埴	覆土 層	口 10.0	粘 細砂粒混 入 焼 紫鉄 色 靑色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は長く大きく外反し、口唇部で心もち内湾する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、頸部付近に横溝調整痕。 内面、口唇部は横溝調整後横溝で、胴部は横溝調整後横溝で。	
86-5	甕	床面 層	底 8.4	粘 砂粒混入 緑泥片管 含む。 焼 紫鉄 色 茶褐色	底部は平底で胴部は球形に立ち上がる。底部の輪郭は明瞭。	外面、胴部は不定方向寛溝で、底部は丁寧な整形りで平滑。 内面、胴部は整形り。底部付近は横溝で。	
86-6	甕	上位 層	口 15.2	粘 細砂粒混 入 焼 紫鉄 色 浅黄褐色	口縁口はなだらかに外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、頸部に横溝による段をつくる。胴部は横方向寛溝り。 内面、口縁部は横溝で、頸部に口縁部よりの残粘土を塗で付ける。胴部は整形り。	
86-7	甕	上位 層	口 31.6	粘 細砂粒混 入 焼 紫鉄 色 にふい黄 褐色	口縁部に厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は強く外反する。口端部は平坦。	外面、口縁部は横溝調整横溝で、頸部は指溝溝でより丸い。口端部は整形り。胴部は右一方向寛溝り。 内面、口縁部は横溝で、口唇部は強い横溝によりややくぼむ。径は鋭い。胴部は横方向寛溝で。	
86-8	甕	中位 洞下平部大 溝	標高 27.0 口 25.4 孔 8.6	粘 細砂粒混 入 焼 紫鉄 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部で強く外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で、口端部は整形り。胴部は右一方向寛溝り。 内面、口縁部から頸部は丁寧な横溝で、口唇部は横溝調整後横溝で、わずかにくぼみがある。胴部は横溝で、底部は回転整形り2段調整。	

第20号住居跡

本住居跡は遺跡の中央部西側に位置する。本住居跡は東壁80cm、南壁1.3mを検出した。北壁は電柱があり西壁は道路のため調査は不可能であり、住居跡の存在を確認したのみであった。平面形は方形を呈すると考えられる。

第21号住居跡（第87～90図）

本住居跡は第2次調査の際、住居跡の大半が未買収地区に入り、かまど部分のみを調査した。第3次調査では残りの南側を可能な限りに拡張し調査した。よってかまど周辺と住居跡南側半分とは調査時期が異なりかまど以南約2.3mはすでに盛り土のため未調査区となってしまった。この未調査区を補うことと第2次、第3次との関連をつけるため全体図の位置関係によって両者を結びつけた。住居跡の規模は推定4.6×4.5mとほぼ正方形を呈すると考えられる。方位はN-19°-Wを測る。住居跡は35号住居跡と36号住居跡とに重複している。本住居跡は南西隅で35号住居跡の北壁の中央部を切り、南東隅では36号住居跡の上に構築し、いずれよりも新しい。残存壁長は東壁2m、西壁3.3m、南壁

1. 住居跡 (第20号・第21号)

3.2m、北壁3.5mを測り、他は重複及び未調査区となる。残存壁高は北壁側43cm、南壁側26cmを測るが土層断面によればマンガン凝集層まで住居跡の掘り込みが確認できる。

周溝は西壁直下のみ検出した。規模は幅約10cm、深さ約5cm、確認長約3mを測る。断面形は「U」字状を呈し覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土層でやや軟質である。

床面はほぼ平坦で全体的に堅く遺存度は良い。特に住居中央部付近では覆土と床面との差が明瞭で覆土は床面で剝離する状態であった。また床面上には遺物、炭化物が散乱し、炭化物の中には建築部材と考えられるものも検出した。しかし本住居跡が火災に遭遇していたかどうかは判別しにくかった。

貯蔵穴は南東隅よりにつくられ、36号住居跡の床面上に検出された。検出段階の規模は28×22cmの楕円形を呈し、深さは21号住居跡床面から約65cmを測る。覆土は炭化物を多量を含む暗褐色粘質土で、この中より遺物が出土している。

かまどは推定北壁中央部よりやや左寄りに付設し、袖部は灰白色粘土を用い「ハ」の字状にやや開いた形で構築している。かまど中軸線は煙道部、袖部の状態から住居跡に対して直角になると考えられる。燃焼部を住居跡内にもち、平面形は台形を呈すると考えられる。かまど検出規模は奥壁幅42cm、焚口幅は不明、袖部検出長最大40cmを測る。火床は床面としほぼ平坦である。燃焼部内覆土は多量の炭化物、焼土が堆積する。煙道部は住居壁を基部から奥行15cm、高さ16cm、傾斜45°で削り込んでいる。その後煙道部幅0.25m、長さ1m、傾斜約10°で煙出し孔に続く。煙出し孔は12×12cmの円形を呈し、高さ約10cmまで確認した。それ以上はマンガン凝集層内に入り不明となる。

住居跡覆土は壁直下で粘質土を持つ灰褐色土層で、その上層は焼土、炭化物を含む暗褐色土層で覆われる。また住居確認面上層より、純粋に近い炭化物層が床面付近にまで達している。この流れ込み炭化物層は2号住居跡、7号住居跡にみられるものと同質と考えられ、何らかの関連があると思われる。

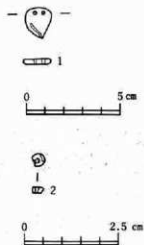
遺物はかまど燃焼部内に甑が正置した形で出土した。また右袖外側には完形に近い土器が多数出土している。

出土遺物は坏、高坏、甕、甑、石製模造品であった。

出土土器のなかでNo 8、17、24、30はかまど内より、No 2、4、6は貯蔵穴、No 1、9、12、13、15、18、25、27、31、32は床面より出土している。

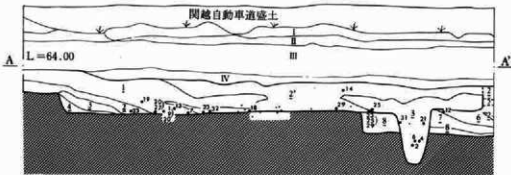
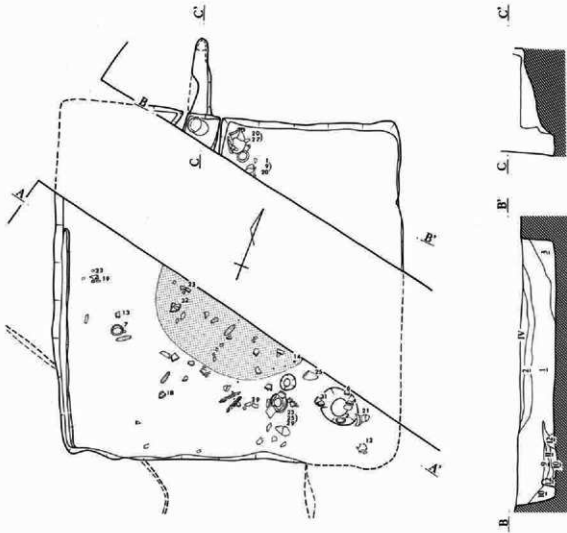
滑石製品、2点出土している。剣形模造品で、両面とも稜がなく水平で板状を呈す。刃部も同じ厚みをもつ柄部は全く失なわれて丸味をもつ。切先を意識し三角形を呈す。孔は剣身基部に並列して2孔を有する。

白玉、側面中央に稜線を持たず、管玉を切断したような円筒状である。断面は長方形を呈する。



第87図 第21号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

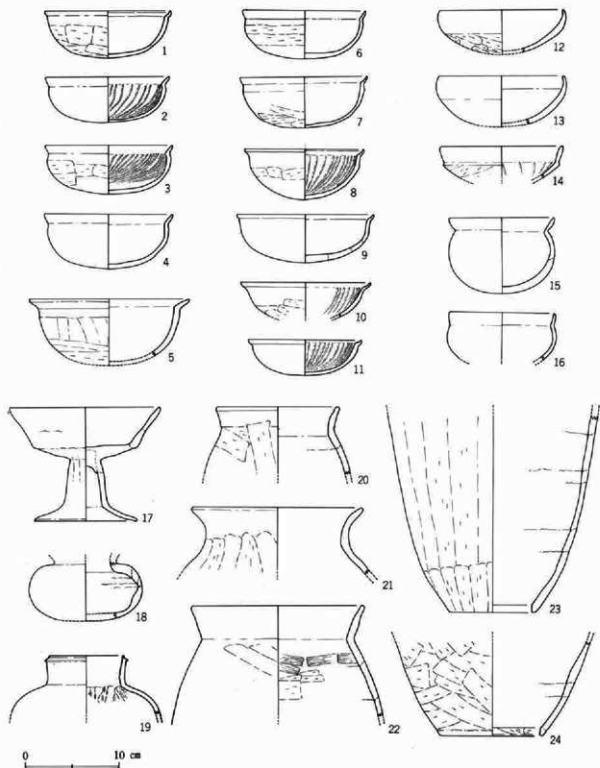


1. 暗褐色土層：若干の炭化物粒を混入、やや砂質。
2. 黒色土層：多数の炭化物混入層。
- 2'. "：2層より炭化物量が少なく表土層の混れ込み。
3. 黄褐色土層：灰色土を含む粘質で緻密で固い。
4. 灰褐色土層：粘質軟質。
5. 暗褐色土層：炭化物の認められない。
6. "：若干炭化物の混入、やや粘質。
7. 黄褐色土層：若干砂質。
8. 灰褐色土層。
9. 10の上層を覆っていた天岸部で使われてはいない。
10. 粘土炭化物等を含む天岸部の落ち込み。
11. 黒色土、黒土灰を含む炭化物層。
12. 砂質粘土：柱の主体をなす。

0 2 M

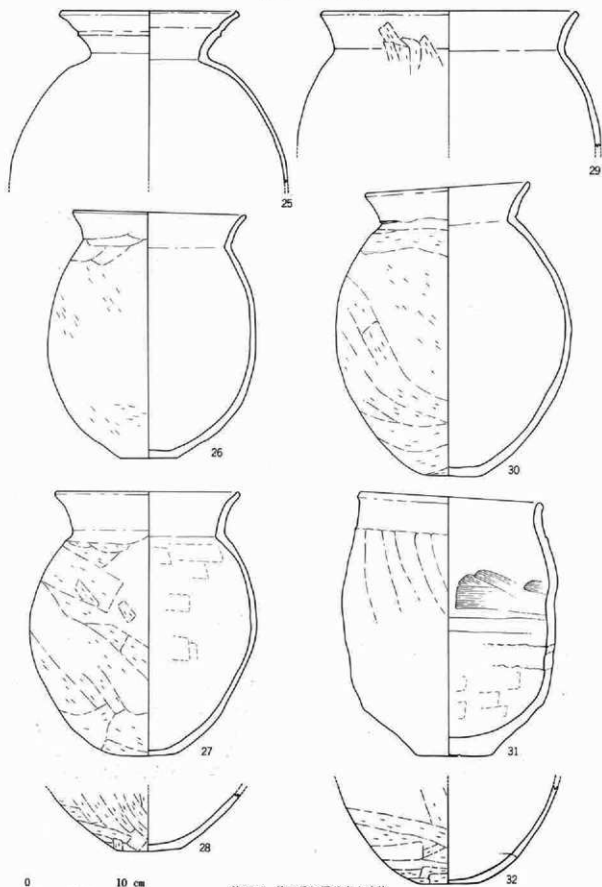
第88図 第21号住居跡

1. 住居跡(第21号)



第89图 第21号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



第90図 第21号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第21号)

遺物観察表 (第89、90図)

図版番号	図形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
89-1	環	床面 瓦	高 5.0 口 13.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外端褐色 内におい 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	外面、口縁部は横溝で、肩部は寛調整。胴部は左→右方向湾り。内面、口縁部は直筒り。口唇部に調整による沈線がある。縁は鋭い。胴部は横溝で。	
89-2	環	貯蔵穴 完形	高 4.8 口 12.6	胎 細砂粒混入 焼 軟弱 色 橙色	全体に器内は薄いか特に底部が著しい。底部はやや扁平を呈し、胴上半部で直立する。口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から頸部にかけて横溝で、その他は準減し整形不明瞭。内面、口縁部は横溝で、縁は丸みがある。胴部は右上がり研磨。	
89-3	環	覆土 完形	高 5.2 口 13.7	胎 細砂粒混入 焼 軟弱 色 橙色	底部は丸底。胴部はやや内湾ぎみに立つ。口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から頸部にかけて横溝で、胴部から底部は左→右方向湾り。内面、口縁部は横溝で、縁は丸みをもつ。胴部は右上がり研磨。	
89-4	環	貯蔵穴 ほぼ完形	高 5.8 口 13.7	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	底部は丸底。胴部は内湾ぎみに立つ。胴部はなだらかで口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は指溝による横溝で、胴部は不定方向湾り。内面、口縁部は横溝で、縁は丸みをもつ。胴部から底部は横溝で後右上がり研磨。	
89-5	環	覆土 瓦	口 17.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く屈曲する。	外面、口縁部は横溝で、口端部は寛調整。胴上半部は左→右方向湾り、下半部は横方向湾り。内面、口縁部は寛調整。口唇部は強い横溝で、縁は鋭い。胴部は無で。	
89-6	環	貯蔵穴 完形	高 5.1 口 13.3	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	底部は丸底。胴部は内湾ぎみに立つ。胴部はなだらかで口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から頸部にかけて横溝で、胴部は左→右方向湾り。底部は準減のため整形不明瞭。内面、口縁部は横溝で、縁は丸みをもつ。胴部から底部は準減し整形不明瞭であるが研磨と思われる。	
89-7	環	覆土 完形	高 5.4 口 13.7	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部は丸底。胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は寛調整。胴部は直筒り。胴下半部から底部は左→右方向湾り。内面、口縁部は寛調整。口唇部に沈線あり、縁は鋭い。胴部から底部は横溝で。	
89-8	環	かまど 瓦	高 5.3 口 12.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	胴部は内湾ぎみに立ち、頸部はあまりくびれず、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は指溝による横溝で、胴部から底部は左→右方向湾り。内面、口縁部は横溝で、口端部はつまみ溝で、縁は鋭い。胴部は右上がり研磨。	
89-9	環	床面 瓦	高 5.1 口 14.8	胎 細砂粒混入 焼 軟弱 色 橙色	底部に厚みをもつ。底部は丸底で胴部は内湾ぎみに立ち口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は指溝で、胴部は直筒り。内面、口縁部は横溝で、縁は丸みをもつ。胴部は研磨されているが、器面が準減し整形不明瞭。	
89-10	環	覆土 瓦	口 14.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 におい橙 色	胴部は扁平ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から頸部は横溝で、胴下半部は直筒り。内面、口縁部は寛調整後横溝で、胴部は右上がり研磨。器面全体に荒れがみつ。	

VI 検出された遺構と遺物

図面番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
89-11	環	埋土 写	高 4.9 口 12.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 にふい 橙 色	ほぼ均一した厚みをもつ、体部は扁平に立ち上がり、口縁部は短く屈曲する。	外面、口縁部は横溝で、頸部は指環によるもので胴部から底部は直削り。内面、口縁部は直調整後横溝で、接は丸みをもつ。頸部は右上がり研磨。	底部に黒染あり。
89-12	環	床面 写	口 13.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 橙 色	口縁下部に厚みをもつ、体部は扁平に立ち上がり口縁部は丸みをもつ、口唇部で内湾する。	外面、口縁部は横溝で、体部は上→下方向斜度削り。内面、口縁部は横溝で、頸部は溝で、	一部に黒染あり。
89-13	環	床面 写	口 13.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 橙 色	器内は比較的厚い、体部は内湾ぎみに立ち口縁部でさらに内湾する。	外面、口縁部は横溝で、溝でより胴部との区分とする。頸部は直削り。内面、口縁部は横溝で、頸部は溝で後研磨。器面が丸れ方向不明瞭。	
89-14	環	上位 写	口 13.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 橙 色	体部は扁平に立ち口縁部はほぼ直立する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、接は直調整で底部上位は粗い削り。内面、口縁部は横溝で、頸部から底部は直調整後研磨。	
89-15	埴	床直 写	高 8.1 口 11.1	胎 砂粒混入 地 やや軟弱 色 黄褐色	胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、口縁部は横溝で、頸部は直調整。底部付近は直削り。内面、口縁部は直調整。胴部は溝で、内外面共に丸れ整形不明瞭。	胴部一部に黒染あり。
89-16	環	上位 写	口 11.4	胎 細砂粒混入 地 翠緑 色 暗褐色	胴部は内湾ぎみに立ち、頸部のくびれは少なく、口縁部は直立する。	外面、口縁部から頸部は横溝で、胴中央部は直削り。内面、口縁部は横溝で、溝でより接は丸みをもつ。胴部は溝で。	頸部に帯付着。
89-17	高 環	かまど 写	高 12.0 口 16.2 幅 11.0	胎 細砂粒混入 地 やや軟弱 色 橙 色	環部体部はやや扁平で、口縁部は外反する。頸部はやや円筒状を呈し裾部で急に開く。	環部外面、口縁部は横溝で、接は比較的鋭い。接に接合痕あり。内面、口縁部は横溝で、胴部は溝で、環部と胴部の接合部は凹形のはそを使う。胴部外面、胴柱部は縦方向直削り。頸部は横溝で。内面、胴柱部は整形不明瞭。裾部は横溝で。	
89-18	埴	床面 写	胴 12.0	胎 細砂粒混入 地 翠緑 色 外赤褐色 内橙 色	胴部は球形をつぶした形を呈する。	外面、胴部は縦方向直削り。内面、胴上半部に接合痕残る。下半部は横溝で。	
89-19	短頸直須壺形	中位 写	口 8.0	胎 白色砂粒混入 地 ひきしまりが強い 色 灰 色	口縁部は直立する。口縁部は鋭い。頸部はやや張りをもつ。	ミズビキ成形。口縁部は体部を絞り込み口を小さくし接合その後回転横溝で整形。外面、口縁部は直調整。胴部は直削り横溝で。内面、口縁部は回転横溝で、頸部は絞り目痕が明瞭に残る。	口縁部と肩面上位に灰白色の自然釉付着。
89-20	小型埴	床面 写	口 13.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 暗褐色	胴部は張りをもたず口縁部は緩やかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は直削り。頸部で足を止めた後残る。内面、口縁部は横溝で、胴部は溝で、接合痕残る。	

1. 住居跡(第21号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・調 色	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
89-21	甕	甕土 片	口 18.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部から口縁部にかけて縦や斜 に外反する。	外面、口縁部は寛調整後磨物で、頸部 から肩部は下→上方向磨削り。 内面、口縁部は磨物で、肩部は磨物で、	
89-22	甕	甕土 片	口 18.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外暗褐色 内によい 褐色	胴部にあまり張りをもたず胴部 はややぐびれ、口縁部は外反す る。口縁部は平肌。	外面、口縁部は磨物で、胴部から胴部 上位は磨削り。 内面、口縁部は寛調整後磨物で、接は 丸みをもつ。胴部は横方向磨削り後磨 物で。	口縁-肩部に黒斑 あり。
89-23	甕	床面 片	孔 9.0	胎 砂粒混入 焼 軟弱 色 褐色	底部は大きな穿孔をもつ長胴形 を呈する。	外面、胴中央部から下半部は下→上 方向磨削り。底部付近は上→下方向磨削 り。 内面、胴部に粘土層の接合痕残る。穿 孔は横方向磨削り。	
89-24	甕	かまど 片	孔 11.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部は直線的に立ち上がる。	外面、胴下半部は不定方向磨削り。 内面、荒れている整形不明瞭。穿孔 部は左→右方向磨削り1段調整。	
90-25	甕	床面 片	口 18.8	胎 砂粒混入 焼 軟弱 色 褐色	胴部は球形を呈し胴部は強くぐ びれ、中位に段をもち口縁部は 外反する。	外面、口縁部は磨物で、口縁部と口縁 部中位の段は寛調整。胴部は磨削り。 磨面が荒れている。 内面、口縁部は寛調整後磨物で、口唇部 は寛調整後磨物で、中位に多少くぼ みをもつ。胴部の接は鋭い。胴部は磨 物で。	
90-26	甕	甕土 ほぼ定形	高 26.0 口 18.3 底 6.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 内よい褐 色	底部は円形の平底で、胴中央部 に最大幅をもつ。胴部はくびれ 口縁部は「く」の字状に外反す る。	外面、口縁部は磨物で、頸部から胴中 央部は下→上方向磨削り。胴下半部は 横方向磨削り。底部は寛調整。 内面、口縁部は磨物で、口縁部は寛調 整で接は鋭い。胴中央部に横方向磨物で、 下半部は下→上方向磨物で、輪縁面わす かに残る。	
90-27	甕	床面 ほぼ定形	高 28.7 口 19.7 底 6.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部は平底で、胴中央部に最大 幅をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反する。	外面、口縁部は磨物で、頸部は指環に よる磨物で、胴上半部は下→上方向磨削 り。下半部は上→下方向磨削り。 内面、口縁部は磨物で、接は鋭い。胴 部は左→右方向磨物で。	
90-28	甕	甕土 片	底 7.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 内よい褐 色	底部は円形の平底で、胴部は内 湾ぎみに立つ。	外面、胴下半部は上→下斜方向磨削り。 内面、磨物で。	
90-29	甕	上位 片	口 27.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部はやや球形を呈し、口縁部 は緩やかに外反する。	外面、口縁部は磨物で、口縁部は寛調 整。胴部は下→上方向磨削り。口縁部 にも磨削り痕残る磨物で後寛調整。 内面、口縁部は磨物で、接はやや丸み をもつ。胴部は磨物で。	
90-30	甕	かまど ほぼ定形	高 30.4 口 17.6 底 6.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色 胴部内面 黒色	底部は平底で、胴中央部に最大 幅をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反する。	外面、口縁部は磨物で、口縁部は寛調 整。肩部は右→左方向。胴上半部は下 →上方向、中央部から下半部は上→下 方向磨削り。底部は磨削り。 内面、口縁部は磨物で、接は鋭い。胴 部は磨物で。	

VI 検出された遺構と遺物

図面番号	部 形	出土位置・遺存状態	法 量	粘土・焼成・色調	部 形 の 特 徴	壁 形 の 特 徴	備 考
90-31	壁	床直 5%	高 27.1 口 19.0 底 8.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 灰褐色	底部は四形の平底で、胴部は張りをもたず立ち上がり口縁部は直立する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は瓦用リ横溝溝で、 内面、口縁部は横溝で、胴上半部から中央部は瓦調整、下半部は横溝で、底部中央に凹形の刻線がある。	
90-32	壁	床面 5%	底 6.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 白に赤褐色	底部中央の筋肉は薄い、底部は四形の平底で、胴部は内湾ぶみに立ち上がる。	外面、胴下半部は下→上方向、底部は左→右方向瓦用リ、 内面、瓦用溝で、接合痕残る。	

第22号住居跡 (第91、92図)

本住居跡は遺跡の北側に位置し、東壁側は27号住居跡、南西コーナーは23号住居跡、住居中央部は25号住居跡と重複する。又北西、北東コーナーは道路下に入り検出できなかった。各住居跡との前後関係は23号住居跡を切り、27、25号住居跡に切られている。東壁の検出壁長は1.1 mを測る。他の部分は27号住居跡と床面レベルを同じくし遺存しない。西壁は一部道路下に入るが残存長さ6.5 mを測る。南壁は23号住居跡より床面が低く、壁の全長約7 mが検出された。また北壁の大部分は道路下となり壁の中央付近で約3.0 mを検出した。各壁の壁下は一直線状に掘り込んである。各コーナーはほぼ直角を呈すると考えられる。検出壁上端部は壁の崩壊が目立ち傾斜をもって立ち上がる。また南壁は東西壁とも直角に交わらず、西方に行くに従い南側へ張り出してゆく。残存壁高は重複する部分を除いて約32 cmを測る。遺存状態は良好で、壁面は平坦である。なお壁は砂質をもつ黄褐色土壌に構築している。規模は東西7.4 m、南北7.6 mを測る。本遺跡の中で最も大型の住居跡に属する。方位はN-82°-Eを測る。壁下の周溝は検出し得なかった。

床面はやや起伏をもち軟弱である。ただし東壁側のかまど付近は良く踏み込まれて堅い。柱穴は3ヶ所検出した。P₁は21×21 cm深さ50 cm、P₂は20×16 cm深さ51 cm、P₃は24×24 cm深さ21 cmを測る。いずれも覆土は炭化物粒を含む暗灰色粘質土壌で、いずれも支柱穴と考えられる。P₁は柱穴の底面に川原石を据えている。支柱穴間ではP₁-P₂間で4 m、P₂-P₃間で3.7 mを測る。各柱穴と壁間との間には一定の幅をもち、支柱穴の位置についても規格性が考えられる。

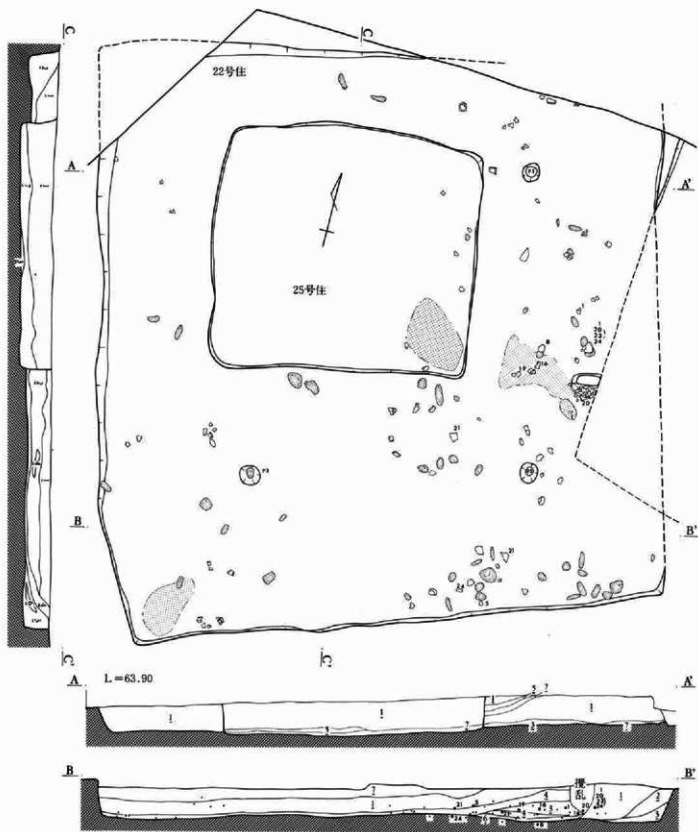
かまど本体の大部分は27号住居跡に切れ右袖部をわずかに残すのみであったが、かまどは東壁のほぼ中央部付近に付設されていたと考えられる。袖部の残存規模は長さ38 cm、袖部幅20 cmを測り、推定袖部長は推定壁から計測すると約1.2 mを測る。袖は推定壁に対し直角になることから、かまど本体の主軸も住居壁に対し直角に交わるものと考えられる。袖内壁は良く焼けている。火床は住居床面とし、火床面はほぼ平坦であった。かまど周辺には多量の炭化物、焼土、灰が散乱している。

住居跡覆土は、床面付近まで住居外から純粋に近い炭化物が、一面を覆っている。本住居跡の大半をなす覆土は炭化物、灰を含む暗褐色土層である。住居床面を覆う炭化物層は2、7、21号住居跡にみられるものと同質と考えられる。本住居跡内には建築部材の炭化物、壁及び床面(かまど周辺を除く)には焼けた痕跡もなく、本住居跡は火災に遭遇した痕跡は認められない。

遺物はかまど周辺に多量に出土し、南壁直下には多量の川原石が一括で置いた状態で出土した。

出土遺物は坏、埴、高坏、甕、須恵高坏である。

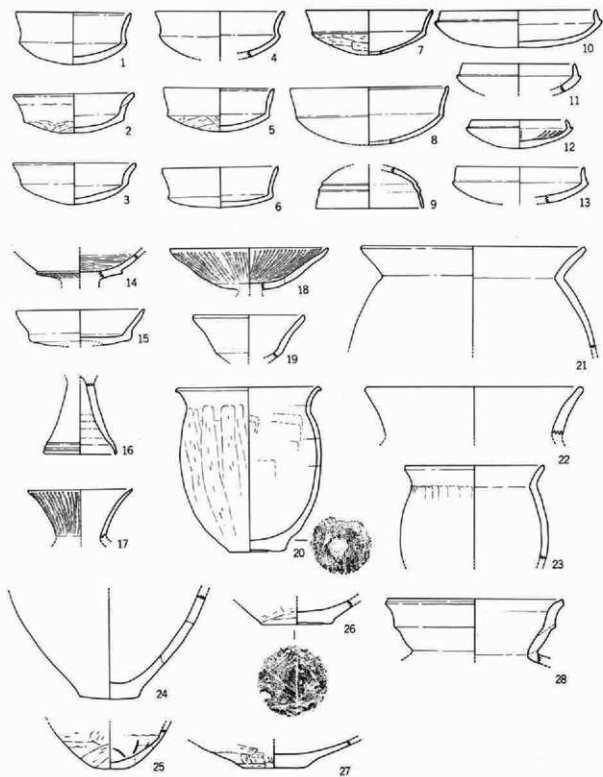
出土土器のなかでNo. 1、8、20、23、24はかまど周辺及び床面より出土している。



1. 暗褐色土層：マンガン粒を混入認め。
2. 暗褐色土層：炭化物粒、輪石褐色土を混入若干砂質を認め。
3. 暗褐色粘質土層：覆土的には2層と近似、粘質性の違いがある。
4. 褐色土層：炭化物層混入認め。
5. 暗褐色土層：炭を混入粘質。
6. 褐色土層：マンガン塩基粘質性を持つ粘々に炭化物混入。
7. 黒色土層：炭化物多量の底土層。

第91図 第22、25号住居跡

1. 住居跡 (第22号)



0 10 cm

第92图 第22号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

遺物観察表 (第92図)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	度量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
92-1	環	かまど右袖 外側 完形	高 5.5 口 12.3	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	体部に厚みがあり口縁部は薄くなる。体部は扁平状に立ち、口縁部は曲線的に外反する。口縁部は鋭い。深みのある土器。	外面、口縁部は整形後後縁部で、整形により鋭い。体部は不定方向整形。 内面、口縁部及び胎部は後縁部で、口縁部は軽いつぼみ、不定方向整形。	
92-2	環	覆土 片	高 4.2 口 13.0	胎 細砂粒混 入 焼 やや堅緻 色 灰黄褐色	口縁部に厚みをもつ。体部は扁平で口縁下半部はやや直立し、上半部で外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は整形後後縁部で、胎部は外内に向かって軽く鋭いつぼみ。胎部は不定方向整形。 内面、口縁部は後縁部で、口縁部は整形後後縁部で、整形により薄くなる。胎部は後縁部で。	
92-3	環	覆土 片	高 4.4 口 12.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胎部は内湾みに立ち、口縁部は曲線的に外反する。口縁部は小丸に反る。	外面、口縁部は整形後後縁部で、体部は不定方向整形。 内面、口縁部は後縁部で、胎部は整形後後縁部で。体部は後縁部で。	
92-4	環	覆土 片	口 13.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平を呈し、口縁部は直立ちに外反する。	外面、口縁部は後縁部で、体部は整形。 内面、全体は丁寧な後縁部で。	
92-5	環	中位 片	高 4.7 口 11.8	胎 微細粒混 入 焼 やや堅緻 色 褐色	体部はほぼ均一した厚みを持ち、口縁部は薄い。体部はやや内湾みに立ち、口縁部は直立ち。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は整形後後縁部で、整形により鋭いつぼみをもつ。体部は不定方向整形。 内面、口縁部は整形後後縁部で、整形後縁部で、胎部は丁寧な後縁部で後縁部方向研磨。	
92-6	環	覆土 片	高 4.2 口 12.4	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	体部は扁平で口縁部は長く緩やかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は整形後後縁部で、整形により鋭いつぼみをもつ。体部は不定方向整形。 内面、口縁部は後縁部で、口縁部は整形。胎部は不定方向整形。	
92-7	環	覆土 片	高 4.7 口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 暗赤褐色	比較的に薄くほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平で口縁部は斜方向に外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は整形後後縁部で、整形により鋭いつぼみをもつ。体部は不定方向整形。 内面、口縁部は左右後縁部で、体部は後縁部で。	外面体部に二次焼成を受けた痕跡あり。
92-8	環	床面 片	口 17.0	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は内湾し、口縁下半部は直立する。口縁部でやや内湾する。口縁部は鋭い。深みのある土器。	外面、口縁部は整形後後縁部で、整形により鋭いつぼみをもつ。 内面、口縁部は後縁部で、口縁部は整形によりくぼみをもつ。体部は不定方向整形。	
92-9	蓋 頂部	覆土 片	口 11.6	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 灰黄褐色	口縁部は外反し下方へ伸び、口縁部は丸い。体部との境に2段の段をもつ。焼は丸みをもつ。天井部は比較的丸いと考えられる。	マキアゲ、ミズビキによる成形。 外面、口縁部は整形後後縁部で、天井部は整形後後縁部で、焼は整形による。 内面、整形後後縁部で調整。	
92-10	環	覆土 片	高 4.0 口 16.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平に立ち上がり、口縁部で内湾する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は整形。調整により鋭いつぼみをもつ。胎部は整形後後縁部で調整。胎部は不定方向整形。 内面、口縁部は後縁部で、胎部は整形。胎部は後縁部で。	内面黒色処理

1. 住居跡 (第22号)

図版番号	部 形	出土位置・ 保存状態	法 量	胎土・施色・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
92-11	環	覆土 Ⅴ	口 12.0	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 黒褐色	体部は扁平で口縁部はやや内湾 ぎみ、体部に厚みをもつ。 口縁部は鋭い。	外面、口縁部は莖調整後機軸で、莖調 整により段をもつ。体部は不定方向莖 削り。 内面、口縁部は左右機軸で、体部は機 軸で。	
92-12	環	覆土 完形	高 3.0 口 10.1	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 暗褐色	底部に厚みをもつ。体部は扁平 で口縁部は内湾する。 口縁部は鋭い。	外面、口縁部は莖調整後機軸で、莖調 整により段をもつ。体部は不定方向莖 削り。 内面、口縁部は機軸で、体部は丁寧な 機軸で後放射状研磨。	
92-13	環	覆土 Ⅴ	口 13.6	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 黒褐色	底部は扁平で、口縁部は内湾さ みに立つ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は莖調整後機軸で、莖調 整により段をもつ。体部は不定方 向莖削り。 内面、口縁部及び頸部は莖調整後機軸 で、底部は機軸で後放射状研磨。	
92-14	高 環	覆土 Ⅴ	体 9.5	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部 は扁平で口縁部は縦やかに外反 する。	外面、口縁部は莖調整、莖調整により 段をもつ。体部は頸接合部より外方へ 向かって右廻り刷毛目調整。刷毛目は 粗い (2mm間隔の3cm幅)。 内面、右廻り刷毛目調整。	
92-15	高 環	覆土 Ⅴ	口 13.8	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 褐色	体部は厚く口縁部は薄くなる。 体部は扁平に立ち口縁部は直線的 に外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は機軸で、頸部は莖調整 により段をもつ。体部は莖方向莖調整。 内面、口縁部は丁寧な機軸で、頸部は 莖調整によりやややくばむ。体部は丁寧 な機軸で。	
92-16	高 環 遺存部	中位 Ⅴ	縦 7.8	胎 緻密 施 堅磁 色 灰褐色	環接合部付近は厚く頸部は薄く なる。頸部は「へ」の字状に開 く。頸部に2本の沈線をもち環 縁部は内湾する。透孔は3ヶ所 と考えられる。	内外面共に回転軸で、頸部の沈線は莖 調整。体部は指節による機軸で板が明瞭 に残る。	
92-17	埴	覆土 Ⅴ	口 10.2	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 におい橙 色	頸部から口縁部につれて薄くな る。口縁部は長く外反する。 口縁部は鋭い。	外面、機軸で後板方向研磨。 内面、左→右方向機軸で。	
92-18	高 環	覆土 Ⅴ	口 17.0	胎 細砂粒混 入 施 堅磁 色 浅黄褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部 から口縁部まで曲線的に立ち上 がる。口縁部は小丸。全体に丸 みをもった整形。	外面、頸部は機軸で後上→下方向放射状 研磨。体部は下→上方向莖調整。研磨 間隔は不規則。 内面、体部は機軸で後中心部から口縁部 に向かって研磨。	内面に黒斑あり。
92-19	高 環	中位 Ⅴ	口 12.0	胎 微細粒混 入 施 やや堅磁 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁 部は曲線的に立ち上がり。体部 との境におずかに段が見られ る。口縁部は丸い。	外面、口縁部は機軸で、体部は機軸で。 内面、全体を機軸で。	
92-20	小笠 外側 完形	高 17.4 口 15.6 底 6.1	胎 砂粒混入 施 堅磁 色 明褐色	底部に最大厚をもち口縁部に向 かうに従って薄くなる。底部は平 底で立ち上がりをもつ。胴中央 部に張りをもち、口縁部はなだ らかに外反し口縁部で外方へ返 る。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は機軸で、口縁部は莖評 之。頸部は下→上方向莖削り。底部中 央はややくばむ木葉状あり、立ち上 り部は機軸で。 内面、口縁部は機軸で、機軸は鋭い。胴 部は莖方向莖機軸で。	底部に木葉状。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状況	法量	胎土・位置・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
92-21	甕	中位 瓦	口 24.0	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は強く外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な修整で、口縁部は軽い寛押え。胴部は寛調整により浅い沈線がある。胴部は横方向に削り。内面、口縁部及び胴部は左右に削り。胴部に寛調整による鋭い稜をもつ。	
92-22	甕	中位 瓦	口 23.4	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は丸い。	口縁部は内外両面に左右に削り。	
92-23	小型甕	床面 口縁部定形	口 14.5	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴中央部でやや張りをもつ。口縁部はなだらかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は寛調整後修整で、胴部は下→上方向。胴中央部は横方向に削り。内面、口縁部は左右に削り。口縁部は軽い寛押え。胴部は寛調整。	
92-24	甕	床面 底部 定形	底 6.1	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもつ。胴部はほぼ均一。底部は平底で胴部はほぼ直線的に外反する。	外面、胴部は下→上方向に削り。底部は周辺を寛調整し、中央部がややくむ。内面、胴部は寛調整。	内面底部から5cmは褐色で、それ以上は灰褐色、褐色となる。通が美しい。
92-25	甕	覆土 底部 定形	底 2.6	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	底部にやや厚みをもつ。底部は器形に対し小型平底で胴部は狭く削化する。	外面、胴部は削り。底部は削り、削りにより底部を造り出す。内面、丁寧な修整。	
92-26	甕	覆土 底部 定形	底 7.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 暗赤褐色	底部に厚みをもつ。底部はやや上げ底で木製痕。胴部は球形を呈する。	外面、胴部は右→左方向に削り。底部周辺を寛調整し、立ち上がり部は削り。内面、寛調整で、器面がやや荒れている。	
92-27	甕	覆土 底部 定形	底 6.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	底部に厚みをもつ。底部は平底で胴部は球形を呈する。	外面、胴部は不定方向に削り。底部は寛調整で、立ち上がり部は寛調整。内面、丁寧な修整。	外面に煤付着。
92-28	甕	覆土 瓦	口 18.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は強く屈曲し「く」の字状に外反する。口縁部中位に段をもつ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部の段は寛調整により断面三角形。口縁部は寛調整。胴部は寛調整。全体は寛調整後丁寧な修整により丸みをもたせている。内面、口縁部は寛調整。口縁部をつまむ。全体は寛調整後修整。	

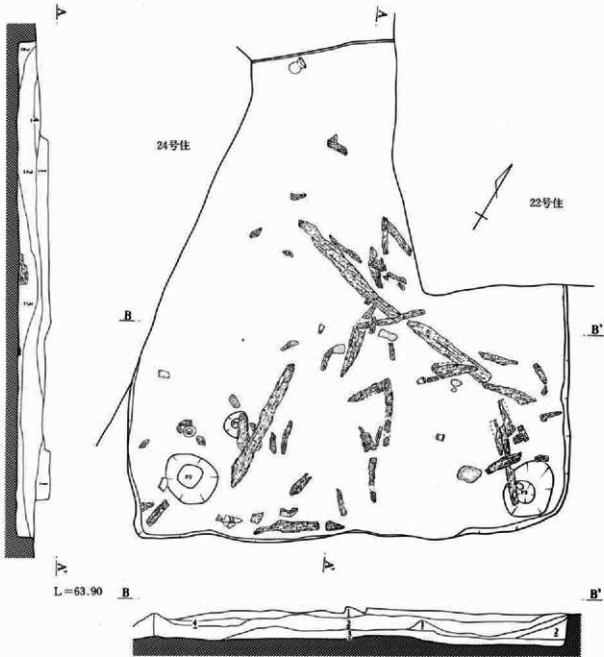
第23号住居跡（第93～98図）

本住居跡は北西コーナー付近に位置する。本住居跡の南東コーナーは22号住居跡、北西コーナーから南は24号住居跡とそれぞれ重複する。両住居跡とも本住居跡を切り、床面も低い。よって重複部分の床面は遺失している。本住居跡の壁を完全に残すのは南壁のみであり、壁長5.7mを測る。他壁の残存長は東壁3m、西壁2m、北壁2mをそれぞれ測る。平面形では東、南両壁は一直線状に掘り込みコーナーもほぼ直角を呈する。西壁はやや中膨らみで、北壁は外反する。残存壁から住居跡の規模を測ると東西5.9m、南北6.5mの南北に長い方形住居跡である。方位は南北壁を棟方向と考えた時N-29°-Wを測る。壁及び床面は砂質を持つ暗褐色土層である。処々に垂直に立ち上がっている箇所もあるが、ほとんどは壁の上端部が崩壊し、斜方向に立ち上がる。いずれも壁面は平坦を呈し、各壁とも

1. 住居跡 (第23号)

遺存状態は良好である。残存壁高は東壁45cm、他壁は25cm程度であった。

床面はほぼ平坦で全体に良く踏み込まれ堅い。床面上には炭化物、焼土が多量に検出された。炭化物内には住居の建築部材と考えられる物もあり、そのほとんどが住居中央部に向けて出土している。



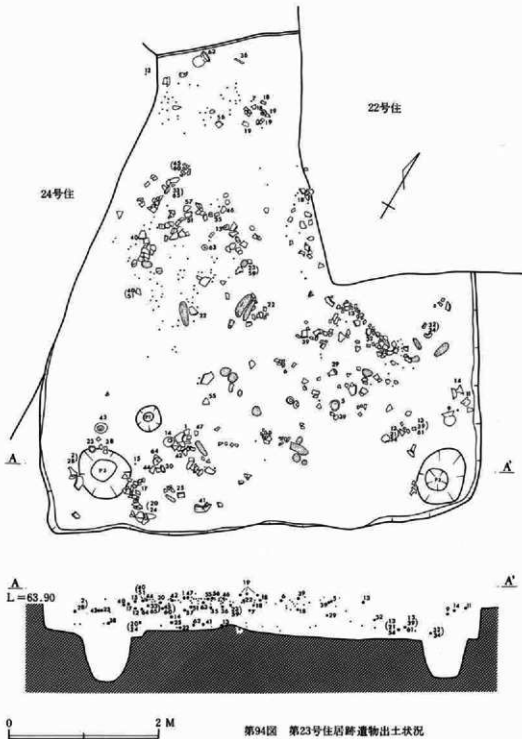
1. 暗褐色土層：多量の炭化物を混入し、遺物量も多く層成込み。 3. 暗褐色土層：多量の炭化物、炭化材、焼土、灰等を混入する。やや粘質。
 2. 暗褐色土層：炭化物は混入しない固くやや砂質。 4. 暗褐色土層：2層と近似的だが、粘質で暗い。

0 2 M

第93図 第23号住居跡炭化物出土状況

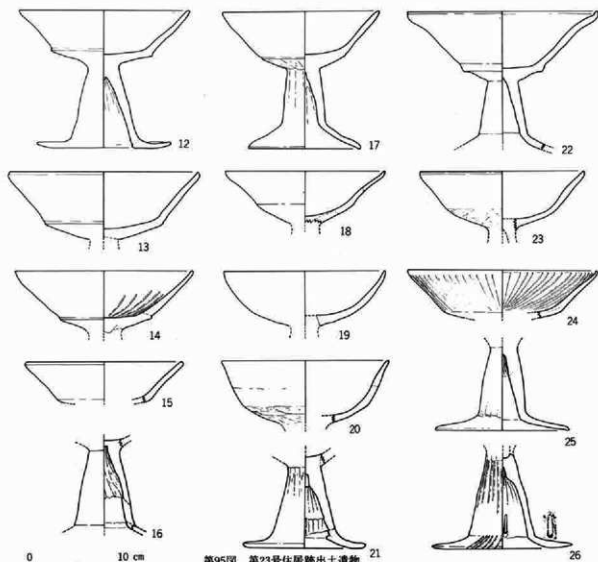
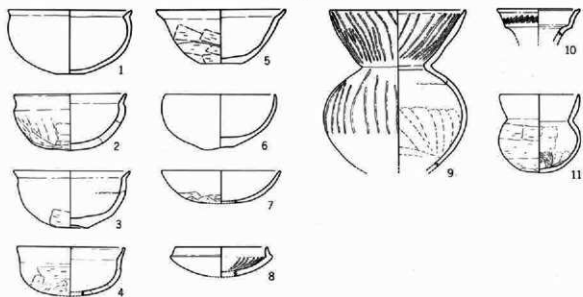
VI 検出された遺構と遺物

また床面、壁が焼かれている部分もあり、本住居跡は火災に遭遇しているものと考えられる。床面上には3ヶ所のピットが検出した。P₁は35×38cmの円形を呈し、深さ55cmを測る。覆土は炭化物粒を混入する暗褐色土層である。これらピットは西南壁より1.5mの位置にあり、深さ、位置、覆土の状況から主柱穴と考えられる。P₂、P₃は70×80cmのほぼ円形を呈し、いずれも深さ58cm、52cmを測る。覆土



第94図 第23号住居跡遺物出土状況

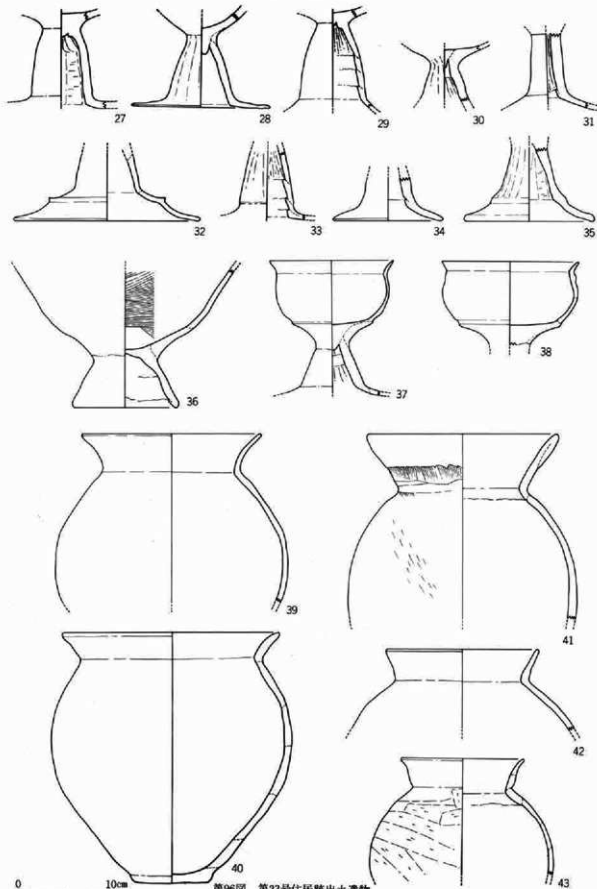
1. 住居跡 (第23号)



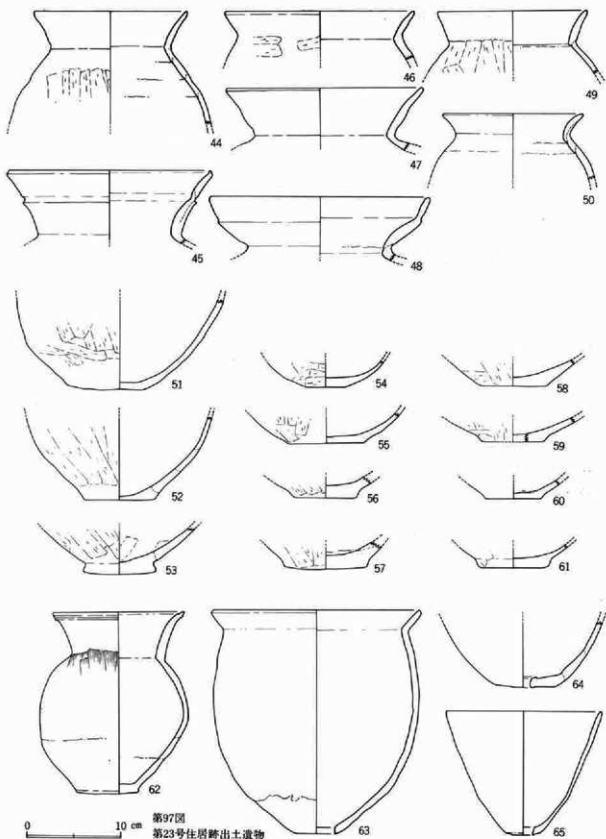
0 10 cm

第95图 第23号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



1. 住居跡 (第23号)



VI 検出された遺構と遺物

は炭化物、焼土が多量に混入し、火災時にはこれらビットは空いていたことがうかがわれ、位置的にも各壁コーナーであることから貯蔵穴と考えられる。

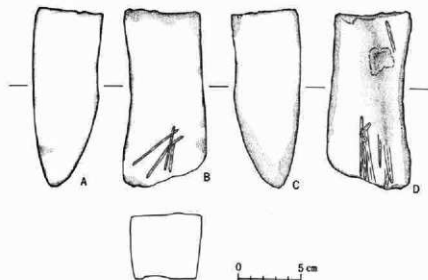
かまどを付設した痕跡がなく、炉の可能性も考慮し、床面を精査したが、炉も不明であった。

住居跡覆土は床面直上に多量の炭化物、灰、焼土を混入する暗黒色土層があり、これらは火災による堆積物と考えられる。その上層は炭化物を混入しない暗褐色砂質土層が間層として入る。上層は多量の炭化物、土器を含む層が住居跡外から流れ込んでいる。この炭化物層の流れ込み方は7、21号住居跡等に良く似ている。

遺物は最上層の炭化物層に圧倒的に多く出土している。出土遺物の大半は覆土上位、中位の位置である。

出土遺物は環、埴、埴、高環、台付甕、甕、砥石であった。本住居跡上面出土の高環の破片が36号住居跡床面上の高環と接合する。

出土土器のなかでNo.4、13、14、20~22、24、25、29、32、34、38、41、54、61、62、64は床面上より出土している。他の遺物は中位、上位でこのうち器種器形により本住居跡に伴うものと見られるものも多々ある。



第98図 第23号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第95、96、97図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
95-1	環	中位 口縁部片	高 6.7 口 13.2	胎 凝砂粒混入 焼 紫褐色 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は球形を呈し、口縁部は短く外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は圓筒状。体部は不定方向向外で、 内面、口唇部は圓筒状、壁は薄い。体部は丁寧な輪で。	
95-2	環	中位 片	高 5.9 口 12.0	胎 凝砂粒混入 焼 紫褐色 色 褐色	体部は均一した厚みをもち、口縁部は薄くなる。体部は内湾ぎみに立ち口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は指頭による積撫で、体上半部は積撫で、下半部は左→右方向圓筒状。 内面、口唇部は圓筒調整後積撫で。胴部は積撫で、底部は不定方向向外で。	
95-3	環	覆土 ほぼ完形	高 6.0 口 11.7 底 3.4	胎 凝砂粒混入 焼 紫褐色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつが、体部と底部との接合付近で厚みをもち、底部は小さくぼみ底で胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。口縁部は鋭い。	外面、胴部は積撫でにより丸みをもつ。胴上半部は積撫で、下半部は積撫で。底部は丁寧な積撫で。 内面、口唇部は圓筒調整後積撫で。胴部は積撫でにより丸みをもつ。体部は積撫で。	整形順序 胴部→口縁部

1. 住居跡(第23号)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・地皮・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
95-4	坏	球面瓦	口 11.6	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は扁平で、胴部はやや直立し、口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は指頭撫で、体部は不定方向磨削り。 内面、口縁部は莖調整後撫で、体部は不定方向撫で。	
95-5	坏	中位定形	高 5.4 口 13.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底で胴部は内湾ぎみに立ち、口縁部でなだらかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は左右横撫で、胴部は左上→右下方向磨削り。底部は不定方向磨削り。 内面、口唇部は莖調整後左右横撫で、胴部は左右横撫で、底部は指頭圧痕。	
95-6	坏	中位瓦	高 5.5 口 11.8	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	底部に厚みをもち、胴、口縁部は薄くなる。底部は小さな平底で、胴部から口縁部にかけて内湾ぎみに立つ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は莖調整後丁寧な横撫で、胴部は莖調整。底部は莖磨り。 内面、口唇部は強い指頭撫で、体部は莖調整後丁寧な横撫で。	
95-7	坏	中位瓦	口 12.8	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 黒褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立つ。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な横撫で、体部は莖磨り。 内面、口縁部は横撫で、体部は莖撫で。	
95-8	坏	覆土瓦片	口 9.8	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 濃い橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は内湾し蓋受部は明確。体部はやや扁平。	外面、口縁部は微莖調整。蓋受部は莖調整により強い段をもつ。体部は莖磨り。 内面、口唇部は横莖調整。体部は丁寧な不定方向横撫で後左上がり左磨り研磨。	
95-9	埴	下位底部欠損	口 14.5	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつが、口唇部のみ薄くなる。口縁部は大きく内湾ぎみに開く。胴部は強くしまり胴部はやや球形を呈する。	外面、口縁部は撫で、口唇部は横撫で、胴部は莖調整。胴上半部は横撫で、下半部は不定方向磨削り。 内面、口縁部は撫で、口唇部は莖調整により丸い段をもつ。胴部は下→上方向横撫で、莖収束後。経磨は口縁部内外面と胴上半部外面に仕上げとして施文。口縁部内面は細かく、外面は粗い。	
95-10	埴須臾器	覆土瓦	口 8.8	胎 黒灰粒子混入 灰白色 地 粘土中央に灰黒色の層が見られる。 やや軟弱 色 灰色	口縁部は外反し、中径で段をもち更に外反する。口縁部はわずかに反る。	ミズヒキによる成形。 外面、口縁部は回転撫で。後の上部は4本1巻の底状文を施す。 内面、回転撫で。口唇部は莖調整によりややくぼむ。	
95-11	埴	中位ほぼ定形	高 8.3 口 8.5 底 7.9	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 濃い橙	口縁部中程に厚みをもつ。口縁部は内湾ぎみに直立する。口縁部は薄く丸い。胴部はしまり胴上半部は最大幅をもつ。底部は丸底、内面に凹凸が見られる。	外面、口縁部は撫で、胴部は莖調整。胴上半部に張りが見え、莖調整後横撫で。胴下半部は不定方向磨削り。 内面、口縁部は莖調整後撫で、胴部に鋭い段をもつ。胴部は丁寧な横撫で、底部は指頭圧痕。	
95-12	高坏	中位ほぼ定形	高 14.5 口 18.7 腹 14.2	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 橙色	胴部体部は平底で、口縁部は外反ぎみに立つ。口縁部は鋭い。胴部は胴部との接合部は細く下方へやや影らみをもち凹凸状を呈する。胴部は凹凸状に開き縦線部ははね上がる。	胴部外面、口縁部は横撫で、口縁部との境は莖調整による明確な段をもつ。体部は莖調整。 内面、口縁部は横撫で、底部は横撫で、胴部外面、胴部は横撫で、胴部は横撫で。 内面、胴柱上半部は左→右方向磨削り。下半部は右→左方向横撫で、胴部は横撫で。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
95-13	高環	床面 写	高 7.2 口 20.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	脚柱合部以外はほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平に立ち口縁部は縦く反する。口唇部がやや内湾する。	外面、口縁部は整形調整後横撫で。口縁部は整形調整。口縁部との境は整形調整。体部は不定方向整形調整。 内面、口縁部は横撫で、口唇部は強い横撫で。底部は整形調整。	外面に黒斑あり。
95-14	高環	床面 写	口 19.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	体部に厚みをもち、口縁部は薄くなる。口縁部は直線的に大きく開き、体部は扁平を呈する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は左右横撫で。体部との境は整形調整により段をもつ。体部は不定方向整形調整。接合は平接。 内面、口縁部は横撫で。体部は整形調整後環部中程まで縦方向研磨。	口縁部局に黒斑あり。
95-15	高環	中位 写	口 17.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部はやや外反きみに立ち、口唇部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。体部は整形調整。 内面、横撫で。研磨を施していると思われるが摩滅のため不明確。口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。	
95-16	高環	覆土 脚部写	残存高 9.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	環部接合部は絞り、円錐台形状に開く。内面に2ヶ所の輪模が見られる。	外面、脚柱部は縦方向整形調整後横撫で。 内面、脚柱上半部は絞り目状、下半部は輪模のみ縦整形調整。	
95-17	高環	中位 写	高 14.5 口 15.9 底 12.1	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	環部に最大厚をもつ。体部は小さく口縁部は低い。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部は低い。脚部は細く裾部は一旦に開く。裾縁部は丸い。	環部外面、口縁部は横撫で。口縁部との境は整形調整によりわずかな段をもつ。体部は整形調整。 内面、口縁部は横撫で。体部整形調整。 脚部外面、縦方向整形調整後右一左方向横撫で。裾部は横撫で。環部との接合は横方向整形調整。 内面、絞り目状、裾部との境は横撫で。裾部は丁寧な横撫で。	
95-18	高環	中位 写	口 16.8	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部に厚みをもち、口縁部に向かうに従い次第に薄くなる。底部から口縁部にかけて、なだらかに立ち、口縁部との境にわずかな段が見られる。	外面、口縁部は不定方向整形調整によるが、横で横がわずかに残る。体部整形調整後横撫で。 内面、口唇部は強い横撫でによりややくぼむ。体部は整形調整。 脚部との接合は底込式。	
95-19	高環	中位 写	口 17.0	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 暗褐色	底部に厚みをもち、次第に薄くなる。底部から口縁部まで内湾きみに立つ。外縁はわずかに見られる。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で。横は整形調整によりわずかに認められる。体部は整形調整。 内面、全体は横撫で。口縁部は摩滅している。	
95-20	高環	床面 写	口 18.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部から内湾きみに立つ。口縁部は丸い。深みのある環部。	外面、口縁部は横撫で。体下半部は下一上方向、上半部は左一右方向整形調整。 内面、口唇部は横撫で。全体は整形調整。 内面、口縁部は横撫で。全体は整形調整。	整形順序 口縁部一体部
95-21	高環	床面 写	高 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 暗褐色	脚柱部は比較的太く円錐台形状に開く。裾部はなだらかに開き、裾縁部は平坦になる。裾縁部は丸い。	外面、脚柱部は整形調整後下一上方向整形調整で。裾部は整形調整後横撫で。 内面、脚柱部は絞り目状で調整は一切加えられていない。裾部は円板状に成形し、脚柱部に貼り付ける。円板は脚柱部より内側に入る。左右横撫で。	

1. 住居跡(第23号)

図面番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・地皮・色調	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
95-22	高 環	床面 堀	残存高 14.6 口 20.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	環部体部は平坦で、口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反し上半部で一層出る。口端部は狭い。脚部脚柱部は短く円錐台形状に開く。裾部はなだらかに開く。	環部外面、口縁部は焼で、口端部は調整。体部は丁寧な焼で。 内面、口唇部は調整後焼後焼で、調整によりやややくばむ。全体は焼で。 脚部外面、環部接合部は焼後で、脚柱部は焼で。 内面、脚柱上部に絞り目肌、絞り目上を焼で、裾部は焼後で。	
95-23	高 環	中位 堀	口 17.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	体部から口端部にかけて薄くなる。体部はやや扁平で口縁部はなだらかに外反する。口唇部はやや内湾する。口端部は小丸。	外面、口縁部は焼で後右上がり放射状研磨。体部は不定方向焼後で。 内面、口縁部は右上がり放射状研磨。口唇部は調整後軽微焼後で、底部は焼後で。	整形順序 研磨→口唇部焼で 一体部外面。
95-24	高 環	床面 堀	口 20.0	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部から口縁部まで内湾きみに立つ。口端部は狭い。体部との境に緩い段。	外面、口縁部は調整後不定方向焼で、口端部は調整。体部は調整型による。体部は不定方向調整。 内面、口唇部は強い微焼で、全体は丁寧な焼により平流。	
95-25	高 環	床面 堀	厚 14.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	環接合部から裾端部に向かうにつれて、次第に薄くなる。脚柱部の接合部は細く円錐台形状に開く。裾部は円板状に開く。裾端部は狭い。	外面、脚柱部は上→下方向焼後で、裾部は焼後で。 内面、脚柱上部は絞り目肌、下部は回転選り後右→左方向焼で、裾部は焼後で。	
95-26	高 環	中位 脚部定形	残存高 10.0 厚 13.9	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	脚上半部に厚みをもつ。脚柱部は下半部がやや窄む。円錐台形状を呈する。裾部は円板状である。裾端部は丸い。	外面、環接合部に細かな選り。脚柱部は焼で後縦方向研磨。裾部も同様。 内面、脚柱上半部に帯い絞り目肌。下半部は回転調整。裾部は焼後で。	成形は脚柱部に環部を貼る後合帆。 内面に置圧痕 長さ2.0cm、深さ0.3cm、寛厚さ0.2cm。
96-27	高 環	黄土 脚柱部定形	残存高 10.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明赤褐色	環接合部と裾部の境は強くしまり、中程は膨らむ。裾部は「く」の字状に開く。	外面、脚柱部は調整後焼で、環接合部と裾接合部は強い微選後で。裾部は焼後で。 内面、脚上半部に絞り目肌、中、上半部は右→左方向回転調整。裾部は焼後で、環部との接合はぞは円錐形。	
96-28	高 環	中位 堀	厚 14.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	脚柱部はほぼ均一した厚みをもつが、裾部は薄くなる。脚柱部は環接合部がしまり中部らみで「へ」の字状に開く。裾部は円板状に開く。裾端部は狭い。	外面、脚柱部は縦方向選り後焼で、裾部は焼後で。 内面、脚柱部は回転選り。裾部は焼後で、脚部整形後環部との接合。	
96-29	高 環	床面 脚部定形	残存高 10.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明赤褐色	環接合部はしまりやや中膨らみで「へ」の字状に開く。 内面、4ヶ所に輪痕が見られる。	外面、脚柱部は調整。裾接合部は微選後で。 内面、脚柱上半部は絞り目肌、下半部は輪痕3段の成形。輪痕は置圧痕。脚柱部を整形後環部接合。	
96-30	高 環	中位 定形	残存高 7.7	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。環部底部は平坦。環接合部がしまり円錐台形状を呈する。	外面、環接合部は微選後で、脚柱部は焼で。 内面、絞り目肌。ほぼ円錐形。環、脚とも成形後接合。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
96-31	高 杯	覆土 脚柱部完形	残存高 8.0	胎 微細粒混 入 焼 やや軟弱 色 橙色	脚柱部は細く円柱状を呈する。 裾部はなだらかに開く。	外面、脚柱部は寛調整後焼で、裾部は 黄焼で、 内面、絞り目線で調整なし。裾部は粘 土を嵌合し成形後黄焼で。	
96-32	高 杯	床面 片	径 20.0	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。脚柱 部はややゆらみを持ち、裾部は 2段になっている。上段はやや 平坦さみで鋭い稜をもち、下段 はなだらかに開く。裾端部は丸 い。	外面、脚柱部は焼で、裾部の稜は寛調 整、稜の上端は指頭焼で、稜を除いて 丁寧な左→右方向焼で。 内面、全体は丁寧な左→右方向焼で。	
96-33	高 杯	中位 脚柱部完形	残存高 7.3	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 明赤褐色	脚部は「ハ」の字状にやや丸みを 呈する。裾部は一次に開く。内面 に3ヶ所の輪積痕が見られる。	外面、脚柱部は下→上方向捩り後焼 で、裾部は黄焼で。 内面、脚上部は回転捩り、下半部 は輪積の指頭焼。裾部は焼で、脚部 は4段成形。輪積は右廻りに粘土柱を 巻く。	
96-34	高 杯	床面 片	径 11.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	円錐台形状脚柱部からやや円板 状の裾部となる。裾端部は鋭い。 内面に1段の輪積痕。	外面、厚減し整形不明瞭。脚部、裾部 とも焼でを施す。 内面、輪積は左巻き、輪積は寛調整。 裾部は黄焼で。	
96-35	高 杯	中位 完形	径 14.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 橙色	脚柱部はラッパ状に開き、裾部 との境に段をまつ。裾部は扁平。 裾端部は丸みをもつ。	外面、脚柱部は上→下方向調整、段 は寛調整。裾部は黄焼で、裾端部は軽 い捩り焼。 内面、脚柱部に絞り目線、その上を右 廻り回転捩り。裾部は黄焼で。	
96-36	台付鉢	中位 台部完形	径 11.3	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 にぶい橙 色	台部が短く大きく開く。台部内 面は折り返し凹凸が強い。端 部はやや平滑。脚部は大きく球 形を呈する。	脚部外面、下→上方向捩り。 内面、脚部から底部への髹状工具によ る整形。 脚部外面、寛調整後焼で。 内面、輪積成形痕がある。嵌合部を右 廻り指頭焼で引き調整。端部は折り返 し黄焼で。	
96-37	高 杯	覆土 片	口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	杯部は口縁部が鋭やかに外反す る。口端部は薄く鋭い。脚部は 円錐台形状に開き裾部は緩やか に開く。内斜口縁の杯に脚部を 嵌合した彫形。	杯部外面、口縁部は丁寧な指頭焼で。 杯部は寛調整。 内面、口縁部は指頭焼で、杯部は焼で。 脚柱受部は浅い円板状で嵌合部を寛調 整。 脚部外面、脚柱部は黄焼で、裾部は黄 焼で。 内面、脚柱部は寛調整。裾部は黄焼で。 ほぞは円錐形。	器面が厚減し整形 不明瞭。
96-38	高 杯	床面 片	口 14.0	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 橙色	内面底部は平底で胴中央部に最 大幅をもち、上半部は内傾し、 口縁部はなだらかに外反する。 口端部は鋭い。内斜口縁の杯に 脚部を嵌合した彫形。	外面、口縁部は黄焼で。胴上半部に鋭 い指頭焼によりよりぼみが見られる。 脚部は焼で、胴端部に寛調整によりわ ずかな段が見られる。底部は丁寧な黄 焼で。 内面、口唇部は強い黄焼で、脚部及び 底部は丁寧な焼で。	

1. 住居跡(第23号)

図版番号	器形	出土位置・ 保存状態	流量	胎土・地色・色調	器形の特徴	器形の特徴	備考
96-29	甕	下位 Ⅲ	□ 19.2	胎 砂粒混入 緑泥片岩 含む。 地 翠緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。口端部は丸い。胴部は球形を呈する。	内外面共に器面が摩滅し整形不明瞭。砂粒が露出している。口縁部内面にわずかの横溝が認められる。	
96-40	甕	中位 Ⅲ 口縁部わず か残存	高 26.0 □ 24.0 底 7.6	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 褐色	底部は平底で胴中央付近に最大幅をもつ。上半部に膨らみをもたらす。下半部ではまる。口縁部は「く」の字状に外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は左→右方向で。胴部は横溝で。胴上半部は下→上方向、下→上方向に削り。底部は丁寧な一定方向に削り。 内面、口縁部は横溝で。胴部は寛調整により鋭い稜をもつ。胴部は横溝で。底部は横溝で。	外面胴部上位～中位下あたりまで2次焼成あり。
96-41	甕	床面 Ⅲ	□ 20.2	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 褐色	口縁部は強く屈曲し「く」の字状に外反する。口縁部上半は折り返し口縁。胴部中位で膨らみをもたらす最大幅となる。口端部は丸い。	外面、口縁上半部は右→左方向で整形。下半部は腹方向に削り。口縁部の折り返しは朝毛目調整後折り返す。胴部は横溝で。胴部は下→上斜方向に朝毛目整形。	
96-42	甕	中位 Ⅲ	□ 16.4	胎 砂粒混入 地 やや堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口端部は丸い。胴部はなで割で胴部は丸みをもつ。	外面、口縁部は左右横溝で。胴部は横溝で。胴部は腹方向に削り。内面、口縁部は寛調整後左右削り。後には寛調整により鋭い。胴部は横方向に削り。	胴部に粘土接合痕。
96-43	甕	中位 Ⅲ	□ 13.2	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴中央部に最大幅をもつ球形を呈する。胴部は屈曲し「く」の字状に外反する。口端部で更に外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は横溝で。胴部は腹方向に削り後横溝で。胴部は幅2cmの右→左方向に削り。 内面、口縁部は横溝で。胴部は横溝でにより鋭くする。胴部は幅2～2.5cm横溝で。	
97-44	甕	上位 Ⅲ	□ 16.4	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部はややなで割で中央付近に最大幅をもつ。口端部は鋭い。	外面、口縁部は丁寧な横溝で。胴部は上→下方向に削り。 内面、口縁部は寛調整後左右横溝で。寛調整により鋭い稜をもつ。胴部は左→右方向に削り。 粘土接合痕が認められる。	
97-45	甕	中位 Ⅲ	□ 21.6	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 灰褐色	口縁部は強く屈曲し外反する。口縁部中位に段をもつ。口端部は鋭い。	外面、寛調整後横溝で。後には寛調整により鋭い稜をもつ。口端部は鋭い稜。 内面、横溝で。外縁反折に強い筋溝溝で。口唇部は寛調整によりやややくばむ。	
97-46	甕	中位 Ⅲ	□ 20.4	胎 細砂粒混 入 地 翠緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は短く「く」の字状に外反する。口端部は鋭い。	外面、口縁部は横溝で。口端部は鋭い稜をもつ。胴部は横方向に削り。 内面、口縁部は横溝で。口唇部は寛調整によりやややくばむ。後には鋭い。胴部は寛調整。	
97-47	甕	中位 Ⅲ	□ 20.3	胎 砂粒混入 地 翠緑 色 褐色	口縁部中位に厚みをもつ。口縁部は強く外反する。口端部は丸い。胴部は膨らみをもつ。	外面、口縁部は左右横溝で。胴部は指頭による横溝で。胴部は削り。 内面、口縁部は左右横溝で。口唇部は指頭溝でによりやややくばむ。胴部は横溝でにより丸みをもつ。胴部は横溝で。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
97-48	甕	覆土 片	口 23.0	胎 細砂粒混 入 焼 翠緑 色 褐色	口縁部は強く屈曲し外反する。 口縁部中に段をもち段より上 は直立する。	外面、肩調整後横撫で、段は肩調整に よるか撫でのため丸くなる。胴部は横 撫で。 内面、全体は丁寧な撫で。口縁部は肩 調整後撫で、ややくぼむ。	
97-49	甕	上位 口縁部定形	口 16.0	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 濃い褐色	口縁部は厚く、胴部は薄い。口 縁部は「く」の字状に外反する。 胴部は比較的丸みをもつ。口縁 部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な左→右方向横撫 で、胴部は2.5-3.0cm幅の下→上方向 縦捩り、底部で止める真直後。 内面、口縁部は肩調整後右→左方向横 撫で、胴部は2.5-3.0cm幅の左→右方向横 撫で、段は鋭い。	
97-50	甕	覆土 片砂	口 15.0	胎 細砂粒混 入 焼 翠緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつが、口 縁部で薄くなる。胴部は張り口 縁部は「く」の字状に外反する。 口縁部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な横撫で。胴部は 横撫で。胴部は真直後。 内面、口縁部は横撫で。胴部に口縁部 からの撫で付け粘土が見られる。胴部 は肩調整。	
97-51	甕	中位 瓦	底 8.2	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部中央がやや薄く、周辺に厚 みがある。底部は平底で胴部は 球形を呈する。	外面、胴中央は上→下方向縦捩り。 下部は右→左方向縦捩り。底部は不定 方向縦捩り。 内面、不定方向横撫で。	整形順序 底部→胴下部。
97-52	甕	覆土 定形	底 7.4	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部中央が深く周辺は厚い。底 部は平底でわずかに立ち上がり が見られ胴部へ続く。胴部は内湾 のまみに立つ。	外面、胴部は下→上方向縦捩り。底部 は不定方向縦捩り。立ち上がり部は横 撫で。 内面、肩調整後横撫で。	外面胴下部に二次 焼成痕。
97-53	甕	覆土 底部定形	底 7.8	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 濃い小 褐色	底部に厚みをもつ。底部は平底 で立ち上がりをもつ。底部から 胴部にかけて屈曲し外反する。	外面、胴部は下→上方向縦捩り。底部 は右側縦捩り。 内面、不定方向横撫で。	
97-54	甕	床面 底部定形	底 4.4	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部から胴 部にかけて内湾のまみに立つ。 底部輪郭は不明瞭。	外面、胴部は左→右方向縦捩り。底部 を造り出す。	
97-55	甕	中位 瓦	底 8.1	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 黒褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。平均 的に薄い。底部は平底で胴部に 張りがある。	外面、胴部は下→上方向縦捩り。底部 は一定方向縦捩り。 内面、底部は丁寧な撫で。	
97-56	甕	中位 底部定形	底 6.9	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 濃い褐色	底部は比較的厚い平底、底部0.5 -1.0cmの有段の立ち上がりをも つ。	外面、胴部は縦方向縦捩り。底部は不定 方向縦捩り。立ち上がり部は横撫で。 内面、横撫で。	
97-57	甕	中位 底部定形	底 9.0	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部は平底で厚みがあり定形 がある。底部にやや造り出しが 見られる。	外面、胴部は上→下方向縦捩り。 内面、横撫で。	
97-58	甕	上位 片	底 7.3	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部は平底で直接胴部へ続く。	外面、胴部は上→下方向縦捩り。底部 は真直後。 内面、底部は横撫で。	整形順序 底部→胴部
97-59	甕	中位 片	底 6.6	胎 砂粒混入 焼 翠緑 色 褐色	底部は平底で造り出しをもつ。 胴部は張りがある。	内面、底部は縦捩り。 内面、横撫で。撫で説明書。	
97-60	甕	中位 定形	底 6.0	胎 細砂粒混 入 焼 翠緑 色 暗褐色	底部周辺に厚みをもつ。底部は 平底で立ち上がりをもつ。内面 に丸みをもたせている。	外面、胴部は縦捩り。底部は不定方向 肩調整。立ち上がり部は横撫で。	

1. 住居跡 (第24号)

図版番号	群形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・焼成・土調	群形の特徴	整形の特徴	備考
97-61	竪	床面 %	底 8.2	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 棕色	底部に厚みをもつ、底部は平底で造り出しをもち胴部へ続く。	外面、胴部は既調整。底部は丁寧な既調整で、立ち上がり部は横溝で、内面、胴部は撫で、底部は既調整。	
97-62	竪	床面 宛形	高 19.2 口 14.0 底 6.6	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 棕色	底部と口縁部に厚みをもつ。底部は平底で胴中央部に最大幅をもち、上半部に膨らみをもつ。口縁部は直下から外反し、口縁部で直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部及び胴部は既調整後後方向斜毛目調整。口縁部は既削り。胴部は縦方向既削り、胴部を意識し削る。底部中央は約1.5cmの範囲でくぼみ、周囲は既調整。 内面、口縁部は横溝で、口唇部は既調整によりややくぼむ。輪溝状が見られる。胴部は既調整により鋭い。胴部は横溝で、底部は縦方向既調整で。	
97-63	瓶	中位 口縁部から 底部まで %	高 23.7 口 22.4 孔 8.0	胎 砂粒混入 やや堅緻 孔 8.0 色 棕色	最大径は胴部にある。口縁部はゆるやかに外反しているが内面に横を獲す。底部は先縮り。	外面は頸部を除き上下方向の既削り。口縁部の内、外は横溝で、内面は指痕・爪痕と撫でが部分的に残る。	内面は部分的に輪溝状が残る。
97-64	瓶	床面 %	底 6.5 孔 2.0	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 棕色	底部に厚みをもち、胴部は薄い。底部は大きな平底で中心よりややずれた位置に小凹孔を穿つ。胴部は内湾すみに立つ。	外面、胴部は縦方向既削り。底部は不定方向既削り。孔は既削り1段調整。 内面、胴部は横溝で、底部指痕既削り。	
97-65	瓶	中位 %	高 13.1 口 16.6 底 2.1 孔 1.8	胎 細砂粒混入 地 堅緻 孔 1.8 色 赤褐色	底部と口縁部に厚みをもつ。底部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。縁既削り。	外面、口縁部は横方向既削り。胴部は縦方向既削り。底部は既調整後穿孔孔1段調整。 内面、口縁部は横溝で、胴部から底部は不定方向既削り。整形は丁寧である。	

第24号住居跡 (第99-101図)

本住居跡は22号住居跡の南側に位置し、かまど及び煙道部は23号住居跡覆土上に構築している。本住居跡はかまどを持つ東壁側を調査したのみで、西側部分のほとんどは道路下に入り調査は不可能であった。確認規模は東壁6m、南壁1.2m、北壁0.5mで調査床面積は4.5m²である。東壁の両コーナーはほぼ直角をなすことから方形を呈する住居跡と考えられる。方位はN-84°-Wを測る。壁は暗灰色粘質土に構築し、東壁はほぼ一直線状に掘り込んでいる。壁はほぼ直に立ち上がるが、南壁の上端部は壁崩れが見られる。壁面はほぼ平坦で、遺存度は良好である。残存壁高は約50cmを測る。住居掘り込み面はマンガン凝集層に入り実存高は不明である。

床面は灰褐色砂質土壌面とする。かまど周辺は良く踏み込まれ堅く、遺存度は良い。覆土と床面の差は顕著であるが、ただ北壁に向うにつれて次第に軟弱となる。壁直下では床面が砂質のため非常に掘みにくかった。

周溝、貯蔵穴、柱穴等は検出し得なかった。

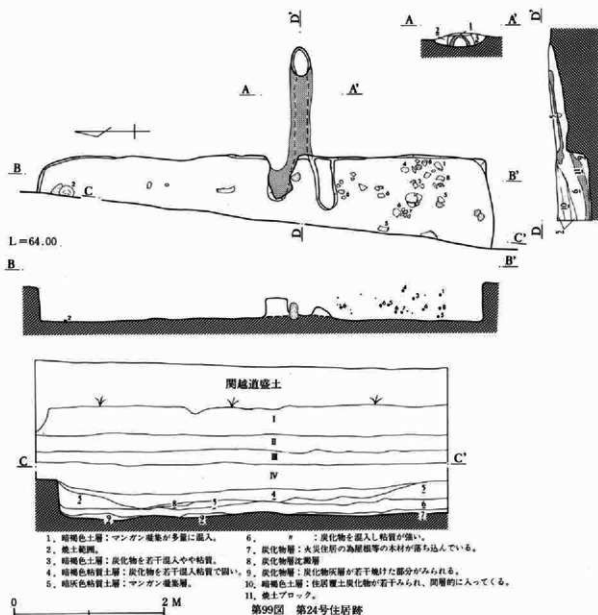
かまどは東壁中央部よりやや右寄りに付設されている。袖部は灰白色粘土を用い住居壁に対して、「ハ」の字状に構築している。かまど中軸線は壁に対して直角となっている。燃焼部は住居跡内につくられ平面形は奥壁幅20cm、焚口幅50cmを測り台形を呈す。火床は床面としほぼ平坦である。左袖内壁はほぼ直に立ち上がり、赤褐色を呈する。右袖内壁は崩れ火床面に焼土ブロックとして落ち込み、袖部基部にわずかに内壁の一部が遺存していた。袖部上面には壁外からの炭化物の流れ込み層が乗って

VI 検出された遺構と遺物

いる。右袖の崩壊と炭化物層の流れ込みは時間的差異はないと考えられる。煙道部は住居壁に対しほぼ直角に構築し、残りは良くほぼ完全な状態で検出した。煙道部は燃焼部奥壁を火床面から約20cm残り、煙道部を構築している。煙道部底面は燃焼部から約30cmまではほぼ平坦でその後は煙出し孔まで約10°の勾配で徐々に登って行く。煙道部全長1.4m、内法幅約20cm、内法高13cmを測る。

煙道部の構築は主軸に対して横幅60cm、深さ約17cmで舟底状に掘り、その中へ灰白色粘土で煙道部底面をほぼ平坦にし、天井部はかまぼこ状のアーチを架けている。掘り込み面は炭化物を混入する暗褐色土層で覆っている。煙道灰は丸味をもち、煙出し孔は22×32cmのやや楕円形を呈す。煙出し孔は13、21、29号住居跡の煙出し孔からみて、本住居跡もほぼ直に立ち上がるものと推定する。天井部残存長は煙出し孔付近から燃焼部まで1.35mを測った。焼土の厚さは約2cmを測る。

住居跡覆土の床面上には焼土、炭化物、炭化物材が検出された。この炭化物層はかまど右袖上方か



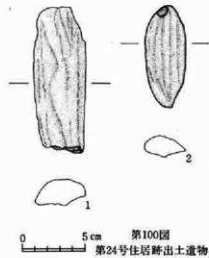
1. 住居跡 (第24号)

ら流れ込んだものと同一である。覆土の大半は炭化物を混入する暗灰白粘質土層である。覆土中位にはマンガン凝集を含む土層がレンズ状に見られ、このことから本住居跡が完全に埋没する以前に水没を受けた可能性がある。このマンガン凝集は住居覆土のみならず、煙道部の上層まで及んでいる。

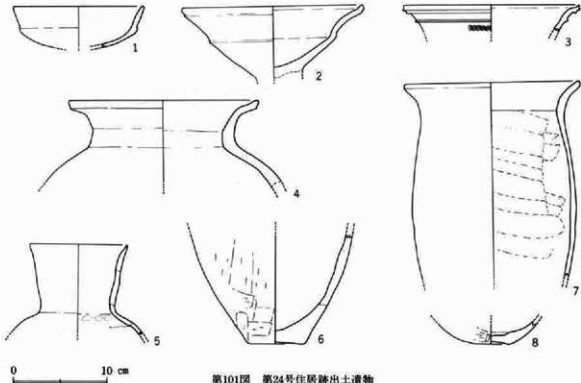
遺物は南東コーナー付近に集中して出土している。出土遺物は坏、高坏、壺、甕、石であった。

出土土器のなかでNo 2、5～8は床面上より出土している。

石、1、2は緑泥片岩で棒状を呈す。人工的加工は認められない自然石、床面より出土。



第100図 第24号住居跡出土遺物



第101図 第24号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第101図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	注量	胎土・地衣・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
101-1	坏	中位 片	口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 紫紺 色 赤褐色	体部は内湾ぎみに立ち、口縁部は緩く外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は泥調製後機織で、泥調整によりわずかな段をもつ。体部は不定方向肌用り。 内面、左右横溝で、指でより丸みをもつ。	

VI 検出された遺構と遺物

図録番号	器形	出土状況・ 保存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
101-2	高杯	床面 杯部完形	口 19.2	胎 濃紺粒混 入 焼 堅緻 色 濃い靑 色	接合部を除いてはほぼ均一した厚みをもつ。杯部中位に段をもつ。体部は直線上に外反し、口縁部で一旦しまり曲線的に立ち上がる。口縁部は鋭い。内面全体に丸みをもたせている。	外面、口縁部は左右横撫で。口縁部に裏による沈線。体部は寛調整により明瞭。 内面、口縁部は左右横撫で。口唇部は寛調整後強い横撫でによりややくぼむ。胴部は寛調整後横撫で。	
101-3	斐 直器部	中位 片	口 18.8	胎 濃密 堅緻 色 暗灰色	口縁部は縦やかに外反し、口唇部で更に外反する。口縁部は断面凸状の段をもち、中位に断面三角形の段をもつ。径より下方に流紋文を施す。	マキアツによる成形。 内外側共に回転撫で。口唇部は寛調整によりややくぼむ。	
101-4	斐	中位 片	口 20.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部に厚みをもつ。唇部は張り口縁部はほぼ直立し、口縁部で外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は左右横撫で。口縁部は寛調整。裏による沈線が見られる。胴部は寛撫で。 内面、口縁部は左右横撫で。口唇部は寛調整後強い横撫でによりややくぼむ。胴部は横撫で。	
101-5	壺	床面 口縁部片 胴部片	口 10.4	胎 濃紺粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口唇部で薄くなる。唇部がやや張り口縁部は直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で。唇部は寛調整後丁寧な横撫で。 内面、口縁部は横撫で。口唇部は寛調整後強い横撫でにより唇部が凹みが見られる。	
101-6	斐	下位 底部片	底 6.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	底部はやや上げ底の平底。胴部は細く立ち長胴形を呈する。内面は丸みをもつ。	外面、胴中央部は下→上方向捩り。下半部は左→右方向捩り。底部は不定方向捩り。 内面、寛撫で調整。	
101-7	斐	腹土 片	口 18.5	胎 濃紺粒混 入 焼 堅緻 色 濃い靑 色	胴部に厚みをもつ。最大幅を胴部中位にもち、胴下半部から細くなっていく。口縁部は縦やかに外反し口縁部で更に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は左右横撫で。底部は上→下方向捩り。胴部は下→上方向捩り。 内面、口縁部は横撫で。口唇部は寛調整によるわずかなくぼみ。胴部は横方向捩り撫で。	外面胴下半部に2次焼成痕あり。 内面整形順序捩撫で(右→左方向)→(上→下方向)
101-8	斐	下位 定形	底 3.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底部はやや上げ底。胴部は細く立ち長胴形を呈する。	外面、胴部は右→左方向捩り。底部は捩り調整。 内面、寛撫で。底部に指痕によるくぼみがある。	

第25号住居跡 (第91、102、103図)

本住居跡は22号住居跡が完全に埋没した後に構築している。よって住居跡は22号住居跡の覆土である。壁の確認高は45cmを測るが、残存壁高は22号住居跡の床面下約5～10cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。平面形は東壁、南壁はほぼ一直線状に掘り込まれているが北壁、西壁はやや膨張りとなる。各コーナーは丸味をもつ隅丸方形住居跡である。住居跡の規模は東西3.6m、南北3.2mの長方形を呈する。方位はN-72°-Eを測る。22号住居跡と向きをほぼ同一にする。周溝及び柱穴は検出し得なかった。

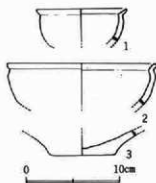
床面はほぼ平坦で、全体に堅い。

かまどは構築物として検出しえなかったが、南東コーナーに多量の焼土、灰、炭化物が堆積してい

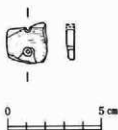
1. 住居跡 (第25号・第26号)

た。またこの付近には他の床面と比べて特に堅く、かまどが位置していたと考えられるが、その痕跡は認められなかった。

住居跡覆土は床面付近で、炭化物を多量に混入する土層でその上層はマンガン粒を混入し、非常に硬い土層である。



第102図
第25号住居跡出土遺物



第103図 第25号住居跡出土遺物

遺物は南東コーナーの焼土、灰の中から数点出土したのみであった。出土遺物は古墳時代後期の坏、

高坏、甕、石製模造品である。本図版中の出土遺物はすべて床面出土である。

剣形模造品、両面とも稜がなく水平で板状を呈する。刃部も同じ厚みをもち、柄部は全く失なわれ方形を呈する。小孔は剣身基部とその下に縦列2孔を有する。

遺物観察表 (第102図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
102-1	坏	覆土 3/4	口 9.6	粘土・細砂粒混入 地 やや堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつが口縁部で薄くなる。体部は内湾さみに立ち、口縁部で短く外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、口端部は軽く握りえ。体部は横方向握り。内面、口唇部は寛調整。体部は寛撫で。	
102-2	坏	覆土 3/4	口 16.0	粘土・細砂粒混入 地 堅緻 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部はやや球形を呈し、口縁部は短く外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。器面が薄減し、整形不明瞭。寛調整と思われる。内面、口縁部は横撫で。	
102-3	甕	覆土 3/4	底 7.1	粘土・砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもつ平底。胴部は球形状に開く。	外面、胴部は不定方向握り。底部は握り調整。内面、寛調整。寛直線。	

第26号住居跡 (第104、105図)

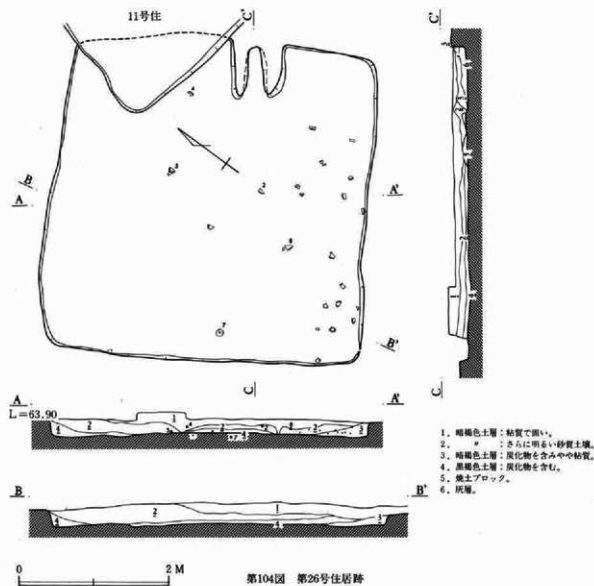
本住居跡は北東コーナーを11号住居跡に切られ、南壁側及び南西コーナーは31号住居跡上に構築している。重複する3軒の住居跡の中で最も高い位置にある。平面形は南壁及び北壁はほぼ一直線状に廻り込み両壁の交差するコーナーはほぼ直角を呈する。北壁の残存部分はやや湾曲さみで、北壁の東側と東壁のかまど北側は推定となる。規模は約4.3×4.2mを測りほぼ正方形を呈する住居跡である。方位はN-84°-Eを測る。壁はやや砂質を帯びる青灰色砂質土壌で、残存壁高は各壁ともほぼ20cmを測り、垂直に立ち上がる。ただしかまど左壁側は確認壁の上端部が崩壊し、やや斜めに立ち上がる。いずれも残存壁の遺存は良好で壁面は平坦である。

V 検出された遺構と遺物

床面はほぼ平坦であるが、31号住居跡と重複する部分の床面は同住居跡の覆土となり、やや軟弱で起伏が見られる。かまど周辺及び住居中央部付近は良く踏み込まれ非常に堅緻である。床面上には周溝、柱穴等は検出し得なかった。

かまどは住居跡全体が浅い位置に構築されたため、調査の際マンガン凝集層を拵土する時点で、煙道部は消失している。このため燃焼部のみ調査した。両袖部は住居跡に対して約5°南側に傾いている。従ってかまどの主軸方向も南側に傾いた形となる。燃焼部は住居跡内につくられ、平面形は奥壁幅25cm、焚口幅35cm、奥行約80cmの長方形を呈する。火床は床面としほぼ平坦である。袖部幅は左袖22cm、右袖31cmと比較的幅が広い。袖部内壁はあまり良く焼けておらず、燃焼部内に灰が、かまど周辺には炭化物、焼土がわずかに見られる程度であった。このことにより本かまどは長期間使用されたとは考え難い。煙道部は前述の如く遺存しないが、煙道部につながる奥壁は直立し約18cm遺存している。

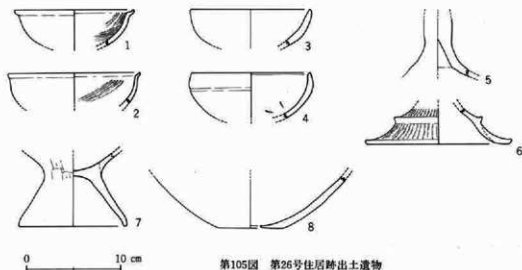
住居跡覆土は、床面付近に炭化物を含む砂質土壌が堆積している。砂質土壌と粘質土壌が交互堆積している部分も見受けられた。しかし覆土の大半は砂質を持つ暗褐色土層である。



1. 住居跡 (第26号)

遺物はかまど左側及び南壁側に比較的多く出土している。

出土遺物は杯、高杯、甕、台付甕であった。出土土器のなかでNo 5、7は床面上より、No 2、4、8は覆土中位から出土している。



第105図 第26号住居跡出土遺物

遺物観察表 (第105図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・施文・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
105-1	杯	覆土 1/6	口 12.8	胎 細砂較混入 施 厚織 色 暗褐色	体部はほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は薄くなる。体部は内湾ぎみに立ち口縁部は短くならぬかに外反する。	外面、口縁部は軽い磨押え。頸部は蓋調整後施で、体部は左一右方向磨削り。内面、口縁部はつまみ。口唇部は蓋調整により平滑。体部は施で後左下一右上方向磨削。	
105-2	杯	中位 1/6	口 14.2	胎 細砂較混入 施 厚織 色 濃い褐色	体部は内湾ぎみに立ち、口縁部は短く外反する。口縁部は鋭い。	外面、頸部から体部にかけて蓋調整。内面、口唇部は蓋調整。体部は施で後右上がり磨削。	
105-3	杯	覆土 1/6	口 13.0	胎 砂粒混入 施 厚織 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は内湾ぎみに立ち口縁部に達する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は磨削で、体部は横方向磨削り。内面、丁寧な磨削で。	
105-4	杯	中位 1/6	口 12.8	胎 細砂較混入 施 厚織 色 褐色	ほぼ均一した厚みであるが、口縁部で薄くなる。体部は内湾ぎみに立ち口縁部は直立する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は磨削り調整後施で、体部は磨削で。内面、口縁部は磨削で、体部は蓋施で。	
105-5	高杯	床面 完形	残存高 6.1	胎 細砂較混入 施 厚織 色 褐色	脚部は円柱形をなし、頸部で外反する。	外面、厚減しているが施で施していたと思われる。内面、脚柱部は柱土柱を縦軸磨削りによりよりどりとする。その後蓋施で、頸部は磨削り後施で、磨削残る。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	部 形	出土位置・遺存状態	法 量	粘土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
105-6	高 坏	覆土 底	底 15.3	胎 磁粒粘 入 焼 堅緻 色 赤色	ほぼ均一した厚みをもつ。裾部は「ハ」の字状に大きく開く。裾中央部に明瞭な段をもつ。裾底部は鋭い。	外面、頸部調整後横撫で。段は差削り調整により縁を鋭くする。仕上げは研磨。段の上部は2mm程度の細かい縦方向、下部は5mm間隔の縦方向研磨。裾底部は差調整、鋭底残る。内面、丁寧な横撫で。	
105-7	土台壁 台部突起	床面 台部突起	底 11.3	胎 磁粒粘 入 焼 堅緻 色 褐色	台上部に厚みをもち次第に薄くなる。台部は「ハ」の字状に開き裾底部は平滑。	外面、胴部は縦方向差削り後縦方向なで。台底部は差削り。内面、接合部は指弾押と横た→右方向横撫で。	
105-8	甌	中位 底	底 7.0 孔 2.2	胎 磁粒粘 入、緑斑 片岩含む 焼 堅緻 色 黒色	体部はほぼ均一した厚みをもち底部は薄い。孔は底部中央に1ヶ所。	外面、胴部は縦方向差削り。底部は差調整。内面、差撫で。	

第27号住居跡（第106～110図）

本住居跡は遺跡最北端中央部に位置する。本住居跡は28号住居跡の直上に構築し、東壁は30号住居跡、西壁は22号住居跡、北壁は33号住居跡と5軒の住居跡と重複する。これらの中で最も新しい住居跡である。検出壁は東壁で28号住居跡と床面レベルをほとんど同じくし、西壁も22号住居跡と床面レベルを同じくし北側に壁を約1m検出した。また22号住居跡のかまどの大半を切断し、わずか右袖の一部を残すのみである。南壁は南東コーナーを一部検出した。住居の平面形は南東コーナーを基点とし、それぞれ検出壁と結んだ線としている。北壁は道路下に入り規模は不明。東西5.3m、南北不明、方位はN-80°-Eを測る。壁は暗褐色粘質土層で、かまど左側と南東コーナーは遺存が良く、ほぼ直立し壁面も平坦である。西壁は22号住居跡と本住居跡との重複関係で三角形に地山が残る。遺存は悪く、残存壁高は東壁22cm、南東コーナー20cm、西壁15cmを検出した。

床面は28号住居跡の覆土で、かまど周辺を除く範囲はやや軟弱である。とくに南西の床面は掘みにくかった。かまど周辺は堅く、炭化物、焼土、灰、土器等が多量に出土している。

かまどは東壁の南東コーナーより約3.5mの位置に付設されている。袖部は灰白色粘質土を用いて、住居壁に対して直角より約8°南に傾いた状態で構築している。よってかまど中軸線も同様である。燃焼部は住居跡内にあり、平面形は奥壁幅35cm、焚口幅40cm、奥行80cmの長方形を呈する。左袖の内壁は良く焼かれて、やや内傾しながら立ち上がる。壁面は平坦であるが右袖内壁部はすでに崩壊し、焼土ブロックとして燃焼部内に落ち込んでいた。火床は床面とし、燃焼部中央は住居床面よりわずかに低く、舟底状を呈している。煙道部覆土は多量の炭化物、焼土がみられる。かまどの崩壊は土砂の流れ込みと同時期で、短期間に埋もれた様子がみられる。覆土上層部には壁外からの流れ込みがみられた。煙道部は住居壁面を基部から削り込み、奥行90cm、傾斜約10°でなだらかに登る。煙道部中央以降は平坦となり煙出し孔につながる。煙道部幅約30cm、長さ1.85mを測る。煙道部の遺存は良く、南壁はほぼ直に立ち上がっている。

住居跡覆土は炭化物、焼土、灰白色土を含む砂質土壌が床面全体を覆っている。その上層はほとんど同色である。

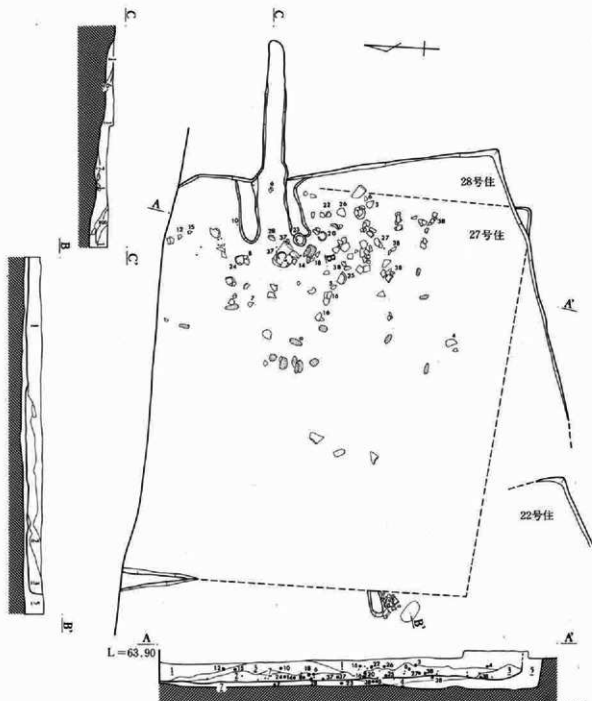
遺物はかまど周辺に多量に検出した。燃焼部内には小型甕が袖部内壁にもたれかかった状態で出土

1. 住居跡 (第27号)

している。出土遺物は、坏、高坏、壺、小型甕、甕、滑石原石、砥石であった。

出土土器のなかでNo 5～7、16、23～25、27～30、34、36～38はかまど内及び床面上から出土している。

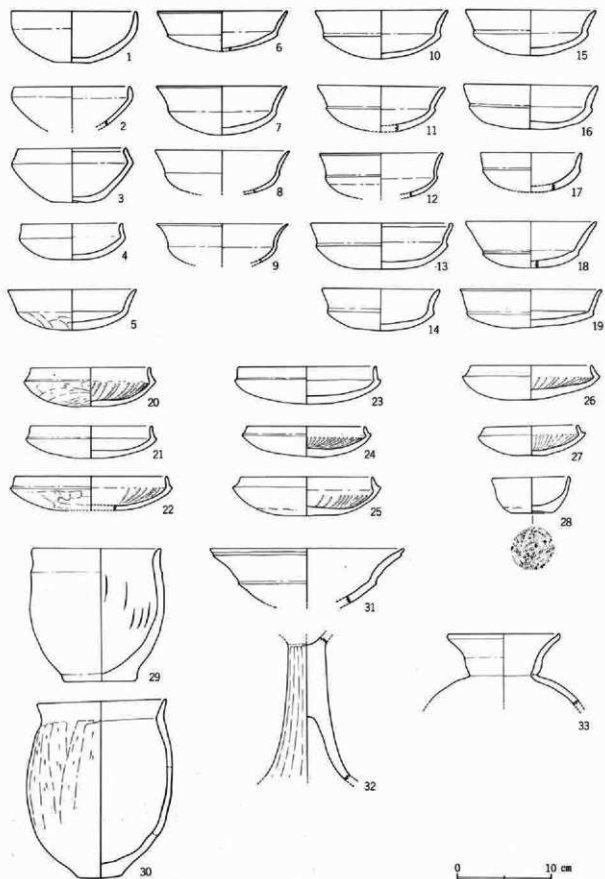
滑石、両面とも自然剝離面を残し、人工的な加工は認められない。荒削の段階と考えられる。



第106図 第27、28号住居跡

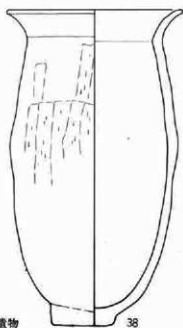
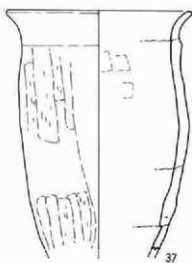
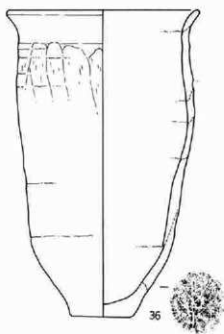
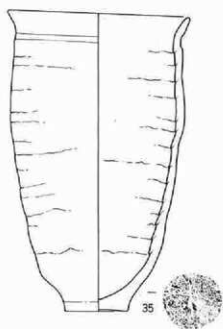
1. 暗褐色土層：炭化物、灰色土を混入し硬い、やや粘質。
2. * : 炭化物、粘土、多量の灰色土を含む、やや砂質土。
3. * : 炭化物を多量に混入する。若干層序的に乱れを生じる。
4. * : 鉄分凝集が見られる酸化土層。
5. 灰白色土層：炭化物、盛土を若干混入やや砂質。
6. 黒褐色土層：粘質土層。
7. 暗灰色土層：灰と炭化物との混土層灰が圧倒的に多い。
8. 黒色土層：炭化物流れ込み層。

VI 検出された遺構と遺物



第107図 第27号住居跡出土遺物

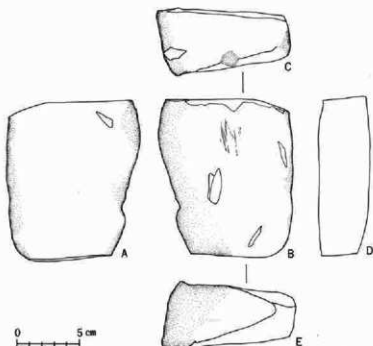
I. 住居跡 (第27号)



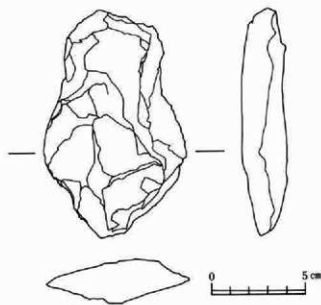
0 10 cm

第108图 第27号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物



第109図 第27号住居跡出土遺物



第110図 第27号住居跡出土遺物

砥石、石材は安山岩質。粗雑な質感を呈す。表、裏面は全体に凸状の滑面となり極端な、磨減りはない。両側面も表、裏とほぼ同様の滑面状態にある。小口面の一方は割れ口になっているが、色調の様子表、裏面と同色であるため、古い割れである。割れ口再使用は及んでいない。

人工遺物のほかに自然石がある。自然石は、カマドの前方に15cm前後の紡垂形の川原石がやや散在的に出土した。この石の広がり住居跡の西半部分までは及んでいなかった。

柱穴については検出されなかった。

遺物観察表 (第107、108図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・地皮・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
107-1	環	覆土 変形	高 5.5 口 13.6 底 3.8	胎 濃細粒混 入 地 やや軟弱 色 赤褐色	底部は円形の平底で、内湾みに立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。	外面、口縁部は横溝で、胴部は縦方向に丸削り。底部は寛削り。内面、口縁部は横溝で、胴部は縦溝整後溝で。	口縁部に覆付着。

2. 住居跡 (第27号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	部 形 の 特 徴	装 形 の 特 徴	備 考
107-2	環	覆土 片	口 12.4	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 暗赤色	胴部に張りがない長胴形を呈す る。口縁部は内湾する。	外面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 。口縁部と胴部は調整痕で区別して いる。 内面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 後物で、胴部は襷物で。	
107-3	環	上位 完形	高 5.7 口 11.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 にふい橘 色	胴部は扁平に立ち口縁部は内湾 する。	外面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 後物で、底部中央に後成前に列離した くぼみ状あり。 内面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 。胴部は篋形後物で。	
107-4	環	上位 片	高 3.8 口 10.8	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部は丸底で、外縁をもち口縁 部は内湾みに立ち、口縁部で 外反する。	外面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 により丸みをもつ、底部は篋形。 内面、口縁部から胴部下位まで襷物 で、底部は襷物で。	
107-5	環	床面 片	高 4.3 口 13.8	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、底部 は丸底で浅く、口縁部は外反す る。	外面、口縁部は襷物で、後物により 丸みをもつ、底部は不定方向篋形 。内面、口縁部は襷物で。	
107-6	環	かまど 片	口 13.6	胎 細砂粒混 入 焼 堅緻 色 暗褐色	底部は浅い丸底で、外縁をもち 口縁部は外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物に篋形 。底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、胴部は篋形 後物で、底部は襷物で。	
107-7	環	床面 片	高 5.2 口 13.9	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外灰黄色 内黒色	底部は丸底で、外縁をもち口縁 部は外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物により 丸みをもつ、底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、底部付近は 篋形後物で。	口縁部付近一部に 黒炭あり。
107-8	環	下位 片	口 14.3	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 赤褐色	ほぼ均一の厚みをもつ、底部は 丸底で浅く、口縁部は外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物により 丸みをもつ、底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、底部は襷物 で、表面が荒れ装形は不明瞭。	
107-9	環	覆土 片	口 14.0	胎 微細粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、底部は 丸底で、外縁をもち口縁部は僅 く外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物により 丸みをもつ、底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、胴部は襷物 で。	
107-10	環	上位 ほぼ完形	高 5.1 口 14.2	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱 色 外褐色 内黒色	ほぼ均一した厚みをもつ、底部 は丸底で、外縁をもち口縁部は 直立に近い感じに立ち上がり、 口唇部で外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物に篋形 後物で、底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、底部は荒れ ているが襷物と思われる。	内面黒色処理
107-11	環	覆土 片	口 13.6	胎 微細粒混 入 焼 軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、底部 は丸底で、外縁をもち口縁部は 外反する。	外面、表面荒れ装形不明瞭。 後物に篋形と思われる。 内面、篋形後物で施したと思わ れる。	
107-12	環	上位 片	口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ、底部 は比較的浅く立ち、外縁をもち 口縁部は直立する。	外面、口縁部は襷物で、 後物に篋形。 底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、底部は表面 が荒れ装形不明瞭。	
107-13	環	覆土 片	高 4.9 口 15.2	胎 細砂粒混 入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部は深めの丸底で、外縁をもち 口縁部は外反する。	外面、口縁部は襷物で、後物に篋形 。底部は篋形。 内面、口縁部は襷物で、口唇部は篋 形後物で、底部は篋形後物で。	

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	器 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	粘土・地味・土質	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
107-14	坏	下位 瓦	高 4.4 口 12.6	胎 細砂粒混 入 軟弱 地 褐色 色 褐色	底部は比較的浅い平底で、外縁をもち口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で。底部は篋削り。内面、口縁部から底部中位は横撫で、下位は撫で。縁は指頭撫で。	
107-15	坏	上位 瓦	高 4.8 口 14.0	胎 強細粒混 入 軟弱 地 褐色 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は丸底で、外縁をもち口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部から底部下位は横撫で、底部は撫で。唇面の荒れが目立つ。	
107-16	坏	床面 ほぼ完形	高 4.6 口 14.4	胎 細砂粒混 入 堅緻 地 型織 色 暗赤褐色	底部は平坦さみの丸底で、外縁をもち口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部は横撫で。唇部は指頭撫で。刷部は篋撫で。	
107-17	坏	覆土 瓦	口 10.8	胎 細砂粒混 入 軟弱 地 軟弱 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部は丸底で、外縁をもち口縁部は直立する。比較的小型の土器。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部から底部中位は横撫で。	
107-18	坏	上位 瓦	縁高4.9 口 14.0	胎 砂粒混入 堅緻 地 型織 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は中央に向かって篋削り。内面、口縁部は横撫で。底部との境は篋調整。底部は撫で。	
107-19	坏	覆土 瓦	高 4.1 口 15.2	胎 細砂粒混 入 軟弱 地 軟弱 色 褐色	底部は丸底で浅く扁平である。外縁をもち口縁部は外反する。	外面、口縁部は横撫で。口唇部はつまむ。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部は横撫で。底部は撫で。内外面共に荒れが目立ち整形不明瞭。	
107-20	坏	上位 完形	高 4.1 口 12.6	胎 細砂粒混 入 堅緻 地 型織 色 暗赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は丸底で、明瞭な外縁をもち口縁部は内湾する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は口縁に向かって左→右方向篋削り。内面、口縁部は横撫で。底部は中心から右上がり放射状研磨。	
107-21	坏	覆土 瓦	高 3.4 口 13.0	胎 細砂粒混 入 堅緻 地 型織 色 褐色	底部から口縁部にかけて次第に薄くなる。底部は丸底で、外縁をもち口縁部は内湾下に立つ。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部は横撫で。底部は研磨されているか不明瞭。	
107-22	坏	上位 瓦	口 16.4	胎 細砂粒混 入 堅緻 地 型織 色 褐色	底部は浅い丸底で、明瞭な外縁をもち、口縁部は内湾下みである。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り後篋撫で。内面、口縁部は横撫で。底部は研磨。	
107-23	坏	床面 完形	高 4.0 口 14.5	胎 砂粒混入 堅緻 色 上白 色 上白	底部は平坦さみの丸底で、外縁をもち口縁部はほぼ直立する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋撫で。底部は篋削り後篋撫で。内面、口縁部は横撫で。底部は放射状研磨。	
107-24	坏	床面 瓦	高 3.2 口 12.8	胎 強細粒混 入 軟弱 地 やや軟弱 色 赤褐色	底部に最大厚をもつ。底部はやや平坦で、外縁をもち口縁部は短く内湾する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部から唇部まで横撫で。底部は中央より唇部に向かって研磨。	
107-25	坏	床面 ほぼ完形	高 4.1 口 14.3	胎 細砂粒混 入 堅緻 地 型織 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部は比較的深い丸底で、明瞭な外縁をもち口縁部は内湾する。	外面、口縁部は横撫で。縁は篋調整。底部は篋削り。内面、口縁部は横撫で。底部は研磨。	

1. 住居跡 (第27号)

図版番号	器形	出土位置・ 保存状態	法量	胎土・地色・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
107-26	環	上位 ほぼ完形	高 3.7 口 13.0	胎 細砂粒混 入 地 灰緑 色 色 暗褐色	底部に厚みをもつ。底部は丸底で、明瞭な外縁をもち口縁部は内湾する。	外面、口縁部は横線で、稜は圓調整。底部は寛削り。 内面、口縁部は横線で、底部は中心から右上がり放射状研削。	
107-27	環	床面 ほぼ完形	高 3.1 口 10.0	胎 細砂粒混 入 地 灰緑 色 色 外褐色 内褐色	底部は丸底で、外縁をもち口縁部は内湾する。	外面、口縁部は横線で、稜は圓調整。底部は不定方向削削り。 内面、口縁部は横線で、底部は中心から放射状研削。	内面褐色処理
107-28	環	かまど ほぼ完形	高 3.3 口 8.4 底 4.6	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 色 濃い褐色	底部は円形の上げ底で、胴部は外反ぎみに立ち上がりそのまま口縁となる。口縁部は平削。	外面、手捏ね土器で、口唇部から胴部中位まで横削で、下位は横削で。 内面、胴部中位まで横削で、下位は横削で。	底部に凝似木葉痕
107-29	小笠篋	かまど 完形	高 14.0 口 13.8 底 7.5	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 色 濃い褐色	底部は円形の平底で、胴部は少し張りをもつ。口縁部はやや外反ぎみに直立する。	外面、口縁部は横削で、胴部は圓削り。底部立ち上がり部は寛削り。 内面、口縁部は横削で、胴部は横削で底が残る。	底部付着に黒灰あり。
107-30	小笠篋	床面 1/2	高 18.8 口 13.8 底 4.7	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 色 灰赤褐色	底部は円形の平底で、胴部は内湾ぎみに立つ。胴部はぐびれがなく口縁部はほぼ直立する。	外面、口縁部は横削で、胴部は下→上方向削削り。底部は圓調整で走り出している。 内面、口縁部は横削で、稜はやや丸い。胴部は寛削で。	
107-31	高環	覆土 1/2	口 20.6	胎 細砂粒混 入 地 灰緑 色 色 褐色	体部は外反ぎみに立ち、口縁部中位で外反する。口唇部で紋をもつ。	外面、口縁部上位は横削で、下位は圓削り。口唇部は圓調整によりくぼみをもつ。稜は圓調整。 内面、口縁部は横削で、中位に指痕によるくぼみをもつ。	
107-32	高環	覆土 1/2	残存高 13.9	胎 細砂粒混 入 地 灰緑 色 色 濃い褐色	円筒状の長い脚部で胴部は縦やかに開く。	外面、脚部は5mm幅の縦方向削削り。 内面、粘土柱を押し広げ圓調整後、縦方向削削で。	
107-33	埴	覆土 1/2	口 11.8	胎 砂粒混入 地 灰赤 色 色 やや軟弱 褐色	胴部は球形を呈し、胴部は強くしまる。口縁部は直に立ち中位で外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横削で、口縁部は圓調整。胴部上位は横削で。 内面、口縁部上位は横削で、下位は圓調整により鋭い。胴部は横削で。	
108-34	煮 須 壺	床直 1/2	残存高 18.7 須 36.2	胎 黒黄粒、 灰白色粒 含む。 地 灰緑 色 色 灰色	底部に厚みをもつ。胴部は大きく張り出し、口縁部は直線的に「く」の字状に外反する。	外面、口縁上部は縦方向削削で、胴部は横削で。胴部は3×5mmの粒状甲子。 内面、圓削削で。胴部は圓調整後削削で胴部は横削で。内面の甲子痕は横削により消している。	
108-35	壺	床面 完形	高 31.3 口 19.5 底 5.6	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 色 褐色	底部は立ち上がり部をもつ円形の平底。胴部は張りをもたない長筒形。胴部にぐびれはなく口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横削で、胴部は圓調整。胴部は寛削り。 内面、口縁部は横削で、胴部は横削で。輪積痕が明瞭に残る。	外面写真あり。 底部に木葉痕あり
108-36	壺	下位 1/2	高 32.5 口 20.6 底 5.6	胎 砂粒混入 地 灰緑 色 色 濃い褐色	底部は平底で、胴部は張りのない長筒形。口縁部は縦やかに外反する。	外面、口縁部は横削で、胴部全体は縦方向削削り。 内面、口縁部は横削で、胴部は圓調整後削削で、内外面に輪積痕が見られる。	底部に木葉痕あり

VI 検出された遺構と遺物

図版番号	品 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
108-37	甕	床面 1/5	口 29.9	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外黒色 内褐色	胴部は張りをもたずに立ち上がる。口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横撫で、胴部上位から中位は下→上方向に削り、下位は上→下方向に削り。 内面、口縁部は横撫で、胴部上位は横方向に削り、胴部は撫で、輪積痕が残る。	
108-38	甕	床面 1/5	高 33.4 口 18.8 底 6.5	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	底部は平底で立ち上がり部をもつ。胴部は長胴形で口縁部は短く外反する。	外面、口縁部は横撫で、胴部は縦方向に削り。胴部と底部の境は削りにより区分。 内面、口縁部は横撫で、腹は削り、胴部は削り調整後撫で。	

第28号住居跡（第106図）

本住居跡は27号住居跡約5cm下に構築されている。住居跡の大半は27号住居跡が覆い、本住居跡の確認規模は東壁2.8m、南壁約4mを測るのみである。他壁の重複以外は27号住居跡と同様、道路下に入ってしまい検出し得なかった。残存壁高は約40cmを測りほぼ直に立ち上がり、壁面も平坦である。暗褐色粘質土を壁としている。東壁と南壁はほぼ直角に交わることから、本住居跡も方形を呈すると考えられる。方位はN-16°-Wを測る。

床面は黄褐色砂質土、やや軟弱で起伏がある。床面から本住居跡の規模をとらえることは困難であった。

住居覆土は本住居跡の床面と27号住居跡の床面との間に、間層的に炭化物を混入する灰白色砂質土層が入る。

周溝、柱穴、貯蔵穴等は検出し得なかった。

遺物は時期不明の土師器片が数点出土した。

第29号住居跡（第111～113図）

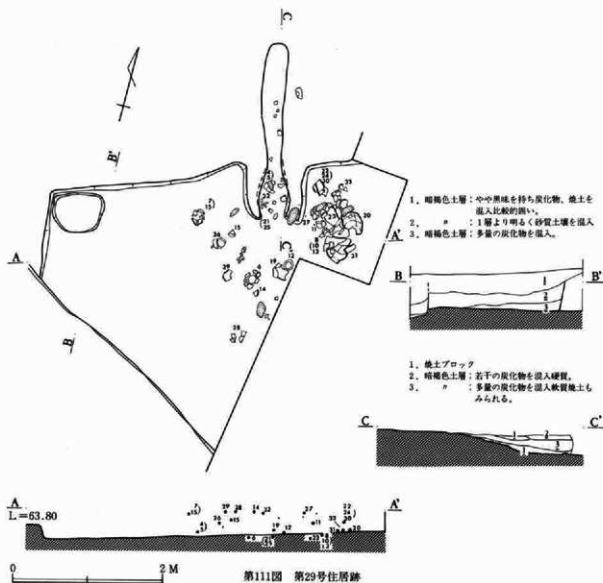
本住居跡は遺跡の北東コーナーに位置する。遺構の検出はかまどをもつ北壁と西壁の一部をそれぞれ検出した。各壁の検出長は北壁で4.2m、西壁で1.2mを測る。本住居跡の東側半分は第2次調査では生活道路下に入り、第3次調査では関越自動車道本線の土盛下となり、調査は不可能であった。重複関係は30号住居跡の南東を切断し、11号住居跡によって南西壁側を切られている。本住居跡の平面形では、北壁はほぼ一直線状に張り込まれ、西壁はやや外側に張り出す。両壁のコーナーは約104°開き鈍角をなすが、方形を呈する住居跡と考えられる。方位はN-20°-Wを測る。各壁の残存高は約40cmを測り、約11°の傾斜をもって立ち上がる。特にかまど周辺の壁の遺存度は良好で非常にしっかり残り、壁面もほぼ平坦である。それに比べ西壁の遺存は上端部に崩壊がみられやや悪い。

床面は壁と同質の土壌に構築している。床面は全体としてほぼ平坦で、かまど周辺はとくに堅く、覆土と床面との差は明瞭で、床面上には多量の炭化物、焼土、灰が検出した。しかし壁側に近づくにつれ次第に軟弱となる。11号住居跡との重複部分では11号住居跡の方が新しく深いため、床面上には張り込み線が明瞭に検出した。周溝、柱穴は検出し得なかった。

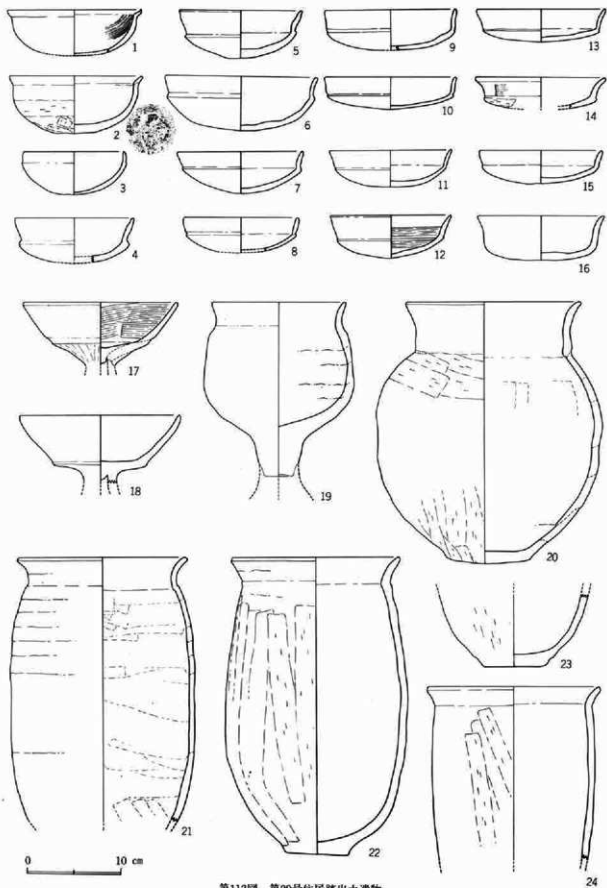
1. 住居跡 (第28号・第29号)

貯蔵穴は北西コーナーの方形堀り込みが考えられ、規模は東西70cm、南北50cm、深さ26cmを測る。貯蔵穴底面はほぼ平坦を呈する。南壁はほぼ直立するが、東壁側は床面付近ですでに崩壊された痕跡があり、立ち上がりはやや悪い。覆土は炭化物を含む暗褐色土層である。位置的覆土的に貯蔵穴の可能性はあるが、深さ的に見て貯蔵穴の役割としては疑問をもつ。

かまどは北壁側のほぼ中央部に付設されていたものと推定する。袖部は灰白色粘土を用い、住居壁に対して直角に構築している。よってかまど中軸線も直角となる。燃焼部は住居跡内にもち平面形は奥行幅20cm、最大幅は中央部で40cm、焚口幅28cm、奥行76cmを測り、やや中張りの楕円形を呈する。袖部は両袖とも約76-80cm、幅25cmを測る。内壁は良く焼け幼黒色を呈する。燃焼部の断面は火床面から残存高の中位まではほぼ垂直に立ち、天井部に近づくにつれ内傾する。おそらくかまぼこ状を呈

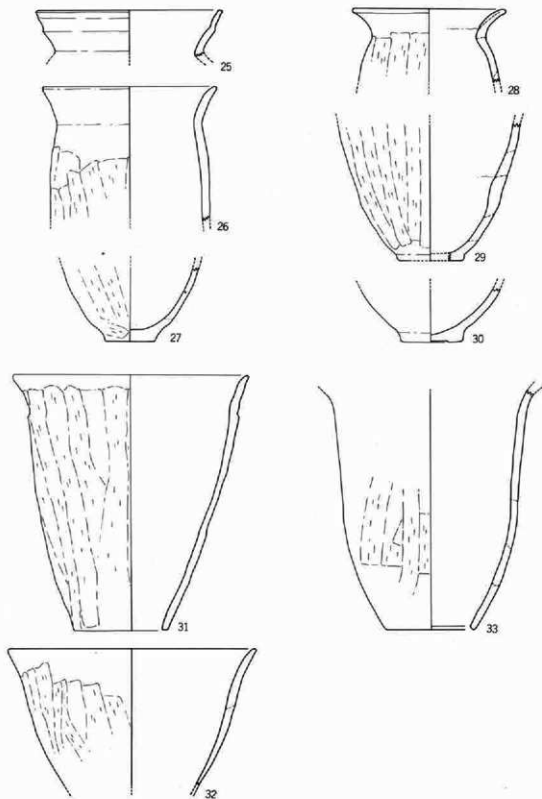


VI 検出された遺構と遺物



第112図 第29号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第29号)



第113团 第29号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

していたものと考えられる。壁面は両袖とも平坦である。右袖の上部から下部にかけ川原石の円礫が袖部に乗る様な形で出土した。袖の補強とも考えられる。火床は床面とし、ほぼ平坦である。燃焼部覆土は天井部の崩落が焼土ブロックとして堆積し、その他炭化物、灰の量も多い。煙道部はかまど奥壁を火床面から削り、傾斜8°で煙出し孔までなだらかに登って行く。煙道部幅は約29cm、長さ約1.6mを測る。ただ煙出し孔は道路下に入り断面によって調査した。これより煙道尻は丸味を持ち煙出し孔の立ち上がり末端は、マンガン凝集層（IV層）に入り不明となる。煙道部内壁も良く焼け遺存度は良い。煙道部の断面形は燃焼部との境に壁の一部が良く残り、この状況から判断するとやはりかまぼこ状を呈していたと考えられる。

住居跡覆土は壁下付近では多量の炭化物混入層、住居中央部床面を覆う土層はやや砂質を持つ暗褐色土層で上層部は焼土、炭化物を含む暗褐色粘質土層である。

遺物はかまど内及び焚口周辺、右袖外側に甕、高杯が多量に出土している。ただし左袖外側は検出できなかった。煙道部内にも数点の出土がみられたが、出土位置から見て、かまど廃棄後流れ込んだと思われる。

出土遺物は、坏、坏、高杯、台付甕、小型甕、甕、甌であった。出土土器のなかでNo.2～5はかまど内より、No.6、8、10～13、15、19～26、31、33は床面上より出土。

遺物観察表（第112、113図）

図録番号	群 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
112-1	坏	覆土 片	口 14.4	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	体上半部に厚みをもつ。体部は内湾ぎみに立ち、口縁部で短く「く」の字状に外反する。口縁部で直立する。	外面、口縁部は横撫で、頸部は既調整後斜め直撫で、体部は既調整。内面、口唇部は既調整。口縁部はつまむ。頸部の横撫でによりやや縦い。体部は既調整後右立ち直射状研磨。	
112-2	坏	かまど 完形	高 6.1 口 14.3 底 3.8	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもち次第に薄くなる。底部は小さな平底で、体部は内湾ぎみに立つ。口縁部は短くわずかに外反する。口縁部は深く鋭い。底部輪郭は不明瞭。	外面、口縁部は既調整後横撫で。胴上半部は右→左方向直撫で、下半部は不定方向直撫で。内面、口縁部は既調整後横撫で。横は既調整により鋭い。胴部は横直撫で。	
112-3	坏	かまど 完形	高 4.6 口 10.7	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底部がやや深い。体部は内湾ぎみで口縁部は直に近い。口縁部は深く鋭い。全体に深みがある。	外面、口縁部は既調整後横撫で。体部は不定方向直撫で。内面、口縁部は斜め直撫で。体部は底部中央から円形状に既調整。	
112-4	坏	かまど 片	口 12.8	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	頸部にやや厚みをもつ。体部は扁平に立ち口縁部は直線的に外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は既調整後横撫で、口縁部にはわずかに波線が見られる。頸部は既調整により明確な直。底部は不定方向直撫で。内面、口縁部は横撫で、口唇部は既調整後横撫で、頸部は横撫で、体部は不定方向直撫で。	
112-5	坏	かまど 片	高 5.1 口 13.2	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	底部中央に厚みをもつ。体部はやや扁平で頸部で一旦くびれ、口縁部はやや外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、横は既調整により直をもつ。体部は不定方向直撫で。内面、全体は丁寧な直で、口唇部は既調整後横撫で。	底部に黒塵あり。
112-6	坏	床面 片	高 5.7 口 16.4	胎 微細粒混 入 焼 堅緻 色 褐色	体部は均一で口縁部が深い。底部付近は扁平で頸部付近で内湾ぎみに立つ。口縁部は直立ちみに外反する。口縁部は鋭い。	外面、口縁部は横撫で、横は既調整により有段。体部は不定方向直撫で。内面、口縁部は横撫で、口唇部は既調整。頸部は直撫で。体部は方向不明瞭な直撫で。	

1. 住居跡(第29号)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
112-7	環	中位 定形	高 4.4 口 13.5	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平で口縁部は直立する。口縁部はわずかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は整形後横撫で。頸部は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は横撫で。頸部は整形後軽い横撫で。体部は不定方向横撫で。	
112-8	環	床直 片	口 12.2	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	口縁部にやや厚みをもつ。体部は扁平に立ち口縁部は直線的に外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。頸は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は整形後、頸部は整形後、体部は不定方向横撫で。	
112-9	環	覆土 片	口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は扁平きみで、口縁部は直立する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横撫で。頸は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は横撫で。頸部は整形後、底部は横撫で。	内面底部に横付着
112-10	環	床面 片	高 3.4 口 14.2	胎 細砂粒混 入 焼 厚緑 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は整形を呈し、口縁部は直立する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は整形後横撫で。頸は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は整形後横撫で。頸部は整形後、体部は不定方向横撫で。	
112-11	環	床面 片	高 38.0 口 12.8	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 におい・ 褐色	底部に厚みをもち次第に薄くなる。底部はやや扁平で口縁部は外反する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は横方向横撫で。頸は整形により段をもつ。体部中心は一定方向。腹辺に沿って彫削り。 内面、口縁部は横撫で。頸部は整形後、底部は横撫で。	
112-12	環	床面 定形	高 4.6 口 12.7	胎 微細粒混 入 焼 灰緑 色 明赤褐色	口縁部に厚みをもつが口縁部は薄く、体部は内湾きみに立ち、口縁部はわずかに外反する。	外面、口縁部は整形後横撫で。頸部は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は丁寧な横撫で。底部は整形後。頸部は横刷毛目調整で内面を掃く。	
112-13	環	床面 片	高 3.5 口 13.8	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平を呈し口縁部はほぼ直立する。口縁部は薄く丸い。	外面、口縁部は整形後、頸は整形により口縁部を区分。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は横撫で。頸部は指頭撫で。体部は不定方向横撫で。	
112-14	環	中位 片	口 14.0	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 におい・ 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は扁平で口縁部は肉直きみに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は 1.5cm幅の刷毛調整後軽い横撫で。頸は整形により段をもつ。体部は整形後。 内面、口縁部は横撫で。頸部は整形後、底部は整形後。	
112-15	環	下位 片	高 3.5 口 13.2	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 明赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部はほぼ扁平に立ち、口縁部は外反きみに立ち、口縁部は丸い。	外面、口縁部は整形後横撫で。頸は整形により段をもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は横撫で。頸部は指頭撫で。体部は不定方向横撫で。	
112-16	環	覆土 片	高 4.6 口 13.6	胎 微細粒混 入 焼 灰緑 色 におい・ 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。体部は扁平で口縁部はほぼ直立し、口縁部はやや外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は指頭横撫で。頸部は横撫でにより丸みをもつ。体部は不定方向横撫で。 内面、口縁部は横撫で。口唇部は整形後横撫で。体部は不定方向横撫で。	

VI 検出された遺構と遺物

図面番号	器形	出土位置・保存状態	流量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
112-17	高坏	埋込内 Ⅴ	口 16.6	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	脚縁合部が厚い。底面中央部が深く、やや内湾きみに立ち上がる。口縁部は平坦。	外面、口縁部は横線で、体部は放射状横線で、口縁部は寛平縁。内面、口縁部は刷毛目横線で、底部は横で、ほぞは凹型。	
112-18	高坏	住居外 Ⅴ	口 17.1	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 褐色	坏部はほぼ均一した厚みをもつ。底部は平坦で口縁部は内湾きみに立ち上がる。口縁部は鋭い。脚縁部は鋭い。	坏部外面、口縁部は横方向調整。口縁部は横線で、頸部は寛調整により有段。底部は寛調整。坏縁合部は他横縁で、接合ほぞは丸型。内面、厚成し起伏がある。口唇部のみ横縁で見える。	
112-19	台付甕	床面 完形	口 14.2	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもち次第に薄くなる。台部縁合は棒状粘土を使用する。胴下半部に最大幅をもち頸部はすぼまる。口縁部は緩やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は底調整後横縁で、頸部は底調整わずかに段が見られる。胴部は上→下方向内湾。台部縁合下半部は整形されず起伏がある。内面、口縁部は横方向横で、底部は不明瞭。頸部は横方向横で。	
112-20	甕	床面 完形	高 27.7 口 18.8 底 8.7	胎 砂粒混入 緑泥片岩 含む 地 褐色	底部に厚みをもち胴部はほぼ均一。底部はやや丸みのある平底で中位に立ち上がり部がわずかに認められる。胴部に最大幅をもち肩がやや張る。口縁部はほぼ直立し、口唇部で外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横線で、頸部は底調整後横縁で、胴上半部は右→左→上方向内湾。下半部は下→上方向内湾。底部は不定方向内湾。内面、口縁部は左右横縁で、頸部は底調整後横縁で、胴上半部は右→左方向、下半部は下→上方向横縁で。	
112-21	甕	床面 完形	口 18.3	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は長胴形で頸部はやや張り出す。口縁部はわずかに直立し、口唇部で外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横縁で、頸部から胴部は下→上方向内湾。内面、口縁部は横縁で、頸部から胴部は底調整後左→右方向、差幅 1.5cm前後横縁で。	
112-22	甕	下位 完形	高 31.3 口 17.7 底 6.6	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもつ。底部は平底で胴下半部に厚みをもつやや下膨らみの長胴形。頸部でわずかにくびれ、口縁部は緩やかに外反する。	外面、口縁部は横縁で、頸部は底調整。胴部は上→下方向内湾。底部は寛縁で、立ち上がり部に指頭圧痕が見られる。内面、口縁部は底調整後横縁で、頸部は底調整により緩い横をもつ。胴部は横方向横縁で。	内面に黄色が見られる。粘土接合痕不明瞭。
112-23	甕	床直 Ⅴ	底 6.0	胎 細砂粒混 入 地 堅緻 色 赤褐色	底部はほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底でそのまま胴部へ移行する。底部の輪郭は不明瞭。	外面、胴部は下→上方向内湾。底部は寛縁で。内面、不定方向横縁で。	
112-24	甕	下位 Ⅴ	口 18.4	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部幅はほぼ同一で長胴形を呈する。口縁部は緩やかに外反する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横縁で、口縁部は鋭い横縁で、胴部は下→上方向内湾。内面、口縁部は横縁で、胴部は横で、頸部は整形不明瞭。	
113-25	甕	床面 Ⅴ	口 20.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 灰褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。口縁部は脛直し中程にわずかな段をもつ。口縁部は平坦。	外面、口縁部は底調整後横縁で、横縁でより丸みをもつ。口縁部は底調整。内面、口縁部は横縁で、横の反対側は指頭横縁で。	

1. 住居跡 (第30号)

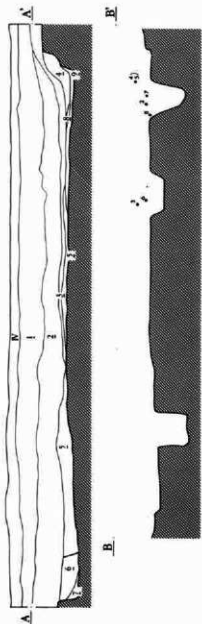
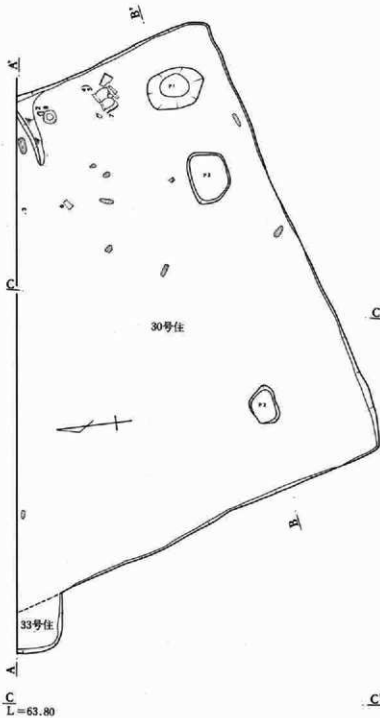
図録番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	胎土・焼成・色調	部 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
113-26	裏	下位 完形	口 18.3	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は張りがなく長胴形を呈する。口縁部は縦やかに外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は横撫で。胴部は下→上方向直削り。 内面、全体は横撫撫で。頸部は丸みをもつ。	
113-27	裏	中位 片	底 5.2	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 橙色	底部に厚みをもつ。比較的小さな平底で立ち上がり部をもつ。胴部は内湾きみに立つ。	外面、胴部は上→下方向直削り。底部は不定方向直削。立ち上がり部は横方向直削り。 内面、横撫で。	
113-28	裏	中位 片	口 16.4	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 濃い橙 色	口縁部にやや厚みをもつ。肩部はなで削で、口縁部は「く」の字状に外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は直調整後左→右方向横撫で。頸部は指頭撫で。胴部は下→上方向直削り。 内面、口縁部は右→左方向横撫で。頸部は後でより丸い。胴部は左→右方向横撫で。	整形順序 口縁部→胴部
113-29	裏	中位 片	底 7.2	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 濃い橙 色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底でわずかに立ち上がり部が見られる。胴部は長胴形で張りが少ない。	外面、胴部は上→下方向直削り。底部は直削り。立ち上がり部は指頭押え。 内面、横撫で。	
113-30	裏	下位 片	底 6.5	胎 磁粒混入 焼 堅緻 赤褐色	底部中央部は薄く周辺は厚い。底部は平底で立ち上がり部をもつ。胴部は内湾きみに立つ。	外面、胴部は直削り。底部は直調整後横撫で。立ち上がり部は横撫撫で。 内面、撫で。	
113-31	瓶	床面 完形	高 27.1 口 24.5 孔 9.5	胎 磁粒混入 焼 堅緻 赤褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。底部付近は細く口縁部まで次第に開く円錐台形状を呈する。口唇部付近でわずかに外反する。口端部は丸い。	外面、口縁部は直調整後横撫で。頸部は直調整。胴部は上→下方向直削り。穿孔は焼成直後2段階調整。1段は内面側直削り。2段目は外面直調整。 内面、口縁部は横撫で。胴部は縦方向直削り。	
113-32	瓶	中位 片	口 26.0	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 濃い橙 色	頸部付近に厚みをもり胴部は薄くなる。口縁部はやや外反きみで胴部は鉢形を呈する。口端部は丸い。	外面、口縁部は丁寧な横撫で。胴部は幅2cmの上→下方向直削り。 内面、口縁部から頸部まで横撫で。胴部は方向不明撫で。	
113-33	瓶	床面 片	孔 9.4	胎 磁粒混入 焼 堅緻 色 橙色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は膨らみもちながら立ち上がる。焼成前に一孔を穿つ。	外面、胴部は上→下方向直削り穿孔は回転削り1段階調整。 内面、下→上方向丁寧な横撫で。	

第30号住居跡 (第114～116図)

本住居跡は遺跡の最北端中央部で、27号住居跡下に構築されている。重複は南壁を11、29号住居跡、西壁は27、28号住居跡とそれぞれ本住居跡上に構築している。33号住居跡は本住居跡と床面レベルを同じくして切断している。住居検出壁は東壁2.7m、西壁は33号住居跡と重複部分まで4.6m、南壁は全長が検出でき6.2mを測る。北壁は道路下となり不明。各壁はほぼ一直線状に掘り込まれ、各コーナーはほぼ直角を呈す。規模は東壁のかまどが壁の中心部に來ると仮定し、東西6.2m、南北6mの正方形に近い住居跡と考えられる。方位はN-83°-Eを測る。

東壁は他住居跡と重複せず炭化物、焼土等一切含まない暗褐色土層で、残存壁高は約40cmを測る。他壁の重複する部分においてはそれぞれ住居跡の覆土となっている。残存壁高は10～20cmを測る。

VI 検出された遺構と遺物

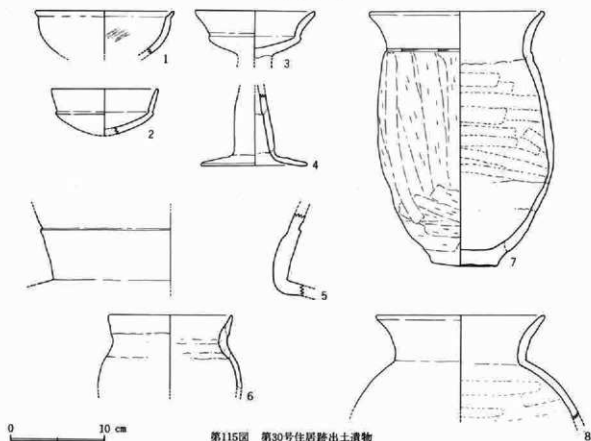


1. 暗褐色土層：やや黒味を持ち硬く炭化物を若干混入する。
2. 暗褐色土層：上層よりはやや明るい黄土がいくらかみられる。
3. 暗灰色土層：黄土がみられやや粘質を持つかまどからの成れ込み。
4. 暗褐色土層：かまど附近の黄土ブロックがところどころにみられる。
5. 暗灰色砂質土層。
6. 5層より黒味多い。
7. 黄褐色砂質土層。
8. 炭化物層。
9. 灰層。

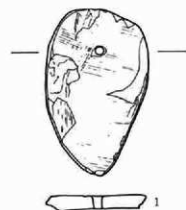
0 2 M

第114図 第30、33号住居跡

1. 住居跡 (第30号)



第115図 第30号住居跡出土遺物



第116図 第30号住居跡出土遺物

各壁とも検出壁上部に崩壊もみられるが、ほとんど直立し壁面は平坦である。

床面は黄褐色砂質土で、住居中央部付近とかまど周辺を除く範囲は砂質を帯び堅さは認められない。床面の比高差は西壁側に向うにつれ低くなる。床面上に3ヶ所のピットが検出した。P₁は76×54cmの楕円形を呈し、深さは約30cm、P₂は50×35cmで深さ46cmを測る。P₁は位置、深さから見て貯蔵穴と考えられる。P₂は位置的に主柱穴とも見られるが浅いため疑問をもつ。P₃は29号住居跡に伴うものである。

貯蔵穴の底面はやや丸味を持ち、断面形は「U」字状を呈す。覆土は床面上の堆積土層と同質であった。また貯蔵穴内より土器の破片が出土している。周溝は検出し得なかった。

かまどの左半分は道路下に入り、拡張するには危険なため断念した。よって調査範囲は右袖部と燃焼部の一部分であった。袖部は灰白色粘土を用いて、住居壁に対して内湾ぎみに構築している。

燃焼部は住居内にもち、燃焼部の中央部やや右寄りと考えられる位置に川原石を支脚として設置していた。袖部は残存長91cm、最大幅は壁付近で20cmを測る。袖部内壁面は火床付近が遺存しているが上半部はすでに崩壊し、燃焼部内に焼土ブロックとして堆積している。火床は床面と平坦である。なお支脚

VI 検出された遺構と遺物

に使用された川原石は火床面までは達していない。燃焼部覆土は火床面付近に多量の炭化物、灰、焼土層がみられる。その上層は焼土粒を含む暗灰色粘質土層がかまど上層から流れ込んでいる。かまどは住居廃棄後間もなく崩壊したものと考えられる。

住居跡覆土は床面付近で暗灰色砂質土層で、覆土の大半は炭化物、焼土を含む暗褐色土層である。本住居跡は廃棄後短期間で埋没している。

遺物はかまど石袖外側と貯蔵穴で、焚口付近にもわずかに出土している。出土遺物は坏、高坏、小型甕、甕、壺、石製模造品であった。

出土土器のなかでNo1以外は床面より出土している。

剣形石製模造品、石質は片岩質の滑石で滑石よりも硬質で、色調はオリーブ黄色である。形態は剣尻か一方に偏く逆三角形を呈する。表、裏面は粗加工時の条痕があり、その後、形磨されている。側面は粗加工時の、割り痕と粗加工時の条痕が見られ、その後、精研磨がほどこされている。穿孔は表、裏側ともに同径である。

白玉、2、3は側面中央に稜線を持たず、管玉を切断したような円筒状である。断面形はほぼ正方形を呈する。上下面は粗れ、研磨した様子は認められない。

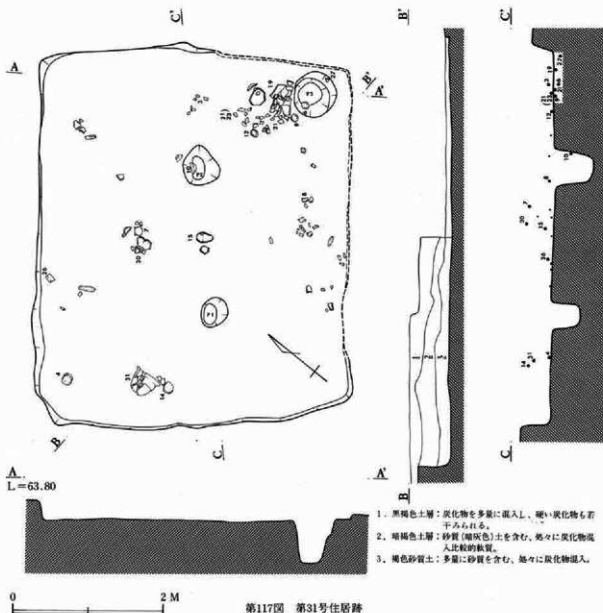
遺物観察表 (第115回)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
115-1	坏	覆土 片	口 14.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 明赤褐色	胴部は内湾きみに立つ。頸部はあまりくびれず口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から胴部にかけて横撫で。胴部は縦方向捩り。内面、口縁部は横撫で。段は比較的肉い。胴部は段調整後研磨。	
115-3	坏	床面 片	口 11.8	胎 細砂粒混入 地 やや軟弱 色 灰褐色	体部は扁平で、外稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。	外面、口縁部は横撫で。段は段調整後などで、底部は捩り。内面、口縁部は横撫で。底部は段調整後横撫で。	
115-3	高坏	下位 片	口 12.8	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 にふい黄色	底部は深く外稜をもち、口縁部は曲線的に立ち上がる。器内は比較的厚い。	外面、口縁部は横撫で。段は段調整。底部は下→上方向捩り。内面、口縁部は横撫で。頸部は指面撫で。底部は横撫で。	内面黒色処理
115-4	高坏	下位 脚柱部定形 裾部片	径 11.4	胎 細砂粒混入 地 堅緻 色 灰褐色	胴部は円錐台形状を呈し、裾部は急に開く。	外面、胴部は縦方向捩り。裾部は段調整後横撫で。内面、胴部は右→左方向捩り。裾部は横撫で。裾部は段調整後横撫で。	
115-5	大型甕	下位 片	径 25.0	胎 砂粒混入 地 堅緻 色 褐色	胴部はしまり、口縁部は外反する。口縁中央部に段をもつ。器内は厚目である。	外面、口縁部は横撫で。段は段調整後横撫で。胴部は段調整後横撫で。内面、口縁部は横撫で。頸部は横撫で。	
115-6	小型甕	床面 片	口 13.2	胎 細砂粒混入 地 やや軟弱 色 赤褐色	胴部にやや張りをもち、口縁部は縦かへに外反する。	外面、口縁部は横撫で。段は段調整後横撫で。胴部は段調整後横撫で。内面、口縁部は横撫で。頸部は横撫で。	

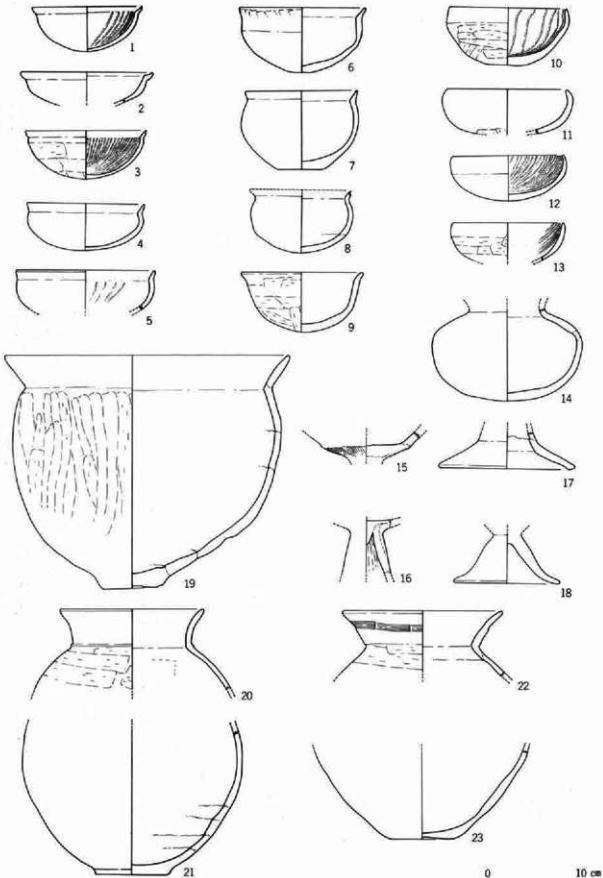
I. 住居跡 (第31号)

図版番号	部形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・地成・色調	部形の特徴	特形の特徴	備考
115-7	裏	床面 完形	高 27.0 口 18.7 底 7.0	胎 砂粒混入 壳 腐蝕 色 褐色	底部は立ち上がり部をもつ円形の平底で、制中央部に最大幅をもつ。口縁部は緩やかに外反する。	外面、口縁部は横溝で、口唇部は窪調整後溝で、製上半部から中央部は上→下方向掘削り。底部付近は左→右方向掘削り。底面、口縁部は横溝で、製上半部は左→左方向掘削で、中央部は左→右方向掘削で、下半部は横溝で。	二次地成痕が見られる。
115-8	裏	床面 $\frac{1}{2}$	口 17.8	胎 砂粒混入 壳 腐蝕 色 赤褐色	胴部は球形を呈する。頸部は物くくびれ、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、口縁部は横溝で、口唇部は横溝で、胴部は右→左方向掘削り。内面、口縁部は横溝で、横は丸みをもつ。胴部は指溝横溝で。	

第31号住居跡 (第117~119図)

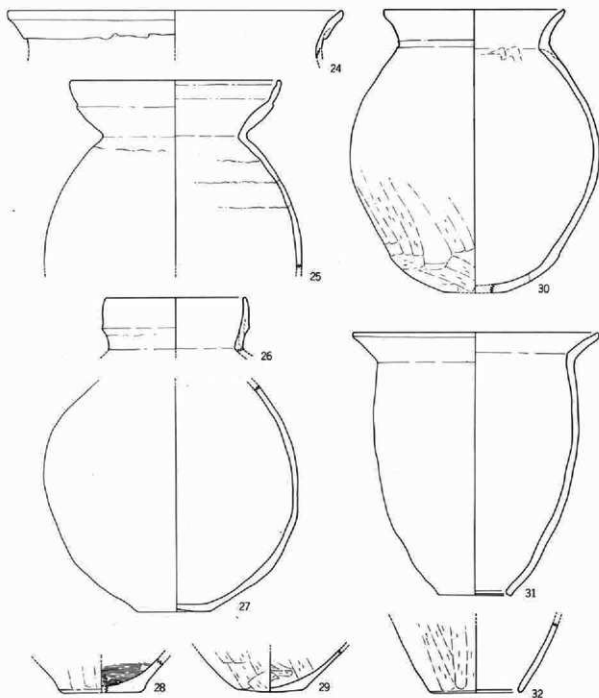


VI 検出された遺構と遺物



第118図 第31号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第31号)



第119図 第31号住居跡出土遺物

本住居跡は遺跡の中央部やや北寄りに位置する。本住居跡は北東コーナーを中心に26号住居跡が、南東コーナーは12号住居跡とがそれぞれ重複する。26号住居跡は約24cm、12号住居跡は4cm上に構築しているため、本住居跡のプランを検出することが出来た。12号住居跡と重複する壁は、残りが少ないため破線で標記した。壁はほぼ一直線状に掘り込んでいるが、西壁は外方にやや湾曲している。各コーナーはやや丸味をもち、規模は東西5m、南北4.1mの長方形を呈し、方位はN-58°-Eを測る。壁は12号住居跡の重複部分と北西コーナー付近を除いては比較的遺存状態が良くほぼ直に立ち上がる。

VI 検出された遺構と遺物

北西コーナーは壁の崩落が見え、傾斜をもち壁面も粗い。確認壁高は東壁約30cm、西壁40cmを測る。

床面はほぼ平坦で住居中央部と南壁側が強く、南壁側床面に炭化物、焼土が検出された。床面上には3ヶ所のピットが検出された。それぞれのピットはP₁は40×35cm深さ40cm、P₂は50×50cm深さ55cm、P₃は1.1×1.1m深さ60cmを測る。P₁、P₂は柱穴、P₃は貯蔵穴と考えられる。柱穴は東、西壁のほぼ中央を結んだ線上に2穴並んで検出している。また両穴とも南北壁間のほぼ中央に位置し、柱穴間は約2mを測る。

貯蔵穴は南東コーナーに位置し、この周辺の床面は堅くなっていて、断面形は東壁側で2段に塌り込まれ、底面はほぼ平坦である。なおこの貯蔵穴は12号住居跡の床面調査の際検出し調査した。本住居跡を調査した時点で、本住居跡に伴うものと判断された。かまど本体は遺存せず、床面の炭化物等の状況から12号住居跡と重複した部分に構築されていたものと考えられる。

住居跡覆土の大半は炭化物を混入する砂質土壌で、上層部は下層部に比べ炭化物、遺物を多量に混入する暗褐色土層である。

遺物は貯蔵穴周辺に多量に出土している。出土遺物は坏、高坏、壺、甕であった。

出土土器のなかで№3、4、6、8、9、12、19、23、26、27は床面より出土している。

遺物観察表 (第118、119図)

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	粘土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
Ⅱ-1	坏	覆土層	高 4.7 口 11.8	粘 砂粒混入 焼 灰緑色 色 褐色	底部は丸底で、胴部は内湾きみに立ち上がり、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から胴部まで横線で、胴部から底部は左→右斜方向彫り。内面、口縁部は縦溝後横溝で、横はやや丸みをもつ。胴部は粗磨。	底部に黒灰あり。
Ⅱ-2	坏	覆土層	口 14.2	粘 砂粒混入 焼 灰緑色 色 褐色	胴部は内湾きみに立ち、口縁部は短く屈曲する。	内面、口縁部から胴部上位まで横線で、胴部下位は彫り。内面、口縁部は横溝で、横は鋭い。胴部は粗磨灰がある。	
Ⅱ-3	坏	床面 完形	高 5.1 口 13.0	粘 細砂粒混入 焼 灰緑色 色 黄色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部はわずかに外反する。口縁部は鋭い。	外面、器用が見れ不明瞭だが口縁部は軽い凹溝後、胴部は右→左方向彫り。内面、口縁部は横溝で横細かい右上がり研磨。胴部は丁寧な磨で、全体を丸く整形。	
Ⅱ-4	坏	床面 完形	高 5.0 口 12.5	粘 細砂粒混入 焼 灰緑色 色 赤褐色	底部は丸底で、胴部はやや球形を呈し、口縁部は短く直立する。	外面、口縁部は横溝で、胴部から底部にかけて横で。内面、口縁部は横溝で、横は丸みをもつ。胴部は円形に磨で。	胴部一部に黒灰あり。
Ⅱ-5	坏	覆土層	口 15.0	粘 細砂粒混入 焼 やや軟弱 色 明赤褐色	胴部は内湾きみに立ち、口縁部は短く外反する。	外面、口縁部から胴部にかけて横溝で、胴部は彫り。内面、口縁部は横溝で、横は鋭い。胴部は粗磨灰が見られる。	
Ⅱ-6	坏	床面 完形	高 6.9 口 13.0	粘 細砂粒混入 焼 灰緑色 色 褐色	胴下半部は扁平きみに立ち上がり、上半部はほぼ直立し、口縁部で短く外反する。口縁部は丸い。底部に起伏があり不安定。	外面、口縁部は横溝で、胴部は丁寧な粗磨で、胴上半部は縦溝後横溝で、底部は不定方向彫り。内面、口縁部及び胴部は横溝で、胴部から底部にかけて丁寧な磨で、全体を丸く深く仕上げている。	整形輪字 胴部→口縁部

1. 住居跡(第31号)

図版番号	部 形	出土位置・ 遺存状態	法 量	土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
III-7	埴	中位 定形	高 8.3 口 12.0 底 4.8	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部は円形の平底で、胴部は内湾ぎみに立つ、口縁部は短く外反する。	内外面共に器面が荒れ整形不明瞭。内腹に浅彫り痕残る。	胴部一部に黒斑あり。
III-8	埴	床面 ほぼ定形	残存高 6.7	胎 細砂粒混入 焼 やや軟弱 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部は「J」の字状に外反する。	外面、胴部は磨撫で。体部内外面荒れ整形不明瞭。	
III-9	埴	床面 定形	高 6.4 口 13.1	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴部は球形を呈し、口縁部がわずかに外反する。口縁部は丸い。	外面、胴部は指頭撫で。胴上半部は右→左方向置削り。底部は不定方向置削り。内面、口唇部及び胴上半部は丁寧な磨撫で。	整形順序 口縁部→胴部 内面底部は27.5×8cmの黒斑あり。
III-10	埴	覆土 ほぼ定形	高 6.1 口 12.5 底 3.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色 におい・傷	底部は円形の平底で、安定が良く胴部は外湾ぎみに立ち上がる。口縁部はやや内湾ぎみである。	外面、口縁部は磨撫で。胴上半部は左→右方向置削り。下半部は下→上方向置削り。底部は磨調整。口縁部と胴部は整形の違いで区分している。内面、全体は撫で後研磨。	内面約1/3黒斑あり。
III-11	埴	覆土 片	口 12.8	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部は内湾ぎみに立ち、口唇部付定で更に内湾する。口縁部と胴部の区別があまりない。	外面、口縁部から胴上半部は磨撫で。下半部は磨撫で。底部は上→下方向置削り。内面、口唇部は磨撫で。胴部から底部は磨撫で。	
III-12	埴	床面 定形	高 4.8 口 11.8	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	底部に厚みをもつ。胴部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は丸い。	外面、口縁部は磨撫で。横腹により胴部と区分。胴部は横置撫で。底部は不定方向置削り。内面、全体は撫で後右廻り右上がり研磨。	
III-13	埴	覆土 片	口 11.8	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部は内湾ぎみに立つ。	外面、口縁部は磨撫で。胴部は左→右方向置削り。口縁部と胴部は整形の違いで区分している。内面、口縁部から胴部にかけて右上がり研磨。	
III-14	埴	中位 片	残存高 9.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部は丸底で、胴部中程に張りをもつ球形をつぶした様な形を呈する。	外面、胴部は磨撫で。胴上半部は磨撫で。下半部から底部は置削り。内面、胴部は磨撫で。胴上半部は指頭撫で。下半部から底部は磨撫で。底部に浅痕残る。	
III-15	高埴	下位 片	残存高 2.1	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱 色 褐色	底部は平底で、口縁部は外反する。	外面、底部は磨毛調整後撫でを施す。底部は磨毛調整で磨毛目痕残る。内面、撫で。	
III-16	高埴	覆土 片	残存高 5.5	胎 細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	胴部は胴部に向かって徐々に開く。	外面、胴部は撫で。内面、置削り。接合部に絞り目痕。	
III-17	高埴	覆土 片	高 14.4	胎 微細砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	底部は横腹に開く。	外面、胴部は磨撫で。底部部は磨調整。内面、横腹痕残る。	底部部に黒斑あり。横腹痕残る。

VI 検出された遺構と遺物

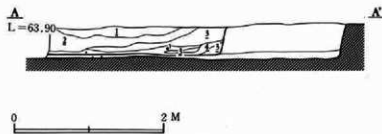
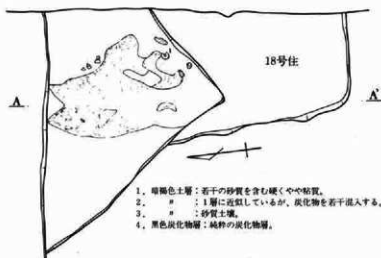
図録番号	器形	出土位置・遺存状態	流量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
III-18	高杯	覆土 脚柱部完形 底部欠	残存高 5.4 底 11.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	接合部はしまり、胴部は「ハ」の字状に開き、底部でさらに開く。	外面、胴部は縦方向窪削り。底部は横溝で、内面、胴部に被り目残れる。その下は撫でを施している。頸部は横溝で、	底部内外面に黒斑あり。
III-19	甕	床面 ほぼ定形	高 24.4 口 30.5 底 5.8	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 灰褐色	底部に最大厚をもち、他はほぼ均一。底部は平底で中央部にやや凹みがある。胴部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は丸い、広口甕。	外面、口縁部は横溝で、胴部は上→下方向窪削り。底部は窪削り。内面、口縁部は横溝で、胴部から底部にかけて横方向窪削り、撫でにより接は鋭い。	
III-20	甕	覆土 欠	口 15.4	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 濃い褐色	胴部は張りをもち、頸部はしまる。口縁部は外反し口唇部で更に外反する。	外面、口縁部は横溝で、頸部は窪調整による段がある。胴部は右→左方向窪削り。内面、口縁部は横溝で、接は比較的鋭い。胴部は窪削り。	
III-21	甕	床面 欠	底 7.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 濃い赤褐色	底部に厚みをもち、胴部はほぼ均一。底部は平底で胴部は球形を呈する。	外面、胴部は窪削りを施すが器面が荒れているため方向は不明瞭。底部は窪削り、立ち上がり部は指滑削り。内面、胴部から底部は平滑な撫で。接合痕が明瞭。	外面新下半部に黒斑あり。
III-22	甕	覆土 欠	口 17.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	胴部上位は張りをもち、頸部は強くしまる。口縁部は「く」の字状に外反する。	外面、口縁部は横溝で、中程に左→右方向胴毛目が施されている。胴部上位は右→左方向窪削り。内面、口縁部は横溝で、接は丸みをもつ。胴部は窪削り、接合痕が見られる。	
III-23	甕	床面 底部定形	底 6.9	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 褐色	甕の大きさに比し、底部は小さくやや上げ底を呈する。胴部は球形に立ち上がる。	外面、胴部は窪削りであるが方向不明瞭。底部は丁寧な窪削り。底部に輪郭は窪削りにより調整。丸みをもつ。内面、全体は窪削り。	
III-24	甕	覆土 欠	口 35.8	胎 砂粒混入 焼 やや軟弱 色 濃い橙褐色	口縁部は外反ぎみに立ち、口縁部からの折り返しにより中程に段をもつ。	内外面共に横溝で、口縁部に粘土帯の接合痕が明瞭に見える。	
III-25	甕	覆土 欠	口 22.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 浅黄褐色	胴中央部に最大幅をもち球形を呈する。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、中位に段をもつ。口唇部はやや内湾する。口縁部は丸い。	外面、口縁部は横溝で、胴部は窪削り。内面、口縁部は丁寧な横溝で、口縁部中位に指滑削りによるくぼみがある。胴部は窪削り。	
III-26	甕	床面 欠	口 15.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外暗褐色 内浅黄褐色	口縁部は外反ぎみに立ち、口縁部からの折り返しにより中程に段をもつ。	外面、口縁部は横溝で、段下に接合痕が見える。内面、口縁部は横溝で、	
III-27	甕	床面 欠	底 7.5 胴最大幅 27	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 暗褐色	ほぼ均一した厚みをもつ。胴中央部に最大幅をもち底部は小さく上げ底を呈する。底部から胴部にかけて急激に丸みをもつ。	外面、胴部は不定方向粗い窪削り。底部は粗い窪削り。内面、窪削り窪削り。全体を球形に整形している。	
III-28	甕	覆土 欠	底 9.3	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 浅黄褐色	底部は円形の平底で胴部へと狭く。	外面、胴部下位は窪削り、底部は窪調整。内面、横方向胴毛目調整。	底部一部に黒斑あり。

1. 住居跡 (第32号)

図版番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
119-29	甕	覆土 片	底 7.4	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 緑色	底部は円形の平底、胴部は外反 ぎみに立ち上がる。器内は全体 的に深い。	外面、胴部下位は上→下方向直削り。 底部は直調整。 内面、直削り、直削残。	胴部下位一部に黒 炭あり。
119-30	甕	中位 片	高 30.0 口 19.2 底 6.4	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 緑色	底部は円形の平底で胴中央部に 最大幅をもち、球形を呈する。 胴部はややしまり口縁部は外反 する。	外面、口縁部は横削で、胴部は直調整。 胴上半部は右→左方向、中央部は下→ 上方向、下半部は左→右削方向、直削 り。 内面、口縁部は横削で、残は直削。胴 部は右→左方向直削で、底部付近に直 削残。	
119-31	甕	中位 ほぼ完形	高 27.8 口 26.3 孔 7.7	胎 細砂粒混 入 焼 灰緑 色 赤褐色	底部は円形の穿孔。胴部はやや 張りをもち立ち上がる。口縁部 は屈曲する。	外面、口縁部は横削で、口唇部は直調 整。胴部は直削り。穿孔は回転直削り で2段調整、焼成前による穿孔。 内面、口縁部は横削で、残は直削。胴 部は直削で、粘土接合直削。	胴部一部に黒炭あ り。
119-32	甕	覆土 片	孔 9.8	胎 砂粒混入 焼 灰緑 色 緑色	底部は円形の穿孔。胴部は外反 ぎみに立ち上がる。	外面、胴部下位は下→上方向直削り。 内面、胴部は下→上方向直削で、孔は 回転直削り2段調整。	胴部下位一部に黒 炭あり。

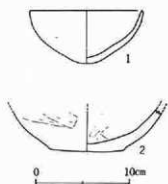
第32号住居跡 (第120～122図)

本住居跡は遺跡の中央部やや北寄りに位置する。重複関係は18号住居跡の約6cm上に構築し、12号住居跡によって北側半分以上が切断されている。また東側半分は第2次調査で遺失し、全貌を把握することはできなかった。よって住居跡の南西コーナー付近のみ遺存する。残存壁は西壁で約1.3m、南壁は1.6mであった。コーナーはほぼ直角を呈することから方形住居跡と考えられる。方位は西壁を棟方向と仮定するとN-61°-Eを測る。西壁は炭化物、焼土等を含まない暗褐色粘質土層である。南壁はほぼ一直線状に掘り込まれ、西壁はやや曲線的になる。残存壁高は37cmを測りほぼ直立する。遺存度は良好で壁面は平坦である。

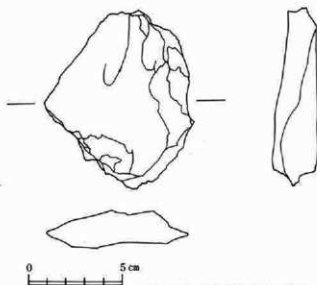


第120図 第32号住居跡

VI 検出された遺構と遺物



第121図
第32号住居跡出土遺物



第122図 第32号住居跡出土遺物

床面はほぼ平坦で堅いが、18号住居跡と重複する部分は床面レベルがやや下り、床の硬さも幾分軟弱となる。床面直上には多量の炭化物が検出された。炭化物の中には茅状のものが束になっているのも見受けられたが、住居跡に使用された建築部材は見当らなかった。床面が焼けていることから本住居跡は火災に遭遇しているものと思われる。かまど、周溝、柱穴等は検出し得なかった。

住居跡覆土は壁直下に軟質の砂質土層が堆積し、床面中央寄りには純粋に近い炭化物層が見られた。覆土上層は炭化物粒をわずかに含む暗褐色砂質土層である。

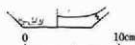
遺物は炭化物層内に数点の土器破片が出土している。出土遺物は、甕、滑石であった。

滑石、荒削段階のもので両面に、自然剥離面を残すが一部に転礫の自然面も見られる。人工的な加工は認められない。

遺物観察表 (第121図)

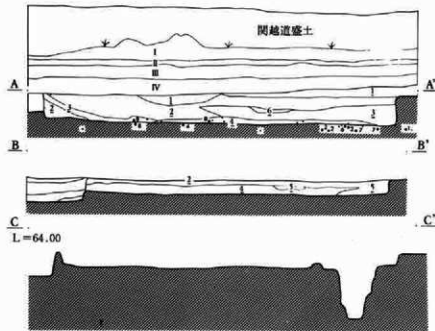
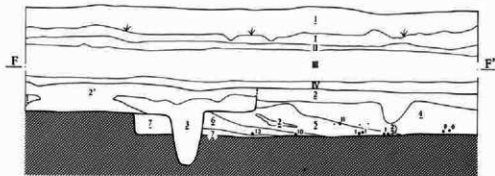
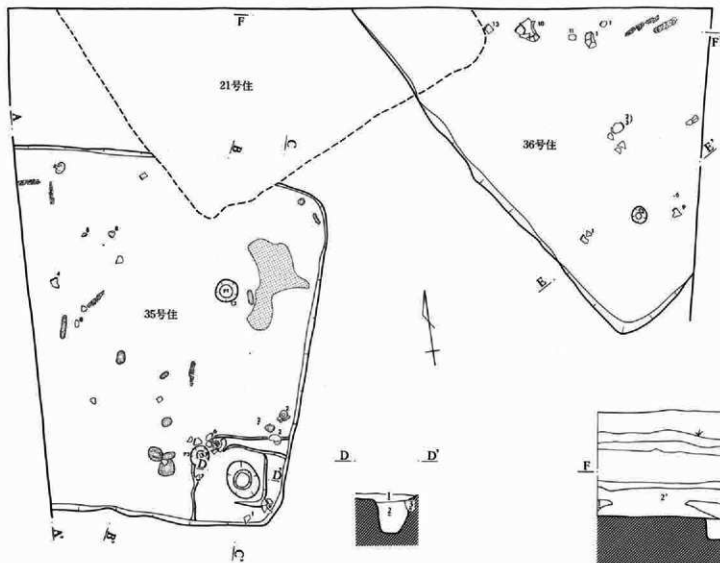
図番番号	器形	出土位置・ 遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	装飾の特徴	備考
出-1	甕	床面 片	高 5.6 口 12.2	胎 細砂粒混 入 焼 紫褐色 色 明赤褐色	底部に厚みもち、口縁部で薄くなる。体部は均曲きみに立ち上がる。口縁部は鋭い。	器面は荒れているが体部に不定方向の磨削が見られる。	
出-2	甕	覆土 片	底 7.6	胎 砂粒混入 焼 紫褐色 色 橙褐色	底部は平成で内湾きみに立つ。	外面、胴部は左→右方向磨削り。体部磨削り後底部の調整。 内面、磨削で。	

第33号住居跡 (第114、123図)



第123図
第33号住居跡出土遺物

本住居跡は27号住居跡の下に構築し、30号住居跡によって南壁が切られている。30号住居跡と床面のレベルを同じくする。住居跡の大半は道路下に入り、南西コーナーを中心として両壁わずか50cmを検出したのみであった。このコーナーはほぼ直角を呈することから方形住居跡と考えられる。方位は西



35号住居跡

- I. 黄褐色土層: A層入砂質を持ち固い粗砂凝結。灰色粘質土層:粘質を持ち固く1層と区別している。
- II. 黄褐色土層:多量に混入。
- III. 黄褐色土層:やや粘土質であるを砂質を帯びる融化石層。
- IV. 暗灰色土層:マンガン凝集土層にマンガンの1層が引ける。
- V. 暗褐色粘質土層:マンガン若土混入。灰色粘土を若干混入。
- VI. * : 黄褐色粘土が若干混入。
3. 暗灰色粘質土層:粘土質であり炭化物を混入する。
4. 黄褐色土層:多量の炭化物混入。
5. 黄褐色土層。
6. 純粋炭化物層。

36号住居跡

1. 暗褐色土層:正下の融化石層を混入混入。やや砂質。
2. 黒色土層:多量の炭化物混入層。2'は2層より炭化物がなく、黄土層の剥れ込み。
3. 黄褐色土層:灰色土を含有程度で融化石層。
4. 暗褐色土層:炭化物層の入れ込み。
5. 黄褐色土層:若干炭化物粒混入やや砂質。
6. 黄褐色土層。
7. 灰褐色土層。



1. 住居跡 (第33号・第35号)

壁を棟方向と仮定するとN-74°-Eを測る。壁は両壁とも一直線状に掘り込まれ遺存度は良好である。残存壁高は約25cmを測り壁面は平坦である。

床面は砂質土壌で、検出床面がコーナー付近のため軟弱である。周溝は検出し得なかった。

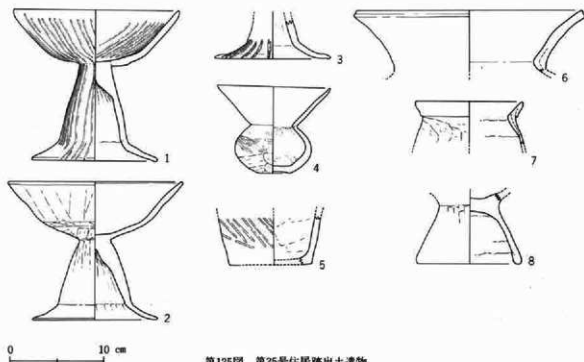
住居跡覆土は壁直下は壁の崩落の黄褐色砂質土層が堆積し、覆土の大半はやや黒味の強い暗灰色砂質土層である。覆土の土質は30号住居跡と近似している。

遺物は南壁下に土師器壺底部の破片が1点出土している。

第35号住居跡 (第124~127図)

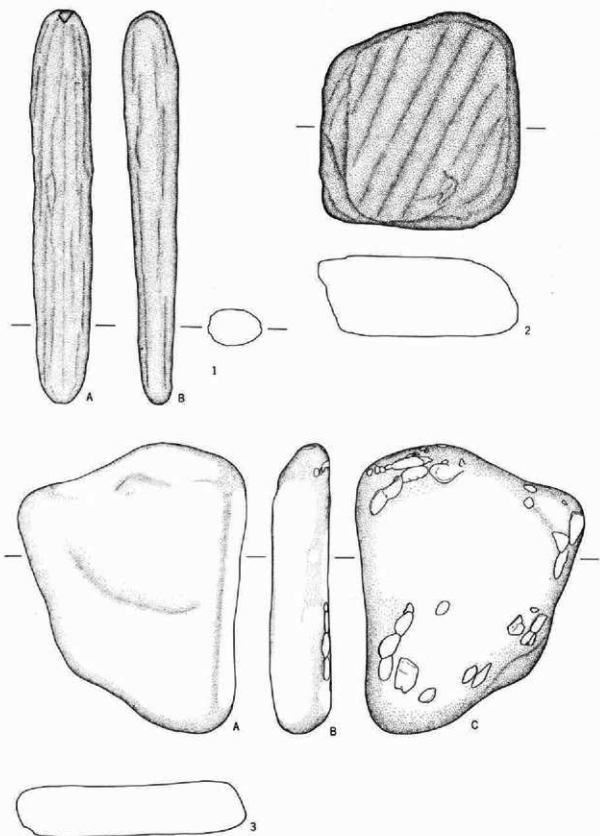
本住居跡は第2次調査では未買収地区のビニールハウスにあたり、第3次調査で21号住居跡の全貌を明らかにするため、可能な限り拡張した区域内にある。本住居跡は東、南両壁をほぼ一直線状に掘り込み、コーナーはほぼ直角を呈する。北壁中央部を21号住居跡の一部を切断されているが、やや外方へ張り出している。西壁は道路下に入り不明。検出した各壁長は東壁4.5m、南壁2.9m、北壁4.2mを測る。各コーナーはやや丸味をもち隅丸方形住居跡と考えられる。方位はN-20°-Eを測る。壁は黄褐色砂質土層となっている。壁の遺存状態は良く、各壁ともほぼ垂直に立ち上る。壁の東、北の両壁はほぼ平坦であるが南壁は壁面が崩落しやや起伏がある。残存壁高は約20cmを測る。また壁の掘り込みはマンガン凝集層(Ⅳ)付近まで認められ、確認壁高は約35cmであった。

床面は全体に良く踏み堅められ、住居中央部と貯蔵穴周辺は特に堅さが目立つ。床面上には土器、川原石、炭化物が散乱する。床面上の炭化物、東壁側の灰、焼土の状態から察して、火災住居跡の可能性も考えられる。周溝は検出し得なかった。柱穴は床面上に2ヶ所検出した。P₁28×30cm、深さ81cm、P₂24×24cm、深さ70cmを測る。各柱穴の覆土は炭化物粒を含む暗褐色粘質土壌である。位置、深さ、覆土の状態からいずれも主柱穴と考えられる。柱穴間は2.2mで、東壁間は1.2mを計測する。



第125図 第35号住居跡出土遺物

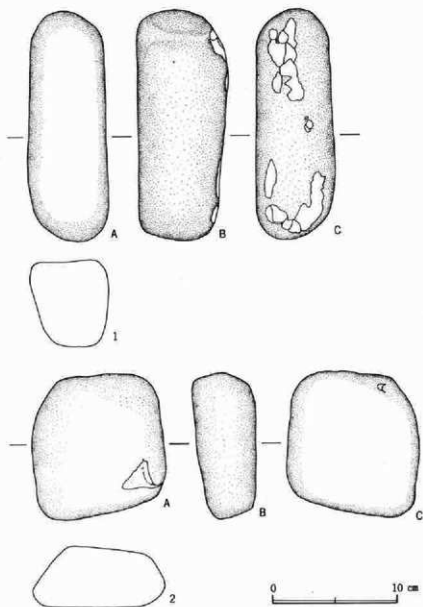
VI 検出された遺構と遺物



0 10 cm

第126図 第35号住居跡出土遺物

1. 住居跡 (第35号)



第127図 第35号住居跡出土遺跡

貯蔵穴は住居跡の南東コーナーに設置されている。平面形は上端部で80×75cmのはほぼ正方形を呈し、中段で45×45cmの円形となる。深さは床面下66cmを測り底面はほぼ平坦である。貯蔵穴の周囲には幅12~22cm、高さ約8cmの帯状の土手が巡っている。帯状の土手は暗褐色粘質土壌で床面の土質とは異なり床面構築後、本土手を築いたものと推察される。また柱穴とも重複しており、柱穴の上面ではこの帯状の土手は途切れ、柱を中心に各壁に向って直角に築いていたものと考えられる。土手の内側はほぼ平坦で一見貯蔵穴に蓋をしていた様な感がある。

かまどは検出しえず、床面上でも精査したが、炉の痕跡も認めることが出来なかった。21号住居跡に切断されている周辺には炭化物、焼土、灰が若干検出し、床面も堅いことからこの付近

にかまどが存在した可能性もある。

住居跡覆土は全体に炭化物粒が認められ、床面付近には多量の炭化物を混入する暗灰色粘質土層が堆積しており、本住居跡が完全に埋没した後に、マンガン凝集層 (Ⅳ層) がつくられたことが土層断面でうかがえる。

遺物は貯蔵穴周辺に多量に出土した。出土遺物は高環、埴、甃、砥石、石などである。

出土土器のなかでNo. 3、5を除くすべては床面より出土している。

砥石、3、4はA~C面は摩耗し平滑で、C面に叩きによる剥離痕がみられる。5は小さな角閃石、石英を含む角閃安山岩で表面は摩耗し平滑。摩耗面はやや内湾する。

石、1は緑泥片岩、2は小さな角閃石を多量に含む角閃安山岩で両方とも、人工加工は認められない自然石。

VI 検出された遺構と遺物

遺物観察表 (第125図)

図番番号	器形	出土位置・遺存状況	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
図-1	高坏	床直 定形	高 16.0 口 17.6 幅 13.4	胎 細砂粒混 入 地 紫緑 色 に白っぽい 褐色	坏部体部は外反し、口唇部で内湾みである。脚部は「ハ」の字状を呈し、裾部は強く開く。	坏部外面、体部を破損後口唇部を横撫で、 内面、口唇部は横撫で、体部は研磨。 脚部外面、脚柱部は研磨。裾部は研磨後横撫で。 内面、脚柱部は絞り目状、下半部は撫で、裾部は横撫で。	
図-2	高坏	床面 坏部片 脚部片	高 14.6 口 18.8 幅 13.4	胎 細砂粒混 入 地 紫緑 色 に白っぽい 褐色	坏部の器内は上半部に厚みをもち下半部が薄い。坏部は緩やかに外反する。脚部は「ハ」の字状を呈する。裾部は強く開く。	坏部外面、口唇部から体中央部まで掘削り後横撫で、口唇部は横撫で。 内面、体上半部は横撫で、中央部から下半部は見調整。 脚部外面、脚柱上半部は掘削り、下半部は撫で、裾部は横撫で。 内面、脚柱上半部に絞り目状、下半部は掘削り後横撫で、裾部は見調整後横撫で。	
図-3	高坏	覆土 片	幅 12.4	胎 細砂粒混 入 地 やや軟弱 褐色	脚部は「ハ」の字状に開く、裾部は強く開く。	脚部外面、脚柱下半部は掘削り、裾部は研磨。 内面、右→左方向掘削り、裾部は横撫で。	
図-4	罎	床面 口縁部片 脚部→底部 片	高 9.1 口 2.2 底 3.1	胎 細砂粒混 入 地 紫緑 色 外殻色黒 褐色	口縁部が薄く脚部から底部に厚みをもつ。底部は円形のやや上げ直で脚部中程に張りをもち、頸部でしまる。口縁部は屈曲し外反する。	外面、口縁部は横撫で、頸部は見調整。胴中央部は刷毛調整。下半部は左→右方向掘削り。底部は見調整。 内面、口縁部は横撫で、後は鋭く絞り目状になる。胴部は横撫で。	胴部一部に黒炭あり。
図-5	鉢	覆土 片	残存高 5.0 底 9.0	胎 砂粒混入 地 紫緑 色 淡褐色	底部は円形の平直で胴部はほぼ直立する。	外面、胴部は右→左方向掘削りによる沈没が施されている。 内面、見撫で。	
図-6	甕	床面 口縁部定形	口 24.6	胎 砂粒混入 地 紫緑 色 褐色	器内が薄い、口縁部は屈曲する。口唇部に一糸の沈線を有する。	外面、口縁部は横撫で、口唇部は見調整。 内面、口縁部は横撫で。	
図-7	小空甕	床面 片	口 11.4	胎 砂粒混入 地 紫緑 色 黒褐色	肩部はあまり張らず、口縁部は「く」の字状に外反すし、口唇部でやや内湾する。	外面、口縁部は折り返し口縁で横撫で、肩部は右→左方向掘削り。 内面、口縁部は横撫で、肩部は無で、輪積痕が見える。	
図-8	台付甕	床面 台部定形	幅 11.0	胎 細砂粒混 入 地 紫緑 色 褐色	大きく短い台部で内湾みで「ハ」の字状に開く。口縁部は平直。	外面、台部は見調整。端部は掘削り。 内面、折り返し後横撫で。後合部に折戻り痕あり。	

第36号住居跡 (第124、128図)

本住居跡は第2次調査では未買収地区内であり、第3次調査の際、21号住居跡の拡張に伴って検出された遺構である。住居確認規模は西壁6m、南壁1.1m、他は関越自動車道路の盛土がうず高くつまれ、これ以上の拡張は危険が伴い、作業的にも困難なため断念せざるを得なかった。住居跡の確認コーナーがほぼ直角を呈することから方形住居跡と考えられる。方位は西壁でN-64°-Eを測る。

1. 住居跡 (第36号)

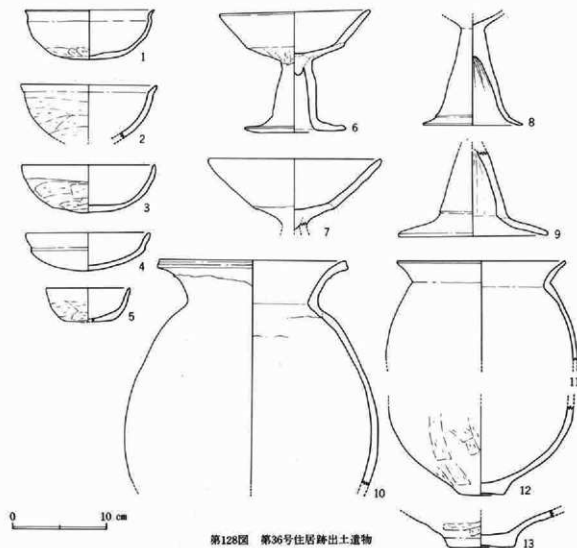
壁は灰褐色粘土層ではほぼ直立し壁面はほぼ平坦で遺存度は良好である。遺構検出面の上端部は粘土のため崩壊しやすく乱れが生じている。残存壁高は約65cmを測り、北側部分では21号住居跡が本住居跡上に構築し残存壁高は30cmであった。確認壁はマンガン凝集層まで認めることが出来た。本遺跡中最も深い住居跡である。

床面はほぼ平坦で中央部付近がわずかに堅く他は軟弱であった。床面上に若干の遺物と炭化材が検出された。柱穴は南西コーナーに1ヶ所確認された。規模は20×20cmの円形を呈し、深さ43cmを測る。ピットは西壁より1.2m、南壁より1.1mの位置にあり、覆土は炭化物を含む暗褐色粘土層である。このピットは位置、深さ、覆土の状況から見て主柱穴の一部と考えられる。

住居跡覆土は壁直下灰褐色粘土層が堆積し、その上層は暗褐色粘質土層である。これらの土層で何回かの堆積過程がうかがえる。

遺物は床面より出土した。出土遺物は環、高環、甕であった。

出土土器のなかでNo 5、7、8、11を除くすべては床面より出土している。



第128図 第36号住居跡出土遺物

VI 検出された遺構と遺物

遺物観察表 (第128図)

図番号	器形	出土位置・ 保存状況	法量	胎土・胎成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
III-1	杯	床面 写	高 5.3 口 13.8	胎 砂粒混入 焼 栗褐色 色 淡褐色	底部は丸底で、胴部は内湾きみに立ち上がり口縁部は強く外反する。	外面、口縁部は指痕による横線で、胴上半部から中央部は窪削り横線で、下半部は左→右方向窪削り。 内面、口縁部は横線で、胴部は窪調整横線で、底部に窪削れる。	
III-2	杯	床面 写	口 14.6	胎 砂粒混入 焼 栗褐色 色 赤褐色	胴部は内湾きみに立ち、口縁部はわずかに外反する。	外面、口縁部は横線で、胴部は右→左方向窪削り。 内面、口縁部は横線で、胴部は窪削りで、	
III-3	杯	床面 ほぼ定形	高 5.4 口 14.2	胎 砂粒混入 焼 栗褐色 色 外暗褐色 内赤褐色	底部は平底で、内湾きみに立ち口縁部となる。	外面、口縁部は横線で、胴部から底部にかけて左→右方向窪削り。 内面、口縁部は横線で、胴部から底部は窪削りで、	底部一部に黒疵
III-4	杯	床面 写	高 4.0 口 13.3	胎 微細粒混入 焼 軟弱 色 褐色	底部は丸底で、扁平きみに立ち口縁部はわずかに外反し、口唇部がわずかに内湾する。	内外両面に器面が整然と不明瞭。外縁は窪調整。	
III-5	杯	覆土 写	高 3.6 口 9.0 底 4.8	胎 砂粒混入 焼 栗褐色 色 褐色	底部は平底で、胴部は外反きみに立ち上がり口縁部となる。 器内は底部が一番薄い。	外面、口縁部は横線で、胴部は左→右方向窪削り。底部は窪調整。 内面、口縁部は横線で、胴部は窪削りで、	
III-6	高杯	床面 ほぼ定形	高 12.8 口 16.3 底 10.9	胎 細砂粒混入 焼 栗褐色 色 褐色	口縁部に厚をもつ。坏体部は扁平を呈し口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は鋭い。胴部は細く短い。裾部は一次に開く。裾部は平底で、裾端部はやや上へ反る。	外部外面、口縁部は横線で、口唇部の境は窪削りによりわずかな段をもつ。体部は窪削りで。 内面、全体は横線で。 脚部外面、脚柱部は縦方向横線で、裾部は横線で。 内面、脚柱部は縦方向に数箇の段を付ける窪削り。裾部は丁寧な横線で。ほぞの差し込みは環部と脚柱部を重ねた後環部から底部に差し込む。ほぞは調整痕なし。	整然脚部 脚柱部 →環部 →口縁部
III-7	高杯	覆土 写	口 18.6	胎 細砂粒混入 焼 やや軟弱 色 明赤褐色	胴部は細く、不明瞭な外反をもち環部は大きく外反する。	外部外面、上位から中位は横線で、後下は窪削り。 外部内面、上位は横線で、中位以下は窪調整横線で。	外部内面底部黒疵あり。
III-8	高杯	覆土 脚柱部定形 裾部写	高 10.3	胎 細砂粒混入 焼 栗褐色 色 赤褐色	接合部は強くしまり、脚部は三角形状を呈する。裾部はわずかに開く。	外面、脚部は縦方向研削。裾部は横線で。 内面、脚部は鋭い目筋。下半部は横で、裾部は横削りで。	
III-9	高杯	床面 脚柱部定形 裾部写	高 16.0	胎 細砂粒混入 焼 栗褐色 色 赤褐色	脚部は三角形状を呈し、裾部は裾端に開く。	外面、脚部は縦方向窪削り。脚部と裾部の境は指痕による横方向横線で、裾部は横削りで。 内面、脚部は左→右方向窪削り。境は鋭い。裾部は横削りで。	
III-10	甕	床面 写	口 20.0	胎 砂粒混入 焼 栗褐色 色 褐色	胴下半部に帯りをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部付近で更に外反する。	外面、口縁部は横線で、口唇部は窪調整。胴部は右→左方向窪削り。 内面、口縁部は鋭い整形は不明瞭だが横削りと思われる。境は鋭い。胴部は横削りで。	

2. その他の遺構 3. 溝 4. グリッド出土遺物

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
III-11	甕	中位 残	口 18.0	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 土に近い黄褐色	胴部はやや球形を呈し、口縁部は屈曲する。	外面、口縁部は微蝕で、胴部から胴上半部は横方向、中央部は斜方向に削り、内面、口縁部は微蝕で、後はやや丸みがある。胴部は横方向に削りで、	
III-12	甕	床面 胴部下位 底部定形	底 4.6	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 赤褐色	底部は小さな立ち上がり部をもつ円形の平底、胴部は球形を呈する。	外面、胴下半部は下→上方向に削り、底部は微調整、中央部にはほみがある。内面、微蝕で、	底部片と胴部一部に黒炭あり、
III-13	甕	床面 底部定形	底 7.2	胎 砂粒混入 焼 堅緻 色 外褐色 内暗褐色	底部は円形の平底で立ち上がり部をもつ、胴部下位は強く外反し球形を呈すると思われる。	外面、胴部下位は削り、底部は微調整後蝕で、内面、微蝕で、黒炭残る。	

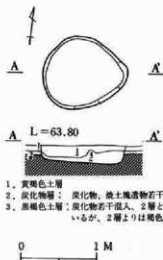
2. その他の遺構

第1号土坑 (第129図)

2号住居跡の南東コーナーを切断し掘り込んでいる。平面形は卵形を呈し、規模は114×96cm、深さ23cmを測る浅い土坑である。覆土は2分層で、下層は炭化物をわずかに含む黒褐色土層で、上層は炭化物を含まない黄褐色土層である。

本土坑を構成する基盤層は上層より1) 黄褐色土層、2) 炭化物層、3) 灰白色砂質土層である。炭化物層は2号住居跡に検出したものと同類と考えられる。

本土坑は炭化物層が安定し、1) 層が安定したのちに掘り込んでいる。出土遺物はなく土坑の性格、時期は不明である。



第129図 第1号土坑

3. 溝

20号住居跡付近から7、5、8 A号住居跡を経て16号住居跡で不明となる。南側を1号溝、北側を2号溝と呼称する。両溝とも幅20～30cm、深さ20cmを測り断面は方形を呈する。覆土は鉄分をやや含む茶褐色土層で一括埋土となっている。溝間は60～110cmを測り交差することなく並行して走る。両溝とも重複する住居跡をすべて切断している。掘り方、覆土、走行性から同時期に存在していたものと考えられる。遺物は古墳時代の土師器の小破片が出土した。

4. グリッド出土遺物

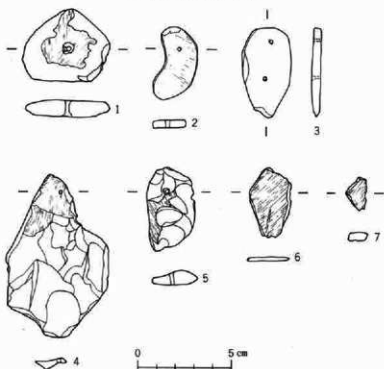
1. グリッド 滑石模造品 (第130図)

勾玉、2は滑石製、扁平で板状を呈し、側面に未調整の面を残す。片面穿孔。

剣形模造品、3は滑石製、両面に稜がなく、平板状を呈し刃部も同じ厚みをもつ。柄部は全く滅失し丸味をもつ。孔は剣身基部のはば中央に見られる。片面穿孔で側面に未調整の部分が残る。

未製品、1、4～7はいずれも形削段階から調整段階である。4は穿孔した段階でまだ製品の子測はつけられない。ただし孔の付近は調整を施している。5は穿孔後やや形を整え剣形製品が予測される。6、7は平板状を呈し、両面は光沢があるが穿孔されていない。6は剣形製品に近い。

VI 検出された遺構と遺物



第130図 I:グリッド出土遺物

I:グリッド (第131図)

剣形模造品 1～4はいずれも両面とも稜がなく板状を呈している。刃部は同じ厚みをもつ。柄部は全く滅失し、1、2は方形を呈している。小孔は剣身基部に縦列に2ヶ所、3、4は丸味をもち、小孔は剣身基部と中央の2ヶ所にある。

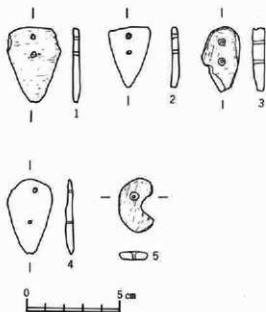
勾玉、5は滑石製、扁平板状を呈し側面に扁平面を残す。孔は中央よりやや上位にある。片面穿孔で未調整の部分が残る。

白玉、6は滑石製、中央部に稜線をもたず、管玉を切断したような円筒状を呈する。上下面には調整痕は認められない。断面は四角形を呈す。

I:グリッド 須恵器 (第132図)

1. 矽口縁部、胎土緻密白色粒を含む。色調黒色。口縁部のみ残存。現存長2.3cmでほぼ均一した厚みをもつ。外面は回転で整形後、下端部に4本1条の波状文を施す。内面は回転横などで、口端部は鋭い。

2. 矽口縁部、胎土緻密、石英、白色粒を含む。色調暗灰色。口縁部のみ残存。現存長2.4cmで



第131図 I:グリッド出土遺物

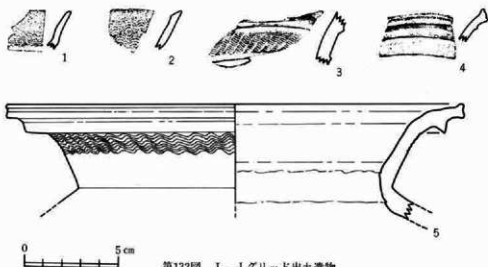
4. グリッド出土遺物

ほぼ均一した厚みをもつ。口唇部寛削りにより口端部は鋭い。外面は4本1条の波状文を2条平行して施す。内面は回転などで。

3. 珧、胎土緻密、黒色、白色粒をわずかに含む。色調灰白色。口縁部中位と考えられる。現存長約3.5cm、厚さ6mmでほぼ均一した厚みをもつ。外面回転横などで、中央部に断面三角形の隆線をもつ隆線間に11本1条の波の細かい波状文を施す。内面回転横などで。

Jグリッド 須恵器(第132図)

4. 珧、胎土緻密、石英、黒色粒を含む。色調灰白色。口縁部のみ残存。現存長約2cmでほぼ均一した厚みをもつ。外面は寛調整により2段の稜線をもち、内面はわずかに内湾し、回転横などで。
5. 珧、胎土緻密、黒色粒をわずかに含む。色調灰褐色。口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存、口径25.6cm、頸部径16cm。口縁部はゆるやかに外反し、口端部付近でさらに外反する。端部は断面凸状の段を有する。段の下方に9本1条の波状文を施す。口縁部から肩部の処々に自然釉が溶着している。溶釉は12号住居跡出土の樽形縁の釉と同色。同質の感じを受ける。



第132図 I. Jグリッド出土遺物

石斧(第133図)

石質は頁岩である。長さは17.8cm、最大幅は11.3cm、厚さ3.5cmである。正面の稜線部分に自然面を残している。刃部の正、裏面ともに破損が認められる。

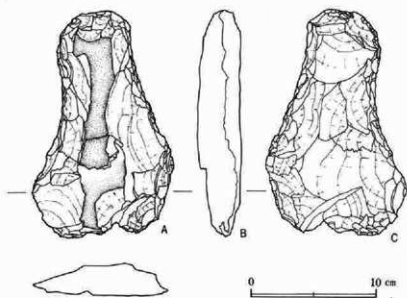
正面右側に大きな第1次剥離面が認められる。縁辺部には細かな2次調整が施されている。裏面も同様に左右両側に粗い第1次剥離面で形成され、縁辺部のみ調整剥離が加えられている。裏面は平坦な面を呈する。形態は体中央部より、やや刃部に寄った位置に最大幅があり、基部寄りには細くなっている。基部から、最大幅をもつ位置の縁辺部は、湾曲している。楔形ないしは、楕形に近い形状の打製石斧である。

Kグリッド(第134図)

石質は頁岩である。長さは10.7cm、最大幅6.0cm、厚さ2.4cmである。正面の一部に自然面を残している。刃部に破損が認められる。

正面左側は大きな第1次剥離面であり、右側は2次調整による細かな剥離を加えている。裏面左側も第1次剥離面を残し、部分的には調整剥離が認められるが、全体的に粗い剥離により仕上げられて

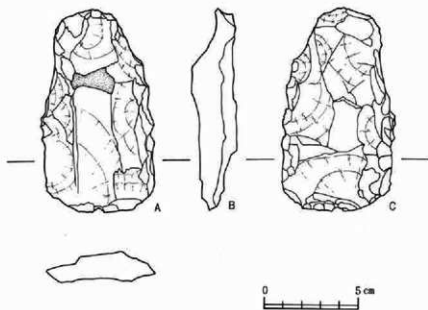
VI 検出された遺構と遺物



第133図 Jグリッド出土遺物

いる。右側は正面同様に、細かな調整刻離が加えられている。

形態は刃部に寄った部分を、最も幅広く製作している。やや長さが短かいが、短冊形に近い形状の打製石斧である。



第134図 Kグリッド出土遺物

Ⅶ 科学分析

温井遺跡出土須恵器の胎土分析

花岡絃一（群馬県工業試験場）

真下高幸（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

はじめに

群馬県内には古窯跡群が11群ある。前回に分析においてそのうちの太田市金山古窯跡群、安中市秋間古窯跡群の須恵器、吾妻郡中之条古窯跡群の瓦について、調査し、一傾向を知ることができた。今回は温井遺跡から出土した須恵器の胎土傾向を知るため調査した。なを本稿の考古学的記述は真下による。

1. 分析目的と試験試料

分析目的

温井遺跡は土師器でいう鬼高期初頭に住居跡群の盛期がある、このため古式須恵器が出土しているがこの中には在地産のほか搬入の須恵器が多く含まれると考えられるので、将来的に実現の可能性がある搬入、在地産の区分に向け成分値を提供することを分析目的とする。

試験試料

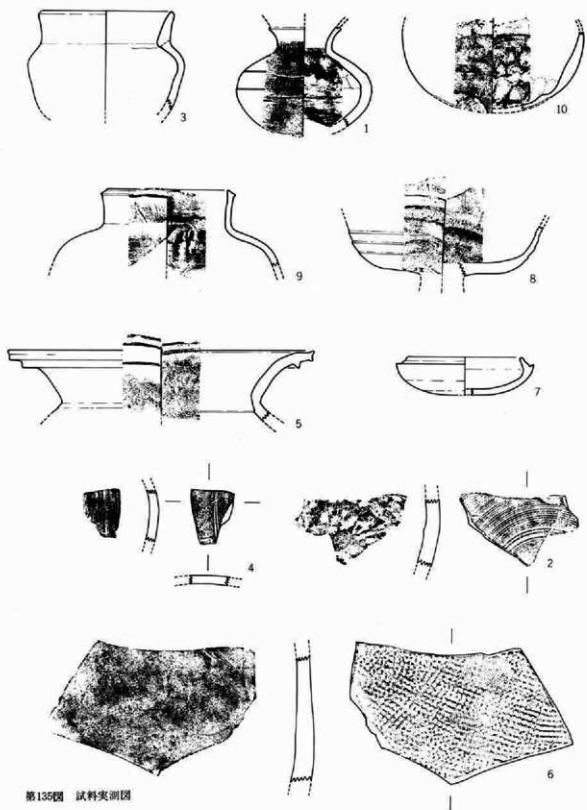
試験試料の出土場所、推定年代、胎土の肉眼観察などの考古学的所見は表1に示したとおりである。

肉眼観察から見た胎土傾向は、素地、夾雑物の特徴から3分類される。

- ① 試料No.4は夾雑鉱物がほとんどなく、わずかながら白色の微細な鉱物粒を肉眼に認めることができる。また水洩の手法や、器形に見る鋭利さ、自然釉の発色と煙による器面の色調が極めて黒味が強いなどの点は、搬入の須恵器と考えられる。
- ② 試料No.1、6、9、10の胎土の夾雑物に、白色鉱物がいく分含まれることと素地の密度が3点ともに近似している。
在地産の須恵器と比較した場合、3点は、良土に見え、搬入の須恵器と考えられる。
- ③ 試料No.2、3、5、7は2、3が共通するほか胎土傾向が異なる。夾雑物がすこぶる多いため関東産の須恵器と考えられる。No.2、3については胎土中に大きな片岩粒を混えているので、埼玉県比企丘陵北部から群馬県藤岡市にかけての秩父古成層が及ぶ地域の須恵器産製品の可能性がある。なお秩父古成層の末端は群馬県、栃木県の県境地帯に至っている。No.7、は胎土および製作技法から太田市金山窯跡群の可能性ある。
- ④ No.8は土師器であり、在地産と考えられる。

これら試料の中で搬入の須恵器と考えられるものは、①、②である。①、②を分離したのは、夾雑物の含有差においてである。③は在地産と考えられる。製作地域は胎土上から見て差があるが、在地の可能性が高いため一括の扱いとした。④は、土師器であるが、当遺跡の一般的な土師器と重量、質感に差異があり、須恵器の質に近いので別扱いとした。

■ 化学分析



第135图 试料实测图

表1 分析試料要目一覧

1. 分析目的と試験試料

図版番号	器形	出土位置・遺存状態	法量	胎土・焼成・色調	器形の特徴	整形の特徴	備考
135-1	瓦	K2 33覆土	胴10.9	胎 緻密、白・黒色鉱物粒を微混入 焼 硬、焼縮あり 色 灰白	最大幅が胴部中央より上方にある。体部中央の沈線間に6~7条を単位とする帯描或点文あり、頸部は著しく細く、口縁にかけ大きく外反する。	内面には指頭圧痕が明瞭、後、横撫が施される。外面体部下半に、若干、指頭圧痕あり。	重さあり、胎土中の夾雑鉱物少なく搬入の須臾器か。
135-2	提瓶	Ia T58		胎 粗雑、白・黒色鉱物の大粒を混る 軟質 色 灰白	提瓶体頂部の少片。表面にはカキ目、裏面には整形痕あり。	外面にはカキ目調整(文様)あり。 内面には粘土の絞り込み後、小粘土塊を当てた特殊な粘土板接合状態をとどめる。	接合の特殊技法は太田市菅の沢陶師須臾器に類似あり。胎土を含め在地の須臾器か。
135-3	短頸壺(土師器)	表採	口10.9	胎 砂を多く含む 焼 硬質 色 褐灰	体部は丸みをおび、口縁部はわずかに外傾する。	外面体部にはへう削りあり、口縁部の内、外に横撫	胎土の特徴から土師器であるが焼成は硬質なため特異。在地の土師器
135-4	樽形罐	13住		胎 白色鉱物微細粒をわずかに含む 焼 硬、焼縮色 灰白	樽形罐の体部小片。外面には2条の沈線と10条以上を単位とする帯描波状文あり。	内面にはシャープな横撫あり。	胎土中に夾雑鉱物が微細なため搬入の須臾器と考えられる。第62-1図
135-5	甕	表採	口24.6	胎 白色鉱物微細粒をわずかに含む 焼 硬、焼縮色 灰	口縁部の小片。外面口縁部に接して1条の凸帯あり。頸部に11-12条を単位とするシャープな帯描波状文あり。	内、外口縁に横撫による横撫あり。 体部と頸部との接合は不明瞭である。	胎土中に夾雑鉱物が微細なため搬入の須臾器と考えられる。
135-6	大甕	23住 中位		胎 黒、白色微細粒を含む 焼 硬、焼縮色 灰	小片の丸みから大甕体部片と考えられる。	外面には指子目状の叩か密にほどこされ、内面の当て目は不明瞭。断面には成形の縁作り痕を認る。	胎土中に夾雑鉱物が少ないため搬入の須臾器か
135-7	坏	Ia 下位	口 9.4	胎 粗雑、酸化鉄・片岩白・黒色鉱物多く含む 軟 色 明褐灰	口縁部は短く外傾し、受の稜部が顕著となる。底面の丸みは小さく扁平気味である。	口縁部には横撫による凹凸あり、口縁部周辺は横撫、体部外面から底部にかけ横撫右廻りの寛削り痕あり。立ち上りの接合は、体部に載せられて接合した痕跡あり。	胎土中に片岩粒雲母粒など夾雑鉱物の多さが目立ちNo3に共通、在地の須臾器か
135-8	高坏	表採	体15.0	胎粗雑。片岩鉱物、大粒な夾雑鉱物粒入る。 軟 色 灰	無蓋の短脚高坏、坏部片。透しは3方透。体部上半に2段の稜あり。下方に帯描波状文あり。	口縁部の内外に横撫あり。体部下半の寛削りは横撫左廻りである。脚部の接合方法は不明瞭である。	胎土中に片岩粒や他の夾雑鉱物が目立つ。重さも軽く、在地の須臾器か。
135-9	短頸壺	21住 中位	口10.8	胎 密で夾雑鉱物ほとんどなし。 焼 硬、焼縮色 灰	頸部は外傾気味に立上り、口縁部外に、稜がある。体部上半から、下方にかけ丸みをおびる。	内面頸部下方に横撫の水洩によるよじれあり。体部内面、横撫あり。立上り、内・外面に横撫。	胎土中に、夾雑鉱物がほとんどないため搬入の須臾器。重さがある。第88-19図
135-10	瓦	Ia No26	最大幅14.5	胎 黒色鉱物特徴的を含む。 焼 もろいが焼縮る。 色 灰	瓦としての注口か体部中ほどにあるが、孔の一部をとどめるのみである	体部外面に不定方向の撫が交錯する。内面下方に粘土板接合時の指頭圧痕あり。内面上方には横撫による再調整の横撫が明瞭となる。底部は粘土板の接合による。	重量が極めて軽く在地の須臾器と考えられる。

699

2. 試験方法

分析用試料は各試料を10 μ 以下に粉砕し、5～10gを径4cmの円板に成型し、蛍光X線分析試料およびX線回折試料とした。

元素分析には、蛍光X線分析装置（理学電機製KG-4型）を使用した。管球は銀対陰極、計数法はチャート方式（4 μ /min）を使用した。詳細な条件は表2に示した。なおケイ素（Si）、アルミニウム、（Al）、マグネシウム（Mg）は定時計数法による。また、蛍光X線分析値は、粘土標準試料（日本標準試料委員会認定、科学技術社発売）R-601、R-602、R-603、および地輪前回折試料の3点（No25・27・33）の湿式化学分析試料を標準として求めた。なお、この値は表3に示した。

表2 分析条件

分析元素	管電圧 電流	分光結晶	検出器	波高分析	時定数
Fe Sr Rb Mn Zr Zn Cu Ni Cr Ba	50KV 20mA		LiF	S-C	積分方式 1
Ca K Ti Si Al	40KV 30mA	EDDT	P-C	積分方式	1
Mg	40KV 30mA	ADP	P-C	積分方式	1

表3 標準試料の分析値

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	SrO (%)	Rb ₂ O (%)	MnO (%)	Ca/K (%)	Sr/Rb (%)
R-601	50.3	33.0	1.16	0.56	0.15	0.29	1.71				0.11	0.24
R-602	45.9	37.3	0.69	0.12	1.41	0.37	0.58				3.06	51.08
R-603	46.1	37.0	0.66	0.09	1.66	0.29	0.40				5.24	25.58
25	66.7	18.6	6.00	0.94	1.09	1.29	1.39	0.028	0.007	0.09	1.08	2.29
27	64.4	17.1	6.03	0.61	0.86	0.55	2.63	0.024	0.012	0.17	0.46	1.16
33	68.0	17.6	1.65	0.49	0.94	0.58	2.77	0.034	0.016	0.10	0.48	1.21

各試料の鉱物組成はX線回折装置（日本電子製TDX5P型）により求めた。管球は鉄管球を30KV-15mAで使用し、時定数4で1/minの速度で測定した。

3. 試験結果および考察

各試料の組成の結果を表3に示した。酸化ナトリウムと強熱残量は都合により測定しなかった。ここでCa/K、Sr/Rbはそれぞれの蛍光X線強度から計算した。また参考のために粘土標準試料の分析値も併記した。

前報告によれば胎土中のCa/K、Sr/Rbの間に地域特性があり、産地別分類できるので第136図に示した。また本遺跡試料と昭和55年度分析試料のうち太田市竜舞、太田122号バイパス遺跡、群馬郡吉岡村陣場、陣場遺跡例との関連が考えられたので第136図に示した。

X線回折の分析結果、肉眼で共通した類似は、No2、3、7、8は一傾向があり、No1・5・6・9・10も一区域にまとまりがあった。

No2・3・7・8は、在地生産されたと考えられた一群であり、おおまかに広がる点が一傾向となっている。この中でNo5も在地産と考えられていたが搬入の可能性もあるし、秋間古窯跡群須恵器群のように、搬入の須恵器に似た胎土傾向の場合は在地の須恵器とも考えられる。化学成分からは判然

表4 分析結果

2. 試験方法 3. 試験結果および考察

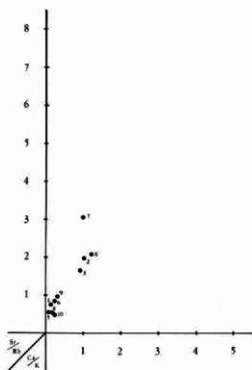
成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
1	69.4	16.5	4.64	0.76	0.21	0.56	1.78	0.16	0.71
2	66.1	17.5	5.41	1.04	1.13	2.06	1.43	1.04	1.95
3	62.7	15.0	5.92	1.00	1.63	3.23	2.26	0.95	1.61
4	67.6	18.8	4.57	0.78	0.18	0.67	1.50	0.16	0.54
5	67.7	16.1	5.10	0.64	0.15	0.65	1.93	0.10	0.55
6	67.0	20.0	3.43	0.84	0.27	0.73	1.71	0.21	0.75
7	65.6	20.0	5.08	0.88	0.78	0.96	1.03	1.00	3.03
8	62.0	17.1	5.05	1.05	1.32	2.15	1.40	1.24	2.09
9	70.5	17.1	4.48	0.68	0.41	0.62	1.63	0.33	0.91
10	70.8	18.2	4.01	0.69	0.20	0.43	1.45	0.18	0.50

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
22	69.7	18.4	3.93	0.70	0.26	1.00	2.61	0.14	1.30
23	66.5	21.0	5.05	0.89	0.84	0.77	1.36	0.85	1.77
24	67.1	20.1	5.66	1.09	0.90	2.23	1.94	0.65	1.59
25	69.3	19.2	3.58	0.70	0.40	0.91	2.34	0.24	1.41
26	64.3	21.7	7.64	1.09	0.74	2.75	1.91	0.54	1.51

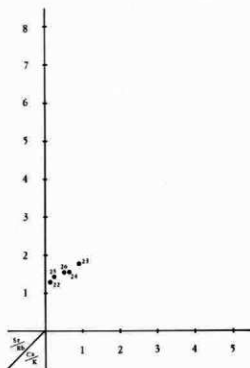
成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
16	66.9	23.0	4.48	1.09	0.46	1.69	1.19	0.53	0.78
17								0.55	0.77
18								0.35	0.40
19	68.9	13.9	5.24	1.00	0.35	1.20	1.57	0.31	0.56
20								0.79	0.71
21	68.9	20.0	4.76	0.89	0.30	1.14	1.75	0.24	0.46

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
11	72.8	19.3	2.19	0.70	0.16	0.47	2.16	0.10	0.62
12	70.5	17.9	3.11	0.75	0.14	0.57	1.68	0.11	0.73
13	70.8	17.3	3.14	0.74	0.17	0.64	1.64	0.14	0.65
14	73.2	15.7	2.43	0.65	0.19	0.32	1.75	0.14	0.59
15	70.2	19.5	2.85	0.63	0.29	0.71	1.76	0.22	0.90

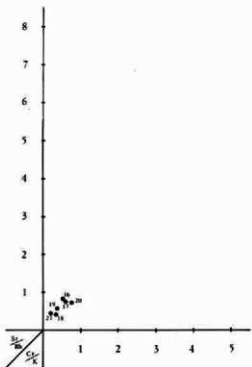
Ⅷ 化学分析



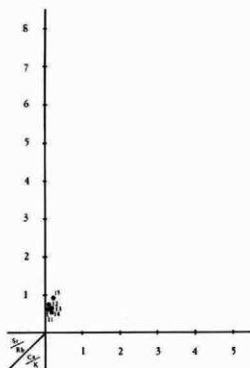
温 井



太田金山



秋 間



東海 常滑・渥美

第136図 $KK\alpha/CaK\alpha$ と $RbK\alpha/SrK\alpha$ による比較

4. ま と め

としない。

Na1・5・6・9・10の一群は一区域内にまとまる傾向があり、Sr/RbとCa/Kの比では過去に分析した結果から最も低い値となった。この区域傾向は、中世陶器の渥美、常滑焼とされた陶器の区域に一致している。

4. ま と め

- (1) 在地窯須恵器および搬入の須恵器の関係が、今回の分析により搬入須恵器と考えられる試料がSr/RbとCa/Kとの比がいちじるしく小さい値となる傾向があった。
- (2) 搬入と考えられる須恵器については、中世陶器の常滑、渥美焼の区域に一致する傾向があった。
- (3) 太田市金山窯跡群と推測されていたNo47は、その区域にあてはまらなかったため、仮にそれが金山で生産されていながらも分析値が異なるのであれば胎土のSr/RbとCa/Kの関係だけでは適当な検討とは言えず、他の成分対比も併せて考慮する必要がある。

注) 1) 花岡紘一「土器の胎土分析について」『塚廻古墳群』(群馬県教育委員会)1980

考 察

1. 住居跡の規格と規模

本遺跡で検出された住居跡は37軒を数える。このうち規模を計測することができたのは24軒である。各住居跡の規模は表1、第137図で示した。

これらの住居跡を小型、中型、大型、特大型と便宜的に4区分した。各型式の大きさについては表2である。各型式を百分率で示すと小型21%、中型54%、大型21%、特大型4%であった。この結果住居跡は $\frac{1}{2}$ 以上が中型に入る。つづいて大型であるが、特大型は比例的に少なくなる。

平面も便宜的に正方形、ほぼ正方形、長方形の3段階に区分して見る。(表3)各形式もやはり百分率で示すと正方形66%、ほぼ正方形17%、長方形17%となる。住居跡の大半が正方形の範疇に入りしかもその誤差が30cm以内に入るものが65%を示す。特大に入る22号住居跡もその誤差はわずかに20cm程度であった。正方形の住居跡は小型の15号住居跡から特大型まで見ることが出来る。ほぼ正方形の住居跡は正方形の住居跡にくらべ数も少なくなる。長方形の住居跡は小型、中型に見ることが出来るが大型、特大型にはほとんど検出していない。

これらの傾向から本遺跡内では各住居跡のほとんどが正方形、あるいはそれに近い形で構築しようとした意図が察せられる。しかしこの意図に反して、刻当しないものも当然見受けられる。

2、9A、10、31号住居跡は小型、中型式に入り長方形を呈している。この4軒のうち柱穴を検出し得たのは、2、31号住居跡で、9A、10号住居跡に関しては残念ながら検出し得なかった。2、31号住居跡の主柱穴は住居跡短辺壁の中央部を結んだ線上に、各壁からほぼ等距離の位置に柱を2本立て主柱としている。

この2本柱で上屋を主に支えていたものと考えられる。他の住居跡に見受けられる4本柱の住居跡とは異なっている。27、30号住居跡については、調査の際、壁の一边とかまどを持った壁側の半分とを検出している。両住居跡ともかまどの位置が壁の中央部に来るものと仮定しグラフ上に掲載した。資料的には半減する。12号住居跡については2次、3次にわたり調査されたもので、図面上において接合した。よって一旦保留しておく。しかし新田郡尾島町歌舞木遺跡21号住居跡は大型で長方形を呈することから資料的にも半減するとは言いきれない。

本遺跡と同じような傾向をもつ遺跡は、歌舞木遺跡、舟橋遺跡、寺内遺跡等が掲げられる。歌舞木遺跡の場合、本遺跡と時期を同じくする住居跡は50軒を数える。住居跡の規模を百分率で表わすと、小型20%、中型44%、大型32%、特大型4%となり、中型が主流を占め大型、小型と続く特大型は非常に少ない。次に平面形で見ると正方形60%、ほぼ正方形16%、長方形24%となり半数以上が正方形であった。また長方形の住居跡は12軒を数えこのうち91%が、小、中型に入り大型に入るのは1軒だけであった。

本遺跡と異なる様相を示す遺跡として、三ッ木遺跡と竹沼遺跡等が掲げられる。竹沼遺跡の場合は本遺跡と時期を同じくする住居が24軒数えられる。このうち規模としては小型46%、中型38%、大型12%、特大型4%である。小型と中型の住居跡が多い。次に平面形では正方形25%、ほぼ正方形25%、長方形50%であった。長方形の住居跡が半数を占めこのことは小型、中型が多いという点をあげ

考 察

表 1

住居	規模 (m) E W × N S	方位	かまど位置	確認柱穴数	貯穴位置	残壁高
1	(4.2×4.0)	N-35-E	右寄り			
2	2.6×3.8	N-28-W	右寄り	2		55
3 A	3.7×3.6	N-45-W	中心			
3 B	5.1×5.3	N-45-E	中心	2	南東コーナー	30
4 A	4.5×4.7	N-84-W	左寄り	4	南東コーナー 北東コーナー	48
4 B	1.3×2.6	N-62-E				50
5	5.5×5.5	N-35-E	中心	2		50
7	6.0×6.7	N-20-W	中心	4		50
8 A	4.6×4.9	N-0	右寄り		南東コーナー	40
8 B	4.7×4.5	N-15-W		2		40
9 A	3.3×2.2	N-45-W	中心		北東コーナー	42
9 B	4.5×4.2	N-47-E	右寄り	4	北東コーナー	28
10	3.1×4.3	N-53-E				42
11	5.4×5.5	N-35-E	右寄り	2		30
12	5.9×5.0	N-83-E	中心	4	北西コーナー 南東コーナー	30
13	4.2×4.5	N-71-W	右寄り	4		35
14	6.0×6.7	N-6-W		2		10
15	2.6×2.3	N-65-W	右寄り			40
16	—×5.2	N-83-E				
17	7.5×—	N-50-E				22
18	5.2×4.0	N-82-E				37
20	0.8×1.3	N-6-E				
21	4.6×4.5	N-19-W	左寄り		南東コーナー	43
22	7.4×7.6	N-29-W	推右	4		32
23	5.9×6.5	N-29-W		2	南壁両端	45
24	1.2×6.0	N-84-W	右寄り			50
25	3.6×3.2	N-72-E				45
26	4.3×4.2	N-84-E	右寄り			20
27	5.3×6.8	N-80-E				22
28	2.8×4.0	N-16-W				40
29	1.2×4.2	N-20-W				40
30	2.7×6.2	N-83-E		1	北東コーナー	40
31	5.0×4.1	N-58-E				40
32	1.3×1.6	N-61-E				37
33	0.5×0.5	N-74-E				25

1. 住居跡の規格と規模

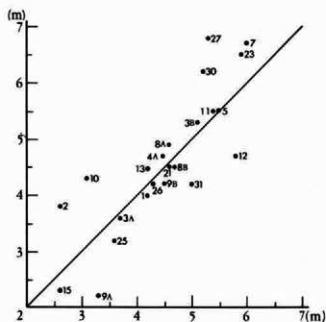
35	4.5×2.9 規	N-20-E	2	南東コーナー	35
36	6.0×1.1 規	N-64-E			65

表 2

	規模(m)	住居跡名						軒数	
小型	2~4.00	2	3A	9A	15	25		5	
中型	4.01~5.50	1	3B	4A	5	8A	8B	9B	13
		10	11	13	21	26	31		
大型	5.51~7.00	7	12	23	27	30		5	
特大型	7.01~	22						1	

表 3

形	壁長の差	住居跡名						軒数		
正方形	30cm以内又は 0~10%以内	1	3A	3B	4A	5	8A	8B	9B	15
ほぼ正方形	10%~20%	11	13	15	21	22	25	26		
長方形	20%~	7	23	30					3	
		2	9A	10	12	31			5	



第137図 住居規格と規模

ることができる。

これらの遺跡のうちから大局的に見て、正方形あるいはほぼ正方形の住居跡は小型から特大型まで存在し、長方形の住居跡は小型、中型に多く見られ、大型住居跡はわずかである。特大型にはほとんど検出してない。この傾向は時間的差によるものか、あるいは地域性によるものかは、今後多くの資料集積により検討課題としておきたいが、本遺跡としての傾向はⅠ、Ⅱ類の段階では比較的大型で正方形に近い。Ⅴ、Ⅵ類では大型から小型まで、壁長の差も正方形から長方形とさまざまな形が見受けられる。

2. 住居跡の方位

検出遺構37軒中36軒の方位を計測した。方位は原則として家屋棟方向が北より何度東又は西に偏しているかとし、 $N-\alpha-E$ 又は W と表記した。(表1)

棟方向の出し方は

- 1) 正方形に近い住居跡(5号住居跡)、又は壁長の差が計測できない住居跡については、かまどの主軸方向とした。
 - 2) 長方形の住居跡(表3)については壁長の長い方に棟が走るものと仮定した。
 - 3) 1)又は2)に該当しない住居跡は北より東に偏している壁を採用した。
- よって2)については14、24、29号住居跡は東へ90度、27号住居跡については西へ90度移動する可能性がある。3)については同じく西へ移動することも考えられる。

本遺跡の方位を集計し(第138図)大局的に見ると万遍なくゆきわたっているが、あえて個別に見るといくつかのグループに分けることができる。(表4)グループ別の区切りは住居跡の方位が一担途切れることから便宜的に区別したもので大意はない。A、Cグループは比較的住居のありかたがまばらであり、B、Dグループは集中している。

棟方向とかまどの位置関係を見ると

Aグループは3A号住居跡を除いた5軒の住居跡はすべて、南東壁にかまどを付設している。とすればAグループはDグループと近接しているものとの見方もできる。

Bグループの2、22号住居跡のかまどの主軸方向は棟方向とは一致せず、90度の位置へくる。これらの住居跡以外では、かまどを検出した住居跡についてはすべて住居跡の長軸方向と一致してくる。いい変えればかまどは北西壁～北壁～南東壁間に付設されていると言えよう。3A号住居跡1軒のみ南西方向にかまどをもち本遺跡内において特殊な例である。このかまどは北東方向に付設されるべきものを反対壁に付設したとの見方もできる。

群馬県内においても開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が急増している。これに伴い集落跡の調査も増えつつある。しかし古墳時代の住居跡ほどの遺跡でも単発的には検出されているが、10数軒以上の集落としてとらえられ、資料化し報告、発刊されているものは比較的少ない。本遺跡と時期的に関連づけられる遺跡により、住居跡の方位について例を見ると歌舞木遺跡では古墳時代住居跡が $N-50^{\circ}-E \sim N-50^{\circ}-W$ の100度間に古墳時代の住居跡が27軒検出している。このなかで $N-30^{\circ} \sim 50^{\circ}-E$ と $N-20^{\circ} \sim 50^{\circ}-W$ と2ヶ所に集中して見られる。三ツ木遺跡では $N-0^{\circ} \sim 50^{\circ}-W$ と $N-55^{\circ}-E$ 付近の2ヶ所に集中している。また本遺跡に近い竹沼遺跡^(注6)では $N-57^{\circ} \sim 88^{\circ}-E$ に多い。A区H-1号住居跡は $N-114^{\circ}-W$ と南西方向に向いているが、本遺跡の3A号住居跡と同様に見た場合 $N-66^{\circ}-E$ となり、 $57 \sim 88$ 度の範囲内におさまる。

これら3遺跡とも方位が、ある一定方向に集中している傾向がみられる。これは時期的なものか、あるいは自然環境によるものかは検討する必要があるが、各遺跡とも本報告による成果を待ちたい。

時期的な傾向として、とらえられる遺跡は寺内遺跡^(注4)があげられる。寺内遺跡では8軒の住居跡が調査されている。報告のなかでは「発掘した範囲内での所見では…(略)…本集落は一時期のもの」と把握することも可能であろうと述べられている。これら住居跡の方位は $N-18^{\circ} \sim 31^{\circ}-E$ の13度の範囲内である。

2. 住居跡の方位

出口遺跡では道路建設(幅5m)に伴い、調査区域幅を7mとして面積約3000m²を調査した。検出された住居跡は57軒で、うち38軒が古墳時代後期の住居跡であった。住居跡の方位はN-0°-100°-S N-20°-60°-Wの範囲に見られ、本遺跡と同様な分布状況となる。これらの遺跡を1つのグラフにまとめると(第139図)N-50°-W-N-110°-Eの範囲に入ってくる。

このことにより本遺跡では住居跡の検出数は少ないが、各遺跡を集約した遺跡であるといえよう。また本遺跡の集落の規模は大きいものと想定される。

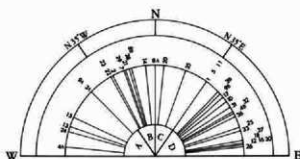
次に本遺跡における棟方向の流れを見ると、比較的古いタイプはN-45°-EとN-35°-W付近間に見られる。この両端より多く集中し、中間は少なく新しいタイプはE-0方向かその前後に見ることができ、N-35°-E付近までバラついている。そこで大局的に棟方向の流れをつかむと北東方向付近から始まり、北西まで広がる。ここで一旦東西方向に集中し、古墳時代後期終末になるにつれて、かまどは東壁にもち棟方向も東西方向付近に集中してくる。

これはある程度時期的なものを反映しているとも見られるが、自然環境あるいは社会環境等の要因によることも考慮しなければならないであろう。

今後より多くの資料の増加に伴い、さらに詳細な検討を加えなければならないが、本遺跡においては時間的な経過により、ある程度棟方向に変化があるということにとどめておきたい。

表4

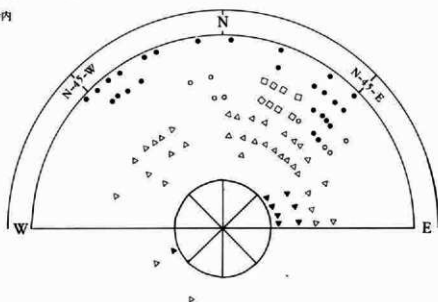
	方 向	住 居 跡 名	軒 数
A	W0°-N-35°-W	3 A 4 A 9 A 13 15 24	6
B	N-34°-W-N-0°	2 7 8 A 8 B 14 21 22 23 28 29	10
C	N-1°-E-N-34°-E	35 20	2
D	N-35°-E-E-0°	1 3 B 4 B 5 9 B 10 11 12 16~18 25~27 30~33 36	19



第138図 住居方位

考 察

- 歌舞木
- 三ツ木
- 寺内
- △ 出口
- ▲ 竹沼



第139図 各遺跡における住居跡の方位

3. 温井遺跡出土土器の推移 (土師器を中心として)

本遺跡内で検出された住居跡は数十軒を数え、住居の切り合い関係や土器の器形の変化により、古い様相から新しい様相まで見受けることができた。この時間差を土器の器形、成整形の異なりにより追うことができるかどうかを検討し、その変化を試案した。

土器の推移を追うにあたって、基本的には各住居跡の切り合い(前後関係)が中心となろうが、住居跡内より出土した遺物が確実に伴うか否かの問題が生じてくる。そこでこの操作方法としてできるだけ主観を取り除くため、遺物の出土位置のしっかりしたものを選んだ。また覆土中から出土した遺物については標高値の求められるものを使用した。そこで確実に住居に伴うものと考えられるものをAとし、順次B、C、Dと記号化し操作を行なった。

A: かまど内火床面出土の土器。 B: 床面密着で壁直下及びその周辺出土の土器。

C: 床面密着で住居中央部付近出土の土器。 D: 住居床面より高い位置の土器

と4分類し、さらにDについては床面より下位、中位、上位に細分した。しかしこの分類方法も多少の主観が入っているのもやむえない事実である。

また、土器の出土位置により住居に伴うものか否かについては、当時の生活空間はどうであったかと言うことも考慮しざるを得ない。住居として掘り込んだ中のみが住居であったか、また掘り込み以外の周囲も生活空間として利用していなかったかどうかである。例えば第5号住居跡出土の遺物のなかで、住居掘り込み外のかまど燃焼部付近出土遺物とそのすぐ壁直下床面密着の出土土器とが接合してきたものもある。このことは住居掘り込み以外の周辺も当時生活の場として利用していたとも考えられる。よって出土位置のDにあたいするものの中にも、住居の埋没具合により住居に伴う遺物が存在することもありうる。またBに位置づけられるものなかで、第9号住居跡のように、かまどを持

3. 温井遺跡出土土器の推移

つ壁側の左コーナーには床面に密着して多量の土器が一括出土している。この土器のなかには器形の異なったものや、成整形に変化が見られる様々な土器が混在していた。この住居跡は本遺跡全体を覆う河川の氾濫により短期間に埋没し、9号住居跡以外の土器も本住居跡のコーナーに押し流されたかと推定されるものもある。よって出土位置ばかりでなく、土層断面の詳細な観察も重要となってくる。

資料操作に使用した住居跡は前記のことを考慮しながら、

1. 前後関係が明瞭な住居跡。 2. 一括遺物が出土している住居跡。 3. できるだけ多種の土器が出土している住居跡を基本とした。

各住居跡内出土遺物のなかでも、比較的古い様相をもつものと新しい様相を呈するものが混在している。器形としては古い形態を持つが、成整形に新しい技術が見受けられるもの、器形は新しいが旧来の成整形の技法を残すものがあり、詳細に観察すると多種多様にもわたる。

そこで一方は器形の流れから、また一方は成整形の流れからの2方向から検討を行なった。

本遺跡の資料をⅠ～Ⅶ類までの分類を試みたが、各分類間には器形・成整形の違いによりさらに細分化される可能性は充分にあるが、図版作製上、器形の変化が明確に判断できるように大別したつもりである。また同じような土器、特殊な土器についてはできるだけ省き簡素化し図版化した。

なお個々の遺物については各住居跡内出土遺物の図版の項に記載したので本項では特徴のみ記した。 坏

第Ⅰ類

1 (95-1) 体部全体が球形を呈し、底部は平底を意識している。器内はほぼ均一で薄く、深みがある。口縁部は95-3に比較し短かく強く外反する。体部は甍削り後丁寧な撫でを施し、甍痕は見られない。口縁部は内外面ともに甍調整で、各稜はシャープである。口縁部には撫では認められない。

2 (95-3) 体部は球形を呈し、深みがある。底部はやや上げ底みである。口縁部はやや長く強く外反する。器内は底部縁辺が厚く、口縁部にむかうにつれ次第に薄くなる。底部中央は上げ底のため薄くなっている。体部は甍削り後丁寧な甍調整を施し、その痕跡がわずかに見られる。体部中央付近には調整による稜線がかすかに認められる。口縁部は甍調整し、外面に軽い撫でを施すが、器形に変化を与えるほどではない。

3 (95-6) 体部は球形を二ツ割りにしたものに底部をつけた形を呈する。口縁部は体部からそのまま口縁となるがやや内湾する。器内は平底の底部がもっとも厚く次第に薄くなる。体部から口縁部にかけて全体を甍削りし、その後丁寧な甍調整を施す。甍痕は認められない。

第Ⅱ類

1 (29-4) 体部は球形を呈し、底部も丸底となるが、器体は安定し深みがある。口縁部はⅠ-1と比較するとわずかに長くなり、外反度もゆるくなる。器内は底部と頸部に厚みをやや持ち、体部中央と口縁部は薄くなる。体部外面は横方向の甍撫でが施こされ、内面は撫で後丁寧な甍研磨を施こす。口縁部内外面ともに甍調整。口唇部末端に甍調整による立ち上りがわずかに見られる。各稜はⅠ-1よりさらにシャープさをます。

2 (118-6) Ⅰ-2より一層球形を呈する。底部は平底が消失し、丸みもち安定感がない。体部上半部の稜がさらに一層強く認められる。口縁部もやや長くなり、外反度も弱くなる。器内は底部に厚みをもつ。体部上半部は甍調整後横撫で、下半部は丁寧な甍削り仕上げ、甍の単位幅は頸部にわずかに認められる。口唇部は甍調整により平滑。口縁部外面に横撫でを施こす。

考 察

3 (118-12) I-3 よりはやや浅くなるが全体に丸みをもち安定感がある。底部の平底は消失し、寛調整により丸く仕上げている。口縁部は一層内傾してくる。器内は底部にもっとも厚みをもち次第に薄くなる。体部外面は寛調整だが単位は不明、口縁部は横撫ででこの撫でにより口縁部と体部とを区分している。内面全体は撫で後、右上り研磨を施す。

4 (118-10) この坯は前記とやや異なり、球形は呈していない。体部は外反ぎみに立ち、口縁部でやや内湾する。底部にわずかな平底の痕跡が見られ、底部消失直前のもとと見られる。器内は底部がもっとも厚く次第に薄くなる。体部外面は寛削り後軽い寛撫で、口縁部は寛削り後横撫でを施すことが体部と明瞭に区分する後を残す。内面は撫で後やや粗い研磨を施す。

5 (29-23) 体部は球形を呈し、口縁部が長くゆるやかに外反する。器内はほぼ均一である。体部下半に横方向の寛調整が見られる。他の部所は丁寧な横撫でが施こされている。

第Ⅲ類

1 (89-1) 底部は扁平で体部は内湾ぎみに立つ。口縁部は短かく外反し口唇部で直立する。器内は底部及び頸部付近にやや厚みをもつ。体部は横方向の寛調整で、底部は不定方向が多い。口唇部外面は寛調整後横撫でを施す。内面は寛調整で口唇部に寛調整による立ち上りがⅡ類より顕著にあらわれる。内縁はやや丸をもつ。

2 (19-4) 体部はⅢ-1と同様の立ち上りを見せ、口縁部はゆるく外反し口唇部の立ち上りはない。底部は扁平でやや丸みをもち安定感がある。器内は底部に厚みをもち次第に薄くなるが頸部でやや厚い。体部全体は一括したような撫でが施こされ、内面はその後、放射状、又は右上りの研磨が認められるものもある。口縁部は寛調整後横撫で、全体になだらかな感がある。

3 (41-4) II-3類と同じ器形であるが、全体に扁平となっている。口縁部の内湾度はゆるく、やや直立ぎみとなる。器内は底部に厚みをもち次第に薄くなる。体部外面は細い不定方向の寛削り。内面は丁寧な撫でまたは寛研磨が施こされている。口縁部は横方向の寛調整後横撫で、口縁部と体部との境を寛により丸をもたせているが横撫でにより体部とを区分している。II-3類に比較し口縁部幅はやや広くなる。

4 (22-14) 体部は深く、断面はやや三角形を定する。口縁部は体部との境にみられる寛調整の段から直線ぎみに立ち上る。底部は小さく丸い。器内はほぼ均一した厚みをもつが口縁部では薄くなる。体部外面は寛調整。内面には頸部までの不定方向の研磨がみられる。口縁部は丁寧な横撫でを施す。また頸部内面には撫でによる指頭圧痕がみられる。

5 (22-17) この器形はこの段階にて出現し、次の段階へと受けつがれ発展し、坯としての主流を占めてくる。体部は内湾ぎみに立ち、口縁部もやや内傾ぎみに立つ。口縁部と体部との境はわずかな稜により区分される。口縁部高と体部高の比は1:1で深みがあり、器体は丸いが安定感がある。器内はほぼ均一で薄い。体部は不定方向の寛調整。内面全体は丁寧な撫でが施こされている。口縁部も内外横撫で、体部との境には指頭圧痕による沈線が見られる。内面においては体部と口縁部との境を明瞭に区分する意識は弱い。

第Ⅳ類

この類に該当する遺物は本遺跡内よりは出土しなかった。第Ⅲ類と次の段階の類とでは成整形の技法上に若干の隔絶が認められることからあえてⅣ類を設定し、本遺跡においては空白時間とした。この空白時間は遺跡が水没下に位置している時期と考えられる。

3. 温井遺跡出土土器の推移

なおこの類の坯を求めるならば、口縁部高と体部高との比が口縁部高の方がやや高く、口縁部が直に立ち上り、体部との区分が明瞭である。保渡田遺跡(注8)第5号住居跡出土の坯であろう。

第V類

1(56-6) 体部の断面形はやや三角形を呈し、底部中央に最深部がある。口縁部はやや直立きみで口唇部付近から外反する。器内はほぼ均一した厚みをもつ。体部は不定方向の寛削り、内面は丁寧な寛撫で、口縁部内外面は寛調整後指頭による横撫で、体部と口縁部の境は寛調整により稜をもつ。

2(16-10) 体部は扁平で口縁部はV-1より外方に開く、器内は底部中央に最大厚をもち次第に薄くなる。体部と口縁部との境には寛調整による段をもつ。整形技法は1と基本的には同様である。

3(107-1) は上記の1と2とを折衷した形であるがやや口縁部が外反する。

4(51-5) 体部は扁平な感があるが丸みをもつ。口縁部は直立する。器内はほぼ均一している。体部は寛調整を施し、口縁部には寛調整による数段の稜をもつ。須恵器の蓋の影響を受けていると考えられる。

5(56-1) 体部は浅く平底で口縁部は内傾する。器内は底部にもっとも厚みをもち安定感がある。体上半部は横方向の寛削り、底部は不定方向である。口縁部は横撫でで体部の境に寛調整による段をもつ。須恵器の坯身の影響を受けているものと考えられる。

第VI類

1(63-7) は第V類の1と3とを組み合わせた器形を呈する。体部の器形は丸みがなくなり扁平を呈する。口縁部は体部との境からやや曲線的に外反する。体部と口縁部とを区分する稜が認められなくなる傾向があり、この区分は整形の違いにより確認できる。口縁部高と体部高との比は1:1.5-2と口縁部が高くなる。器内はほぼ均一している。体部外面は寛調整で、口縁部及び体部内面は撫でを施す。

2(63-8) 第V-4類の系譜を引くものと考えられる。体部は扁平で、口縁部は直線きみに外反する。整形技法はV-4類と同様である。

高坏

第I類

全体の概観は深みがあり、直線的でいたるところにシャープな稜があり固さが見られる。

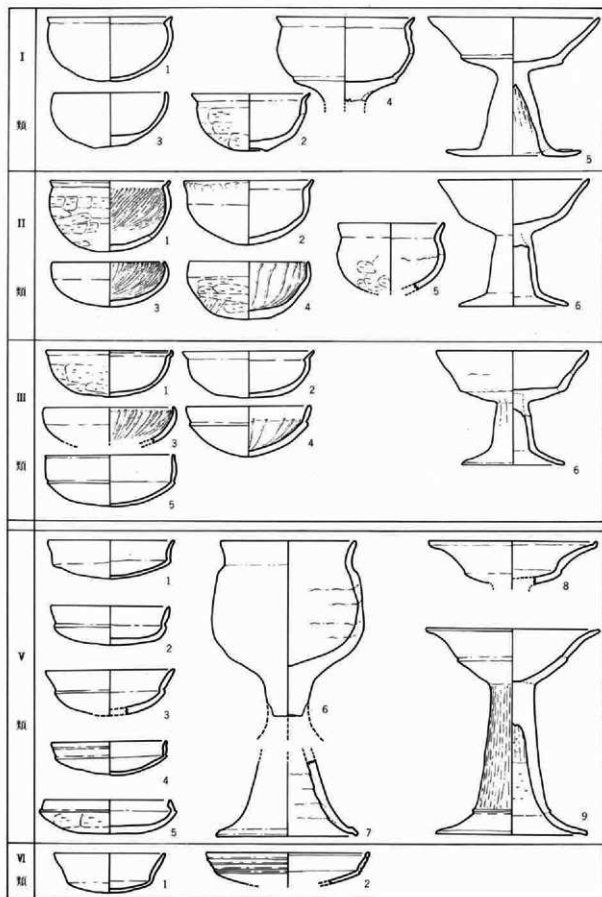
5(95-12) 坏部、平らな円板に口縁部を取りつけた形を呈する。口縁部は比較的直線状に立ち上り、口唇部でわずかに外反する。器内はほぼ均一した厚みをもつ。体部内面中央部は平底であるが口縁部と接するところは調整を施し、なだらかで丸く深味をもたせている。外面の口縁部と体部の境は寛調整により段をもつ。口縁部は撫で、口唇部内面に指頭押圧による撫でのくぼみが残る。

脚部、坏接合部は強くしまり、脚柱部中央でやや膨らみをもつエンタシス状である。裾部は急激に開き板状又は裾部末端部でわずかに跳ね上る。裾端部は丸い。器内は坏接合部がもっとも厚く、裾端部になるほど薄くなる。外面は寛調整を施し仕上げは丁寧である。脚柱部内面の上半部は絞り目痕が残る。下半部は輪積で、輪積部の面を寛による調整又は横撫でを施す。裾部は内外面ともに丁寧な撫でである。

坏部と脚部の接合は柄によるが、両者ともある程度仕上げた後に接合している。接合後は柄およびその周辺には調整による手は加えていない。外面のみ調整を施す。

4(96-38) はI-3類の坏に脚部を接合し高坏としたものである。

考 察



第140圖 土器分類圖

3. 温井遺跡出土土器の推移

第II類

第I類と比較すると、坏部内面や、各稜等全体に丸みをもつ。また第I類と同様深みがある。

6 (29—26) 坏部、体部は心持ち上向きに立ち上り、口縁部は内湾気味で、口唇部でわずかに外反する。外面体部と口縁部との境は稜あるいは段が見られるがI類に比較しゆるやかである。内面底部はやや扁平で口縁部との境は丸みをもち、深みがある。器内は底部中央がもっとも厚く、口縁部につれて次第に薄くなる。坏部内外面全体を丁寧な撫でを施す。

脚部 脚柱部と环接合部とのしまりはなくなり、ややたく直線的に開く。エンタシス状の脚柱部は消失する。裾部は板状のものから、わずかにラッパ状に変り、内面に見られる脚柱部と裾部との稜は床面より上位にくる。稜は内外面とも明瞭である。环接合部から脚柱部上位にかけて下方方向からの寛調整痕がわずかに残るが、全体としては丁寧な撫でを施す。

第III類

坏部は前類より浅くなり、口縁部は中央の器内が薄くなる。外観的にはやや曲線状になりつつある。

6 (89—17) 体部内面はやや平坦で、口縁部は直線状に立ち上るが、やや外反きみである。体部と口縁部は明瞭な区分が施こされるようになり、内面には凹線状の稜が認められる。口縁部の立ち上りも直線的なものから曲線的なものになる傾向がある。坏部の内外面は撫で、口唇部は寛削りを施す。

脚柱部 环接合部とのくびれはなくなり、あってもわずかで、直線的で、やや台形に近くなる。裾部の開きはII類よりさらにラッパ状となり、内面の稜の位置はさらに上位にくる。稜も調整によりシャープさが欠けてくる。外面の脚柱部から裾部にかけての稜はなだらかに広がる傾向をもつ。器内は脚柱部はほぼ均一であるが裾部は端部につれ次第に薄くなる。整形は外面の寛削り後撫でが目立つ。

第V類

高坏にも須恵器の影響を受けているものと従来の伝統を引き続けているものがある。概観的には全体が曲線的でシャープさが欠ける。従来の稜はなだらか又は消失している。

7 (56—10) 大きな脚部でラッパ状に開く。器内はほぼ均一である。脚柱部と裾部との境は不明瞭で、ゆるやかに開きながら裾端部となる。脚部外面は丁寧な撫でを施しているが、内面には輪積痕が残り、簡単な撫でである。

8 (51—7) 体部から口縁部にかけてはゆるやかな曲線もちながら立ち上る。口縁部と体部との境は寛調整によりわずかな稜をもつ。内外面ともに丁寧な横撫で。

9 (56—7) 坏部 8と同様ゆるやかな曲線もちながら口縁部は立ち上る。口唇部は内側というより上向きとなっている。口縁部と体部の境は寛調整により段をもつ。器内はほぼ均一で、深く丸みをもつ。内外面とも丁寧な撫でを施す。

脚部 环接合部がわずかに細い円筒状を呈する。裾部は脚柱部よりゆるやかに開く。器内は脚柱部上位が厚く下位につれて薄くなる。脚柱部外面は縦方向の細い寛撫で、内面は輪積痕が残るが、裾部の内外面ともに撫でを施す。

要

第I類

1 (96—39) 体部は球形を呈し、口縁部は「く」字状に強く外反する。口端部は丸みをもつものと寛あてを施したものがある。器内はほぼ均一がとれている。体部の外面は寛調整後、水拭き状による丁寧な仕上としている。寛調整による胎土粒子の動きはつかめるが、その単位幅は不明である。口縁部

考 察

は横撫でで全体の仕上げは丁寧である。

なおこの時期には折り返し口縁 2 (96-41) や刷毛目状の調整を施す婁 3 (97-62) も見受けられる。

第Ⅱ類

体部の器形にはⅠ類と同様球形を呈するもの 1 (30-33) とやや長胴化になりつつある 2 (30-34) とが見られる。全体的には長胴化への傾向がうかがわれる。口縁部は「く」字状に外反する。器内はほぼ均一で薄い。体部外面の整形は篋削り後横撫でを施しているが、篋痕が残るものと、胎土粒子の動きのみ見られるものがある。篋の動きは頸部を意識し、頸部に沿った横方向の動きが見られる。体部中央は斜方向に、体部下半は底部の調整を含め横方向に施す。なおⅠ類に見られた水拭き状の仕上げは行っていない。内面は篋調整後丁寧な横撫で、口縁部は内外面とも横撫で、頸部の内外の後は篋調整によりシャープである。

3 (31-35) この時期の有段口縁はまだシャープな段を残し、体部も球形を呈する。

第Ⅲ類

胴部の球形度はⅡ類に比較しやや胴長となり、最大幅を胴上半部にもつ。口縁部の外反度はⅡ類と同じか又はやや頸部に丸みをもってくる。器内は底部付近に厚みをもち、次第に薄くなり、口縁接合部で厚みをもつ。整形技法は外面頸部で篋を意識的にとめ 1 (23-31) または頸部から縦方向に篋削りを施す。頸部からの縦方向の篋削りはこの段階より始まる。

2 (24-41) は仕上げ調整の際篋削り痕を消しているが縦方向の胎土粒子の動きが認められる。

3 (41-11) は胴部内面に刷毛目状の調整痕が残るが、外面に縦方向の篋痕がみられる。全体的に篋削り後丁寧な撫でのため篋単位は不明瞭であり、その痕跡は一般的に頸部付近のみ認められる。底部は丁寧な篋削り、内面は横撫で、内縁は鋭利さに欠ける。

また有段口縁はこの段階でもわずかに残る。

第Ⅴ類

第Ⅲ類に比較し、極端に長胴化する。整形技法にも大きな差が認められる。

1 (108-38) 体部は長胴化しているが、胴最大幅は中央部上半にもつ。口縁部はやや長く、ゆるやかに外反する。底部には器体安定のための造り出しをもつ。器内は頸部付近でもっとも厚く、底部に従い薄くなる。外面胴部は縦方向の長く粗い篋削り、内面は撫で。

2 (108-36) 最大幅を頸部付近にもち、底部につれて次第に細くなる。口縁部は厚く短かく外反する。底部は平底で安定感をもたせている。器内はほぼ均一した厚みをもつが、底部のみやや厚い。

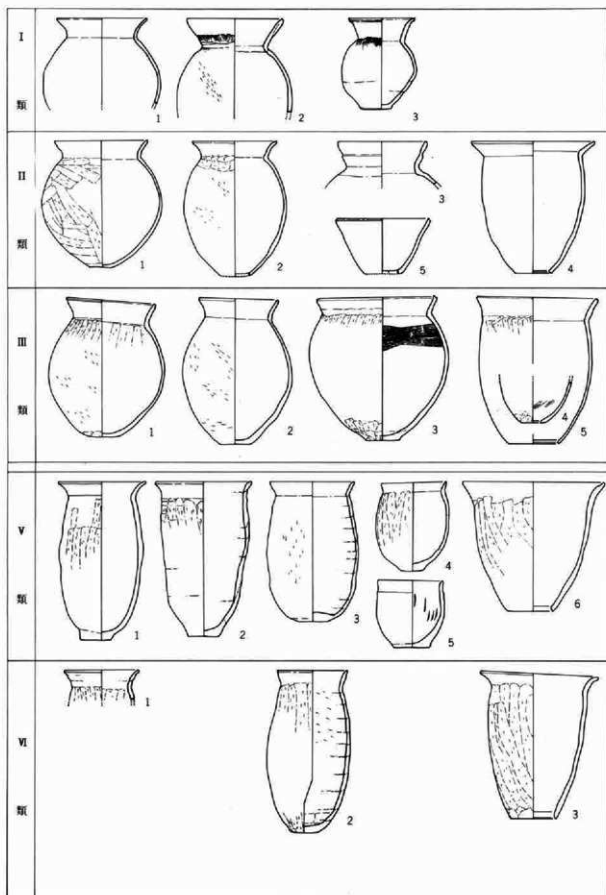
体部全体に成形時の輪積による起伏が残る。頸部から胴中央部にかけては縦方向の篋削りが明瞭に残るが、下半部では撫でのため不明瞭となっている。内面には輪積痕が明瞭に残り、粘土接合面を密着させる程度の撫で仕上げである。

3 (51-15) 体部中央がやや胴張りである。器内は底部にもっとも厚みをもつが他はほぼ均一した厚みである。体部外面は篋削り後全体に調整を施している。成整形は前記の 1、2 とほぼ同様である。またこの段階では成整形技法を同じくする小形婁の出土が顕著に見られる。

第Ⅳ類

第Ⅴ類の婁と比較し、大差はないが本遺跡に最終のものとして取り上げた。器形全体はⅤ類と同じく、長胴化を呈し、最大幅を胴中央部付近にもつ、器内は全体が厚く、口縁部にも厚みが見られ、

3. 温井遺跡出土土器の推移



第141図 土師器分類図

考 察

全体がだらけた感がある。口径もⅤ類と比較し小さく、とくに頸部径は小さい。

1 (63-13) の口縁部はややゆるやかに外反する。外面の篋削りは頸部から削り出している。

2 (63-12) は胴中央部に最大幅をもち、Ⅴ-3類と同様の器形を呈しているが、口縁部にくびれがなく、立ち上りは直立きみである。外面の篋削りは口縁部下位から一挙に胴部に向けて削っている。内面には成形時の輪痕が明瞭に残り、その上を軽く撫でている程度で器内の厚薄があり、粘土接合痕も明瞭に残る。

Ⅱ類

第Ⅰ類

本類に伴う甌は本遺跡内より出土しなかった。

第Ⅱ類

4 (119-31) 体部中央に最大幅をもち、口縁部は大きく、強く外反する。口唇部はやや上向きかけんになる。頸部は明瞭な稜が見られる。体部下半で急にすぼまり、孔を穿つ。孔は比較的小さく、口縁部に対して平行に切断する。器形全体に丸みをもつ。器内はほぼ均一。体部外面は篋調整後撫でを施し、篋痕は消失している。口縁部は内外面ともに丁寧な横撫でを施す。穿孔は篋により、明瞭な稜を残す。

5 (29-31) は成形形の技法は4と同様であるが鉢形を呈する。

第Ⅲ類

胴中央部付近に最大幅をもつ。口縁部はⅡ類と比較し、わずかゆるやかに外反する。全体的にはまだ球形を呈しているがⅡ類に比較すると長胴化となっている。器内は頸部に最大厚をもつ。

外面頸部に甌と同様に縦方向の篋削り痕がみられる。胴部は撫でを施しているが篋調整痕が残る。口縁部は丁寧な横撫で、頸部内稜はやや丸みをもってくる。底部穿孔は内面側に切り込み、その切痕の稜は調整によりやや丸い。

第Ⅴ類

6 (16-22) 口縁部に最大幅をもち、底部にかけて次第に細く逆三角形を呈する。口縁部はなだらかに外反し、頸部の稜は消失している。器内はほぼ均一した厚みをもつ。体部の篋削りは口縁部下位から胴部中位まで一挙に篋を選び篋痕は明瞭に残る。体部下半は撫でにより篋痕は不明瞭である。内面は丁寧な撫でが全体に施こされ頸部付近も丸みをもつ、底部の穿孔は篋調整を施し、稜も丸くなる。

第Ⅵ類

3 (63-14) 口縁部に最大幅をもち、底部に最少幅がくる細長い逆三角形を呈する。三角形はⅤ類より口径と底径の比は大きくなる。器内はほぼ均一している。外面の篋削りは口縁部下位から縦方向の篋削りで篋痕が明瞭に残る。底部の穿孔は撫でにより丸みをもたせている。成形技法は甌と同様である。

以上、各分類別に器種を見てきたが、当初に記したように、器形の変化、整形技法の変化による流れが見受けられる。

住居跡に伴う一括出土遺物のなかでも何分類かの遺物がみられる。この図は成形技法の流れのなかでの1時点である。住居の時期を決定するにあたりどの遺物をもって住居の時期とするか、または代表とする器種にするかが問題であり、詳細な検討をしなければならないであろう。

4. 石製模造品について

そこで本遺跡における各類別を時期的に位置づけて見ると、県下では火山灰の降下問題で盛んに検討がなされてきている。本遺跡内での火山灰は浅間山の爆発によるB、A軽石で、遺構に直接関連する浅間山C軽石及び榛名山二ツ岳によるF P、F P'等の火山灰は検出され得なかった。遺跡上にこれらの火山灰が降下した可能性は浅間山については強いが、榛名山二ツ岳については今後の検討を要する。検出され得なかったのは本遺跡の立地上の問題にかかわってくるものと考えられる。そこで県下に土師器を出土している遺跡を中心に比較検討し、類別の位置づけを試みたい。

第I類では環は壙形から環形に移行し、甕ではS字状口縁がすでに主流からはずされている。下郷遺跡においてI-3類の環の祖形と思われるのがS Z 22より出土して、下郷第II類に位置づけられている。この類の甕はS字状口縁が主流を占め下郷第III類まで見受けられることによって成整形技法においても若干異なることから下郷II、III類よりは下るものと考えたい。鹿島遺跡第6号住居跡はなかば埋没した段階で、榛名山二ツ岳の爆発による火山灰の堆積が認められる。出土土器は甕、壺、高環、埴である。本遺跡のI-2類の甕と近似している点も見られるが、しかし高環は裾が急に開き若干古い形態をもつ。相対的には近い時期と考えたい。

第II類に近似している遺跡としては寺内遺跡第6号住居跡が見られ、F A降下以前に形成され、F P降下により廃棄されたものと見ている。寺内遺跡とは相対的に非常に近い時期と見られるが、甕の整形や、環に新しい様相が認められる。

第III類は前類の流れを汲む環、高環部部の器形は扁平状となり浅くなる。また多種の器形が出現するとともに環においては口径や器高にやや規格化された傾向が見られ、須恵器の坏身部の影響を受けた環が出現し始める。正観寺第11号住居跡からは同様な環が多数出土している。環の器形、成整形技法から同時期または一歩古い様相が見られる。甕の頸部がくびれることや甕にもやや古い様相が見られる。またこの時期としては荒砥五反田遺跡第12号住居跡、引間遺跡第32号住居跡や大室小杖庭遺跡等^(注13)があげられ、県下至るところにその出土例が見られる。^(注14)^(注15)

第V類の環は須恵器の影響を受けたものが主流を占め、甕は長胴化し整形技法は縦方向の粗い彫削りである。また小型甕の出現が多く見られる。また須恵器の出現も多くなる。鯉沼東遺跡等に見られる環の状態では鯉沼はV類より新しく、VI類よりやや古く、中間に位置づけられよう。^(注16)

第VI類は峯岸山記載遺跡第10号墳前の住居跡出土の環と時期をほぼ同じくすると考えたい。

よって第I類は5世紀中葉、第II類は5世紀後半、第III類は6世紀初頭、第V類は6世紀後半、そして第VI類を7世紀初頭に位置づけたい。

今後この時点の捕らえかたによりさらに細分類、細時期化していかねばならないと考える。

4. 石製模造品について

本遺跡内より各種の石製模造品が出土しているが、工房跡としての遺構は検出し得なかった。石製模造品の出土場所は主に住居内、I₄、I₅グリッドである。住居跡内は住居覆土及び床面上よりで、I₄、I₅グリッドについては多量に洗滌された土器の中に混じって出土している。

出土総数は64点で内訳は勾玉5、管玉6、白玉34、剣形14、未製品5点であった。各計測値は表(第5~10)で示した。

勾玉(第26、67、84、130、131図)

勾玉には丸味をもつものA類、扁平を呈するものB類に分けられる。

考 察

A類 (第26、67、84図)

26、67は表面、腹面とも光沢研磨されている完成品である。84は形削りの痕跡を腹面にわずかに残すが精製研磨工程である。26は碧玉質、67、84は滑石質である。

B類 (第131、132図)

131は表面を粗研磨後、腹面の研磨を施している。側面には削り痕が見られ研磨を施しながら形態を整えていく。研磨工程、131は表面を粗研磨、側面は削り痕で研磨は認められない。130より前段階のものである。

表 5 (勾玉)

図版番号	法 量 (mm) 長径×短径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
26	23×8×6×2	光沢研磨	光沢研磨		片面穿孔	碧玉質
67	19×7×4×1.5	光沢研磨	光沢研磨		片面穿孔	滑石質
84	27×10×7×2	削り整形後研磨	削り痕	削り痕	片面穿孔	滑石質
130-2	39×18×4.5×2	粗研磨	粗研磨	削り痕	片面穿孔	滑石質
131-5	27×13×3.5×1.5	粗研磨	形削り	形削り	片面穿孔	滑石質

管玉 (第15、31、36、52、74、79図)

管玉には細いものをA類 (36、74) と太いもの (直径5mm以上) をB類と分けた。

36、52を除いては完成品である。36は上面に2ヶ所の穿孔があり、1孔が下まで貫通している。表面上部に影痕線が一周している。上面は丸味があり未完成の状態での線は切断の切り込みとしては浅く、擦切のための目印と考えられる。52は形削り工程後、穿孔工程で破損したものと考えられる。表面は割痕が残り全体に角張っている。孔径は白玉より大きく管玉として考えたい。

表 6 (管玉)

図版番号	法 量 (mm) 長径×短径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
15	36.5×7.0×3.5×4.0	光沢研磨	平滑研磨	平滑研磨	両面穿孔、孔中央部が狭くなる	碧玉質
31-2	19.5×8×4×3.5	光沢研磨	平滑研磨	平滑研磨	両面穿孔、孔中央部が狭くなる	碧玉質
36-1	残11×4×2×2	光沢研磨	破損	平滑研磨	両面穿孔	碧玉質
52-4	残9×10×4 (破)	削り痕	破損	破損	片面穿孔	砂岩質

4. 石製模造品について

74-5	残16×4×2×2	光沢研磨	破損	平滑	両面穿孔	滑石質
79-2	25.5×6×3×3	光沢研磨	平滑研磨	平滑研磨	両面穿孔	滑石質

白玉 (第12、36、52、67、74、79、87、116、131図)

製作工程のうち形割前段階のものはなく、すべて側面は研磨され白玉としての形態を整えている。上下面を1)平滑にし完成品となっているもの、2)割れ口の残る未完成品とがある。孔径はmm単位以下であるが1)同径穿孔と1)片面側が大きい異径穿孔の2種類がみられる。同径穿孔の場合は片面穿孔と両面穿孔の2種類が考えられ、異径穿孔は片面穿孔が考えられる。

未製品の種類が少なく、製作工程を踏まえることは出来ないが、従来の出土例から見ると穿孔→側面研磨→上下面の研磨の順が見られる。穿孔以前の工程としては上下面の粗研磨^(注18)が考えられる。

2)の割れ口が見えるものについては、粗研磨が行届かなかつたのか、また管玉を切断したままの状態か自然剥離したものか今後の資料の増加をまちたい。管玉を切断したものと仮定するならば、出土している管玉とで検討しなければならない。本遺跡から出土している管玉の直径と白玉との直径が同一のものも存在するが、しかし同一径のもので孔を比較すると、いずれも白玉の方が細く孔径を同じくするものは見当たらない。従って本遺跡出土の管玉を切断した可能性は低いと考えられる。

表 7 (白玉)

図版番号	法 量 上径×下径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
10-1	4.5×4.5×3×2	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔	碧玉質
2	4.5×4×2.5×2	平滑	平滑	縦方向研磨	同径穿孔	
36-4	3.5×4×3×2	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔 上面が細い	
5	4.5×4.5×3.5×1.5	起伏があり 粗れている	やや平滑	斜方向研磨	同径穿孔	
6	5×5×2.5×2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	縦方向研磨	同径穿孔	
7	4×4×3×2	平滑	平滑	縦方向研磨 やや膨みをもつ	同径穿孔	
8	4.5×4.5×3×2	平滑	平滑	縦方向研磨	同径穿孔	
9	5.5×5.5×3×1.5	起伏があり 粗れている	やや粗れて いる	斜方向研磨	異径穿孔	
10	5×5×2×2	やや平滑	やや平滑	縦方向研磨	同径穿孔	
11	5.5×5×2.5×1.5	割れ痕	やや平滑	縦方向研磨	同径穿孔	
12	7×7×4×2	光沢研磨 くぼみ	光沢研磨 くぼみ	光沢研磨 やや膨みをもつ	異径穿孔	
13	5×5×3×2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	縦方向研磨	ほぼ 同径穿孔	

考 察

14	5 × 5 × 3 × 2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	斜方向研磨	同径穿孔
15	5.5 × 5.5 × 2 × 2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	斜方向研磨	ほぼ 同径穿孔
16	5 × 5 × 1.5 × 2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	縦方向研磨	異径穿孔
17	4.5 × 4 × 1.5 × 1.5	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	縦方向研磨	同径穿孔
18	4 × 4 × 2.5 × 2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	斜方向研磨	異径穿孔
19	残4.5 × 2	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	斜方向研磨	異径穿孔
20	4.5 × 1.5	起伏があり 粗れている	起伏があり 粗れている	斜方向研磨	異径穿孔
52-2	8 × 7 × 3.5 × 2	平滑	一部破損し ているが残 存面は平滑	斜方向研磨	同径穿孔
3	3 × 3 × 3 × 2	平滑	破損し不明 瞭	縦方向研磨	ほぼ 同径穿孔
67-2	3.5 × 3 × 2 × 1.5	やや平滑	やや平滑	縦方向研磨	異径穿孔
74-6	5.5 × 5 × 3.5 × 1.5	平滑	平滑	斜方向研磨	同径穿孔
7	6 × 5.5 × 4.5 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	同径穿孔
8	5.5 × 5.4 × 1.5	平滑	平滑	斜方向研磨	同径穿孔
9	5 × 5 × 4.5 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	同径穿孔
10	6 × 5 × 3.5 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	ほぼ 同径穿孔
11	6 × 5.5 × 3 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	両面穿孔
12	4 × 4 × 4 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔
79-3	7 × 7 × 6 × 2	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔
4	5 × 5 × 2 × 1.5	平滑	平滑	縦方向研磨	異径穿孔
87-2	4 × 3.5 × 2 × 1.5	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔
116-2	4.5 × 4.5 × 3 × 1.5	平滑	平滑	斜方向研磨	異径穿孔
131-6	5 × 5 × 3.5 × 2	平滑	剝離	縦方向研磨	異径穿孔

剣形品 (第13、74、87、103、116、130、131図)

剣形模造品のうち稜の状態から両面に稜を有するものをA類、片面に稜を有し他面は水平のものをB類、両面とも稜がなく扁平なものをC類に大別できる。

4. 石製模造品について

A類 (74-3)

柄部はすでに消滅し、剣身部と刃部とを稜によって区分し、研磨の方向もことにしている。切先部は剥離しているが鋭いと考えられる。

B類 (74-2)

柄部と剣身部は区別しているが間は認められない。剣身部の基部から切先部にかけて稜線をもち刃部に向うに緩い薄くなる。切先部は鋭い。

C類

本類はすべて剣身部が全く消滅し、剣身基部が1方形を呈するもの、2両端が丸いもの、3円形を呈するものがある。また剣身部に1孔を有するものと2孔を有するものがある。

C-1類 (62, 132-1, 2)

剣身基部を全面的に平滑整形し、先端部を鋭角にして切先を表わす平面三角形。小孔は1孔と2孔が見られるが孔の位置は比較的剣身基部に近い。

C-2類 (74-4, 103, 116)

剣身基部中央を平滑にし、両端部は丸く整形する。先端部は鋭角であるがやや丸味をもつ。小孔は1孔と2孔が見られる。1孔を有する116はC-2類の剣身基部よりやや中央の位置に穿孔している。2孔を有する74-4, 103図は、一方の孔は1孔を有するものとはほぼ同位置であるが、他方は剣身部やや中央に穿孔している。

C-3類 (87-1, 130-3, 131-3, 4)

剣身基部を丸く仕上げ、先端部を細くするが切先としての意識が薄れている感がある。孔は1孔を有するものは出土せず、本遺跡においてはすべて2孔を有している。孔の位置は剣身基部と一方は剣身中央部または、やや先端部よりに位置している。87-1は剣身基部に並列して2孔を穿っている。

C-2類はC-1からC-3類にかけての過渡期的のものと思われる。孔はC-1からC-3類になるにつれて孔の位置も次第に切先部に近づいてゆく。

表 8 (剣形)

図版番号	法 量 (mm) 長径×短径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
62-2	35×20.5×4×2	粗研磨	粗研磨	輪郭研磨	両面穿孔	刃部は打裂痕
74-2	50×18×4×2	研磨	研磨	研磨	片面穿孔	
3	39×28×5×2.5	研磨	研磨	研磨	片面穿孔	
4	23×22×2×2	研磨	研磨	研磨	両面穿孔	
87-1	残16×13.5×3×1.5	研磨	研磨	研磨	両面穿孔 同径穿孔	
103	残21.5×20×5×2	粗研磨	粗研磨	削り	片面穿孔	
116-1	44×27×4×1.5	研磨	研磨	粗研磨	片面穿孔	
130-3	47×27×4×2	研磨	研磨	研磨	片面穿孔 ほぼ同径	

考 察

5	44×25×8×2	形割り、一部荒削り	荒割り、一部荒削り		両面穿孔
6	36×23×2.5	精研磨	精研磨	剥離	両面穿孔
131-1	40×29×3×2	研磨		研磨	片面穿孔
2	31×22×5×2	研磨	研磨	研磨	片面穿孔 同径穿孔
3	34×19×6×2	粗研磨		粗研磨	
4	39×24×3.5×2	粗研磨		粗研磨	片面穿孔

未製品

板状未製品（第130-6図）

表裏面とも斜方向の研磨痕があり、剣形品の形態を示している。側面上部には擦痕が認められるが刃部は剥離している。本遺跡出土の剣形模造品と比較し穿孔もなく、厚さも薄いことから本遺跡出土の剣形模造品の範疇に入れることは出きない。

表 9（未製品）

図版番号	法 量 (mm) 長径×短径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
52	80×70×26	粗削り	剥離			埴形
110	119×75×24	荒削り	荒削り			
122	94×75×26	荒削り	一部原石荒削り			
130-1	48×40×10×2	荒削り	荒削り	打割り痕	片面	有孔円板
4	87×56×13×2	形割り、一部荒削り	荒削り		片面穿孔	

（紡錘車）表 10

図版番号	法 量 (mm) 長径×短径×厚さ×孔径	技 法				備 考
		表 面	裏 面	側 面	穿 孔	
31-1	22×46×16×7	平滑光沢あり	平滑光沢不明瞭	研磨後細い影痕	片面穿孔	滑石完成品
74-1	22×44×14×7	平滑光沢あり	平滑光沢あり	細かな削り	両面穿孔	完成品

本遺跡における滑石製模造品の製作工程について

前述した如く本遺跡内より工房跡の検出を見ることができなかったのは、まことに残念である。従来より滑石模造品及び製作工程についてはさかんに研究され、論文、報告等がなされているが、本遺跡においてもいくつかの工程が見られる。製作工程を述べるにあたり種類別に工程を順次追って行く

4. 石製模造品について

のが本筋であるが、本遺跡から出土した資料は量的に少なく、種類別に追って行くのは不可能である。そこで本遺跡内における滑石製模造品について、未製品より製作工程を概略的に追って見たい。また未成品の限定から製作工程について多少の無理があり、これに対して異論も起りうるであろう。

1) 原石(122図) 自然面を残し、形も比較的大きい。自然面を残すことから一応原石として取り扱った。

2) 荒削り工程(110図) 製品の製作に対して目的を持った割り方を行う。本遺跡出土のものはやや扁平で小さく、小形の製品(勾玉、剣形、有孔円板等)製作を目的としたものであろう。笹遺跡のVI-II号住居跡出土のものは、滑石石材と記されているがこの工程のものと思われる。^(注20)

3) 荒削り工程(130図) 荒削りの石材をある程度の厚さに削り、穿孔の前段階をなすもの、本遺跡からの出土例を見ないが第130-4図では穿孔する部分に荒削りを入れ、ある程度の薄さにした後穿孔している。削りの状況、穿孔の位置から剣形模造品の製作が想定される。第52図は穿孔の大きさから見て管玉の破損品と考えられる。この段階では表面に起伏があり荒削りの様子が見られる。

4) 形削り工程(130-1、5図) この段階ではすでに穿孔がなされ、孔の周辺には荒削りが残っている。剣形未製品については剣身部、刃部の区別がなく側面を打ち欠き、研磨は認められない。有孔円板についても同様のことが言える。側面の打ち欠きによる影響が孔の周辺の荒削りまで達している。

5) 形削り工程(52、103、131図) この工程では割痕はすでに消失し、形態の調整から粗研磨への段階である。52図は増としての目的をもち、粗削りにより整形している段階である。口縁部は削り痕により、断面は三角形を呈しているが円形にする意図が見られる。頸部は上下方向から鋭く鑿を入れ、深く削りくびれを出している。体部及び底部は細かな削りで丸味をもたせている。131図は勾玉として体裁を整えすでに穿孔がなされている。表裏面は粗研磨が施こされているが側面にはまだ削り痕がある。とくに腹部においては断面三角形の小さな削り痕が認められる。103図は剣形製品の破損品であるが側面に削り痕が残る。

6) 粗研磨(130図) 表、裏、側面とも粗研磨が施こされているが、体裁としてはまだ不完全である。

7) 精製研磨(84図) は形削りも完了し、体裁も整っている削り痕の上面を研磨し、削りにより生じた後にも丸味がある。完成品の前段階である。

以上が本遺跡において検出された未製品を工程別に捉えたものである。これらの工程を踏まえて本遺跡における製作工程を復元してみると、A小孔をもつものとB小孔をもたないものがある。

穿孔をしない製品としては増形製品がある。

増形製品としては高崎市剣崎天神山古墳より石製模造品の一括出土があり、外山和夫氏は「石製模造品類を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって」のなかで、増形石製品の説明が述べられている。^(注21) 本遺跡出土のものより後の段階の工程がうかがわれる。この他増形石製品を出土する古墳として白石稲荷山古墳があげられる。^(注22)

原石→荒削り→形削り→仕上げ研磨の工程が言えよう。

小孔をもつ石製品は勾玉、管玉、剣形、白玉、有孔円板が見られる。このなかで剣形石製品がある程度の工程がうかがえるので、これに沿って復元してみると、

原石→荒削り→A 荒削り→穿孔→原体からの切り離し→研磨

考 察

→B 原体からの切り離し→荒削り→穿孔→形削り→形削り→研磨

A130-4図、B130-4、5、131-5、84図の2通りの工程が考えられる。

剣形石製品の製作工程について「神坂峠」では荒削り→形削り→粗研磨→精製研磨→穿孔の順になされていると述べている。また寺村氏は「下総国の玉作遺跡」の中で勾玉ではあるが研磨工程後穿孔の位置づけをし、「千葉市上ノ台」でも同様な製作工程を述べている。

本遺跡において石製品の穿孔の時期はある程度、形態が予測できた段階で穿孔を施し、その後細部にわたり調整、位上げを行なっている。また石製模造品に関連すると思われる遺物が数点出土した。

砥石（第20、98、126図）

第20図は各面とも研磨されているが、B、D面に上下方向に浅い研磨溝が走る。第98図も各面に研磨痕があり、さらにD面では細かい研磨の溝とU字状の溝がみられる。第126図でも砥石に使用されているにもかかわらず、打撃痕が認められる。これらの砥石は溝の入り方、打撃痕等から見て滑石製品の工具として使用された可能性が高い。またこれらの砥石と同種なものに笹遺跡、八代玉作遺跡等に見られ、八代玉作遺跡では工具として取り扱っている。その他土玉（第48-3図）については、下総国玉作遺跡では工具の一種として取り上げているが、本遺跡の土玉については孔も細く、コマとしての使用痕は認められない。

鉄製品（第36-3図）について錆がはなはだしく、工具として使用したものかは判断がつかかわる。これらのことから土玉、鉄製品については工具としての取り扱いについては一考をよする。

注1 横沢克明、石塚久則、都丸肇、真下高幸、「温井遺跡」『関越自動車道地域埋蔵文化財調査概報 I・V』群馬県教育委員会。

注2 井上唯雄、大江正行、石塚久則、柿沼恵介、「歌舞木A遺跡」、昭和49年 群馬県教育委員会

注3 横沢克明、真下高幸、能登勉、「舟橋遺跡」、昭和50年、群馬県教育委員会

注4 井上唯雄、「寺内遺跡」昭和50年、勢多郡赤城村教育委員会

注5 井上唯雄、「三ツ木遺跡」、1977.3 群馬県教育委員会

注6 前原豊、綿貫鋭次郎、設楽博己、「竹沼遺跡」、1978、藤岡市教育委員会

注7 小林敏夫、坂爪久純、「土橋・三ツ古屋・出口・島海戸遺跡」、昭和51年、埴町教育委員会

注8 都丸肇、桜場一寿、中東耕志、須田茂、「保渡田遺跡」、1980、群馬県教育委員会

注9 石川正之助、井上唯雄、梅沢重昭、松本浩一、「特集、火山堆積物と遺跡（『考古学ジャーナル』）157、1579

注10 中隆之、「下郷遺跡」『関越自動車道地域埋蔵文化財調査報告』1980 群馬県教育委員会

注11 松村一昭、「赤堀村鹿島遺跡」昭和52年 赤堀村教育委員会

注12 飯塚恵子、久保泰博、高野学、田口一郎、「正観寺遺跡群(1)」1979 高崎市教育委員会

注13 井上唯雄、「荒砥五反田遺跡」1978.3 群馬県教育委員会

注14 神戸聖語、今井敏彦、佐々木恵子、「引間遺跡」1979 高崎市教育委員会

注15 井上唯雄、「荒砥上諏訪遺跡」1977.3 群馬県教育委員会

注16 中沢貞治、村田喜久夫、「鯉沼東遺跡」、昭和52年、伊勢崎市教育委員会

- 注17 松村一昭、「赤堀村峯岸山の古墳Ⅰ」 昭和50年 赤堀村教育委員会
- 注18 大場鶴雄、「神坂峠」、昭和44年、阿智村教育委員会
- 注19 寺村光晴、「下総国の玉作遺跡」、昭和48年、千葉県教育委員会
- 注20 梅沢重昭 「管遺跡」—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究— 1966 群馬県立博物館
- 注21 外山和夫、「考古学雑誌」、第62巻第2号、昭和51年9月
- 注22 後藤守一、「多野郡平井村白石稲荷山古墳」、群馬県史蹟名称天然記念物調査報告第三輯
- 注23 大場鶴雄、「神坂峠」、昭和44年、阿智村教育委員会
- 注24 寺村光晴、「下総国の玉作遺跡」、昭和48年、千葉県教育委員会
- 注25 種田斉吾、栗本佳弘 「千葉市上ノ台遺跡」 1973 房総考古資料刊行会
- 注26 新井房雄氏の鑑定による
- 注27 前原豊、古郡正志 「小野地区遺跡群」、1981、蕨岡市教育委員会

結 語

温井遺跡の発掘調査以前はこの付近一帯が河川の氾濫原で、遺跡が存在するという事は考えられていなかった。遺物の出土を見ても流出されて来たものとの見方が強かった。調査の結果、古墳時代の集落の営まれていたことで、この付近一帯特に微高地については今までの見解を改める必要が生じたことは意義深い。

古墳時代の集落を営む土壌の形成は最下層に川原石、この川原石は下栗須地区の粘土採集跡、付近の井戸掘削時の最下面にも認められることができる。よって、鮎川を要とする扇状地一帯は鮎川の氾濫により流出した礫群と考えられる。礫群の上層は、いわゆる藤岡粘土層で現在も瓦等の素材として盛んに採集されている。粘土層は流出、水没、乾燥を何回か繰り返している。本遺跡では古墳時代後期の乾燥期に最初に集落がつくり始められている。本遺跡が営まれた後も3回の氾濫がうかがえる。第1回は温井第Ⅲ類期に、2回目は第Ⅵ類期に、3回目は浅間山爆発B軽石降下以前の水没期である。第Ⅵ類期以降は集落は営まれない。

現在の地形とほぼ同様になるのはB軽石降下期頃である。現在でも低地は水田として、微高地は桑園、畑地、村落となっている。

調査区域内からは古墳時代の遺構のみ検出されたが、遺構面を覆う土壌、及び遺構内覆土より縄文時代の遺物が数点出土している。このことは調査区域外に縄文時代の集落が存在することも充分考えられる。

遺跡の存在する範囲は地形図、付近の土層断面等により検討すると関越自動車道の地域のみでなくさらに西側の微高地一帯に広がる可能性がある。

よって本遺跡を含むこの地域一帯は縄文時代、古墳時代、平安時代とえんえんにわたり生活の場として使用されてきたと言えよう。^(注27)

最後に、本遺跡調査を実施するにあたり、日本道路公団第二建設局高崎工事事務所をはじめとする諸機関、さらに調査、整理にご指導ご支援いただいた各関係諸氏、諸先生ならびに発掘調査に参加、ご協力くださった皆様のご苦勞に対して心より感謝申し上げます。

图 版

図版一 I 遺跡全景



(1) I 区 全景 南より



(2) II 区 全景 南より

図版一2 遺構全景



(1) 遺構全景 南より(第2次)



(2) 遺構全景 南より(第2次)

図版一 3 遺構全景



(1) 遺構全景 南より (第2次)



(2) 遺構全景 北東より (第3次)

図版一 4 1号住居跡



(1) かまど 西より

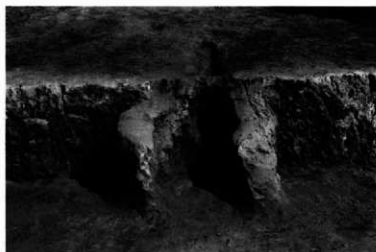


(2) 全 景 南より

図版一 5 2号住居跡



(1) 全 景 南より



(2) か ま ど 南より



(3) 甗出土状況

図版一六 3A号住居跡



(1) 全景 北より (第2次)



(2) 全景 北より (第3次)



(1) かまど 北より



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



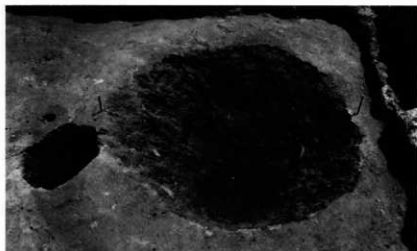
(4) 遺物出土状況



(1) 炭化物出土状況 南より



(2) 全 景 南より



(1) 3 B号住居跡 貯蔵穴 西より



(2) 4 A号住居跡 かまど 西より



(3) 4 A号住居跡 遺物出土状況



(1) 全 景 西より



(2) 全 景 西より

図版一II 4B号住居跡



(1) 遺物出土状況



(2) 全景 東より



(1) 全景 南より (第3次)



(2) 全景 南より (第2次)



(1) かまど 南より
(第3次)



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況

図版一四 7号住居跡



(1) 遺物出土状況



(2) 全景 西より



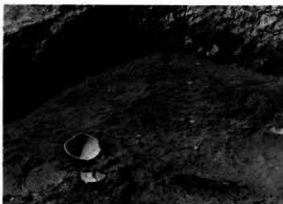
(1) 全 景 南より



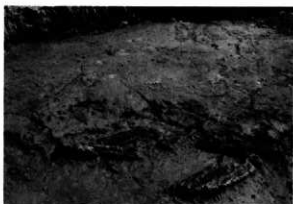
(2) 8A号住居跡 かまど 南より



(3) 8A住居跡 貯蔵穴 南より



(4) 遺物出土状況



(5) 遺物出土状況



(1) 全 景 北より



(2) か ま ど 北より



(3) 遺物出土状況

図版-17 9B号住居跡



(1) かまど西より



(2) 全景西より



(1) 遺物出土状況



(2) 全景 北より



(1) 全景 西より (第2次)



(2) 全景 南より (第3次)



(1) かまど西より(第2次)



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況

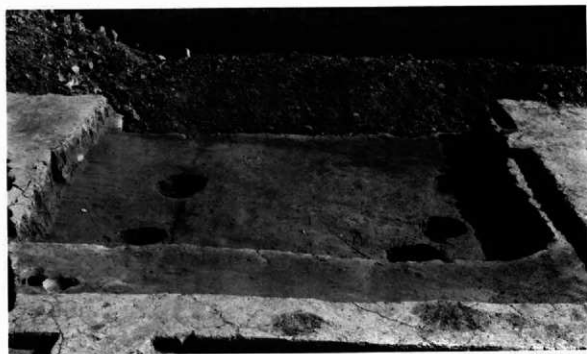


(4) 遺物出土状況

図版一21 12号住居跡 全景



(1) 全景 東より (第2次)



(2) 全景 西より (第3次)



(1) かまど 西より



(2) かまど



(3) 遺物出土状況



(1) 全景 西より



(2) 全景 東より



(1) かまど 南より



(2) 全 景 南より

図版一25 15号住居跡



(1) かまど 西より



(2) 全景 北より



(1) 全景 東より (第2次)



(2) 全景 北より (第3次)

図版-27 21号住居跡



(1) 全 景 西より (第2次)



(2) 全 景 南より (第3次)



(1) 遺物出土状況



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(1) 全 景 西より 白線手前

遺物出土状況

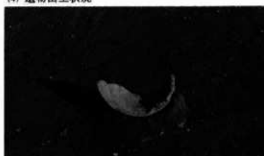


(2) 遺物出土状況

(3) 遺物出土状況



(4) 遺物出土状況





(1) 全景 南より

遺物出土状況



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(4) 遺物出土状況



(5) 遺物出土状況

図版一31 24号住居跡



(1) かまど西より



(2) 全景南より



(1) 遺物出土状況



(2) 全景 西より



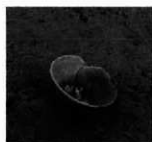
(1) 全 景 西より



(2) かまど 西より



遺物出土状況



(4) 遺物出土状況

(3) 遺物出土状況



(1) 全 景 西より



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(1) かまど 南より



(2) 全 景 南より

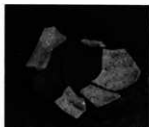
图版—36 29号住居跡 遺物出土状況



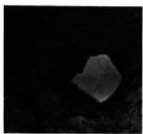
(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(1) かまど及び遺物出土状況



(2) 全 景 西より



(1) 貯藏穴



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(4) 遺物出土状況



(5) 遺物出土状況



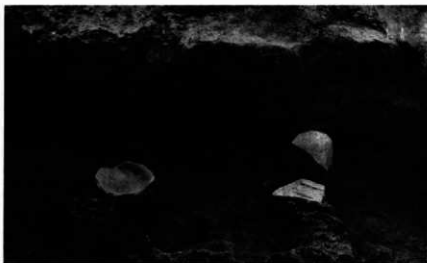
(6) 遺物出土状況



(1) 31号住居跡 全景 東より



(2) 32号住居跡 全景 北より



(1) 遺物出土状況



(2) 遺物出土状況



(3) 遺物出土状況



(1) 遺物出土状況



(2) 全景 東より

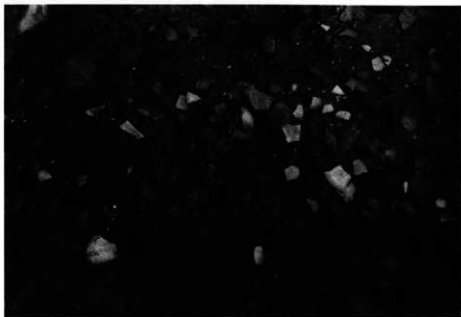


(1) 35号住居跡 貯蔵穴 西より



(2) 36号住居跡 全景 北より

図版-43 I-4 グリッド



(1) 遺物出土状況 (1)



(2) 遺物出土状況 (2)



(3) 遺物出土状況 (3)

図版-44 I-4, I-5グリッド 遺物出土状況



(1) I 4, I 5グリッド

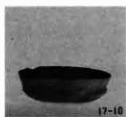
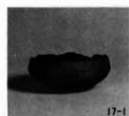


(2) I 4, I 5グリッド

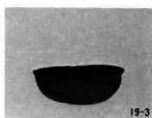
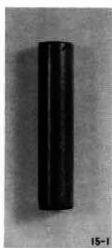


(3) I 5グリッド 大木出土状況

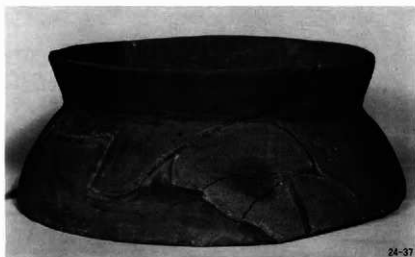
図版一45 2、3 A号住居跡



图版一46 3 A、3 B号住居跡

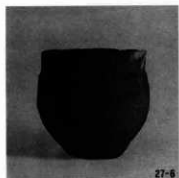


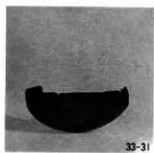
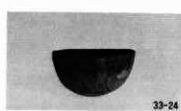
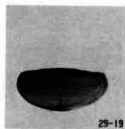
图版一47 4 A号住居跡





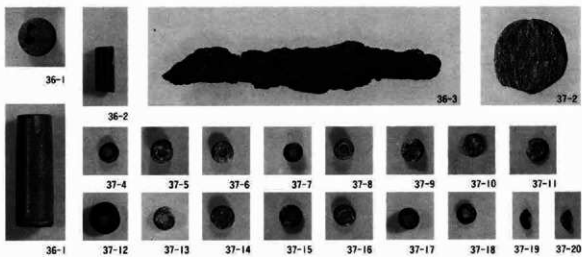
图版-49 4 B、5号住居跡



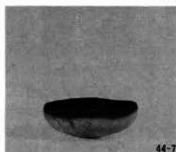
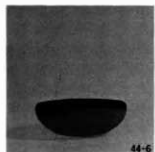
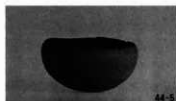




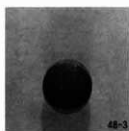
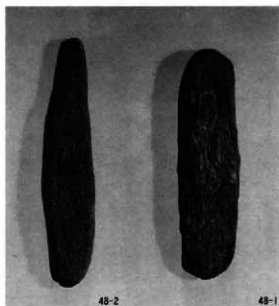
图版—52 7、8 A号住居跡



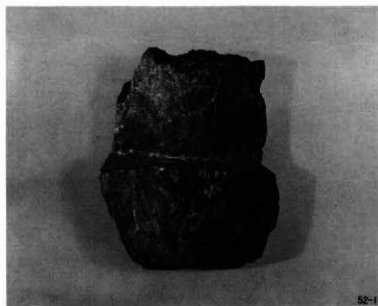
图版—53 9 A、10号住居跡



图版—54 10、11号住居跡



图版—55 11、12号住居跡





56-15



56-16



56-19



56-20



56-21



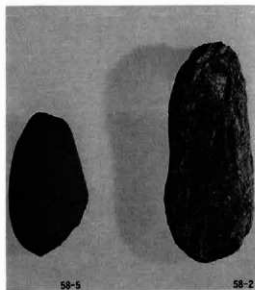
57-25



57-28



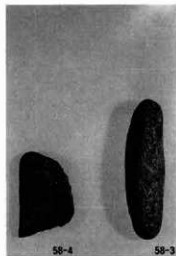
57-24



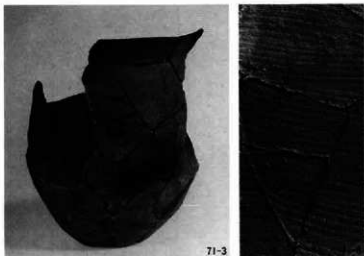
58-5

58-2

图版—57 12、13号住居跡

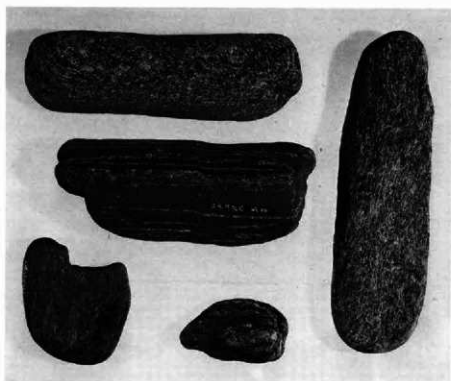


图版—58 15、16号住居跡

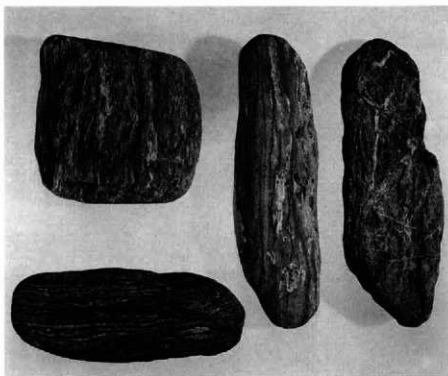




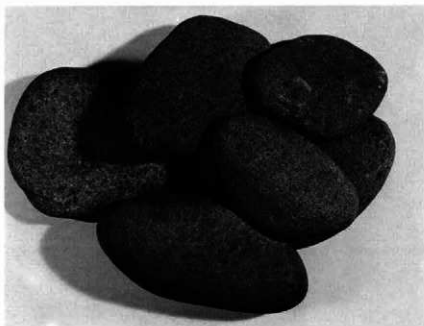
配石全景



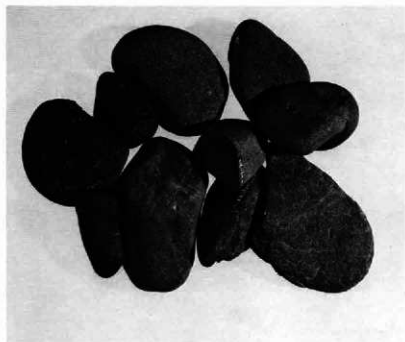
配石縁辺



配石縁辺



配石中心部



配石中心部



78-3



81-5



81-13



81-13



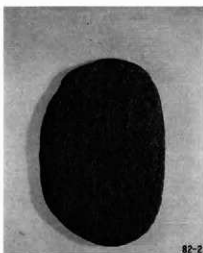
79-2



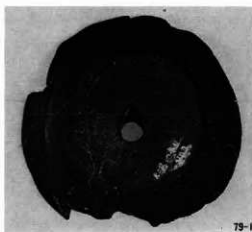
79-4



81-15



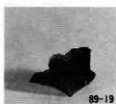
82-2



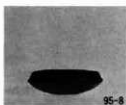
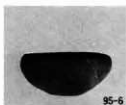
79-1



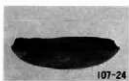
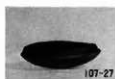
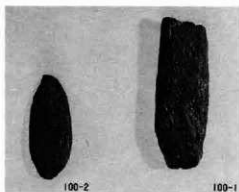
82-1



図版-63 21、22、23号住居跡

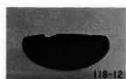


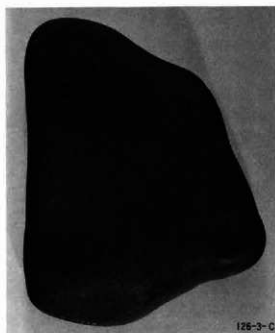
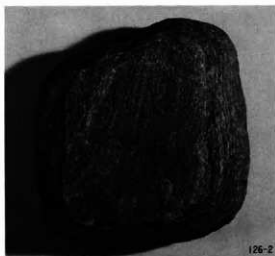












図版一七〇 36号住居跡 14グリッド



図版-71 I、Jグリッド



温井遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第2集—

印刷 昭和56年3月26日

発行 昭和56年3月31日

編集

群馬県教育委員会文化財保護課

群馬県前橋市大手町1丁目1番1号
(0272) 23-1111

群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784の2
(027952) 町2511

発行

群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784の2
(027952) 町2511

印刷

朝日印刷工業株式会社